

大阪市内埋蔵文化財包蔵地
発掘調査報告書

(2021)

2023.3

大阪市教育委員会
(一財) 大阪市文化財協会

例言

1. 本報告書は令和3年度の大阪市内埋蔵文化財発掘調査の概要を集めたものである。
2. 第1部の調査は大阪市教育委員会の指導のもと（一財）大阪市文化財協会が各原因者より委託をうけて実施したものである。
第2部の調査は大阪市教育委員会が実施したものである。
3. 第1部の執筆は（一財）大阪市文化財協会調査課長 高橋工および事務局次長 南秀雄の指揮のもとに各々の発掘担当者が担当した。担当者の氏名は各報告書に記してある。
第2部の執筆は大阪市教育委員会文化財保護課長 鈴木慎一の指揮のもとに各々の発掘担当者が担当した。その氏名は各報告書に記してある。
4. 本報告書の編集は大阪市教育委員会事務局文化財保護課において行った。

目 次

第1部

北 区

同心町遺跡発掘調査 (DC21-1) 報告書 1

福島区

野田城跡伝承地発掘調査 (NO21-1) 報告書 13

中央区

大坂城跡発掘調査 (OS21-1) 報告書 45

島之内 1 丁目所在遺跡発掘調査 (SI21-1) 報告書 59

天王寺区

上本町遺跡発掘調査 (UH21-1) 報告書 71

上本町遺跡発掘調査 (UH21-2) 報告書 89

浪速区

湊町遺跡発掘調査 (MC21-1) 報告書 101

淀川区

西中島 7 丁目所在遺跡 B 地点発掘調査 (WN21-1) 報告書 113

東淀川区

西淡路 1 丁目所在遺跡 E 地点発掘調査 (WA21-1) 報告書 137

東住吉区

北田辺 4 丁目所在遺跡 B 地点発掘調査 (KI21-1) 報告書 165

難波大道跡発掘調査 (ND21-1) 報告書 173

平野区

平野環濠都市遺跡発掘調査 (HN21-1) 報告書 183

長原遺跡発掘調査 (NG13-5) 報告書 203

第2部

中央区

大坂城下町跡発掘調査 (SOJ21-1) 報告書 225

天王寺区

鳥ヶ辻 2 丁目所在遺跡発掘調査 (SNS21-1) 報告書 229

四天王寺旧境内遺跡発掘調査 (SST21-1) 報告書 233

住吉区

南住吉遺跡発掘調査 (SMN21-1) 報告書 237

平野区

長原遺跡発掘調査(SNG21-1)報告書.....241

第 1 部

北区天満橋三丁目19-1～6、20-2・3、22-1・2における
建設工事に伴う同心町遺跡発掘調査(DC21-1)報告書

調査個所 大阪市北区天満橋3丁目19-1~6、20-2・3、22-1・2
調査面積 100m²
調査期間 令和3年6月28日~7月14日
調査主体 一般財団法人 大阪市文化財協会
調査担当者 調査課長 高橋工、南秀雄、藤原啓史

1) 調査に至る経緯と経過

同心町遺跡は大阪市北区に所在し、淀川の旧本流である大川の右岸に位置する。周辺は、弥生時代前期以前に大川の營力で形成された微高地である[趙哲済ほか2014]。調査地点は、1598(慶長3)年につくられた天満堀川を埋め立てた阪神高速12号守口線と、天満橋から北へ延びる天満橋筋の交点の南側街区に当る(図1)。

同心町遺跡は、1996年に北区同心2丁目で発見された、南北500mに広がる弥生時代中期を主とする集落遺跡で、調査地はその北端部になる。これまで行われた周辺の調査では、DC96-1・02-3・15-1・20-1次調査などで第Ⅱ～Ⅲ様式期の土壙などや土器・石器が出土している。調査区から東約100mにあるDC02-3次調査では、これに加え、第V様式～庄内式期や奈良時代前後の土器などが出土しており、近辺にこの時期の集落などがあった可能性もある。また南東約120mのDC15-1次調査では、大川右岸に築かれた大規模な堤防跡の一部が発見されている[大阪市教育委員会・大阪市文化財協会1998・2004]、[大阪市教育委員会・大阪文化財研究所2017]。

本調査地に隣接した南約10mではDC20-1次調査が行われており、今回の調査との関連性が重視される(図2)。DC20-1次調査では、弥生時代の第Ⅱ～Ⅲ様式期の小穴・溝・土壙、古代と推測される平行する2条の溝が検出された。弥生時代中期の小穴の大部分は掘立柱建物の柱穴と考えられ、組み合うものがあった。サスカイトの石器遺物には、石槍の未製品または楔形石器と考えられるものや石鎌未製品の可能性があるものが出土した。また、徳川期の南北方向の溝(推定幅約6m、深さ約1m)があり、周辺の田畠に対する基幹的な灌漑水路と推定されている。

大阪市教育委員会が2021年2月18日に行った試掘調査によると、地表下約2.3mに弥生時代と推測

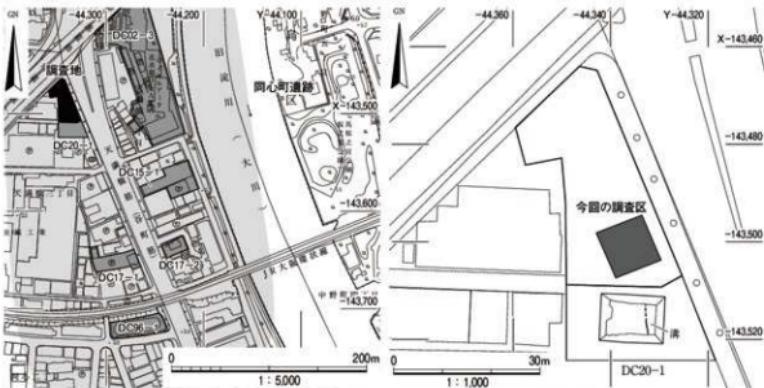


図1 調査位置図

図2 調査区位置図

される地層が存在した。6月28日より、DC20-1次の調査地に近い敷地南側に東西10m、南北10mの調査区を設定して本調査を実施した。本報告で用いた方位は、現場で記録した街区図を1/2,500大阪市デジタル地図に合成することによって得た世界測地系座標に基づき、座標北を基準にした。標高はT.P.値(東京湾平均海面値)を用いてTP±○mと表記した。

2) 調査の結果

i) 層序

調査地は南北に長く、標高は中央部から北・西側がTP+3.4m前後であるのに対し、南・東側はTP+3.2m前後とやや低くなっている。厚さ約1.2~1.6mの現代盛土より下の地層に層名を付した(図3・4)。

第1層：黒褐色(2.5Y3/2)シルト質中粒～細粒砂層で層厚は20cmである。19世紀以降の作土層で西壁のみに残存していた。DC20-1次調査の第1層に相当する。

第2層：にぶい黄褐色(10YR4/3)シルト質中粒砂主体の作土層で、層厚は15cmである。18世紀後半頃と推測される。上面にSD201があった。DC20-1次調査の第2層に相当する。

第3層：第4層上面の遺構であるSD401の埋土である。第3a・3b層に区分され、下層の第3b層は西側肩部に分布していた。第3a層は黒褐色(10YR3/2)シルト質中粒砂層で作土化している。最大層厚は55cmである。第3b層は暗灰黄色(2.5Y4/2)粘土偽礫混り灰黄褐色(10YR4/2)中粒～粗粒砂や、弥生時代の遺構埋土に由来する黒色(10YR2/1)粗粒砂質シルト偽礫などから成る。最大層厚は45cmである。第3b層は、主にSD401を浚えたり掘り直した際などに肩近くを埋めたものと推定される。第3層からは17世紀後葉の肥前陶器碗31、土師器皿30が出土した(図9)。

第4層：粘土～シルト偽礫混りのにぶい黄褐色(10YR5/4)中粒～極粗粒砂層の盛土で、層厚は西端で60cm、東端で30cmである。本層上面の標高は南西端TP+2.0m、北東端TP+1.6mで、北東に向かって低くなっていた。DC20-1次調査の第4層である。前後の地層とDC20-1次調査との関係から17

世紀前葉の徳川初期と推定される。本層から瓦器碗の破片29が出土した(図9)。

第5層：灰黄褐色(10YR4/2)～オリーブ褐色(2.5Y4/3)中粒砂の水成層で、層厚は2~4cmである。四壁の地層断面では一部にしか存在しない。第5層は第6層上面の凹みとSK601の上部を埋めていた。本層から瓦器碗27・28と弥生土器26が出土した(図9)。26は、断面三角形突帯と指頭圧痕突帯を巡らした第Ⅲ様式の壺の頭部である。本層は中世まで遡ると考えられる。DC20-1次調査の第5層に当る。

第6層：黒色(10YR2/1)シルト質中粒～粗

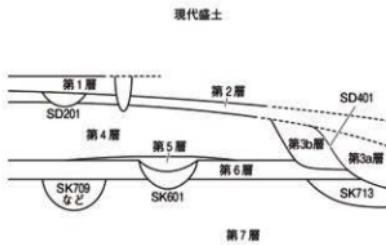


図3 地層と遺構の関係図

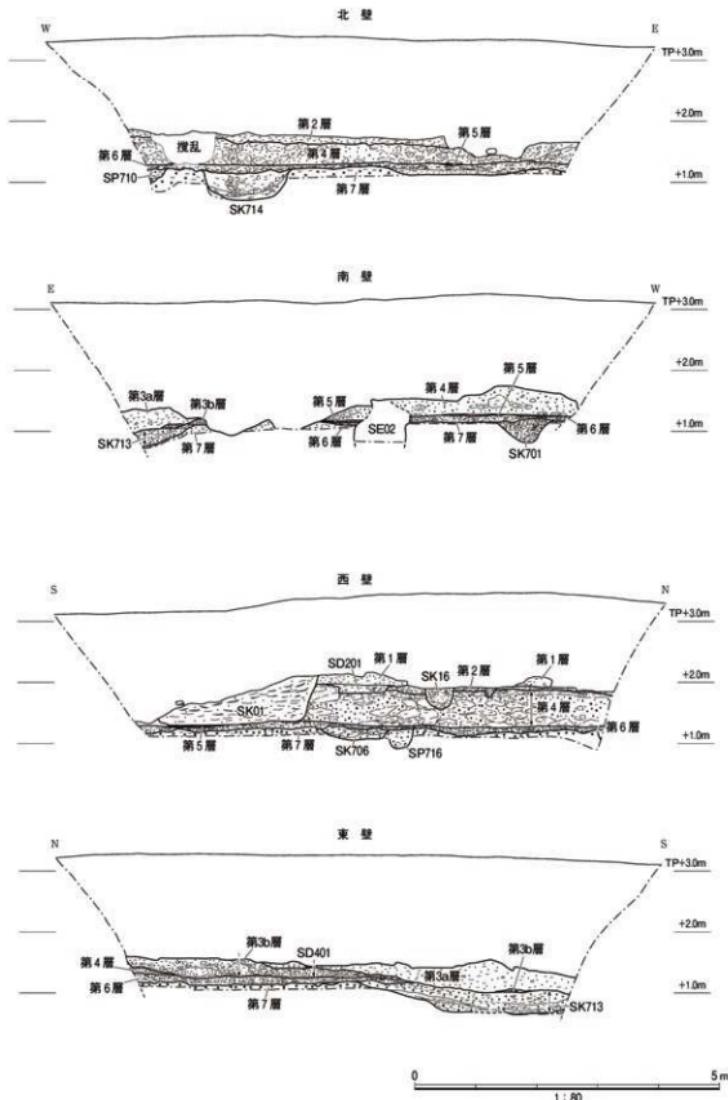


図4 地層断面図

粒砂や褐色(10YR4/4)～暗灰黄色(2.5Y4/2)細粒砂質シルトの小偽礫などから成る盛土で、層厚は12～20cmである。本層から弥生土器13～18と頁岩製の小型扁平片刃石斧20が出土した(図7)。13～15は壺で、ハケメ調整の第Ⅱ様式の13・14のほか、タタキメのある第V様式の壺15が含まれる。16・17は鉢、18は鉢(もしくは台付鉢)の口縁部である。16は口縁端部にキザミメを施し、直線と扇形の櫛描文がある。17・18は凹線文が施された第IV様式の土器である。ほかに紀ノ川流域産とみられる紅旗石石英片岩が出土した。DC20-1次調査の第6層に当る。

第7層：暗灰黄色(2.5Y4/2)～黄灰色(2.5Y4/1)極粗粒砂～細砾に少量のシルトが混じる水成層で、層厚は100cm以上である。下方にいくに従って細礫が多くなる。本層からは遺物は出土していない。上面でSK713などの弥生時代中期の遺構を検出した。DC20-1次調査の第7層である。

ii) 遺構と遺物

a. 第7層上面の遺構と遺物(図5～7)

第7層上面で弥生時代中期(第Ⅱ～Ⅲ様式)の土壌、小穴などを検出した(図5上)。下記に報告する遺構以外は、ごく浅いものである。

SK713 調査区南東にあり、南北3.5m以上、東西1.3m以上、深さ0.5m以上である。東へ深くなりつつ広がっていた。北西に水が流れ込んだような窪みがあり、水成層を挟在しつつ黒色(10YR2/1)中粒～粗粒砂質シルトなどで埋められていた(図6)。井戸のような遺構の可能性がある。

SK713からは1～5・19の弥生土器・石器やイノシシの骨などが出土した(図7)。1は壺、2～5は壺である。4の底部は結晶片岩を含む紀伊産の壺と考えられる。SK713では第Ⅱ様式の土器が多い。19はサスカイト製の横長剥片である。主剥離面の末端に細かい剥離面が並んでおり、この部分を刃として利用した可能性がある。

SK707～709 調査区北西を占める溝状の土壌である。これらの前後関係の有無などは埋土からはわからなかった。SK707は長さ3.8m、幅1.3mで、西端が深くなっている、深い部分は0.48mであった。SK707と平行するように北にあるSK708は長さ約3.8m、幅0.95m、深さ0.23mである。両者の間にあるSK709は幅0.7m、深さ0.23mであった。これらの埋土は黒褐色(2.5Y3/1)シルト質中粒～粗粒砂層が主体を成すが、SK707には細～中礫が集中する部位があった(図6)。

SK707から6～10の弥生土器が出土した(図7)。6・7は壺、8・10は壺、9はミニチュアの鉢である。口縁下端に6はキザミメ、7はユビオサエによるキザミメを施す。SK707は第Ⅱ～Ⅲ様式にわたり、第Ⅱ様式の土器が多い傾向があった。

SK701 南西隅の平面円形の土壌で、東西0.9m以上、深さ0.35mである。埋土はシルト小偽礫混り黒褐色(10YR3/1)中粒～粗粒砂質シルトなどであった(図4の南壁地層断面図)。第Ⅲ様式の高杯などが出土した。

SK714 北西隅の平面円形の土壌で、東西1.55m、南北0.65m以上、深さ0.45mである。加工時堆積層の上に水成層を含む薄い地層があり、シルト偽礫混り黒褐色(2.5Y3/1)シルト質中粒～粗粒砂層で埋められていた(図4の北壁地層断面図)。第Ⅱ～Ⅲ様式の弥生土器底部や鉢11などが出土した(図7)。

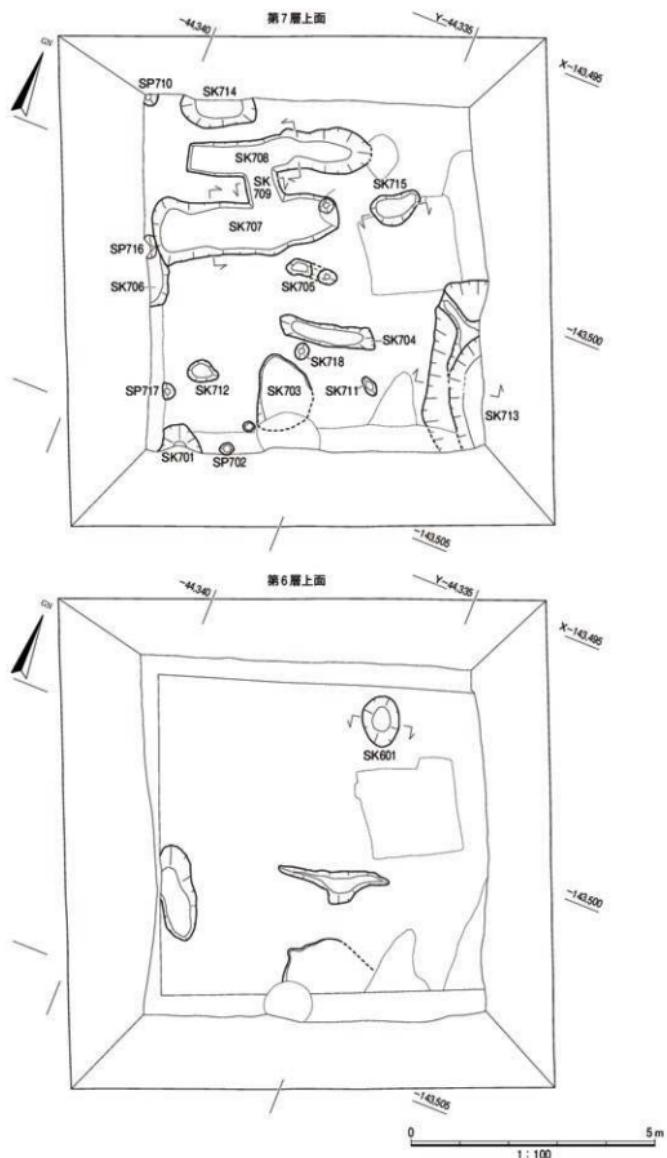


图5 遗構平面图(1)

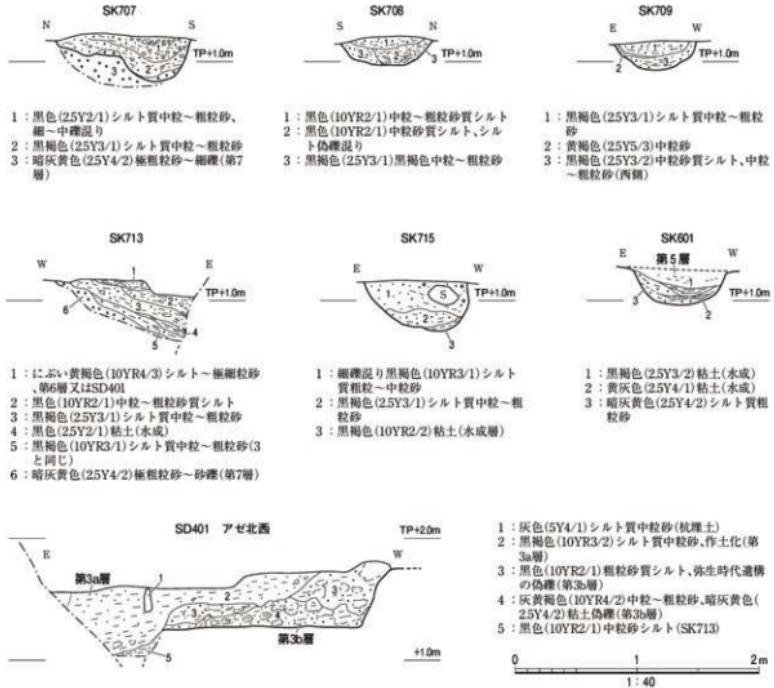


図6 遺構断面図

SK715 調査区北東寄りにある平面楕円形の土壤で、長さ1.05m、幅0.65m、深さ0.4mであった。底に薄い水成層があり、埋土中に長さ0.25mの石があった。

SP702・710・716・717 柱穴の可能性のあるものは4基である。北西隅のSP710は直径0.35m、深さ0.25m、西壁際のSP716は直径0.45m、深さ0.3mであった。その南のSP717は直径0.3m、深さ0.15m、南壁際のSP702は直径0.3m、深さ0.1mであった。いずれも柱痕跡は確認されていない。埋土は、SP710が黒色(10YR2/1)シルト質中粒～粗粒砂層、SP716が暗灰黄色(2.5Y4/2)シルト質極粗粒砂層、SP717が黒褐色(2.5Y3/2)中粒～極粗粒砂質シルト層、SP702が黒褐色(2.5Y3/2)粗粒砂質シルト層である。SP702からは壺の体部12が出土した(図7)。波状文と円形浮文、櫛描直線文と円形浮文の間に斜格子文を施した第III～IV様式の土器である。

b. 第6層上面の遺構と遺物(図5・6)

第6層上面にはSK601以外に遺構はなかった(図5下)。三箇所ほどの浅い窓みを水成層である第5層が埋めていた(図版2下)。

SK601 平面楕円形で、長さ1.05m、幅0.75m、深さ0.3mであった。下半は水成の粘土層を含む暗

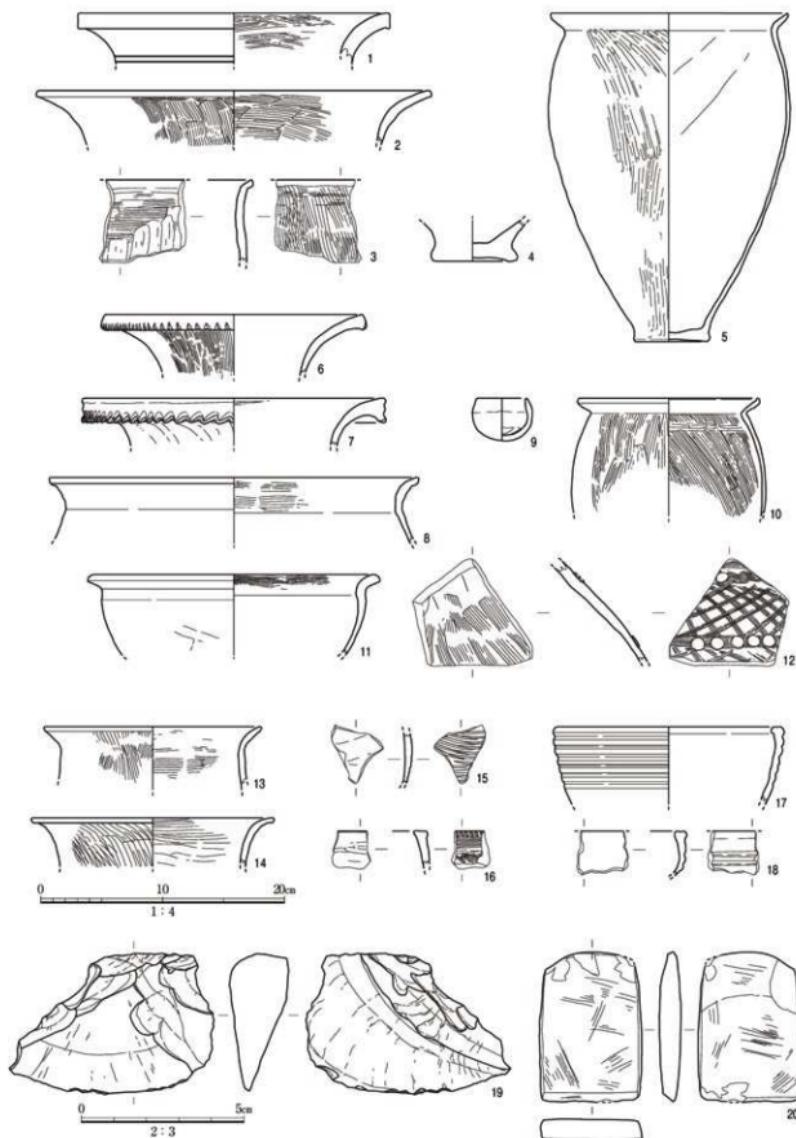


图7 出土遗物实测图(1)

SK713(1~5·19)、SK707(6~10)、SK714(11)、SP702(12)、第6层(13~18·20)

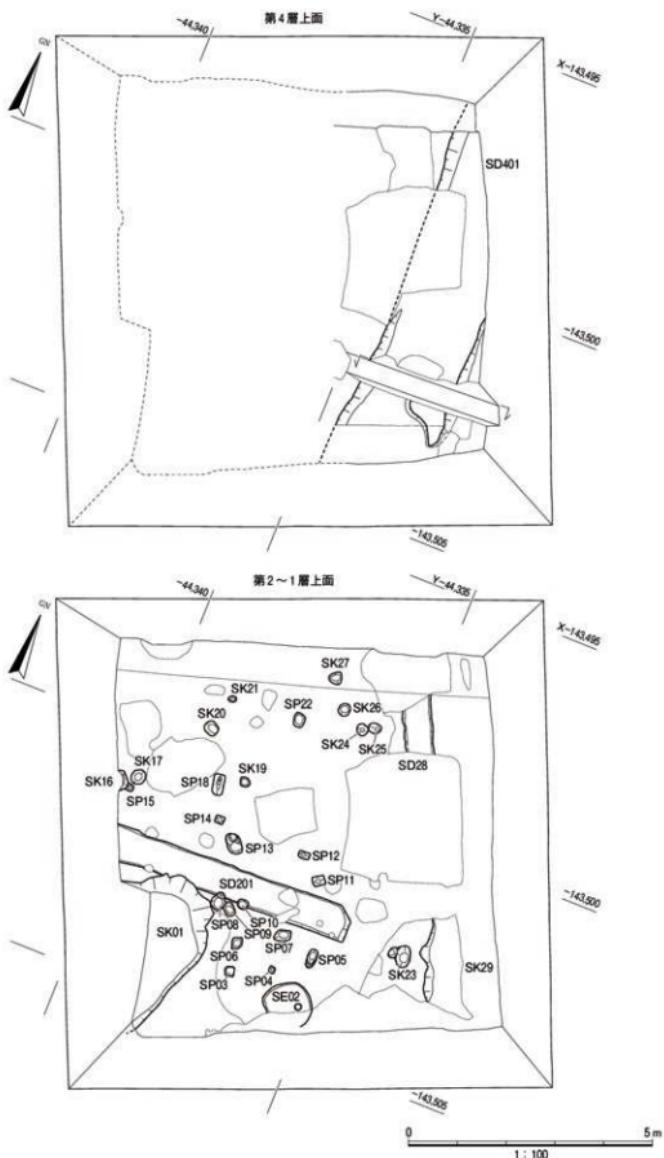


図8 遺構平面図(2)

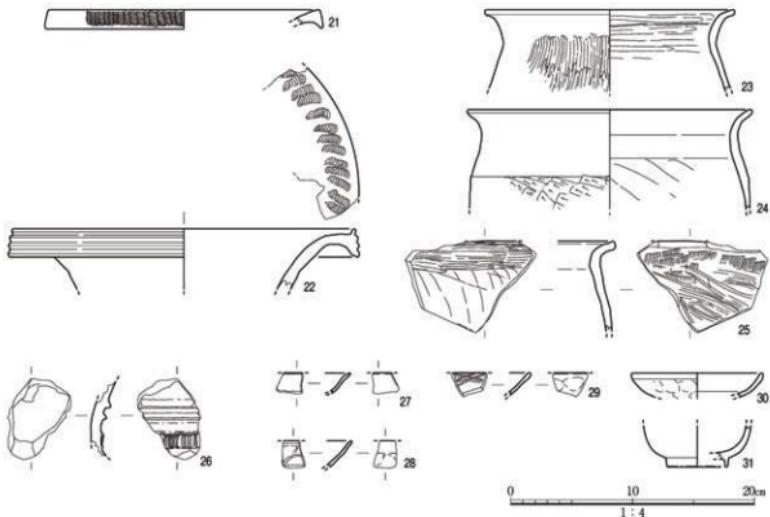


図9 出土遺物実測図(2)

第5層(26~28)、第4層(29)、SD401(21~25・30・31)

灰黄色(2.5Y4/2)シルト質粗粒砂層、上半は第5層で埋まっていた(図6)。遺物からは判別できないが、第5層の時期に近い中世の遺構であろう。

c. 第4層上面の遺構と遺物(図6・8・9)

徳川初期の盛土と推定される第4層上面にはSD401があった(図8上)。

SD401 幅3m以上、深さ0.8m以上の南北方向の溝である。これと連続するDC20-1次調査のSD401は深さ約1mで、溝底と推定される小溝で折り返すと幅は約6mであった。今回の調査では溝の芯は調査範囲より東にあり、幅はやや広い可能性がある。方向はN3°Wで、DC20-1次調査地点(N12°W)から若干、座標北方向へ近づいていくようである。断面形をみると2段に深くなり、約1.5m幅の平坦部がある(図6)。平坦部は第3b層によって埋められている。SD401出土の遺物(図9の30・31)とDC20-1次の調査結果から、SD401は17世紀前葉から18世紀中頃に機能していたと推定される。

SD401からは、これに切られるSK713や第6層に由来するとみられる、21~25の弥生土器が出土した(図9)。21・22の壺では、21が口縁部端面に廉状文を施す生駒西麓産である。22は口縁部端面に凹線文が巡らされ、内縁に扇形文がある。23~25の壺では、24が体部外面をヘラケズリした紀伊産の土器である。22は第IV様式、ほかは第II~III様式である。

d. 第2層~1層上面の遺構

西側は第2層上面、第2層が削平されていた東側では第3層上面で、第2層上面より上位の遺構を

調査した(図8下)。多数の小穴があるが、確実な第2層上面の遺構はSD201のみである。ほかは新しく、19~20世紀の遺構である。南西のSK01は焼けた瓦などが廃棄され、第2次大戦の戦災時の可能性がある。南壁際のSE02の埋土中には直径15cmの土管が挿入されていた。

SD201 幅0.7m、深さ0.13mで、長さ5.2m以上である。方向は下層のSD401と直交する。埋土は第1層と類似し、灰黄色細粒砂偽礫混り黒褐色(2.5Y3/2)シルト質細粒~中粒砂層であった。耕作に係わる遺構であろう。18世紀末頃と推定される。

3)まとめ

1. 南隣のDC20-1次調査地と同様に、第Ⅱ~Ⅲ様式期を主とする土壤、小穴などを検出した。南東のSK713は井戸のような遺構の可能性がある。調査地周辺は集落域の一部であろう。
2. DC20-1次調査の層序と対応し、上記の遺構面である第7層上面から、第6層→第5層(水成層:中世)→第4層(盛土:17世紀前葉)→徳川期の作土層と、土地利用が変遷した。今回の調査によれば、第6層の下限は弥生時代後期頃となる。
3. 第4層上面でDC20-1次調査の大溝の続きを検出した。時期は第4層が形成された17世紀前葉以降で18世紀中頃までで、幅は6mを超えると推定される。

参考文献

- 大阪市教育委員会・大阪市文化財協会1998、「信開ホテルによる建設工事に伴う発掘調査(DC96-1)」:「平成8年度大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書」、pp.13-22
- 大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2004、「同心町報告書B地点発掘調査報告書(DC02-3)報告書」:「平成14年度大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書」、pp.3-11
- 大阪市教育委員会・大阪文化財研究所2017、「北区天溝橋二丁目34-3における建設工事に伴う同心町跡地発掘調査(DC15-1)報告書」:「大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書(2015)」、pp.1-8
- 趙哲済・市川創・高橋工・小倉徹也・平田洋司・松田順一郎・辻本裕也2014、「上町台地とその周辺における地形と古地理変遷の概要」:大阪文化財研究所・大阪歴史博物館編「大阪上町台地の総合的研究」、pp.9-21

北壁地層断面



第7層上面遺構
検出状況(北から、
奥の建設現場が
DC20-1次調査地)



第7層上面遺構
全景(北から)



SK713(南から)



SK707~709、
SK714(西から)



第5層の分布状況
(北から、中央部で
帯状に白っぽく
見える所)



SD401(南から)



SD401断面(北から)



第2層～第1層上面の
遺構とSD401検出状況
(北から)



福島区玉川四丁目143-3、158-1における建設工事に伴う

野田城跡伝承地発掘調査(NO21-1)報告書

調査個所 大阪市福島区玉川4丁目143-3、158-1
調査面積 200m²
調査期間 令和4年2月7日～3月17日
調査主体 一般財団法人 大阪市文化財協会
調査担当者 調査課長 高橋工、横山洋、橋本稔、平山裕之

1) 調査に至る経緯と経過

i) 調査地の地理的歴史的環境

調査地は淀川デルタの一角にあたる低湿地に位置している。このデルタを形成した旧淀川本流は中之島の北の堂島川、南の土佐堀川となり再び合流する。調査地はその合流点(木津川の始点)から北西へ約400mの位置である(図1)。

当地の由来は以下のとおりである[角川日本地名大辞典編纂委員会1983、平凡社地方資料センター1986]。中世に当地は四天王寺領鷺島庄に属し、「野田」の地名は14世紀に現れる。足利義詮作と伝わる『住吉詣』貞治3(1364)年4月に「野田の玉河あり、このほとりに藤の花咲きみだれたり」とある。15世紀には『満済准后日記』永享5(1433)年に「鷺島庄内野田村」とみえるものの、崇禪寺文書によれば寛正2(1461)年まで野田村は崇禪寺領となり、寺領目録に野田の地名が散見されるという。

戦国時代には、1533(天文2)年、当地を訪れた本願寺十世証如が佐々木(六角)氏らに襲われた際、証如を守った門徒21人が討死したとの伝承があり、当地の真宗寺院極楽寺と円満寺はいずれもこの伝承を寺の起源としている。『細川両家記』によると、1531(享禄4)年、細川高国・浦上村宗連合軍「二万余騎」が野田・福島に布陣したが、細川晴元・三好元長連合軍に敗れている。1570(元亀元)年からの石山合戦では本願寺と組んだ三好三人衆が野田城を築き、籠城したが、1576(天正4)年に織田信長が陥落させた。1614(慶長19)年の大坂冬の陣では豊臣方が野田・福島に砦を築いたが、徳川方に陥落されている。

近世の当地は1619(元和5)年以後幕末まで天領となっていた。東南約500mに架橋された船津橋は堂島川と土佐堀川の合流点であり、また木津川と安治川(前身は伝法川)への分岐点でもあり、その東



図1 調査地位置図

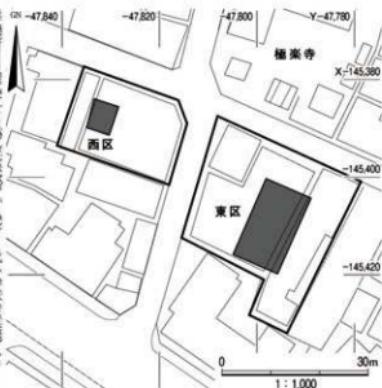


図2 調査区位置図

は全国諸藩の蔵屋敷が並ぶ中之島であった。このような地の利をいかした野田村では荷船業者が活躍し、またウナギ漁、イワシ漁などの漁業も盛んであった。漁業の神エビス神の名を有する野田恵美須神社が極楽寺の東隣に鎮座している。エビス信仰の起源は平安末頃で、室町時代以後エビス神は七福神の中心となり、商業や農業の神にもなったと言われている[徳丸亞木1999]。

ii) 過去の発掘調査

これまで野田城跡では5件の発掘調査が実施され、貴重な成果を上げている(図1)。

NO07-1次調査では、TP-3.0m以深で堀状遺構(幅3.0m以上、深さ1.0m以上)が検出されている。その堀は北西-南東方向であり、初めて発見された野田城に関わる遺構と評価された。17世紀初頭までに埋められていたが、その上位層から多量の貝殻を含む遺構が検出され、近世野田村の住人らが貝の採集などさかんに漁業に携わっていた様相がみられた[大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2008]。

NO11-1次調査では、野田城に関わる遺構は検出されなかつたが、15世紀の度重なる作土層とそれに挟まれた分厚い貝殻廃棄層(最大層厚約60cm)がみつかり、当地における農業と漁業が中世後期まで遷ることが判明した[大阪市教育委員会・大阪文化財研究所2013]。

NO12-2次調査では、北北東-南南西方向の堀跡(幅4.4m以上、深さ1.3m以上)がみつかっている。この堀は細かい年代は不明だが、およそ16世紀に機能していたようで、NO07-2次調査で発見された堀との関係が注目される[大阪市教育委員会・大阪文化財研究所2014]。

NO15-1次調査では、TP-4.0m付近まで近世の地層が続いていること、他の調査で発見されている近世の地層より2mほども低いことなどから、調査地自体が野田城の堀の中にあたっている可能性が窺われた[大阪市教育委員会・大阪文化財研究所2017]。

NO16-1次調査では、江戸時代の作土層、その下位で厚さ125cm以上と分厚い水成層ないし湿地位堆積層が検出された[大阪市教育委員会・大阪文化財研究所2018]。調査地の位置から、野田城および近世野田村の範囲外にあたると推測される。

iii) 調査に至る経緯と経過

当該地はふたつの敷地からなるが、同一業者による同時開発(共同住宅建設)が計画された。2021年11月10日、大阪市教育委員会による試掘調査の結果、遺構面や遺物包含層が確認されたことにより、本調査を実施することとなった。

調査は東区(170m²)と西区(30m²)の2箇所で行うこととなり(図2)、まず西区、次いで東区の順に実施した。調査開始時の機械掘削は、東区ではGL-1.3mとし、後述する第3層から人力による調査とした。西区ではGL-1.9mとし、第4層から調査を行った。東区には前代の建物基礎による大きな擾乱壙が6個所にあり、調査範囲は限られることになった。調査深度としては、東区では湧水によりTP-2.7mまでしか調査できなかつたが、西区では排水作業によりTP-3.7mまで断面調査を実施した。

調査の開始は2022年2月7日、終了は同年3月17日である。

以下の本文等に示す標高値はT.P.値(東京湾平均海面値)で、TP±○mと記した。また本報告で用い

た国土座標値は現場で作成した街区図を1/2500大阪市デジタル地図に合成することにより世界測地系座標に乗せたものであり、方位は座標北を基準とした。

2) 調査の結果

i) 層序(図3～8)

調査地の現地表面の標高はTP-0.5m前後と低い。これは20世紀の地下水汲み上げによる地盤沈下によるものであり、当該地一帯の地盤沈下は1.0～1.5mとみられている[前田昇1988]が、もともと当地一帯はいわゆる標高ゼロメートル地帯だったのであろう。

なお、以下に述べる各層は複数の偽縫から成るものが多く、すべて人為的に形成された整地層(盛土層)であり、自然の堆積層は確認されていない。

第0層：近代以後の盛土や擾乱層である。現地表面下0.8～1.7mに堆積している。特に西区(図6～8)では1.5m以上の深さまで攪乱等が及んでおり、下記の第1～第3層は残っていなかった。

第1層：東区にのみ遺存していた地層で、TP-1.3～-1.7m付近に堆積していた(図4・5)。最大層厚は35cmで、北から南へ低く傾斜している。2層に細分された。第1a層は褐色～にぶい黄色のシルト・砂混りシルト・細粒砂などの偽縫からなる。第1b層は東区南部で部分的にみられた暗オリーブ褐色砂混りシルトを主体とする地層である。第1層は機械で掘削したため、年代は不明である。

第2層：東区に遺存していた地層で、TP-1.5～-1.8m付近に堆積し、最大層厚は30cmで、南へ低く傾斜していた(図4・5)。a・bの2層に細分された。第2a層はオリーブ褐色シルトを主体とし、第2b層はオリーブ褐色～暗褐色シルト・砂混りシルトなどからなる。第2層も機械で掘削したため、年代は不明であるが、江戸時代に属すると推測される。

第3層：東区でTP-1.8～-2.1m付近に堆積し、最大層厚は50cmで、南へ低く傾斜していた(図3～5)。a・bの2層に細分され、遺構の人力調査は機械掘削後の第3b層上面から開始した。第3a層は暗灰黄色～オリーブ褐色シルト・砂混りシルトなどからなり、第3b層はオリーブ褐色砂混りシルトを主体としている。第3a層中、および第3b層上面遺構などから大量の貝殻が出土した。貝種はほぼシジミに限られる(註1)。また出土遺物は15世紀後半～16世紀中頃(図26)であり、第3b層上面遺構の年代からみても、本層による整地の年代は、おおむねその範囲内と推測される。

第4層：東区でTP-1.9m以下に堆積している地層で、最大層厚は70cmを測る。本層も南に低く傾斜していた(図3～5)。a～dの4層に細分され、北西部で部分的ながら各層の上面に薄い(厚さ2cm以下)焼土・炭の薄層が検出された。第4a層はオリーブ褐色シルト・砂混りシルト等で、第4b層は灰オリーブ色シ

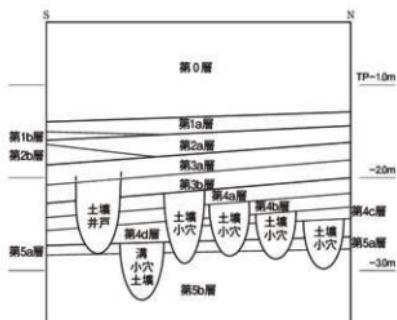


図3 地層と遺構の関係図

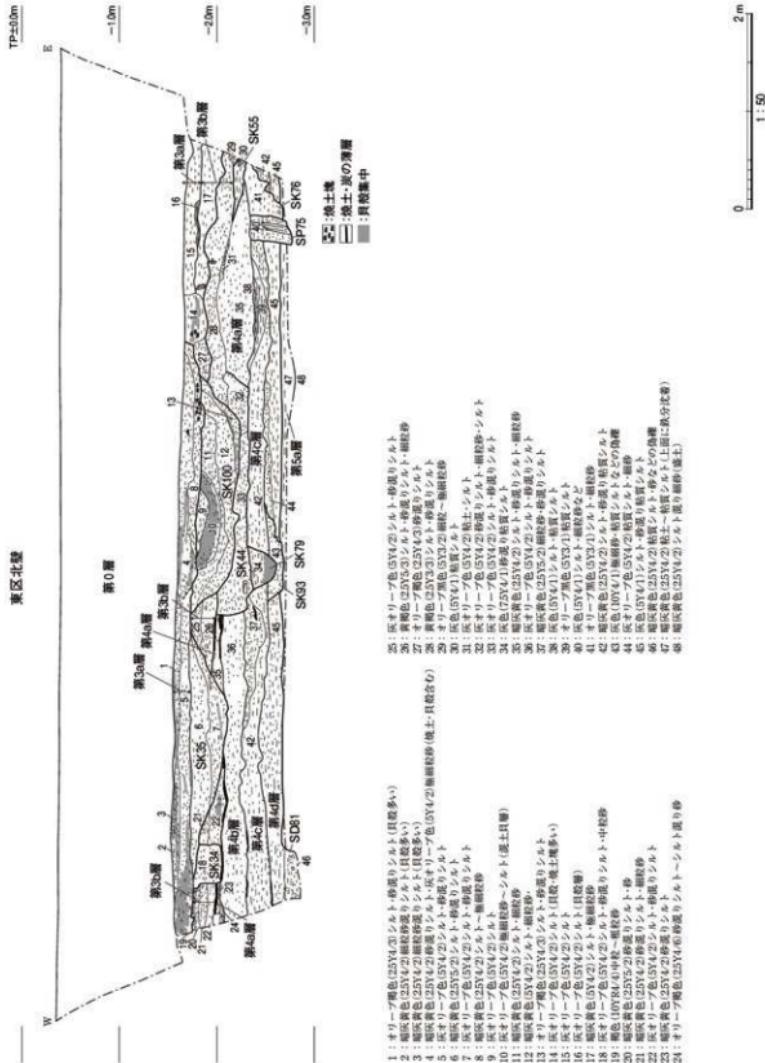


圖4 東區北壁地層斷面圖

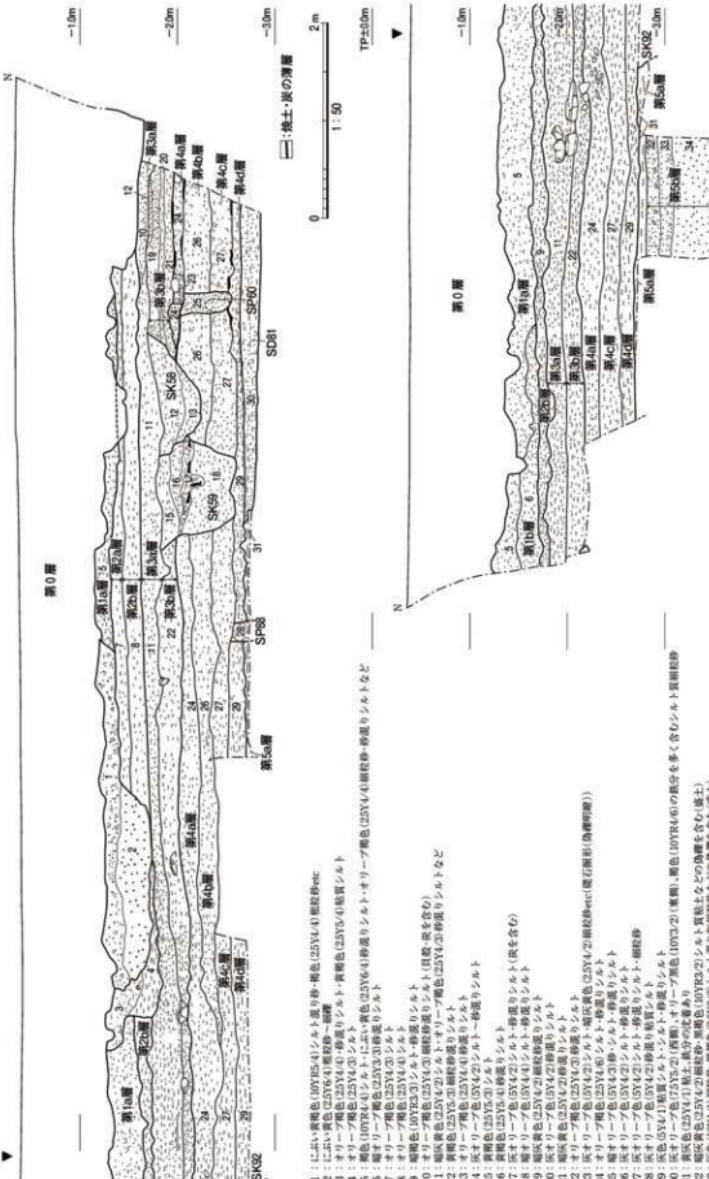


図 5 東区西壁断面図

ルト・砂混りシルトである。第4c層は灰オリーブ色シルト・砂混りシルト・細粒砂などからなる。第4d層は灰色粘質シルト・シルト・砂混りシルトである。各層上面で遺構が検出された。第4層に伴う遺構からもシジミの貝殻が多く出土している。東区では本層の年代は15世紀である。

西区では、東区と同じく部分的に炭の薄層がみられた盛土層を第4層とした(図6～8)。下位に識別しやすい第5層が認められること、またそのレベルから見て、東区第4層の下部層である第4c・4d層に相当する可能性が高いが、それ以上に多く細分が可能であった。そのため、東区第4層のような細分名称は与えていない。遺構は機械掘削後の図8～9層上面付近で検出した。西区の本層出土遺物にも15世紀のものがあり、東区と同様の年代が与えられる。

第5層：東区、西区とも共通して認められた整地層が第5層である。最上部に粘土・粘土質シルト・シルトなどがみられ、その下部は厚い砂を主体とするという同じ特徴がみられた。TP-2.6m以下に堆積していた。層厚は東区で80cm以上、西区で100cm以上である。a・bの2層に細別する。第5a層は暗灰黄色～黄褐色の粘土・粘土質シルト・シルトなどであり、上面付近に鉄分の沈着がみられた。層厚は東区で10cm余、西区では10～30cmである。本層の上面で溝、小溝群、小穴など多くの遺構が検出された。第5b層は、様々な色調の細粒～粗粒砂で、シルトの偽縫合が混じる部分もある。本層上面

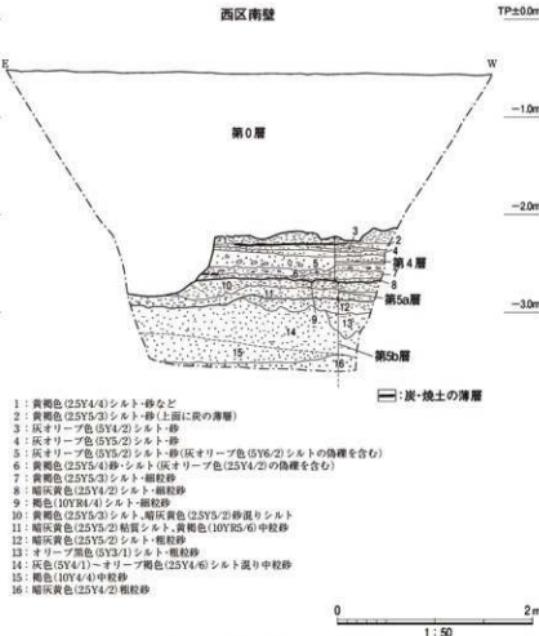


図6 西区南壁地層断面図

西区西壁

TP±0.0m

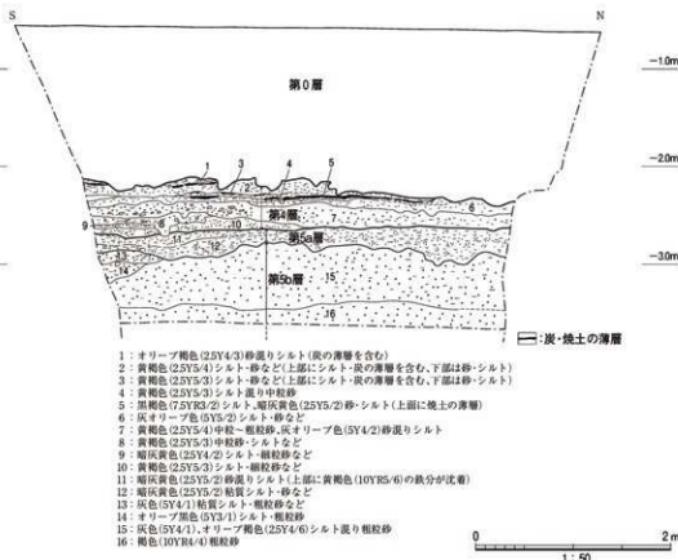


図7 西区西壁地層断面図

TP±0.0m

西区東壁(北半)

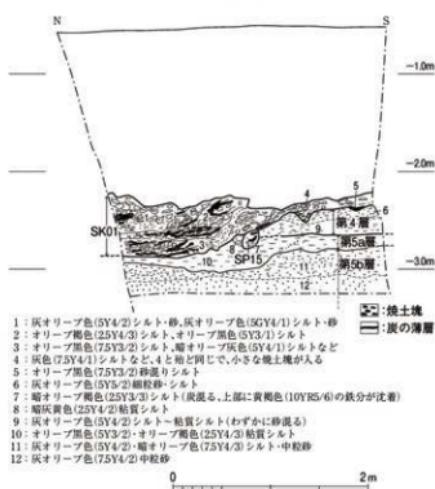


図8 西区東壁(北半)地層断面図

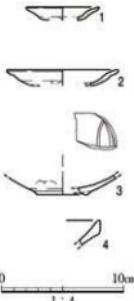


図9 第5a層および上面遺構
出土遺物実測図
SD85(1)、SK14(2)、第5a層(3・4)
編年[佐藤亜聖2022b]Ⅲ—1～3類に相当する。これらは13世紀と
考えられる。なお、瓦器は西区第5b層からも細片が出土している。

第5a層の上面は、東区では湧水により遺構の掘下げが困難で、完掘できないものも多かった。東区、西区とも溝、土壙、小穴群などの遺構が多数検出された(図10～12)。

東区では北部で南北溝SD81と東西溝SD91、中央部で東西溝SD85や南北溝SD86などが検出された。SD85と86は一連であった可能性が高い。両者は最大幅0.5m、深さ0.1m未溝と浅い。SD86の西側で、やはりSD85と一連の細い南北溝がみられた。SD91は幅0.4m弱、深さ0.1m未溝である。埋まつたのち上面に石が置かれていたが、故意かどうか判然としない。これらのはかにも細く深い溝が断片的ながら検出されている。これらは耕作に伴うものかもしれないが、埋土は一様でなく、重複関係から同一面の他の遺構(SK84を除く)より古いのが特徴である。北西部で検出されたSD81は幅0.9m、深さ0.1mで、他の溝より大規模で性格も異なるようであるが、中央部には連続しない。なお、これらの溝はさまざまな偽跡で埋まっており、水流の形跡は認められなかった。

土壙は、大小の規模のものが検出された。東区北部のSK84は東西1.0m以上の大きさで深さは0.1mほどであるが、東南に向って広がるかのような不定形な形状であった。重複関係から、小さな南北溝や小穴などより古い。SK92は東西2.3mで南北規模は不明、断面は湧水による崩落により記録できな

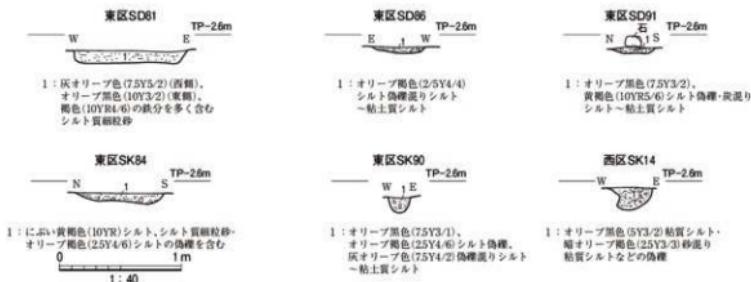


図10 東区・西区第5a層上面遺構断面図

かったが、深さは0.6m内外であり、シルト・砂などの偽疊で埋まっていた。西区で検出されたSK14は長軸0.55m、短軸0.45mで深さは0.2mほどであった(図12)。

このほか東区・西区ともに多数の小穴が検出された。大きさはさまざまであるが、最大で直径0.3m深さ0.1mほどである。東区北端部では方形のものも3個認められた。西区の小穴は掘下げが可能であ

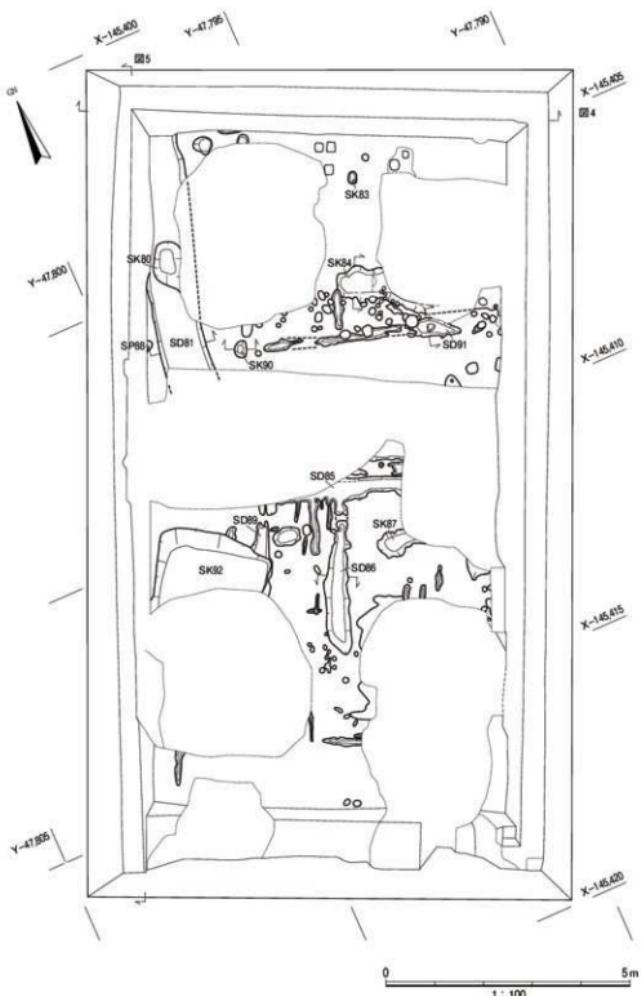


図11 東区第5a層上面造構平面図

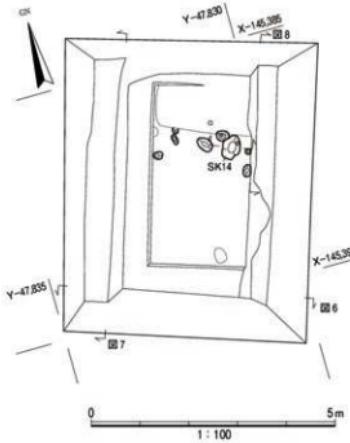


図12 西区第5層上面遺構平面図

に相当し、13世紀前半に位置する。11・12は口縁部の特徴から壠の出土例では15世紀と考えられている[土山健史1989]。13はやや大きい細形管状土錐で重量は3.5gである。本層は13世紀の遺物を含むが、盛土の年代は15世紀頃とみられる。

第4d層上面の遺構(図14・15)は以下のとおりである。

SK77は東西0.85m、南北0.3m以上、深さ0.2mで、大量の貝殻を包含していた。SK93は東西0.9m、南北1.0m以上、深さ0.2mの規模である。SP73は直径、深さとも0.2mほどである。SK72は東西0.5m、南北0.4m、深さ0.15mで、やはり貝殻が多く含まれていた。SK68は直径0.5m余、深さは0.15mで、残りの悪い棒状の鉄製品(釘か?)が出土している。SP67は深さ0.1mほどと浅く、底面に石が置かれていた。上面が水平ではないが、礎石(根石?)の可能性がある。ただ周間に組合う礎石などはなかった。以上のほか、遺構ではなかったが、数か所で炭や貝殻の集中的な分布が、平面的に認められた。

り、直徑数cmの柱材が検出される例(図化できず)があった。

以上の遺構から出土した遺物は細片が多いが、瓦質土器羽釜などのほか、東区SD85から瓦器(細片)、西区SK14から壁土らしき粘土塊が出土している。後述する第4d層の年代からみて、本遺構面の年代は上限が13世紀、下限が15世紀頃で、やや時間幅が大きいがそれ以上に絞り込むのは困難である。

b. 東区第4d層の遺構と遺物(図13~15)

第4d層出土の遺物(図13)には土器皿5、瓦器6~8、瓦質土器擂鉢10~12、中国産青磁碗9、土錐13などがある。瓦器柄6~8のうち6は3とほとんど同じで高台消滅の直前段階である。7は厚手であると想われる。9は蓮弁を描いた龍泉窯系II類

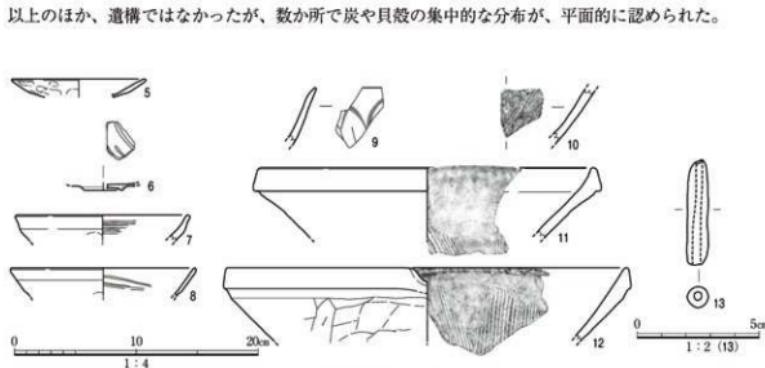


図13 東区第4d層出土遺物実測図

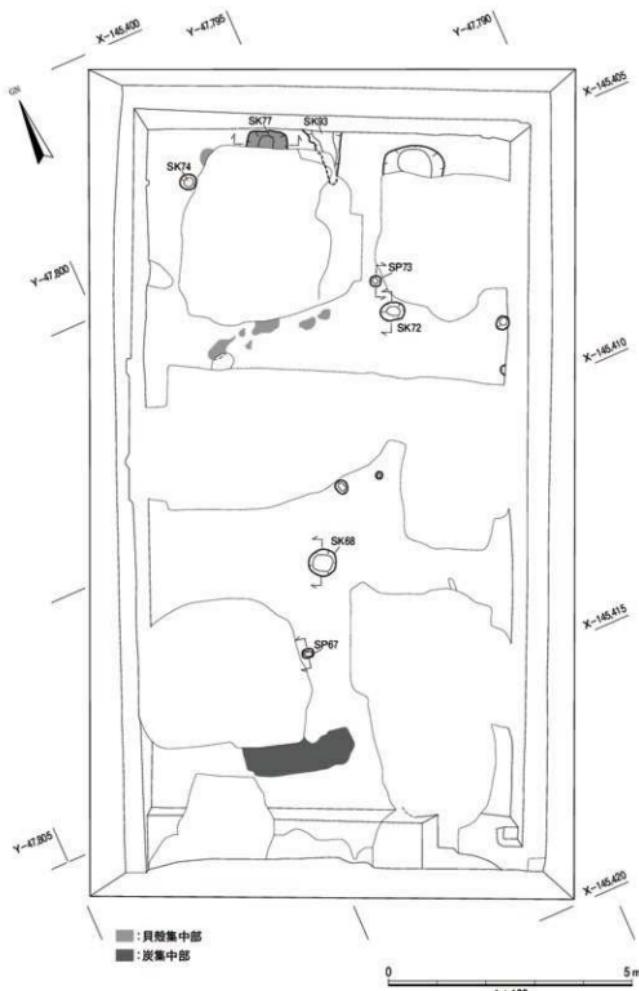


図14 東区第4d層上面造構平面図

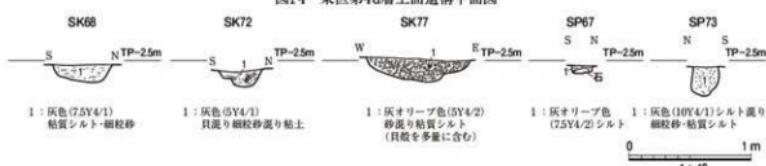


図15 東区第4d層上面造構断面図

以上の第4d層の遺構からの出土遺物には年代判定に有効なものが無いが、上下の地層がいずれも15世紀代なので、やはり15世紀に属する。

c. 東区 第4c層の遺構と遺物(図16~18)

第4c層出土の遺物(図16)には、土師器14~19、備前焼20・21、古瀬戸24、瓦質土器22・23・25・27~31、東播系須恵器26、砥石32などがある。

14~19は皿で、14・16のように底部から直線的に口縁部が長くのびるタイプと17・19のように口

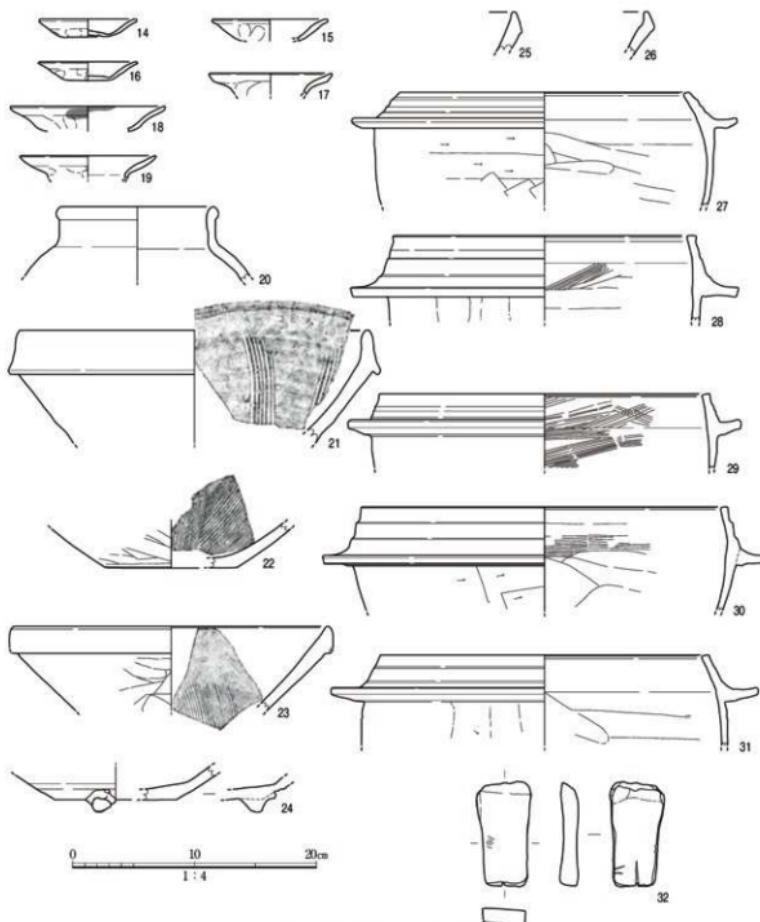


図16 東区第4c層出土遺物実測図

縁部から体部が屈曲するタイプがある。京都の類例では9a段階(15世紀前半)とその前後[平尾政幸2019]である。備前焼は20が壺、21が擂鉢である。いずれも乗岡編年[乗岡実2017]の5a～5b期で15世紀後半頃である。瓦質土器は擂鉢22・23・25がある。26は東播系須恵器こね鉢である。23は第4d層の11・12などと大きく変わらない。24は古瀬戸の大皿である。27～31は瓦質土器羽釜であり、27・31は口縁部が内傾する和泉型D1類、28～30は口縁部が直立ぎみで同D2類に属し、両者はいずれも15世紀頃に位置づけられる[皆原正明1983]。32は砥石で、図の上端面には自然面が残るが、他は平滑である。縦断面図の、向って左右両面が研ぎ面となっているが、深く窪んでいる左側の面が主に利用されたとみられる。第4c層の年代も15世紀後半頃であろう。

第4c層上面の遺構(図17・18)は以下のとおりである。

SK61は東西0.5m、南北0.5m以上で、深さ0.2mであった。その中位に貝殻が集中していた。SK62は東西0.85m、南北0.6m余で深さは0.3mである。貝殻が特に多く、ぎっしりと詰まっていた。SK63は東西0.4m以上、南北0.6m、深さ0.3mの規模である。SK64は東西1.0m以上、南北1.3m、深さ0.3mで、部分的に貝殻の集中がみられた。SK76は北東隅で検出された土壤で東西0.5m以上、南北0.2m以上、深さ0.4m以上であるが、大半は調査区外で詳細不明である。SP75より古い(図4)。SP76は、掘形が直径0.3m弱、深さ0.4m余で、柱が遺存していた。柱材は断面が長辺0.11m余、短辺0.05mの角材であった。SK79は細長く蛇行するが南へ続かないので土壤とした。幅0.5mで長さ約1.0m、深さ0.3mである。遺構内の下位に多量の貝殻が集中して埋まっていた。このほか、SK57の北側や中央部で砥石らしき石を各1個検出している。以上の遺構の年代も、上下の地層の年代から15世紀後半頃であろう。

d. 東区 第4b層の遺構と遺物(図17～19)

第4b層出土の遺物(図19)は土師器33～39、瓦質土器41～43、瓦44、土錘40などである。33～39は皿で、体部外面に指痕を留めている。京都では9B・9c段階(15世紀中～後半)にみられる手法である[平尾2019]。40は太く短い紡錘形の管状土錘で、長さ2.75cm、幅2.1cm、孔径は1.35cmと大きく、重量は5gと軽い(遺存率は約5割)。41は擂鉢で、口縁部の断面形は三角形につくる。42は羽釜、43は甕である。43は頭部がなくなっている、体部から直接口縁部がとりつく。頭部のない甕は天王寺旧境内遺跡(ST94-7次) SD102の第5層(15世紀)には現れている[大阪市文化財協会1996]。44は丸瓦で、凸面は縦方向の粗いミガキ、凹面には布目と波形に連続する吊紐の痕跡がみられる。吊紐の繩目は波形3単位とも鮮明(反転部を除く)で、成形型を覆う布袋の外側で吊紐が全周していたことを示す。瓦編年の中世VI期(1380～1430年)以後の技法である[山崎信二2000]。本層の年代も15世紀であるが、第4c層の年代および土師器皿から、その後半に降るであろう。

第4b層上面の遺構(図17・18)は以下のとおりである。

SK57は直径約0.3m、深さ0.1mと小規模である。その北隣に、同じ層位で直径0.2m余の砥石らしき石材(平坦面あり)があったことから、その据付け穴であったかもしれない。西壁断面で検出されたSP60は掘形が東西0.25m余、南北0.2m、深さ0.55mほどの規模で、底付近で0.15m弱の柱材と思しき部分があったが、確実ではない(図5)。

以上の遺構から出土した遺物は少なく、SP60から土師器皿の細片が出土したのみである。遺構の

年代は決めがたいが、ベースの第4b層が15世紀後半頃の可能性があり、また第4a層上面遺構が15世紀後半からなので、本層上面遺構もその頃と想定される。

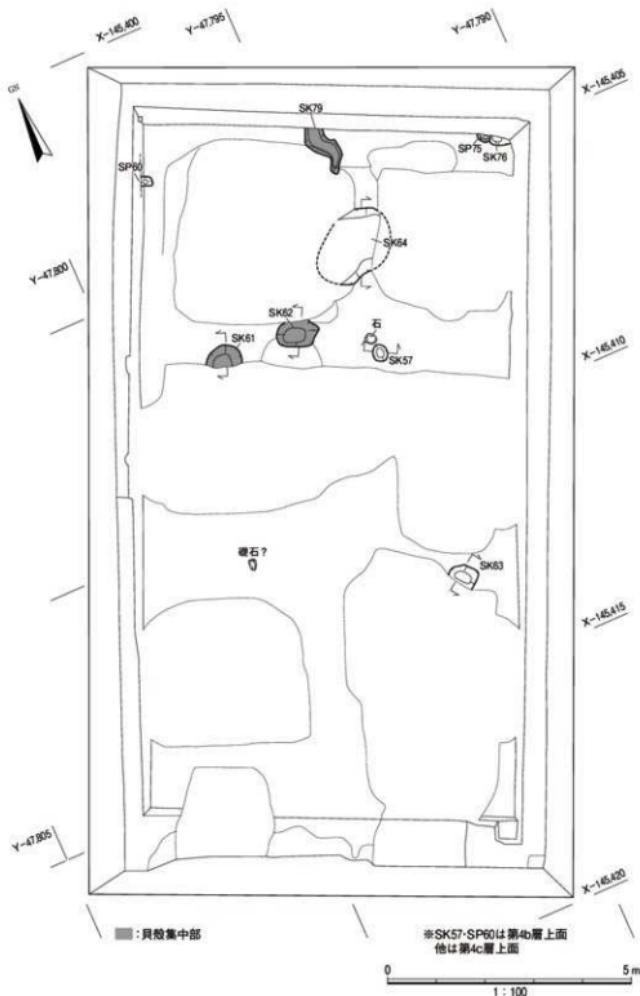


図17 東区第4b・4c層上面遺構平面図

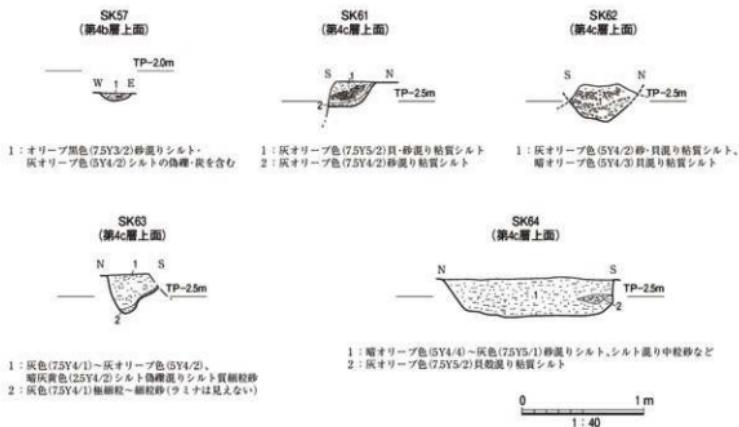


図18 東区第4b・4c層上面遺構断面図

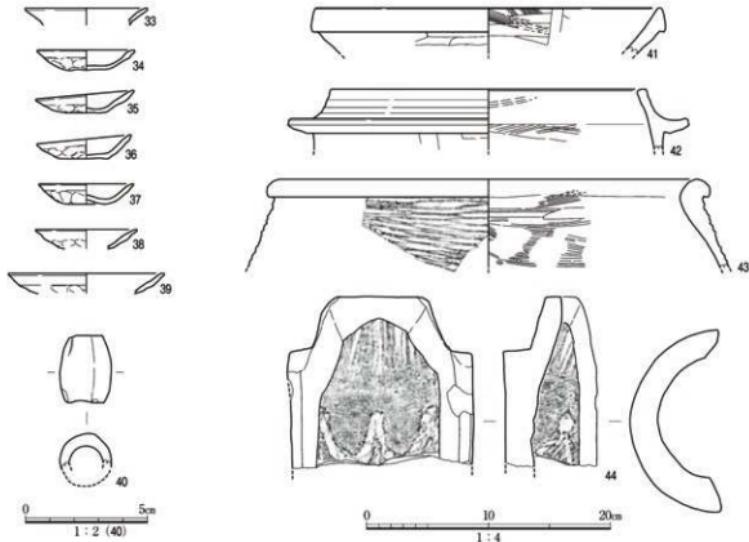


図19 東区第4b層出土物実測図

e. 東区 第4a層の遺構と遺物(図20~22)

第4a層出土の遺物(図21)は、土師器皿45のはかに実測できるものはなかった。

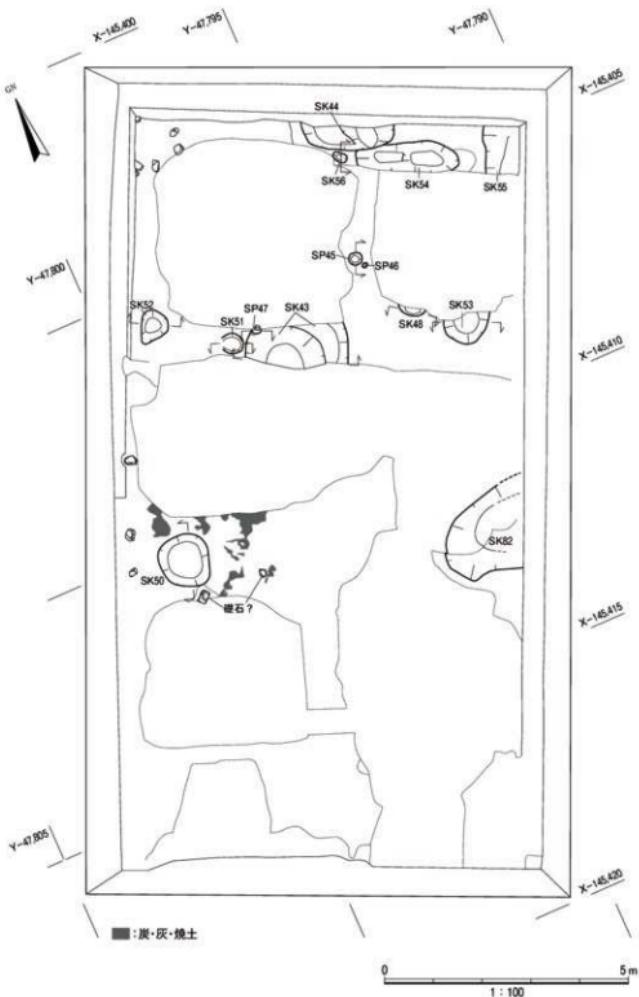


図20 東区第4a層上面遺構平面図

第4a層上面の遺構と遺物(図20~22)を、北から順に述べる。

SK44は東区北端で検出された東西2.4m、南北0.6m以上、深さ0.3m余の土壌である(図4)。中国産青磁皿60、土錘61が出土した。60は[續伸一郎2022]によれば青磁VI類新相で、同古相とともに15世紀末~16世紀前半とされる。61は40と同形で大型の長さが短い太形管状土錘で孔径も大きく、現重量は31gである(遺存率は8~9割)。SK56は東西0.25m、南北0.35m、深さ0.15mほどの小土壌である。SK54は東西2.0m、南北0.6m以上で、深さは、より深い東半部で0.6mである。重複関係からSK44より古い。SK55は東区北東隅で検出された。東西・南北とも1.0m以上、深さ0.15m足らずの浅い土壌である(図4)。土器皿が多数出土し、51~59を実測した。このうち53~55は完形またはそれに近く接合・復元された。54と55のように異なるタイプの土器は、京都ではやはり9B・9c段階で共存している。SP45は直径0.2m、深さ0.2mである。柱穴かもしれないが、柱痕跡は認められなかった。SK52は東西・南北とも0.6m、深さ0.1mである。SK51は東西0.4m余、南北0.4m、深さ0.1m足らずと浅い。SP47は直径0.15m、深さ0.2mで底に石が埋まっていた。この石は長さが小穴の直径より大きいので、礎石ではないであろう。SK43は東区北部で検出された東西2.0m、南北0.7m以上、深さ0.6mの土壌である。土器皿48~50が出土した。いずれも外面にユビオサエの痕跡が顕著に残る。SK48は東西0.5m以上、南北0.3m以上、深さ0.15m弱の規模である。SK53は東西0.9m、南北0.6m以上、深さ0.2m余の土壌で、

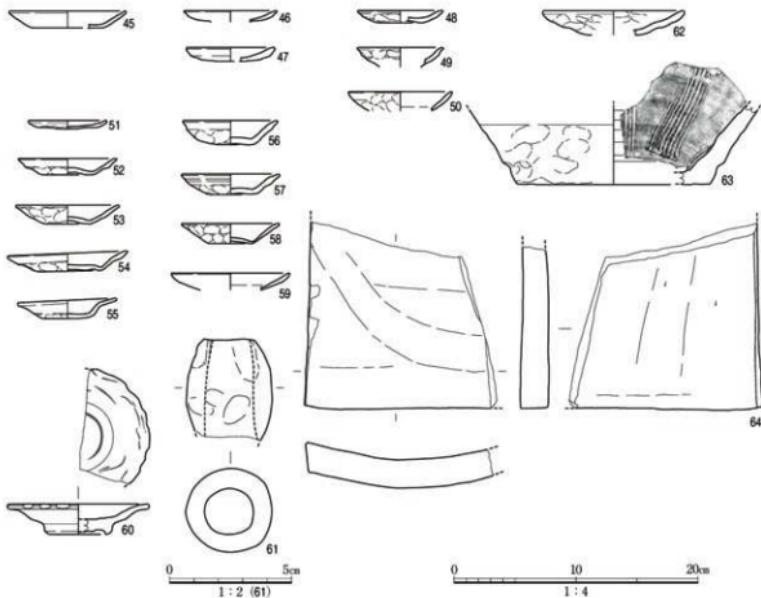


図21 東区第4a層・第4a層遺構出土遺物実測図

第4a層(45)、SK53(46)、SK50(47)、SK43(48~50)、SK55(51~59)、SK44(60・61)、SK82(62~64)

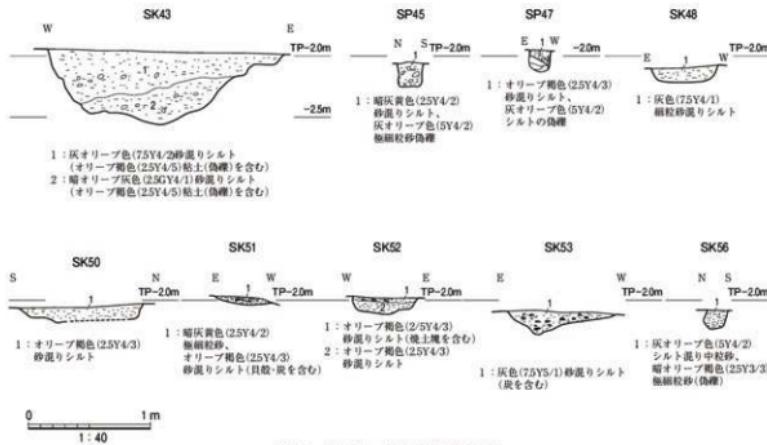


図22 東区第4a層上面遺構断面図

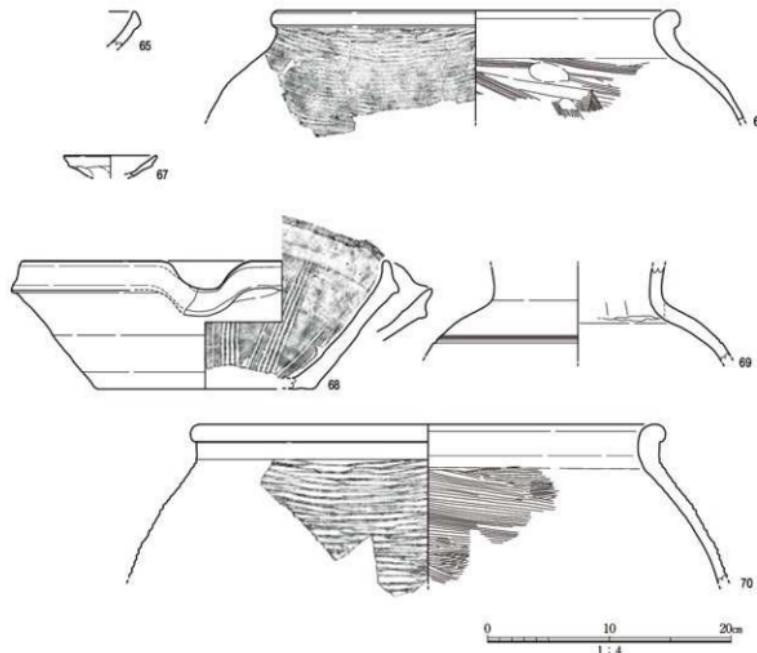


図23 西区第4層下部遺構出土遺物実測図
第4a層 (65・66)、SK05(67)、SK01(68~70)

土師器皿46が出土した。SK50は東西、南北とも1.0m余、深さ0.1m余のやや不整形な土壙で、土師器皿47が出土している。SK82は東西1.5m以上、南北1.8m以上、深さ1.1mの大型土壙で、シルトの偽礫や砂などで埋まっていた。土師器皿62、備前焼鉢63、平瓦64などが出土した。これだけでは年代不明であるが、62・63はいずれも近世のものではない。64は凹面の調整は丁寧なナデ、凸面の調整は粗雑なナデまたはケズリである。

以上の第4a層上面遺構群は、SK55、44などの土器により15世紀のおそらく後葉から16世紀前半までの年代幅に収まるであろう。

このほか、SK50の周辺では礎石の可能性があるものを含む石材の散在や炭・灰を多量に含む土の分布がみられた。

f. 西区 第4層の遺構と遺物(図23~25)

西区第4層は、東区第4層の下部層に相当する(先述)。ここから出土した遺物(図23)は、東播系須恵器鉢65、瓦質土器壺66である。65は細片だが口縁部の形態はⅢ—2類かその前後(主に13世紀)、66は口縁部が外反し、胎土に径5mm大の長石を含むなど他地域産かとみられる。先にみたST94-7次SD102の第5層では短い頸部から強く外反する壺も出土している。66はそれと頸部がないものの中間的形態である。SD102第5層の年代は少数の豊臣期の遺物を除いて15世紀第2~第3四半期とされている[佐藤隆1996]。

第4層上面の遺構と遺物は以下のとおりであるが、西区ではこの面まで機械で掘り下げたので、報告する遺構には上位層に属するものが含まれうる。

SK01は図8-6層上面の遺構で、東西2.0m以上、南北1.2m以上、深さ0.5m余の規模で、焼土塊を含む埋土で埋められていた。備前焼68、常滑焼とみられる69と瓦質土器70が出土した。68は器高が低く口縁部を大きく上に拡張する鉢であり、69は肩部に直線彫描文を施し頸部が直立する壺である。70は壺で、頸部はかなり短いが直立気味で、口縁部は玉縁状に外反する。66との形態差はわずかであり、ST94-7次SD102第5層と変わらぬ年代であろう。SK04は東西0.6m、南北0.45m、深さ0.4mの規模で、上面が平たい花崗岩が二石、重なった状

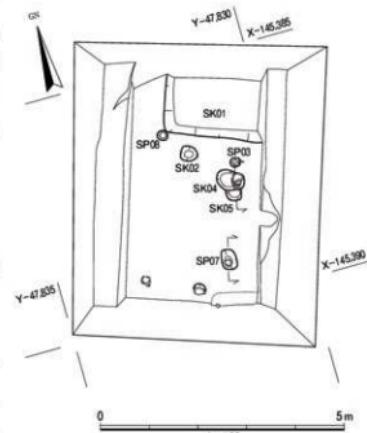


図24 西区第4層および上位層遺構平面図

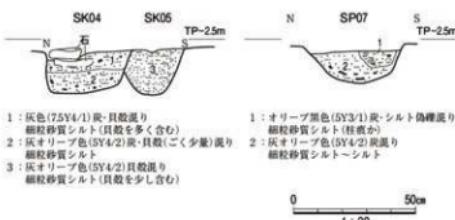


図25 西区第4層下部遺構断面図

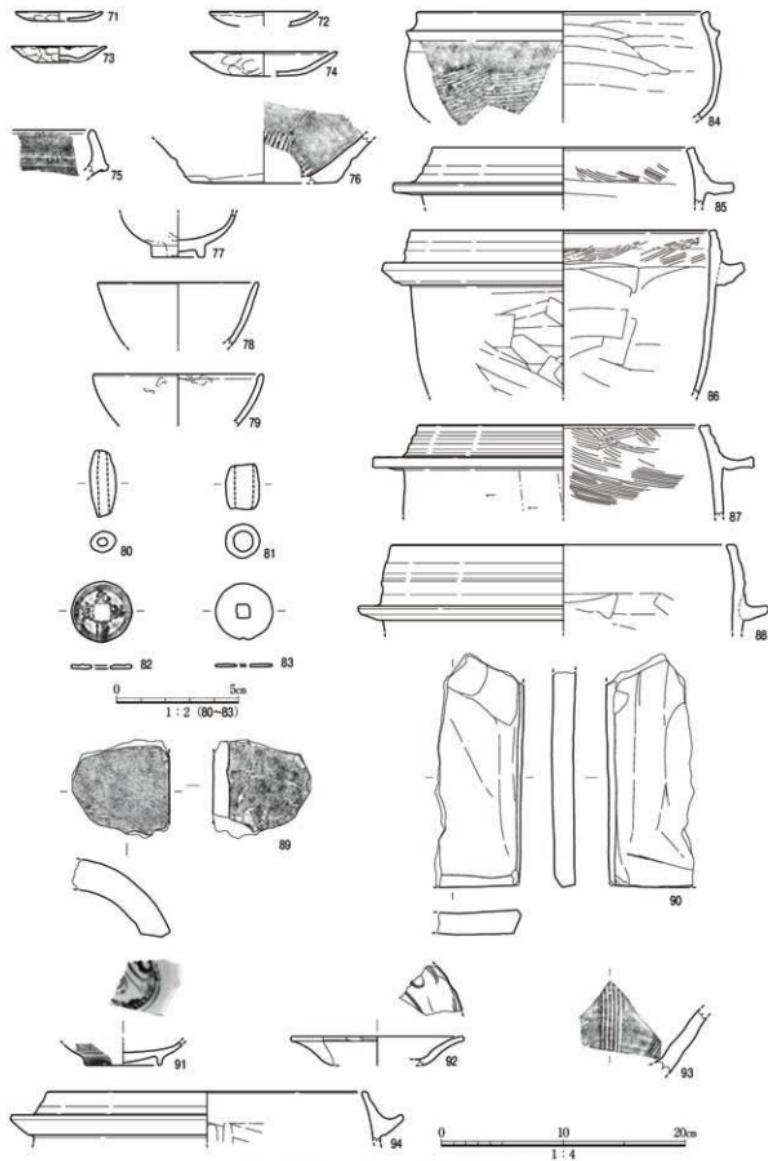


図26 東区第3層・第2～3層出土遺物実測図
第3層(71～90)、第3層上面(91)、第2～3層(92～94)

態で検出された。この石材が礎石であった可能性がある。SK05はSK04より古く、東西0.3m、南北0.45m、深さ0.4mで、貝殻を多く含んでいた。土師器皿67が出土した。この皿は京都では9期から10A期(15世紀前半～16世紀前半)にみられる。

g. 東区 第3層の遺構と遺物(図26～31)

第3層中まで機械掘削を行ったので、人力による調査ではa・b層の掘り分けはできていないが、図4・5により帰属する層位が判明する遺構がある。また検出した遺構の中にはより上位層に属するものが含まれている。

第3層出土の遺物は、土師器、瓦質土器、肥前陶器、備前焼、中国産磁器、瓦、土錐などである(図26)。このほか、下位層に由来する可能性があるものとして92～94がある。71～74は土師器皿であり、概して浅い器形で、外面にユビオサエ痕などが残っている。75・76は備前焼擂鉢で、75の口縁部内面には摺目を施した際の櫛状工具の痕跡が残る。口縁部外面には凹線がなく、21のように古いタイプである。76は体部下半部で、摺目は放射状で斜放射状ではない。77は肥前陶器碗で、高台は露胎(外面の一部を除く)である。他の遺物に比べ、これだけが新しく、混入かとみられる。78・79は中国産青磁のいわゆる直口碗である。79は釉の溶けが悪く、内外面に釉切れがみられる。80・81は管状土錐で、重量は80が1.9g、81は3.4gであるが、81は短く太く、孔径も大きい40・61と形の上では似ているが、かなり小さい。82は元祐通宝で、直径2.5cm、厚さは外縁部で0.15cm、重さ3.5gである。北宋元祐年間(1086～1093)の鋳造である。83は青銅の無文鏡で、直径2.3cm、厚さは0.1cm、重さ1.8gを測る。84は肩部に突帯が巡る深い器形で播磨系とみられる土師器鍋[姫路市教育委員会1975]であり、体部外面はタタキで仕上げている。堺では15世紀後半頃から出土例があり、焙烙の粗型と考えられる[十河良和1996]。85～88は瓦質土器羽釜で、口縁部はやや内傾するものが多いが、ほぼ直立する86もある。89は丸瓦で、端部を面取りし、凹面には吊紐痕がみられる。90は平瓦で、凹面側の端部を面取りし、凹面は丁寧なナデ、凸面は粗いナデまたはケズリで仕上げている。91は青花碗で、中世後期貿易陶磁の碗C群に属するようで、15世紀末から16世紀中頃までと位置づけられている[續2022]。ほかに、壁土の破片も出土している。

以上から、第3層出土の遺物は、混入品とみられる77を除いて15世紀後半から16世紀に及ぶが、本層は整地層なので、整地の年代は91の下限である15世紀末～16世紀中頃の範囲となる。

このほか、92は中国産青磁皿で、口縁部は輪花につくり、内面には文様が刻まれ、60と類似している。93は備前焼擂鉢で、摺目は正放射状である。94は瓦質土器羽釜で、口縁部の外面には細い沈線が巡る。

第3層の遺構と遺物は以下のとおりである(図27～31)が、ここでは層位が判明する遺構、および遺物が出土した遺構などを中心に北から順に報告する。それ以外の遺構は断面図(図28)を参照されたい。東区北端で検出したSK34は第3b層上面の遺構で、SK35より古い(図4)。東西0.65m以下、南北0.7m以上、深さ0.15mほどの規模で、北に向かって幅が狭くなる。中国産青磁碗95、不明陶器96、丸瓦97が出土した。95は外面の文様が細蓮弁文で、この碗は6期(15世紀末～16世紀前半)と分類されている[續2022]。96は内面にのみ透明釉を施し、外面は露胎で、器種がわからない。胎土はやや粗く、瀬戸美濃焼に似るように感じられ、古瀬戸焼の壺かもしれない。97は凸面に縱方向のナデ、凹面に布目

と吊紐痕が見られる。そのほか人頭大およびそれより小さな石が2個出土したが、石材は不明(うち1個は花崗岩ではない)である。SK35も第3b層上面遺構で、SK34より新しい(図4)。東西が最大2.4m、南北0.5m以上で深さ0.4mであった。土師器皿109・110が出土した。その東側で遺構の西端が見えていたが、SK36~38などの存在により、平面形は確定できなかった(図4、SK100とする)。SK36

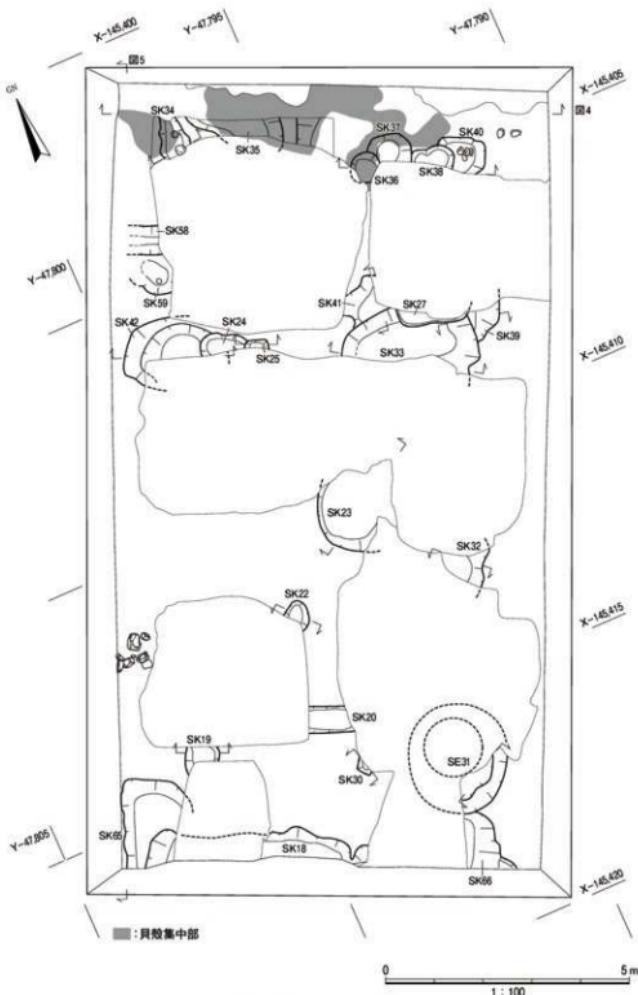


図27 東区第3層遺構平面図

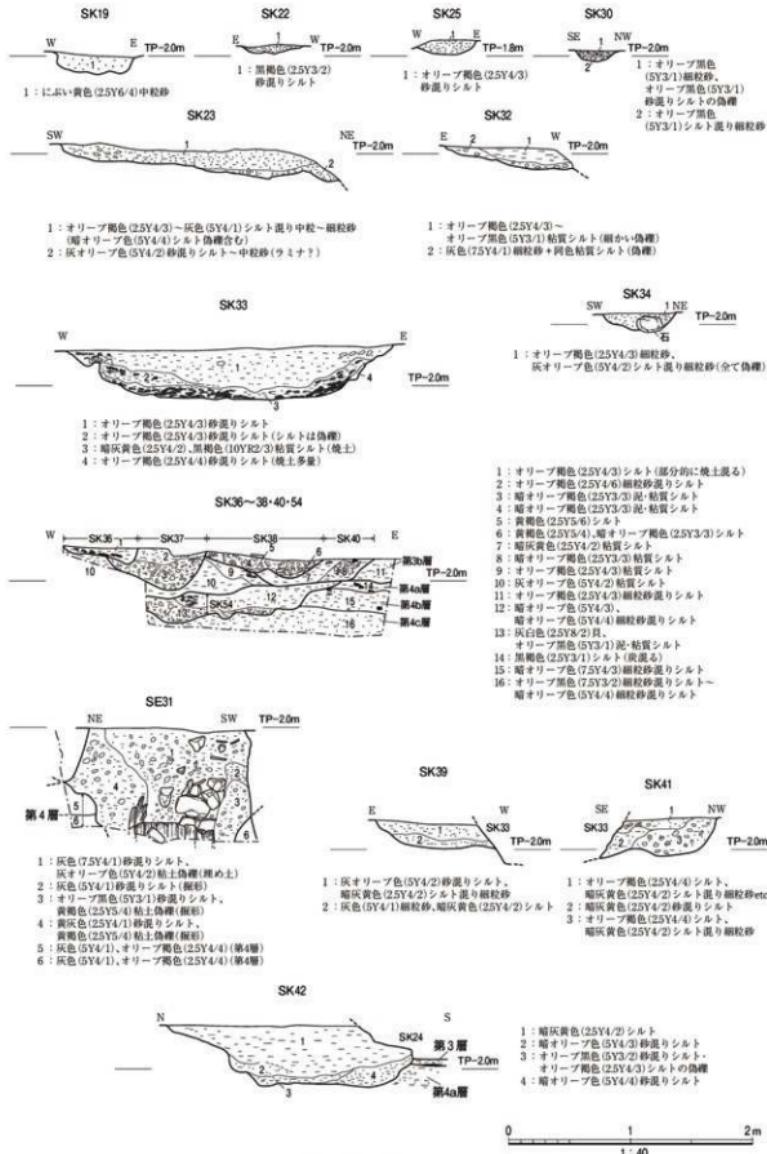


図28 東区第3層遺構断面図

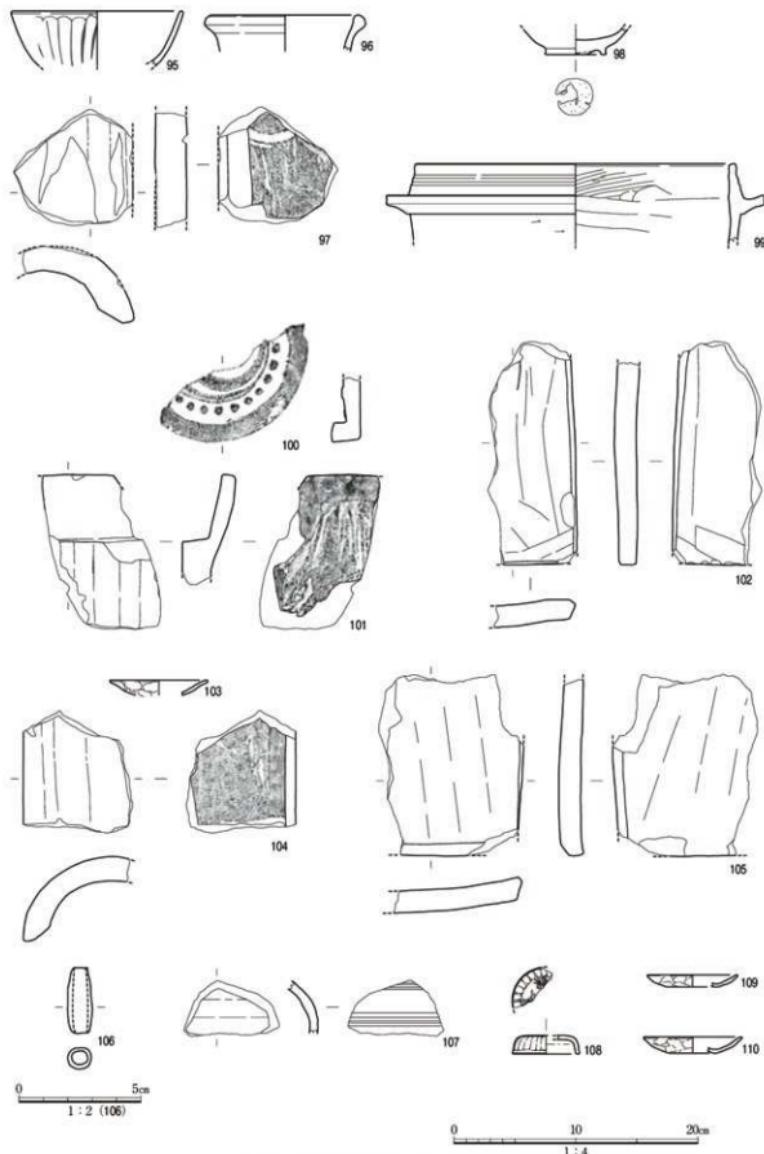


図29 東区第3層遺構出土遺物実測図(1)

SK34(95~97)、SK38(98~102)、SK40(103~105)、SK58(106)、SK42(107)、SK33(108)、SK35(109·110)

～38・40は東西に並んで重複する土壙群で、切合い関係は、古い順にSK40→SK38→SK37→SK36である(図28)。SK36は直径約0.6mほどの円形で深さ0.1m余、部分的に焼土を含み、下部層に多量の貝殻を含んでいた。SK37は東西0.9m、南北0.6m以上、深さ0.3mで埋土の下部層に貝殻を多量に含んでいた。SK38は東西0.9m以上、南北0.4m以上、深さ0.15mで、やはり貝殻を多く含んでいた。出土遺物には瀬戸美濃焼碗98、瓦質土器羽釜99、巴文軒丸瓦100、丸瓦101、平瓦102などである。98の釉調は淡い緑色を呈する御深井釉とみられ、そうであれば17世紀前半以後に降る。99は瓦質土器とはいえ、胎土が土師器と同じである。101の凹面には吊紐痕がみられる。SK40は東西1.2m以上、南北0.7m以上、深さ0.2mで、やはり下部層に貝殻を含んでいた。土師器皿103、丸瓦104、平瓦105、10数cm大の石塊数個などが出土している。104の凹面には布目が残る。105は、凹面は端部を面取りし、丁寧なナデ、凸面には粗いナデまたはケズリがみられる。SK58・59は第3b層上面遺構で、SK58がSK59を壊している(図5)。SK58は東西0.7m以上、南北1.2m、深さ0.45mである。環状土錘106が出土した。この土錘も孔径が大きく軽い。重量は1.9gである。SK59は東西0.9m以上、南北1.0m以上、深さ0.85mで、中部層に炭などを含んでいた。SK42は東西2.0m以上、南北0.9m以上、深さ0.5mの規模で、SK24より古い。中国産青磁壺107が出土した。肩部の上下に沈線文が各一段巡っている。SK33は東西1.4m、南北1.0m以上、深さ0.45mで、埋土の下部層に焼土を多く含んでいた。中国産青白磁香合の蓋108が出土した。外型づくりで天井部には草花などの文様がある。下部層から火を受けた壁土も出土している。SK23は東西・南北とも1.6m以上、深さ0.2m余で、比較的多くの遺物が出土した。壁土111は被熱した粗い灰黄褐色土で木舞の痕跡が明瞭に残っており、図中、横方向にみられる痕跡から木舞の材は直径3～6mmで植物質(木や竹の小枝など)のものであろう。外表面(壁面)にはやや精良でにぶい黄橙色土による厚さ2mmの上塗りを施している。鉄漆112は椀形漆で、内底部に鉄分が付着している。焰烙114は外面が格子タタキであり、大坂ではタタキが体部下半に収まるのは豊臣前期の傾向であるが、体部から底部への丸みは豊臣後期的でもある[大阪市文化財協会1992]。土師器鍋116

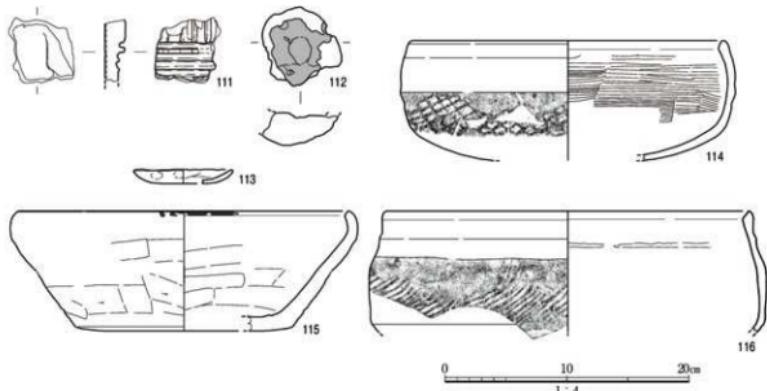


図30 東区第3層遺構出土遺物実測図(2)

SK23(111～116)

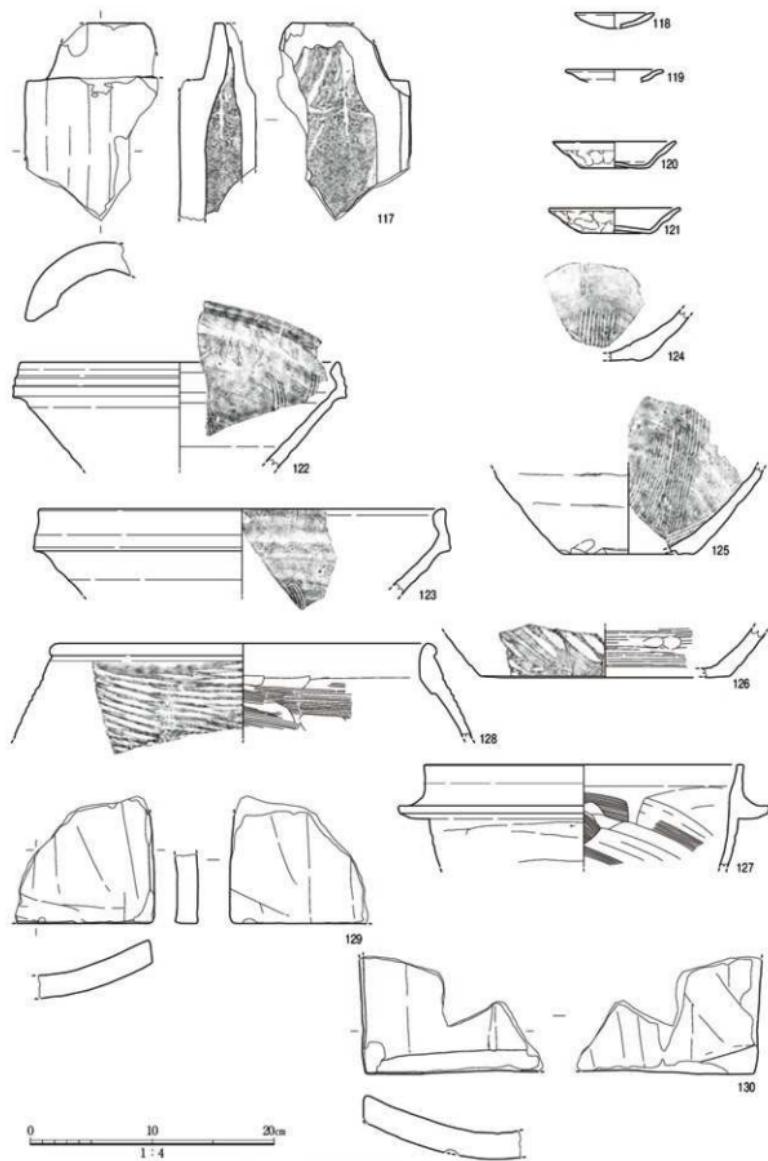


図31 東区第3層遺構出土遺物実測図(3)
SK32(117)、SK65(118・119)、SE31(120-130)

は焰烙の祖型であるが、堺出土例ではA-VI類で、16世紀後半とされる[十河1996]。厚手の土師器鉢115は破片2個からの復元図であるが、粗製で胎土が粗く、口縁部に煤が付着していることから、火入れ(灰炉など)と考えられる。SK32は東西0.8m以上、南北0.7m以上、深さ0.2mであった。丸瓦117が出土した。凹面には布目が見られ、凸面は縱方向のナデ調整である。SK65は東西1.3m以上、南北1.8m以上、深さ0.2m余で、土師器皿118・119が出土した。SE31は東西1.0m以上、南北1.5m以上に及ぶ井戸である。図27では湧水のため井戸側部分の平面図がとれなかったが、直径1.2m弱の桶の側材を井戸側としていた。遺物は廃絶時の埋め土から出土した。土師器皿120・121は底部から屈曲して口縁部が立ち上がる。16世紀前半～中頃かとみられる。備前焼播鉢122～125のうち、122・123は口縁部が薄く直立する16世紀後半のタイプ[乗岡2017]である。土師器壺126はタタキ痕が残る厚手で粗製の土器である。特に火にかけた様子は見られない。瓦質土器127は口縁部が直立しないしやや外開きであり、羽釜としてはかなり後出のものである。同壺128は頸部がなく肩部からそのまま口縁部にいたるタイプで、これも16世紀後半かとみられる。平瓦129・130はいずれも丁寧なつくりである。ほかに、花崗岩の石材も多数出土している。

このほかに、東区南部の西壁とその付近で花崗岩が集中しているところがあったが、明確な遺構の形にはなっていない。帰属する層位は第3a・b両層に及んでいた(図5)。なお、SK18・20は近世後半以後の遺構である。

以上の遺構と遺物から第3層以後の年代を整理すると、第3b層上面遺構ではSK34が15世紀末～16世紀前半頃、第3a・b層のいずれに属するか不明の遺構ではSE31が16世紀後半、SK23が豊臣期となる。より上位層に属するとみられるのがSK36～38・40であり、17世紀後半以後だが、おそらく降っても18世紀であろう。SK15・20は近世後半以後である。

3)まとめ

今回の調査結果は以下のようにまとめられる。

1. 当地における開発は13世紀から15世紀にいたる期間にその起点が求められ、それは第5層によるかなり大規模な整地(盛土)であった。おそらく淀川デルタの湿地帯を埋立てたのであろう。周辺の調査地をみると、南西約80mのNO11-1次調査では最大60cmに及ぶ貝殻廃棄層が検出され、それは度重なる15世紀の作土層の間に位置していた。今回の西区の西北西約60mのNO12-2次調査では16世紀の堀の埋土に15世紀の遺物が含まれていた。この二例から察すると、第5層の整地は15世紀に入ってからであったかもしれない。

この整地層の上面で検出された遺構は東西・南北の耕作溝群やSD81と土壤、多数の小穴などであり、耕作溝は他の遺構より古い。この埋立てによってまず農地が開発され、次いで生活域に変化したものとみられる。

2. 第4層から第3層の段階では盛土による整地を繰り返し、盛んにシジミ漁が行われていたことが判明した。検出された遺構はシジミの集中的な廃棄例を含む土壤が主体であり、少数の柱穴や礎石跡などもみられた。土壤にはしばしば焼土塊を伴ったり、生活面の上面に炭の薄層がみられた。



国32 野田城推定復元図

おそらく、大量のシジミを煮て、その剥き身を商品化したのである。それは15~16世紀のことであり、土錘の出土とも相俟って漁村的な色合いを濃くし、前代(第5層段階)から大きく変貌したように見受けられる。漁業神であるエビス神を祭る惠美須神社の存在も、そのことを裏づける。しかし一方で、NO11-1次地点では同じ15世紀でも作土層の連続的な堆積が知られており、実態は半農半漁といったところであろう。このことは、近代以前の日本の漁民の大半を占める網漁民の伝統的な実態が半農半漁であったという指摘

【高桑守1984】や、エビス神が室

町時代以降、農業神的性格も帯び

た[徳丸1999]ことからも、首肯されるところである(註2)。

3. このような変化の背景には二つの可能性が考えられる。ひとつは、最初の開発(第5層の埋立てとその上面造構)が四天王寺の鷺島庄段階のものであり、1433(永享5)年から1461(寛正2)年までの間に、野田村が四天王寺領から崇禪寺領に変わっていることと対応するという見方である。いまひとつは、当地の開発が15世紀からとすれば、それは崇禪寺領になったことを契機に始まったという見方である。現時点ではいずれとも決しがたい。

4. 今回の調査では、期待された野田城に関する遺構は発見されなかったが一定量の瓦、丁寧なつくりの壁土などの出土から、その片鱗は窺える。

冒頭で述べたように、過去の断片的な調査では野田城に関する有力な資料が得られている。NO07-2次・NO12-2次調査では堀状の遺構が検出されており、NO15-1次調査では調査区が堀の内部にあたると推測されている。この3箇所を定点と仮定して堀を復元したのが図1と図32である(註3)。

この復元はかなり大胆かつ単純なものであるばかりか、北側などはまだ資料不足である。ただ、NO16-1次調査地は、明らかに城外であろう。また、当地の真宗寺院二寺(極楽寺、圓満寺)の存在は、本願寺十世宗主証如にまつわる伝承や、本願寺が三好氏と組んで野田城を構えたことなどから、この二寺が(開基年代は不明だが)野田城ゆかりの地に建設された可能性を示す。よって、城域の北限は圓満寺より北であり、NO16-1次調査地より南と推測できよう。また、「字城之内」がさらに西方に広がっていることは、今回復元した堀の外にも外郭の堀があったことを示すのかもしれない。

野田城の実態解明は今後に期するところが大きい。さらなる発掘調査の進展が待たれる。

註)

- (1)今回出土した多量の貝殻は現場での担当者の目視によりシジミに限られるとしたが、他の貝種が混じっていないとは断言できない。いくつかの遺構や地層にて貝殻のサンプリングを行ったので、貝の鑑定は今後の課題としたい。
- (2)ただし、本遺跡では土縁の出土はさして多くない。網漁民というより、貝などの採集漁民というのが実態に近そうであるが、純然たる網漁民以上に農業生産への依存度は高かったであろう。
- (3)図32のベースマップは内務省「大阪実測図」(1880年)であるが、図1(デジタルマップ)と重ねると正確に一致する部分とかなり不具合な部分がある。そのため、大阪実測図上での想定位置に各調査地を記入したので、図1と一致しない部分がある。

参考文献

- 大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2008、「野田城跡伝承地発掘調査(NO07-2)報告書」:「平成19年度 大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書」、pp.15-23
- 大阪市教育委員会・大阪文化財研究所2013、「野田城跡伝承地発掘調査(NO11-1)報告書」:「大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書(2011)」、pp.137-144
- 大阪市教育委員会・大阪文化財研究所2014、「野田城跡伝承地発掘調査(NO12-2)報告書」:「平成24年度大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書」、pp.7-14
- 大阪市教育委員会・大阪文化財研究所2017、「野田城跡伝承地発掘調査(NO15-1)報告書」:「大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書(2015)」、pp.61-68
- 大阪市教育委員会・大阪文化財研究所2018、「野田城跡伝承地発掘調査(NO16-1)報告書」:「大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書(2016)」、pp.141-150
- 角川日本地名大辞典編纂委員会1983、「角川日本地名大辞典 大阪府」 角川書店
- 大阪市文化財協会1996、「四天王寺旧境内遺跡発掘調査報告」、pp.1-136
- 佐藤亞聖2022a、「畿内窯瓦器概説」:「新版 概説 中世の土器・陶磁器」中世土器研究会編 真楊社、pp.187-200
- 佐藤亞聖2022b、「東播系須恵器」:「新版 概説 中世の土器・陶磁器」中世土器研究会編 真楊社、pp.219-230
- 佐藤隆1996、「中世後期の陶磁器・土器について」:「四天王寺旧境内遺跡発掘調査報告」、pp.81-92
- 菅原正明1983、「畿内における土釜の制作と流通」:「文化財論叢: 奈良国立文化財研究所創立30周年記念論文集」 奈良国立文化財研究所、pp.725-758
- 十河良和1996、「堺環濠都市遺跡出土の土師質土器・熔培について」:「関西近世考古学研究IV」 関西近世考古学研究会、pp.9-25
- 高桑守1984、「伝統的漁民の類型化にむけて」:「国立歴史民俗博物館研究報告」第4集 国立歴史民俗博物館、pp.57-69
- 横伸一郎2022、「中世後期の貿易陶磁器」:「新版 概説 中世の土器・陶磁器」中世土器研究会編 真楊社、pp.353-374
- 徳丸亞木1999、「えびす」:「日本民俗大辞典」上巻 吉川弘文館、pp.208
- 土山健史1989、「堺環濠都市遺跡における15・16世紀の在地土器」:「中近世土器の基礎研究」V 日本中世土器研究会、

- 乗岡実2017、「戦国時代の備前焼編年」：『東洋陶磁』第46号、pp.5-21
- 姫路市教育委員会1975、「加茂遺跡」姫路市文化財調査報告V 姫路市教育委員会
- 平尾政幸2019、「土師器再考」：『洛史 研究紀要』第12号 京都市埋蔵文化財研究所、pp.9-56
- 平凡社地方資料センター1986、「日本歴史地名大系 大阪府の地名」 平凡社
- 前田昇1988、「上町台地と大阪低地」：『新修大阪市史』第1巻 大阪市
- 山崎信二2000、「中世瓦の研究方法」：『中世瓦の研究』 奈良国立文化財研究所、pp.10-37

東区北壁地層断面
第5a層上面北部の遺構
(南から)



東区西壁地層断面
第5a層上面中央部の遺構
(東から)



東区東壁地層断面
第5a層上面東部の遺構
(北西から)



西区南壁地層断面
(北から)



西区西壁地層断面
(東から)



西区北壁地層断面
(南から)



西区第5a層上面の遺構
(西から)



東区第5a層上面の遺構
(南から)



東区第5a層上面中央部の遺構
(東から)



東区第4d層上面の遺構
(北から)



東区第4c層上面の遺構
(北から)



東区第4c層上面
SK62下部層
(南から)



東区第4c層上面
SP75
(南西から)



東区第4b層上面の遺構
(北から)



東区第4a層上面の遺構
(北から)



東区第3層上面および
上位層の遺構
(南から)



東区第3層
SE31
(北から)



東区第3層
SK37・38
(南から)



中央区内淡路町二丁目33における建設工事に伴う
大坂城跡発掘調査(OS21-1)報告書

調査個所 大阪市中央区内淡路町2丁目33
調査面積 111m²
調査期間 令和3年4月19日～5月13日
調査主体 一般財団法人 大阪市文化財協会
調査担当者 調査課長 高橋工、岡村勝行・島貫聰

1) 調査に至る経緯と経過

調査地は豊臣氏大坂城跡構の西部、松屋町筋から東20mに位置し、内淡路通りに面する(図1)。周辺ではこれまで数多くの調査が行われ、古墳時代から近世にかけての遺構・遺物が確認されている。もっとも近接する東15mのOS90-142次調査地では、住友銅吹所より古い17世紀初頭の銅精錬跡が検出されている。また、南30mのOS90-64・91-6次調査地では6世紀代の遺物が出土し、12~13世紀の建物跡、豊臣前期・後期の柱穴、溝などが検出され、長期間にわたって居住域にあったことが判明している[大阪市文化財協会2003]。

大阪市教育委員会により、令和3年1月6日に試掘調査が実施され、現地表下0.9m、1.5mで焼土層が確認された。いずれかが大坂ノ陣によるもので、豊臣期の遺構面および遺物包含層の存在が想定された。この結果を受け、本調査は敷地中央の東西6m、南北18mを対象とし、排土置き場の関係から、北と南に二分割して実施することになった(図2)。令和3年4月19日に北区から調査を開始した。まず重機で地表下0.8m(第7層)まで掘削し、その後、下位層を人力で掘り下げた。層序に応じて、順次遺構・遺物を検出し、実測・写真撮影による記録を進め、地表下2.8mまで調査した。4月26日に調査を完了し、埋め戻した。南区は5月6日から開始した。南部で竈が検出されたため、教育委員会と相談の上、幅3.5m、南に1m拡張した。その結果、新たな竈2基が発見され、これらの3基の竈を中心に調査を進めた。最終段階で中央部を深掘りし、地表下4.0mまでの地層の観察を行った。5月13日に現地における全作業を終了し、資材・機材を撤収した。

報告で用いた方位は、現場で記録した街区図を1/2,500大阪市デジタル地図に合成することによって得た世界測地系座標に基づき、座標北を基準とした。標高はT.P.値(東京湾平均海面値)を用いて

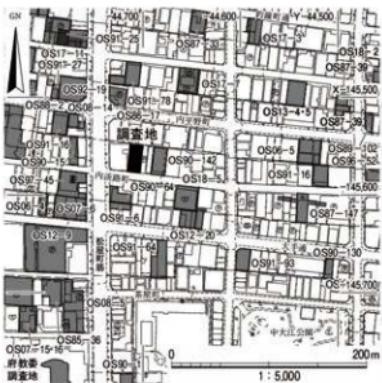


図1 調査位置図



図2 調査区位置図

TP+○mと表記した。なお、本報告の遺物の記載は調査課学芸員小田木富慈美が担当した。

2) 調査の結果

i) 層序(図3・4、図版1)

現地表の標高はTP+6.7~6.8mで、おおむね平坦であるが、現敷地は東から西に下がる傾斜地に位置する。南区の西壁断面地層を基に、TP+6.8m以下、TP+2.8mまでの地層を第1層~第17層に区分した。

第1層：現代の盛土層および攪乱埋土で、層厚は20~40cmである。

第2層：黒褐色細粒砂質シルトを主体とする近現代の盛土層で、層厚は10~30cmである。

第3層：暗オリーブ褐色(2.5Y3/3)細粒砂質シルトを主体とする近代の盛土層で、層厚は5~10cmである。

第4層：炭・焼土混り黒褐色(2.5Y3/2)細粒砂質シルトを主体とする近世以降の盛土層で、層厚は10~15cmである。

第5層：炭・焼土混り暗灰黄色(2.5Y4/2)細粒砂質シルトを主体とする近世以降の盛土層で、層厚は5~10cmである。

第6層：黄褐色(2.5Y5/6)粘土質シルトからなる近世の盛土層で、層厚は10~15cmである。重機によって掘削したため、詳細は不明であるが、断面観察では上面で土壤、礎石などが確認できた。

第7層：焼土・炭を含むオリーブ褐色(2.5Y4/3)細粒砂を主体とする近世の盛土層で、層厚は10~50cmである。調査区南東部では焼瓦を多く含む。

第8層：黄灰色(2.5Y4/1)細粒砂質シルトからなる整地層で、層厚は3cm前後である。固く締まり、

TP+7.0m
上面は焼けている。本層から遺物は確認できなかったが、上面で礎石群、土壤、溝など18世紀後半に位置づけられる遺構を検出した。建造物が想定される調査区西半に分布する。

+6.0m
第9層：黄色(2.5Y8/6)粗粒砂質シルト(三和土)からなる整地層で、層厚は10cmである。固く締まる。上面で礎石群、土壤、溝など18世紀後半に位置づけられる遺構を検出した。建造物が想定される調査区西半に分布する。

+5.0m
第10層：偽礎を多く含む暗灰黄色(2.5Y5/2)中粒~粗粒砂を主体とする盛土層で、層厚は20~40cmである。調査区西部に分布する。

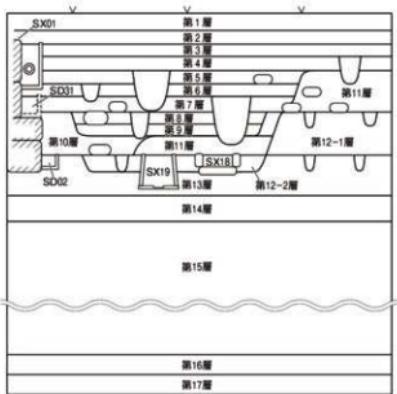


図3 地層と遺構の関係図

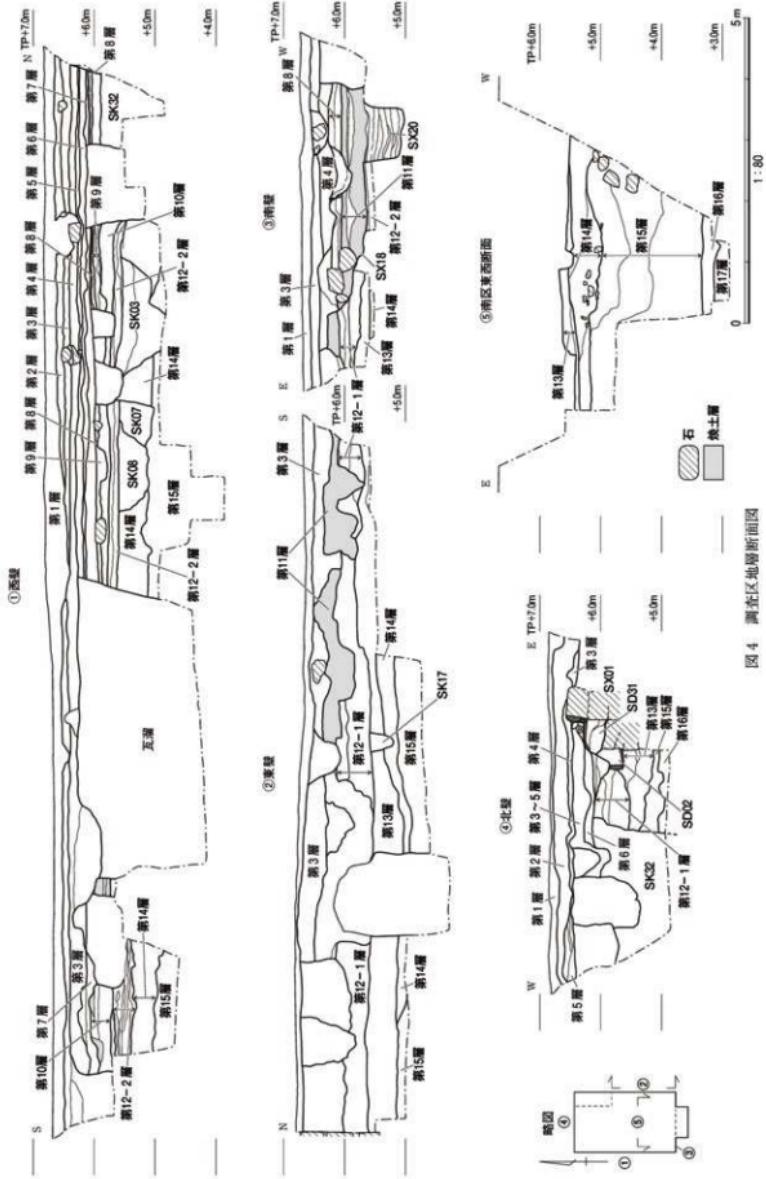


图 4 潘杏区地质剖面图

第11層：焼土・焼壁・炭からなる盛土層で、層厚は20~50cmである。調査区南端のSX18~20付近および南部東壁近くに分布する。肥前磁器の染付碗ないしは蓋物32や土師器焙烙33(図8)など、18世紀初頭に属する遺物を含む。

第12~1層：偽縞が多く含む暗灰黄色(2.5Y5/2)中粒~粗粒砂を主体とする盛土層で、層厚は20~40cmである。調査区南東部の高まりを構成し、調査区南東部では最上部は被熱のため、黒色化している。上面でSK25、礎石列SA21などを検出した。

第12~2層：偽縞混り黄色(2.5Y8/6)細粒砂~黄灰色(2.5Y4/1)細粒砂質シルトからなる3~5cmの薄層を積み重ねた整地層で、層厚は15~20cmである。上面は固く締まる。調査区の西半分に分布し、上面で竈SX18~20のほか、土壤・溝・礎石など、17世紀後半~18世紀前葉に位置づけられる遺構を検出した。

第13層：細・中疊を含む炭混りオリーブ黒色(5Y3/1)細粒砂シルトからなる盛土層で、層厚は30~50cmである。岩相から作土由来と考えられる。中国産青花皿4、肥前磁器碗5、土師器皿6・焙烙7、肥前陶器碗8・皿9、丹波焼播鉢10・11(図7)など、17世紀第2四半期を中心とする前半期の遺物を含む。上面では石垣SX01・SD02・礎石列SA14・土壤などの遺構を検出した。

第14層：黄灰色(2.5Y4/1)細粒砂質シルト~細粒砂からなる盛土層で、層厚は10~30cmである。中國津州窯産青花碗1・肥前陶器2・3(図7)など、豊臣後期に属する遺物を含む。

第15層：細~大疊を含み、偽縞混り黄褐色(2.5Y5/6)細粒砂質シルトを主体とする盛土層で、層厚は180cmである。周辺の調査成果から、大坂城三ノ丸築造時(慶長3(1598)年)の盛土と考えられる。

第16層：オリーブ褐色(2.5Y4/3)細粒砂質シルトを主体とする作土層である。層厚は20cmである。遺物は確認できなかった。

第17層：暗灰黄色(2.5Y4/2)細粒砂質シルトからなる作土層である。層厚は20cm以上である。遺物は確認できなかった。

なお、今回の調査では地山層には到達できなかった。

ii) 遺構と遺物(図5~8、図版2・3)

北区では第8層上面、第12層上面、第13層上面、南区では第12・13層の上面で、それぞれ精査を行い、大きく2時期の遺構を検出した。

a. I期：17世紀後半~18世紀前葉の遺構と遺物

第12・13層上面で検出した遺構で、石垣、竈、礎石列、土壤、溝などがある。

SX01：調査区北東部の第13層上面で検出した石垣で、東西1.80m、南北5.80m分を確認した。4段のうち最下段は地中にあり、地上部分の高さは0.70mである。直方体の花崗岩を用い、下2段は幅30~50cm、長さ30~50cm、厚さ20cm前後で、西に0.5mせり出す。上2段は一部を除き、幅30~50cm、長さ30~50cm、厚さ30~35cmの石を用いる。SX01は、後世の盛土により、徐々に埋め立てられるが、西辺に沿って、木樋、土管の排水施設が敷設され、近代まで機能した。

SD02：SX01の西辺に沿って設けられた樋である。幅0.50m、深さ0.20mで、長さ5.80m分を検出した。側壁には厚さ7cm前後の三和土を用い、底は一部木質が遺存し、板材が用いられたと推定される。

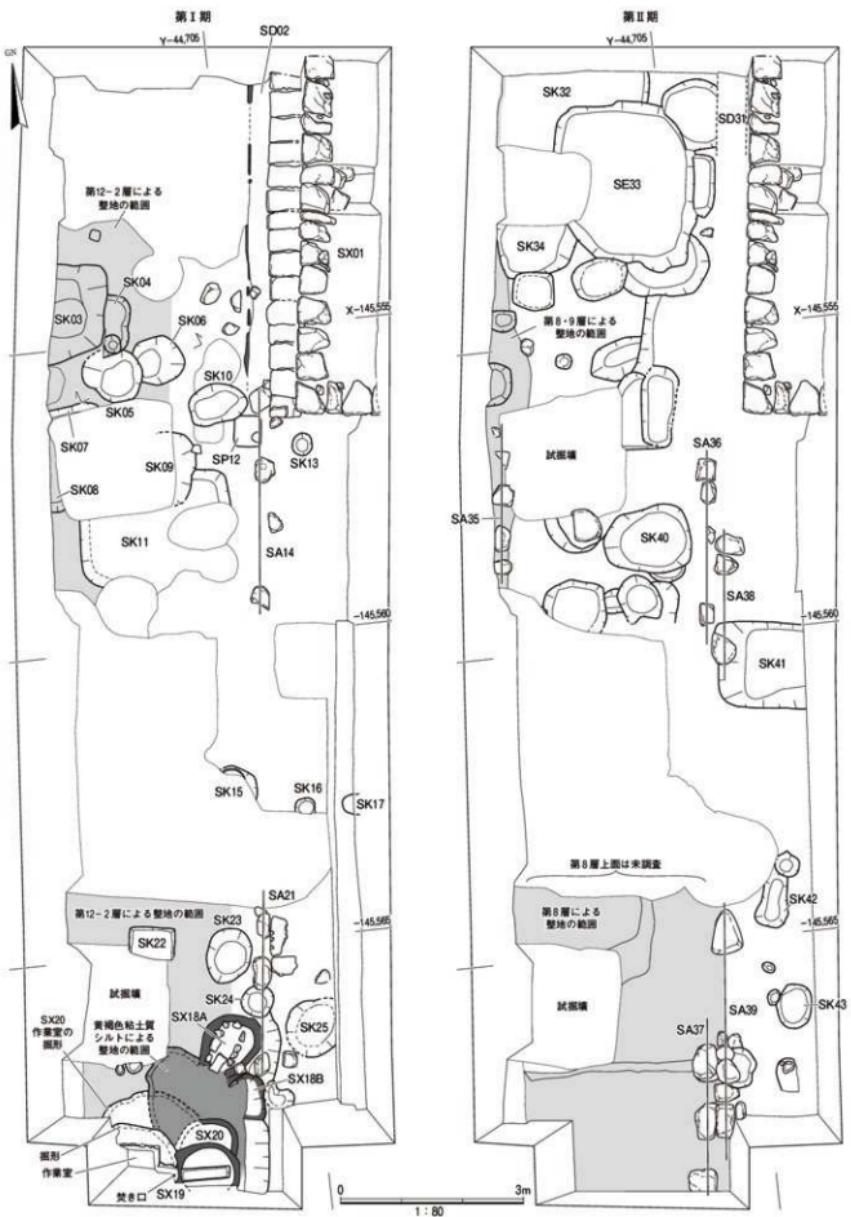


図5 調査区造構平面図

肥前器白磁碗30が出土した。器壁が薄く、17世紀後葉に属するものと考えられる。

SK03：調査区中央北寄りで検出した土壌である。東西0.80m以上、南北1.60m、深さ0.80m以上で、調査区外に拡がる。17世紀中葉に属する肥前陶器皿25、肥前器染付碗26、土師器焼塙壺の蓋27と身28のはか、丹波焼、瀬戸美濃焼陶器、瓦質土器、サザエ貝、魚骨が出土した。

SK04：調査区中央北寄りで検出した土壌である。東西0.45m以上、南北1.00m、深さ0.40mで、SK03に切られる。中国景德鎮窯産青花小杯15・中国漳州窯産青花大皿16・肥前陶器碗17・肥前器染付碗18など、17世紀前～中葉に属する陶磁器のはか、魚骨が出土した。

SK05：調査区中央部で検出した円形の土壌である。東西0.90m、南北0.85m、深さ0.35mで、17世紀後葉に属する肥前器色絵碗29のはか、肥前陶器、瓦質土器、魚骨が出土した。

SK06：調査区中央部で検出した円形の土壌である。東西0.80m以上、南北0.75m、深さ0.25mで、最上層には炭、焼土、銅滓が混じり、その下層はオリーブ褐色粗粒砂質シルトを主体とする埋土は丁寧に埋め立てられていた。明確な焼面は確認できないが、他の土壌と異なり、燃焼行為を想定させる。埋土からは、17世紀後半の肥前陶器・磁器、瀬戸美濃焼志野のはか、魚骨が出土した。

SK07：調査区中央西壁沿いで検出した一辺0.70m以上、深さ0.50mの土壌である。

SK08：調査区中央西壁断面で確認した一辺1.30m以上、深さ0.50mの土壌である。

SK09：調査区中央部で検出した一辺1.20m以上、深さ0.50m以上の土壌である。

SK10：調査区中央部で検出した長円形の土壌である。東西0.95m、南北0.65m、深さ0.3mで、土師器皿が出土した。

SK11：一辺2.40m、深さ1.30m以上の土壌である。肥前陶器碗、丹波焼擂鉢が出土した。

SP12：長辺0.45m、短辺0.42m、深さ0.2mの柱穴で、南東隅に直径0.18mの柱痕跡が残る。

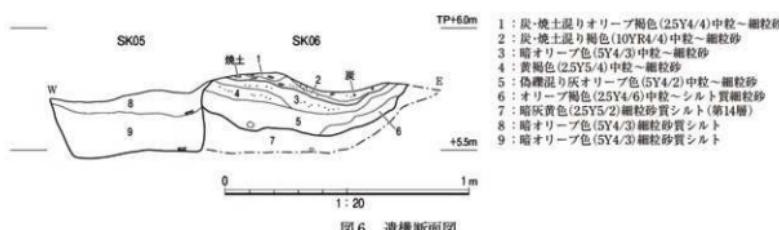
SK13：調査区中央部で検出した直径0.35～0.40m、深さ0.25mの土壌である。

SA14：調査区中央部で検出した南北方向の3つの礎石列である。SD02の南への延長線上に位置し、礎石間の距離は、北から1.10m、2.10mである。

SK15：調査区中央部で検出した長辺0.65m以上、短辺0.55m以上、深さ0.10mの土壌である。

SK16：調査区中央部で検出した直径0.35m、深さ0.35mの土壌である。瀬戸美濃焼の天目碗19、人骨の可能性がある骨片が出土した。被熱のため変色し、外面には付着物がある。

SK17：調査区東壁で確認した直径0.30m、深さ0.40mの土壌である。



SX18：調査区南端近くの第12-2層上面で検出した連房式の竈である。北側のSX18Aは壁体痕跡から長軸1.20m、短軸1.00mに復元でき、南西に焚き口をもつ(注)。燃焼空間は長辺0.50m、短辺0.45mで、現状の深さは0.1mである。底には平石を敷き、その上に一辺10~20cmの礫を馬蹄形に9つ配し、焚き口には砂岩製の台石(長さ31.0cm、幅16.5cm、厚さ10.0cm)が置かれていた。竈壁体、平瓦のほか、焰烙と思われる土師器片、鉄製釘が出土した。南側のSX18Bは燃焼室の壁体底部の一部が残るだけで正確な規模は不明であるが、斜面(傾斜約40度)で確認できる焼面の範囲から、一辺0.80mほどの燃焼室が想定される。燃焼室底から肥前磁器染付碗31が出土した。器壁が厚く、外面には草花文、高台内には「大明年製」銘を施す。18世紀初頭とみられる。SX18南西は4cm前後浅く凹み、黄褐色粘土質シルトで整地されていた。

SX19：調査区南端(拡張区)の第12-2層上面で検出した地下式竈である。燃焼室はよく遺存しており、深さ0.70m、竈口の直径は0.85m、壁体の厚さは0.10m前後である。底には搔き出し用の溝を加工した石材を敷く。西に焚き口、作業室がある。作業室の正確な規模は不明であるが、深さは0.8mあり、壁は丸瓦を7段ほど小口積みして作られていた。燃焼室の埋土からは、鉄製釘のほか、三巴文軒丸瓦24が出土した。2箇所に釘孔を有する。作業室からは17世紀中葉に属する肥前陶器皿20、肥前磁器染付徳利22のほか、中国漳州窯産青花碗21が出土した。

SX20：調査区南端(拡張区)の第12-2層上面で検出した地下式の竈で、SX19に切られる。西に作業室をもち、深さは0.7mで、厚さ数cmの粘土質シルトを十数層重ね、丁寧に埋め立てられていた。位置関係、規模から、SX19に先行する竈と考えられる。

SA21：調査区南部の第12-2層上面で検出した礎石列で、SD02、SA14の延長線上に位置する。礎石間の距離は、北から1.00m、1.50mである。一辺0.55mの礎石が使われており、敷地境に作られた土塀の可能性がある。

SK22：調査区南部で検出した長辺0.75m、短辺0.40m以上、深さ0.25mの土壙である。掘形はほぼ直方体を呈し、有機質の付着が顕著で、木枠の存在が想定される。黄褐色粘土質シルトで埋め戻されていた。埋土からは、丹波焼、瓦のほか、肥前磁器染付小杯23が出土した。外面には葉文を施し、17世紀中葉に属する。

SK23：調査区南部で検出した直径0.85~0.90m、深さ0.20mの土壙で、17世紀中葉の丹波焼摺鉢のほか、寛永通宝の錢縫15枚分が出土した。うち一枚はX線撮影の結果、新寛永銭であることが確認された。

SK24：調査区南部で検出した直径0.55m、深さ0.15mの円形の土壙で、17世紀代の肥前磁器碗のほか、備前焼、丹波焼の破片が出土した。

SK25：調査区南部で検出した直径0.90m、深さ0.40mの土壙で、肥前陶磁器、瓦質土器などが出土した。

b. II期：18世紀中葉～後葉の遺構と遺物

第8~10層の上面で検出した遺構で、礎石列、井戸、土壙、溝などがある。ここでは主要な遺構・遺物についてのみ記載する。

SD31：北壁地層断面で確認した、石垣SX01の西辺に沿う溝で、幅0.40m、深さ0.15mである。

SK32：調査区北端で検出した、東西2.40m以上、南北1.25m以上、深さ1.20m以上の大型の土壌である。

SE33：調査区北部で検出した長辺3.00m、短辺2.60mの井戸である。

SK34：調査区北部で検出した東西1.10m、南北0.70m以上、深さ0.25mの土壌である。肥前陶器、備前焼、土人形のはか、土師器ミニチュア焼炉34が出土した。煤が付着しており、実際に使用している。外面には赤色顔料による施文、底部には判読不明の墨書きを有する。18世紀代のものであろう。

SA35：調査区中央西壁沿いで検出した礎石列である。西側に建物が想定される。

SA36：調査区中央部で検出した礎石列で、I期のSA14の主軸をほぼ踏襲する。

SA37：調査区南端で検出した礎石列で、北にあるSA36の主軸上に位置する。

SA38：調査区中央部で検出した礎石列で、SX01西辺の石垣、SA39の延長上に位置する。

SA39：調査区東南部で検出した礎石列である。一辺0.60～0.75mの大型の礎石を用い、礎石間の距離は北から2.25m、0.90mである。西側に建物が想定される。

SK40：調査区中央部で検出した東西1.40m、南北1.00m、深さ0.60mの土壌で、寛永通宝1枚が出土した。

SK41：調査区中央部で検出した長辺1.40m以上、短辺1.45m、深さ1.30m以上の土壌で、肥前陶器、丹波焼鉢、丸瓦などが出土した。

SK42：調査区東南部で検出した南北1.00m、東西0.50m、深さ0.15mの土壌で、18世紀後半の肥前陶器碗が出土した。

SK43：調査区東南部で検出した南北0.70m、東西0.60m、深さ0.15mである。

c. 地層出土の遺物

第14層：1は中国漳州窯産青花碗である。2・3は肥前陶器である。2は碗である。3は皿で、底部内面に胎土目痕を有する。以上は豊臣後期に属するものであろう。

第13層：4は中国景德鎮窯産青花の皿である。5は肥前磁器の染付碗である。口縁端部を軽くつまんで外反させている。6は土師器皿で、底部内面にナデによる圓線を有する。7は土師器焰烙で、外面には平行タタキを施す。8は肥前陶器の刷毛目碗である。9は肥前陶器の溝縁皿で、内面には砂目痕を有する。10・11は丹波焼の擂鉢である。いずれも1単位6条の摺目を有する。以上は17世紀前半に属し、第2四半期に属するものを多く含む。

第12～2～13層：12は肥前磁器の染付皿である。17世紀中葉に属する。13は瀬戸美濃焼の火入れで、底部を穿孔し、高台を打ち欠いている。灯火具に転用したとみられる。

第12～2層：14は肥前陶器の擂鉢で、口縁部には鉄釉を施す。17世紀前半に属し、下位層からの混入品であろう。

第11層：32は肥前磁器の染付碗ないしは蓋物であろう。外面にはコンニャク印判による桐文を施す。33は土師器の焰烙である。器高が比較的高く、把手には貫通する円孔を施す。以上は18世紀初頭に属するものであろう。

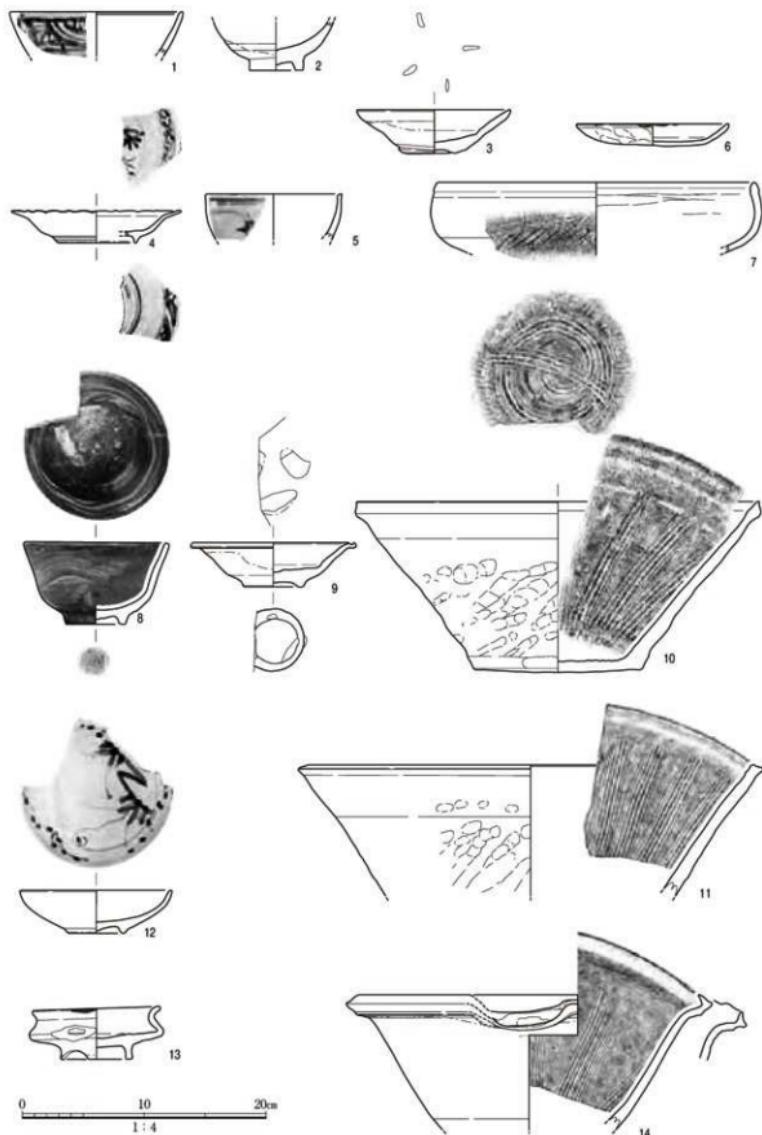


图7 出土遗物实测图(1)

第14层(1~3)、第13层(4~11)、第12~13层(12·13)、第12~2层(14)

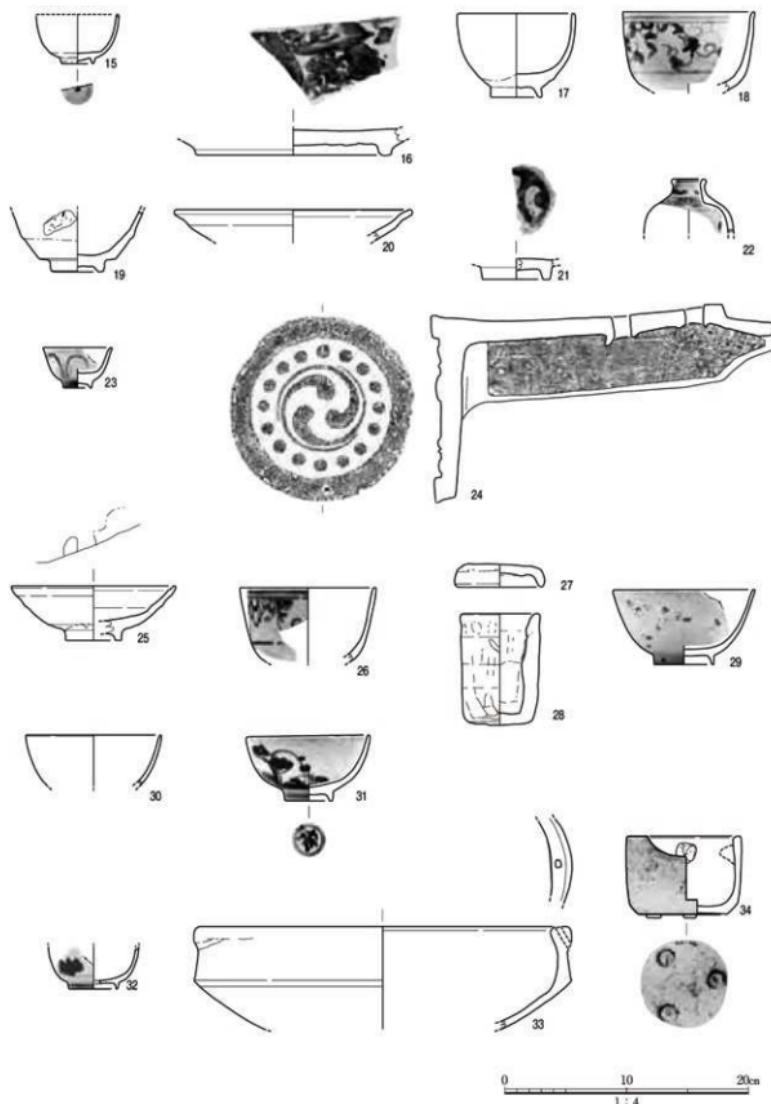


図8 出土遺物実測図(2)

SK04(15~18)、SK16(19)、SX19作業室(20~22)、SK22(23)、SX19燃焼室(24) SK03(25~28)、
SK05(29)、SD02(30)、SX18A(31)、第11層(32・33)、SK34(34)

3)まとめ

今回の調査により、以下の点が明らかになった。

1. 調査区では大坂ノ陣に伴う焼土層ではなく、第12層が盛土される17世紀中葉頃、調査区全域で大きな地形の改変を伴う造成の跡が確認された。この造成に伴い北部では、石垣SX01が構築され、南部では第12-2層による盛土で、東西の段差が形成された。
2. 屋敷地の構成について、整地の範囲、土壤の分布から、調査区北部では、SX01から西に数mを空けて、居住空間が西方に広がっているものと想定される。数点のみであるが、銅滓が出土し、被熱されたSK06が検出された。顯著でないものの、OS90-142次調査で発見された鋳造活動との関連が窺える。
3. 調査区南部では、17世紀中葉以降、地下式の大型竈SX19・20、その廃棄後に連房式の竈SX18が築かれ、18世紀前葉には廃絶したと考えられる。整地の範囲、礎石列SA21から、これらの竈は建物内部にあり、その規模から日常生活ではなく、大量の湯を要する生業に関わるとものと想定される。
4. 18世紀初頭以降、調査区全体は火事により被災した。整地の範囲や礎石列の主軸を見る限り、屋敷地の構成、敷地境には大きな変更は認められない。
5. 石垣SX01は、後世の盛土により徐々に埋没するが、排水路を敷設しつつ残存し、近代まで敷地の区画として踏襲された。

注)竈に関わる遺構の呼び方については、「住友銅吹所発掘調査報告」(大阪市文化財協会1998) 145頁の記載、「鍋釜の乗る口を竈口、その内部の薪が燃やされる穴を燃焼室、燃焼室に薪をくべる口を焚き口、焚き口の後に掘り下げされている部分がある場合、それを作業室と呼ぶ」に倣う。

引用・参考文献

大阪市文化財協会2003、「OS90-64次およびその周辺の調査」：『大坂城跡VI』、pp.169-174

北区西壁地層断面
(南東から)



南区東壁地層断面
(西から)



南区南壁地層断面
(北西から)



北区第Ⅰ期遺構群
(南から)



北区第Ⅰ期遺構群
(西から)



北区第Ⅱ期遺構群
(南西から)



南区調査最終状況
(北から)



南区第Ⅰ期
竈群検出状況
(拡張前：南西から)



南区第Ⅰ期
竈群検出状況
(拡張後：南西から)



中央区島之内一丁目52、52-3、53-1・2における
建設工事に伴う島之内1丁目所在遺跡発掘調査(SI21-1)報告書

調査個所 大阪市中央区島之内1丁目52・52-3、53-1・2
調査面積 64m²
調査期間 令和4年1月24日～2月2日
調査主体 一般財団法人 大阪市文化財協会
調査担当者 調査課長 高橋工、平田洋司

1) 調査に至る経緯と経過

島之内1丁目所在遺跡は大阪市中央区に所在し、大坂城跡に西接する(図1)。南の島之内2丁目所在遺跡とともに地形的には上町台地の西斜面と台地西側に形成された南北方向の砂州およびラグーンに当る。当遺跡内の調査は少ないが、北東の住友銅吹所跡での一連の調査(DB90-1・91-1・92-1次)が特筆される[大阪市文化財協会1998]。江戸時代に日本で最大級であった銅精錬所(1636~1876年)の調査であり、炉・給排水施設・建物などの遺構とともに原料から製品に至る各工程の金属類や精錬用に用いる道具、多量の陶磁器などの遺物が出土した。また、古代以前に遡るものとして溝・大型の畔状遺構・畠状遺構が確認され、飛鳥時代の多量の土器や斎弔・舟形木製品などが多量に出土している。南の島之内2丁目遺跡では、複数の調査が行われている。南西約400mにあるSI11-1次調査ではTP+2.2m付近で海成砂層を確認し、上位から17世紀前半~19世紀代の遺構・遺物を検出した[大阪市教育委員会・大阪文化財研究所2013]。南約400mのSI16-1次調査ではTP+0.8mの地点で古代と考えられる湿地性堆積層を確認し、中世の作土層を経て、詳細な時期は不明ながら近世に宅地化することが判明した[大阪市教育委員会・大阪文化財研究所2018]。また、古代の湿地性堆積層は同調査から北のSI18-1次調査でも確認され、整地層を挟んで18~19世紀代の遺構が検出されている[大阪市教育委員会・大阪文化財協会2020]。

今回調査地で令和3年11月10日、大阪市教育委員会による試掘調査によって、現地表下約1.2m以下に近世以前の遺構と地層が認められたため調査を行うこととなった。令和4年1月24日より敷地北部に東西・南北各8mの調査区を設け調査を開始した(図2)。重機による掘削は後述の第3層までとし、以下は人力による掘削で進めた。第5層以下は安全のため四周にテラスを残して掘削を行い、平



図1 調査地位置図

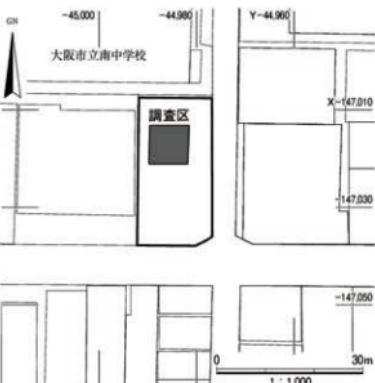


図2 調査区配置図

面的な掘削は第7層上面までとし、工事敷となる現地表下約2.3m以下は部分的な深掘りを行った。

本報告で用いた方位は、現場で記録した街区図を1/2,500大阪市デジタル地図に合成することによって得た世界測地系座標に基づき、座標北を基準にした。標高はT.P.値(東京湾平均海面値)を用いてTP±○mと表記した。

2) 調査の結果

i) 層序(図3・4)

調査地の標高は直前の整地によって部分的な凹凸はあるが、TP+3.0~3.3mとほぼ平坦である。調査では現地表下3.2mまでの地層を確認し第1~第7層に区分した。

第1層：現代盛土および擾乱で、層厚は60~120cmである。

第2層：炭・シルト偽礫を含む暗オリーブ色(5Y4/4)中粒~粗粒砂からなる近代の整地層で、層厚20cm未満で北部のみに遺存する。

第3層：炭・シルト偽礫を含む暗オリーブ褐色(2.5Y3/3)シルト質細粒~中粒砂からなる近世の整地層で、層厚は10~20cmである。重機によって除去したため詳細な時期は不明であるが、本層に係わる遺構の出土遺物から18世紀代と考えられる。

第4層：整地層で上部の第4a層と下部の第4b層に区分した。第4a層は炭を含むオリーブ褐色(2.5Y4/3)シルト質細粒~粗粒砂からなる整地層で、層厚は20cmである。本層上面から調査を開始し、第4層上面の遺構のほか、第3層より上位からの遺構もあわせ検出した。第4b層は後述の大規模な土壌SK504の埋土であるほか、遺構外にも分布する整地層である。層厚は土壤内で最大140cm、土壤外で20cm未満である。第4b層としたSK504の埋土からはわずかに17世紀前葉~中葉の遺物が出土したのみで、第4a層からの出土遺物はないが、本層上面で検出した遺構からの出土遺物とあわせ、17世紀中葉を中心とした時期といえる。

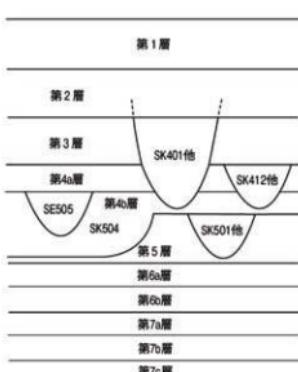


図3 地層と遺構の関係図

第5層：にぶい黄褐色(10YR5/4)細粒砂からなる水成層で、層厚は80cmである。最上部は第4層の整地の際に削平を受けているが、わずかに土壤化した個所が認められる。本層上面にて土壤を確認した。本層以下からの出土遺物はなく時期は不明であるが、上面検出の遺構および周辺の調査成果から古代~豊臣期までと幅をもって考えておきたい。本層以下は上町台地西斜面と砂州の間に形成されたラグーンの堆積物と考えられる。

第6層：湿地性堆積層で第6a・6b層の2層に大別した。第6a層は黒色(2.5Y2/1)~暗褐色(7.5YR3/4)を呈するシルトからなり、層厚は20~30cmである。第6b層は黒色(10YR2/1)~黒褐色(7.5YR2/2)を呈するシルトからなり、暗色帶である。層厚は10cmである。第6a・6b層とも

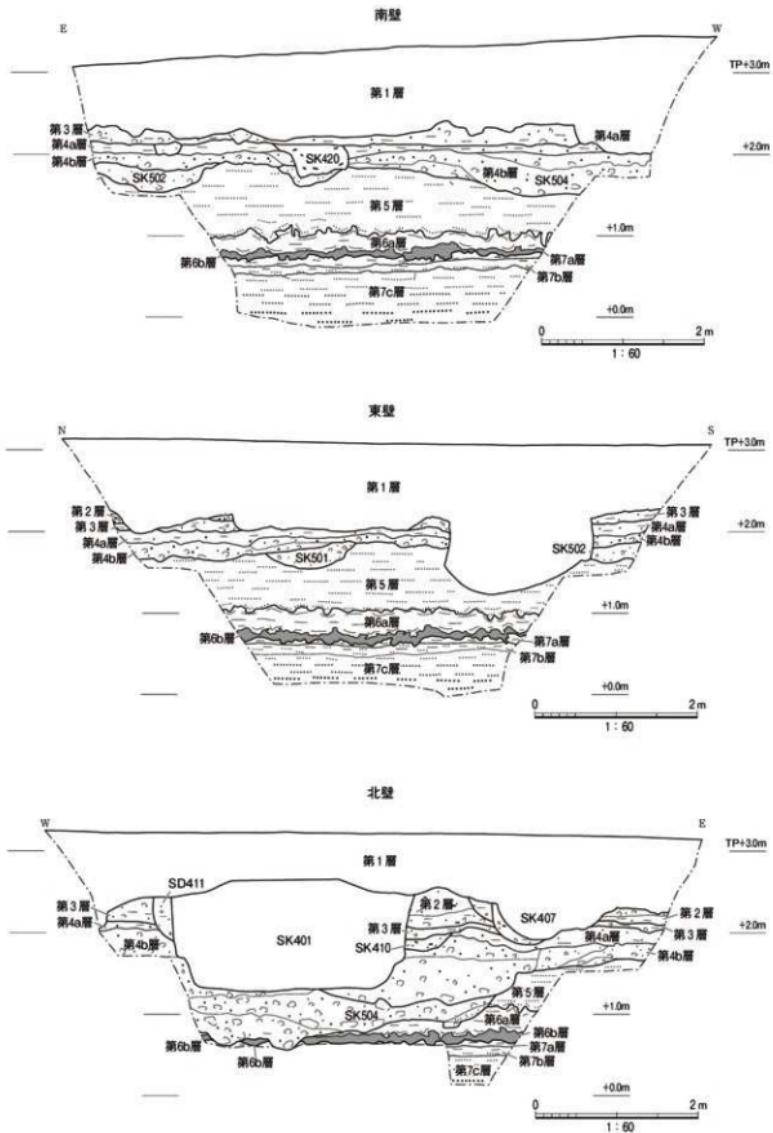


図4 地層断面図

に踏込みのほか、地震とみられる変形が著しい。遺物は出土しなかったが、このうち第6b層は住友銅吹所跡の第13層、SI16-1次調査地の第5層に類似し、飛鳥時代を中心とする古代に比定できよう。

第7層：本層以下は部分的に設けたトレーナーで確認したのみである。河成～湿地性の堆積層で上部ほど細粒化する。第7a～7c層に区分した。第7a層は黒褐色(2.5Y3/1)シルトで、層厚は10cm未満である。第7b層はオリーブ黒色(5Y3/1)細粒砂質シルトで、層厚は10cmである。第7c層はオリーブ黒色(5Y2/2)細粒～粗粒砂で、層厚は50cm以上である。上部に第7b層からの生痕化石が認められる。遺物は出土しなかった。

ii) 遺構と遺物

a. 第5層以前の遺構と遺物

自然堆積層である第5層より下位では第6a層上面・第6b層上面・第7a層上面にて遺構検出作業を行った。第7a層以下では生痕化石が観察できたものの人為的な擾乱が認められなかったが、第6b層上面および第6a層上面では踏込みとみられる凹凸が多数検出された。今回の調査では遺物は出土しなかったが、周辺に集落の存在が予測される。

b. 第5層上面の遺構と遺物(図5・6)

第5層上面検出の遺構は埋土から大きく2つの時期に分けられる。埋土に第5層上部に形成された古土壤の偽礫を多く含む一群(SK501～503)と含まない一群(SK504・SE505)であり、埋土の状況や遺構の分布から前者の方が古く位置づけられる。

SK501 調査区東端で検出した南北0.8m、東西0.7m以上の平面形が方形の土壙である。深さは0.3mで、埋土はシルト偽礫を少量含む細粒砂である。遺物は出土しなかった。

SK502 調査区南東部で検出した南北1.9m以上、東西1.2m以上の平面形が不整形な土壙で、調査区外へ続く。深さは0.3mで、埋土はシルト偽礫を少量含む細粒砂である。瀬戸美濃焼鉄軸皿1が出土した。

SK503 調査区南端で検出した南北1.0m以上、東西0.6mの平面形が不整形な土壙で、調査区外へ続く。深さは0.3mで、埋土はシルト偽礫を少量含む細粒砂である。遺物は出土しなかった。

上記の遺構は埋土が共通し、第5層上部に形成された古土壤上に本来の遺構面があると推定される。遺物の出土は1片のみであり、時期は決しがたいが、豊臣期～徳川初期と考えられる。

SK504 調査区北西部で検出した。大部分が調査区外のため、本来の形状は不明であるが、南北5.5m以上で、東西は南端で4.2m、北端で5.0m以上と北に向かうほど幅が広い。南端部では、浅い溝状の落込みが南にのびる。深さは0.6m～1.4mで、底部の形状から複数の土壙が重なりあった結果とみられるが、埋土に差はなく、同時に埋められたと推定できる。埋土は第6層以下に由来するシルト偽礫を少量含むのはかは今回の調査地では見られないシルト偽礫・細礫を多く含む粗粒砂層であり、別の個所から持ち込まれた可能性が高い。第4b層とした埋土は土壙の範囲を越えて周囲にも分布しており、土壙を埋める同時に周辺の整地を行った可能性がある。また、遺構の周囲にはこの整地土の下位に第6層以下に由来する偽礫を含む細粒砂が分布する個所があり、これは土壙を掘削した際に周囲にこぼれた土と考えられる。

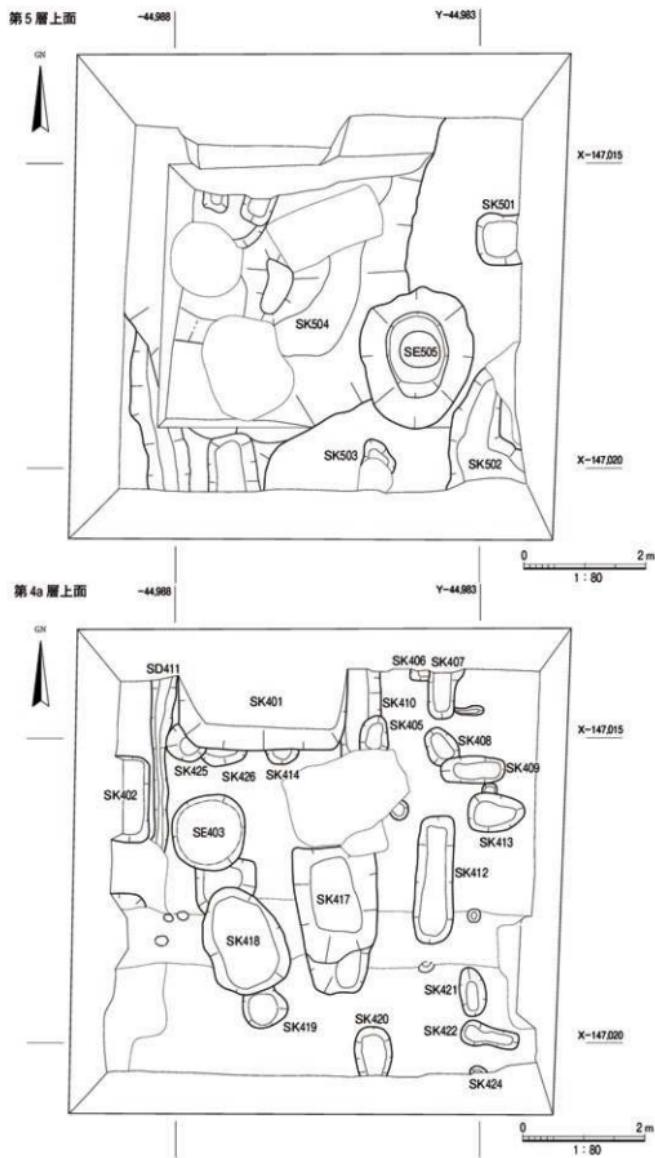


图 5 遗構平面图

土壤が掘削された目的であるが、北西端ではやや深くまで掘り込まれているものの、第6a層に達した時点での掘り込みを停止している個所が多く、また、壁面が垂直に近く掘り込まれていること、埋土に第5層の細粒砂をほとんど含まないことも考慮に入ると、第5層の細粒砂の採取を目的とした可能性が高い。周辺の開発に際して、整地土や建材として採取されたのかもしれない。

遺物には埋土最上部付近から17世紀前葉～中葉にかけての土師器・備前焼・丹波焼片などがわずかに出土した。2は土師器皿、3は丹波焼擂鉢である。

SE505 SK504の埋土上面で検出した井戸である。SK504の埋土を第4b層としたため、第4b層上面の遺構とすべきであるが、他の第5層上面の遺構と同一の検出作業であったため、ここに記す。検出時は南北2.3m、東西1.9mの平面形が梢円形であったが、検出面から0.2m以下では直径1.1～1.2mの平面形が円形となり、垂直に下がっていた。深さは1.6mである。底付近には直径0.6mの桶状の井戸側が認められた。火消壺とみられる土師器片が出土した。細片のため時期は不明であるが、SK504との関係から17世紀前葉以降といえる。

c . 第4a層上面の遺構と遺物(図5～7、写真1)

第4a層上面では土壤・溝・井戸などを検出した。重機掘削後の最初の遺構検出面であり、これらには第3層より上位に本来の遺構面があるものも含まれている。以下、主要なものを示す。

SK417 調査地中央部で検出した南北2.5m、東西1.4mの平面形が方形の土壤である。深さは最大0.6mで、南側は0.3mと一段浅い。土師器・瓦質土器・丹波焼・肥前陶磁器・瓦片など17世紀中葉～後葉の遺物が出土した。

4～6は土師器で、4は皿、5・6は培烙である。7は丹波焼の鉢である。8～11は肥前磁器で、8は口縁が直立する青磁染付碗、9・10は染付碗、11は青磁皿である。

SK410 調査地北端部で検出した南北1.5m以上、東西0.7mの土壤で、深さは0.2m未満である。土師器・肥前陶器・瓦片など少量ではあるが17世紀後葉の遺物が出土した。

SK412 調査地東部で検出した南北2.0m、東西0.6mの平面形が方形の土壤である。深さは0.2mで埋土は炭・漆喰・シルト偽礫を含む細粒～粗粒砂である。丹波焼・肥前磁器・瓦片など17世紀後葉の遺物が出土した。

SK420 調査地南端で検出した南北0.8m以上、東西0.6mの土壤である。深さは0.4mで、埋土は炭・貝・シルト偽礫を含むシルト質中粒～粗粒砂である。土師器・肥前磁器碗のほか硯の製作工程で生じた石材が出土し、17世紀後葉に位置づけられる。

12・13は土師器で、12は皿、13は培烙である。14は肥前磁器染付碗である。15は硯の製作工程で生じた石材である。SK420からはほかにも同様の品が出土している(写真1)。

SK421 調査区南東部で検出した南北0.7m、東西0.4mの平面形が梢円形の土壤で、深さは0.2mである。埋土は下部が炭を多く含むシルト質細粒砂、上部がシルト偽礫を含むシルト質細粒～中粒砂である。土師器・丹波焼・肥前陶磁器・瓦片など17世紀後葉の遺物が出土した。

16・17は肥前磁器碗である。18は培塙片で内面に緑青の付着が見られ、銅精錬に使用されたものであろう。19は人物を模した土人形である。

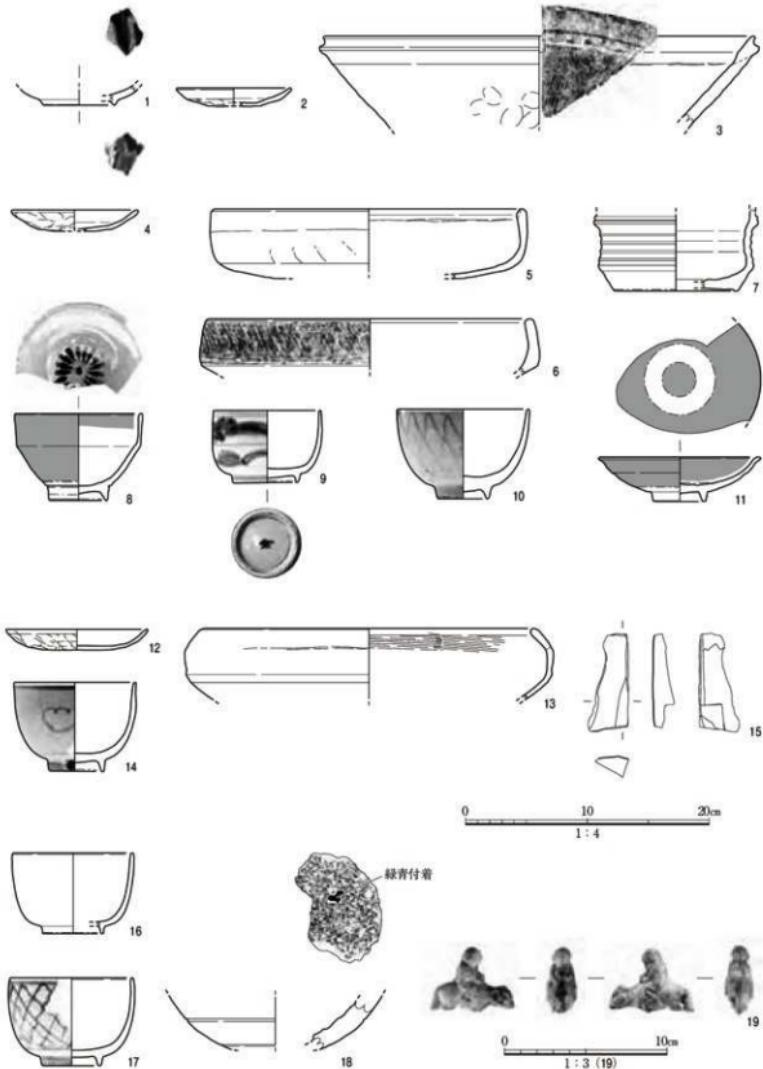


図6 出土遺物実測図(1)

SK502(1)、SK504(2・3)、SK417(4~11)、SK420(12~15)、SK421(16~19)

1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 1 2 3 4 15



写真1 SK420出土の視製作過程石材

他に埋土等から17世紀代の遺構と考えられるものには以下のものがある。

SK426 調査地北西部で検出した直径0.8mの平面形が円形の土壙である。深さは0.3mで、底部は平坦である。埋土はシルト偽礫を多く含む粗粒砂である。遺物は出土しなかった。

SK425 SK426に西接する直径0.6mの平面形が円形の土壙である。深さは0.2mである。遺物は出土しなかった。

SK413 調査地東部で検出した東西0.9m、南北0.6mの平面形が円形の土壙である。深さは0.2mで、埋土は炭を多く含むシルト質細粒砂である。土師器片・瓦片が出土したのみである。

SK409 SK413の北に位置する土壙である。東西1.1m、南北0.6mの平面形が楕円形で、深さは0.1mである。肥前陶器皿が出土した。これに切られるSK408も17世紀代の可能性がある。

SK419 調査地南西部で検出した直径0.8mの平面形が円形の土壙である。深さは0.1mで、埋土は炭を含むシルト質細粒砂である。煙管雁首片が出土した。

以下は18世紀代に下るものであり、壁面で確認できたものはすべて第3層以上に帰属する。

SK422 調査地南東部で検出した東西1.0m、南北0.4mの平面形が楕円形の土壙である。深さは0.1mである。肥前陶器・瓦片など18世紀初頭の遺物が出土した。

SK418 調査地南西部で検出した南北1.8m、東西1.2mの土壙である。深さは1.3mで、埋土は礫・炭・漆喰・漆喰偽礫などを多く含むシルト質粗粒砂である。少量ではあるが、肥前陶器・軟質施釉陶器・瓦片など18世紀代の遺物が出土した。

20は肥前陶器鉢である。21は肥前磁器染付皿である。22は輪羽口である。

SE403 調査地西部で検出した直径1.2mの平面形が円形の井戸である。深さは1.6m以上で、井戸枠等の痕跡は確認できなかった。少量ではあるが、肥前陶磁器・瓦片など18世紀代の遺物が出土した。

以下は壁面の観察から、第3層以上に遺構面があるので、出土遺物とあわせ18世紀後半以降に位置づけられる。

SD411 調査地北部で検出した幅0.2~0.4mの南北方向の溝である。深さは0.1mを確認し、壁面の観察によれば0.5mである。土師器・関西系陶器・肥前陶磁器・瓦片など18世紀後葉の遺物が出土した。

SK405 調査地中央部で検出した南北0.6m以上、東西0.4mの平面形が楕円形の土壙である。深さは0.2mで、埋土は炭・焼土・シルト偽礫を多く含むシルト質粗粒砂である。土師器・肥前陶磁器・瓦片など18世紀後葉~19世紀前葉の遺物が出土した。

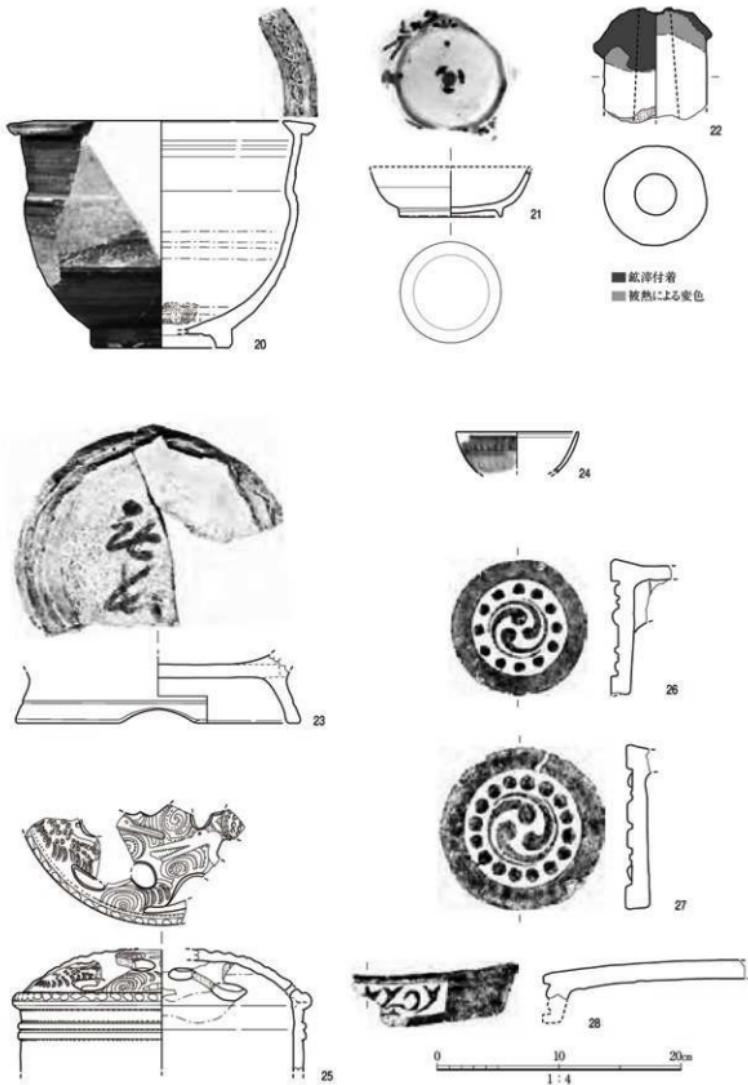


図7 出土遺物実測図(2)
SK418(20~22)、SK401(23~28)

SK401 調査地北端部で検出した東西2.7m、南北1.3m以上の平面形が方形の土壙で、調査区外へ続く。深さは1.2m以上である。いわゆる瓦溜で、被熱した多量の瓦片を主体に土師器・肥前陶磁器・瀬戸美濃磁器など18世紀末～19世紀初頭の遺物が出土した。

23は土師器焜炉で内面には墨書がある。24は肥前磁器染付碗である。25は瀬戸美濃磁器火鉢である。26・27は巴文軒丸瓦で、28は唐草文軒平瓦である。

SK402 調査地西端部で検出した南北1.4m、東西0.6m以上の平面形が方形の土壙で、調査区外へ続く。深さは0.2mである。信楽焼・肥前磁器など18世紀後葉～末の遺物が出土した。

SK407 調査地北東部で検出した南北0.8m以上、東西0.4mの平面形が方形の土壙で、調査区外へ続く。深さは0.5mで、埋土は炭・シルト偽礫を多く含むシルト質粗粒砂である。瓦片が出土した。

上記のように第4a層上面検出の遺構は17世紀中葉を初現として17世紀後葉になると遺構の数が増大する。調査地における開発が17世紀後葉に積極的に行われたことを示すものであろう。さらに第3層の整地を経て、18世紀代以降も引き続き屋敷地として利用されたことがわかる。

3)まとめ

今回の調査は小規模であったが、いくつか重要な成果を得ることができた。

調査地が上町台地斜面と砂州に挟まれる東横堀川の前身となるラグーンに位置していることが明らかとなった。遺物は出土しなかったが、近隣の調査成果とあわせ古代に遡るものであろう。また、埋没後には小規模であるが遺構が見られた。第4a層による整地後、17世紀中葉から遅くとも17世紀後葉には遺構・遺物とともに増大し、当地が屋敷地として本格的に開発されたことが判明した。硯の製作に係わる遺物は当地の生業の一端を示すものであろう。

また、第5層上面で検出した砂の採取を目的とした可能性がある土壙は、小規模な範囲の調査のため拡がりは不明であるが、周辺の開発を考える上で示唆的である。当地の本格的な開発に先立ち、より城下に近い部分が先行して開発され、当該地への整地・建築材料として砂の採取が行われたと考えることもできよう。

島之内における調査は数を増してきたとはいえ、まだまだ少なく地域ごとの開発の時期の差や土地利用など不明な点が多く残されている。今後のさらなる調査の進展に期待したい。

参考文献

- 大阪市文化財協会1998、「住友銅吹所跡発掘調査報告」
大阪市教育委員会・大阪文化財研究所2013、「島之内2丁目所在遺跡発掘調査(SI11-1)報告書」:「大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書(2011)」、pp.375-384
大阪市教育委員会・大阪文化財研究所2018、「島之内2丁目所在遺跡発掘調査(SI16-1)報告書」:「大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書(2016)」、pp.361-366
大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2020、「島之内2丁目所在遺跡発掘調査(SI18-1)報告書」:「大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書(2018)第1分冊」、pp.315-324

南壁地層断面
(北から)



北壁地層断面
(南から)



第7層上面
(南から)



第6b層上面
(南から)



第6a層上面
(南から)



第5層上面
遺構検出状況
(南から)



第5層上面
(南から)



第5層上面SK504
(南東から)



第4a層上面
(南から)



天王寺区小宮町18-5・12・24における建設工事に伴う

上本町遺跡発掘調査(UH21-1)報告書

調査個所 大阪市天王寺区小宮町18-5・12・24
調査面積 104m²
調査期間 令和3年4月5日～4月23日
調査主体 一般財団法人 大阪市文化財協会
調査担当者 調査課長 高橋工、平山裕之

1) 調査に至る経緯と経過

上本町遺跡は、大阪市内を南北に延びる上町台地に立地している。おもに台地の脊梁部～東縁部にかけて分布し、北側に難波宮跡、南側には四天王寺旧境内遺跡が所在する。東側は難波京朱雀大路跡によって画され、遺跡南部の西側は、伶人町遺跡に接している。本遺跡は、古代から近世の複合遺跡として知られ、古代の難波京や豊臣期の城下町である南・北平野町に関する新たな発見に期待が寄せられている。

調査地は天王寺区小宮町に所在し、天王寺区役所の北東約50mに位置する(図1)。遺跡範囲の南東部に立地し、南西約500mの一帯には四天王寺が伽藍を構えている。上町台地の東縁部は、多くの開析谷があり込んでおり、調査地周辺にも「真法院谷」や「北山谷」が埋没していることが知られている(図1・2)。周辺のおもな既往の調査としては、西に約200mの地点でNW81-4次調査が実施され、「米家」と墨書のある土器が出土した。多量の製塙土器も出土し、「難波市」との関連が指摘されている[大阪市教育委員会・大阪市文化財協会1983]。北に約200mの一帯では、UH08-9・09-2・17-3次調査が行われている。UH08-9次調査では、7世紀後葉の井戸から百済系の陶質土器を含む一括遺物が出土し[大阪文化財研究所2012]、UH09-2次調査(D区)では、難波京に係る推定条坊線の南北ラインに合致する位置で、8世紀の橋梁遺構が出土した[大阪文化財研究所2010]。さらにUH17-3次調査では、難波京の推定条坊に係る一坊を四分する位置で、中世の溝を検出するなど[大阪文化財研究所2018]、上町台地において難波京の展開を傍証する遺構・遺物が多く発見されている。近世後半を中心とした「土採り穴」も本遺跡の特色を示し、UH08-9・10-4・17-2・17-3次調査などで見つかっている[大阪文化財研究所2012・2018、大阪市教育委員会・大阪文化財研究所2019]。これは、数寄屋建物の土壁に用いられた「上塗り用色土(大坂土)」を採掘した遺構であり、上本町遺跡



内に広く分布する。

調査地の南側は、四天王寺旧境内遺跡に係る調査で、成果が上がっている。ST96-4次調査では、難波京に係る8世紀の条坊道路側溝と思われる南北方向の溝、16世紀前葉に築造された同方向の堀、石垣などが発見された[大阪市文化財協会1999]。一方で、今回の調査地とも深く係わる「真法院谷」の調査例は少ない。UH09-5次調査では15世紀の土壤を検出し、谷の東斜面を確認した[大阪市教育委員会・大阪文化財研究所2011]。近年では、UH20-4次調査で谷内を調査しており、谷底に相当する砂礫層(地山)および谷の南斜面を検出した。古代の盛土層は未確認で、谷の埋立て時期は、豊臣期を下限とする結果であった[大阪市文化財協会2021]。

以上のような歴史的環境に位置する当該地で、大阪市教育委員会が試掘調査を行ったところ、中世以前の遺構面や遺物包含層が地表下約1.5m以下の深さで確認され、これを受けて発掘調査を実施することになった。近世の古絵図や明治19(1886)年に作成された『大阪実測図』〔地図資料編纂会編1987〕には、四天王寺の北東側に「毘沙門池」と称される溜池が描かれており、その旧範囲は本調査地にも広がる可能性が考えられた(図2)。さらに「真法院谷」の谷頭が、今回の調査地付近に存在するとの推測もなされており[高橋工2007]、こうした状況を踏まえて本調査に臨んだ。

遺跡の残存状況が良好と判断された敷地の東端に、東西8m×南北13mの調査区を設定し(図3)、令和3年4月5日より調査に着手した。重機掘削は後述する第4層上面までとし、それ以下の掘下げと遺構の掘削は人力による。壁面の崩落を防ぐため、第5層より下層の調査は、小段を設けて行った。

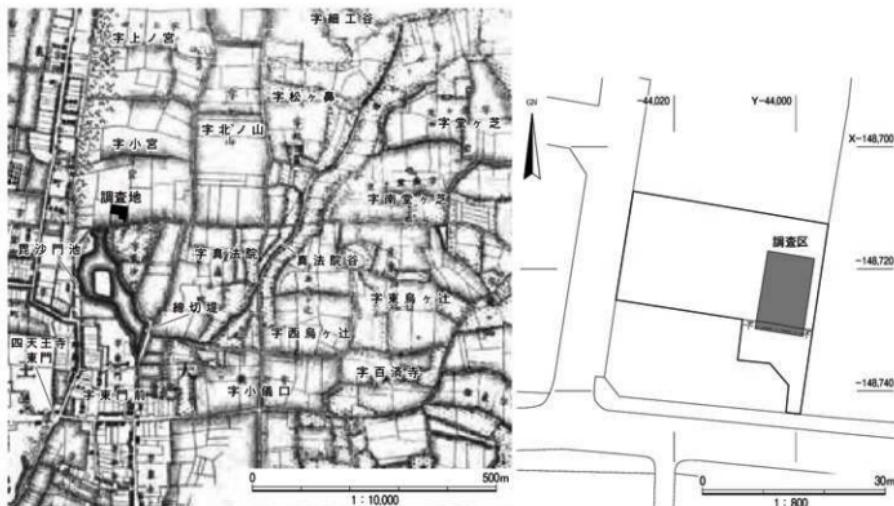


図2 「大阪実測図」にみる調査地の周辺
 (「地図資料叢書会編1987」に加筆)

図3 調査区配置図

調査の進行に伴って、地層・遺構の実測図作成と写真撮影による記録保存、出土遺物の捕集に努め、4月23日に現地での作業を終了した。

本報告で用いた方位は、現地で作成した街区図を大阪市デジタル地図(S=1/2500)に合成することで世界測地系座標に乗せており、座標北を基準とする。標高はTP値(東京湾平均海面値)で、本文中では「TP+○m」と略記している。

2) 調査の結果

i) 層序(図4～6、図版1)

調査地は東西に細長く、東側で南へ突出した形状の敷地にある。現地表面の標高は、敷地の北端中央部でTP+13.8m前後、南端中央部ではTP+13.3m前後で、北から南へ緩やかに下がっていた。敷地の南は段差を介し、さらに約0.6m低くなっていた。現代の盛土層・擾乱埋土(層厚約40～180cm)を第0層とし、地表下約3.3mまでの地層を第1～9層に大別した(図4)。以下に、東・北・南壁地層の断面観察によって、各層の特徴を整理しておく(図5・6)。

第1層：灰黄褐色(10YR4/2)～にぶい黄褐色(10YR4/3)細礫・炭・偽礫(灰黄色細粒～中粒砂)混りシルト質細粒～中粒砂からなる近代～現代の盛土層である。層厚は約15～25cmであった。

第2層：灰黄褐色(10YR4/2)～にぶい黄褐色(10YR4/3)細礫・炭混り細粒～中粒砂質シルトからなる近世末期～近代の作土層である。層厚は約15～30cmで、下面遺構として溝・土壤が認められた。

第3層：灰黄褐色(10YR5/2)～にぶい黄褐色(10YR5/3)炭混り細粒砂質シルト、シルト質中粒～粗粒砂による互層をなす水成層である。層厚は最大約15cmで、東壁では平行ラミナが顕著であった。上位・下位の地層の年代から、19世紀頃の水成層と捉えておく。本層までを重機によって除去した。

第4層：第4a・4b層に区分した水成層である。第4a層は、灰黄褐色(10YR4/2)～にぶい黄褐色(10YR4/3)の細礫・炭・偽礫(第4b層由来)混りシルト質細粒～中粒砂からなる。層厚は約25～35cmで、東壁では平行ラミナが顕著であった。第4b層は、灰黄色(2.5Y7/2)～にぶい黄褐色(10YR4/3～5/4)細礫・炭混りシルト質細粒砂からなり、層厚は約20～30cmであった。

出土遺物は両層を一括で捕集し、古代～近世まで時期幅のある遺物を確認した。図化できなかったが、土師器焜炉や関西系陶器土瓶などが出土しており、第4層の時期は19世紀前葉と考えられる。本層上面では、溝(SD201・203など)や土壤(SK302・204など)が検出された。

第5層：褐色(10YR4/4)～にぶ

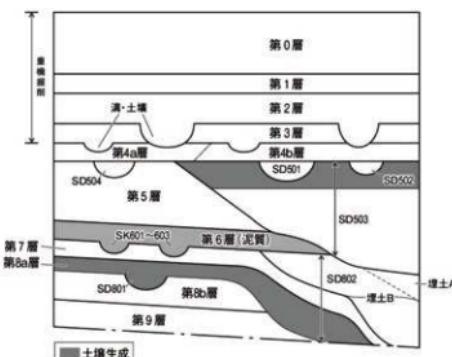
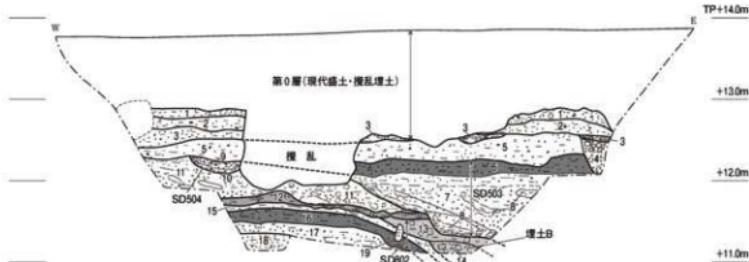


図4 地層と遺構の関係図



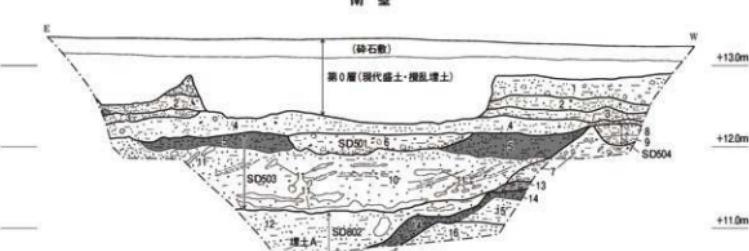
図5 東壁地層断面図

北壁



- 灰黃褐色 (10YR4/2) 細繩・皮・偽縫 (灰黃色細粒～中粒砂) 混りシルト質細粒～中粒砂 (第1層)
- 灰褐色 (10YR5/2) 假縫
- 灰褐色 (10YR5/2) 假縫より細粒質シルト・シルト中粒～粗粒砂による互層 (第3層)
- 灰褐色 (10YR4/2) 細繩・偽縫・混りシルト質細粒～中粒砂 (第4層・遺構の可能性もあり)
- 灰褐色 (10YR4/2) 細繩・偽縫・混りシルト質細粒 (多孔隙)
- 灰褐色 (10YR5/3) 細繩混りシルト質細粒～細粒砂質シルト (SD503最上部: 土壌生成)
- 灰褐色 (10YR5/4) 細繩・偽縫・混りシルト質細粒～中粒砂、中粒～粗粒砂、シルト～粘土質シルト (8) による互層 (SD603土壌)
- 黃褐色 (25Y4/1) シルト～粘土質シルト (帶状およびブロック状)
- 褐色 (10YR4/4) 傷縫 (灰～灰白色シルト) を多く含むシルト質中粒砂 (SD504土壌)
- 灰褐色 (10YR5/1) 細繩・皮・偽縫 (灰白色シルト) を少含むシルト質中粒砂
- 灰褐色 (10YR5/3) 偽縫・混りシルト質細粒 (8a層)
- 灰褐色 (10YR5/4) 細繩・混りシルト質細粒～中粒砂 (8b層)
- 灰褐色 (10YR5/2) ～灰褐色 (10YR5/4) 偽縫混りシルト質細粒～中粒砂 (第9層)
- 灰褐色 (25Y4/2) 細繩及び粗粒砂質シルト (第10層)
- 灰褐色 (73Y4/1) 粘土質シルト

南壁



- 灰褐色 (10YR4/1) 細繩・皮・偽縫 (灰褐色細粒～中粒砂) 混りシルト質細粒～中粒砂 (第1層)
- 灰褐色 (10YR4/2) 細繩・皮・偽縫 (灰褐色細粒～中粒砂シルト) 第2層
- 灰褐色 (10YR5/3) 偽縫・混りシルト質細粒～中粒砂 (第3層)
- 灰褐色 (10YR5/4) 細繩・偽縫・混りシルト質細粒 (多孔隙)
- 灰褐色 (10YR4/3) 細繩・偽縫・混りシルト質細粒～細粒砂質シルト (SD503最上部: 土壌生成)
- 灰褐色 (10YR4/4) 細繩・偽縫 (灰～灰白色シルト) 混りシルト質中粒～粗粒砂 (SD501土壌)
- 褐色 (10YR4/4) ～灰褐色 (10YR5/3) 細繩・偽縫 (黑灰色シルト) 中粒～粗粒砂 (灰褐色)
- シルト～粘土質シルト (11) による互層 (SD603土壌)
- 黃褐色 (25Y4/1) シルト～粘土質シルト (帶状およびブロック状)
- 褐色 (10YR4/4) 傷縫 (灰～灰白色シルト) を多く含むシルト質中粒砂 (SD504土壌)
- 灰褐色 (10YR5/1) 細繩・皮・偽縫 (灰白色シルト) を少含むシルト質中粒砂
- 灰褐色 (10YR5/3) 偽縫・混りシルト質細粒 (8a層)
- 灰褐色 (10YR5/4) 細繩・混りシルト質細粒～中粒砂 (8b層)
- 灰褐色 (10YR5/2) 細繩・皮・偽縫 (灰～灰白色シルト) 第9層
- 灰褐色 (25Y4/1) 粘土質シルト

図6 北・南壁地層断面図

い黄褐色(10YR5/3)の細礫・炭・偽礫(黄灰～黒灰色シルト)・中粒～粗粒砂(黄灰～黄褐色)混りシルト質細粒～中粒砂からなる盛土層である。調査区の西部に分布し、層厚は最大約70cmを確認した。遺物は土師器・須恵器のほか、中国産青磁・肥前陶器碗30(図13)・備前焼播鉢などが出土しており、本層は豊臣後期(1598～1615年)を下限とする時期に属すると思われる。本層上面の遺構として、溝(SD504・503)を検出した。

第6層：黄灰色(2.5Y5/1)～灰黄褐色(10YR5/2)細礫・炭(少量)・中粒砂(黄灰色)混りシルトからなる泥質の水成層である。北壁の観察では、SD802(後述)の埋土を覆うように堆積しており、層厚は最大約15cmであった。遺物は須恵器の細片が出土している。

第7層：調査区北西部にのみ分布し、にぶい黄褐色(10YR5/3)細礫混りシルト質細粒砂からなる水成層である。下位の第8a層を薄く覆って堆積し、層厚は約5cmであった。本層上面で、土壌(SK601～603)を検出した。

第8層：第8a・8b層に区分した。第8a層は北壁で灰黄褐色(10YR5/2)、南壁で黒褐色(10YR3/2)を呈する。暗色化が顯著で、細礫混りシルト質細粒～中粒砂からなり、下位層の上部が土壤生成した古土壤である。下位層上面の溝(SD802)の斜面に沿って分布しており、第7層もこの斜面を覆つて堆積していた。第8b層は北壁で灰黄褐色(10YR5/2)～にぶい黄褐色(10YR5/4)、南壁で暗褐色(10YR3/3)を呈し、細礫・炭混りシルト質細粒～中粒砂からなる盛土層である。層厚は第8a層が約10～15cm程度、第8b層は約20cm以上とみられる。第8b層の上面で溝(SD802・801)を検出した。

本層からは土師器・須恵器をはじめ、古代の遺物が多量に出土した(図12)。第8b層の遺物は、土師器・須恵器・製塙土器からなり、8世紀のものである。第8a層の遺物は、土師器・須恵器・黒色土器・瓦で、8～9世紀に属する。遺物の詳細は別項で述べる。

第9層：本調査で確認したもっとも古い地層で、黄褐色(2.5Y5/3)～灰黄色(2.5Y6/2)細礫混りシルト質細粒砂～細粒砂質シルトからなる。層厚は約20cm以上で、遺物は出土しなかつたが、古代以前の盛土層である。

本調査地では地山層を検出しておらず、TP+10.6m以下に埋没しているものとみられる。周辺の古地形からみて、埋没谷の中に立地すると考えられる(図1)。

ii) 遺構と遺物(図7～13、図版2～5)

本調査で検出した古代～近世の遺構・遺物のうち、主要なものを報告する。

a. 第8b層上面の遺構(図7・11・13、図版2)

SD802 第8b層上面から掘り込まれた溝である。方位は北北東～南南西(N16° E)で、南側に向けて深さを増す。南壁を参考にすると、溝の幅は約3.8m以上、深さは約0.8m以上となる。溝底には到達しておらず、最下部の堆積状況は不明であった。北壁では西斜面に沿って土壤生成し(第8a層)、その直上に第7層が薄く堆積した後、やや暗色を呈する客土(埋土B)がなされていた。東・南壁では、南部の埋め残った部分が、北→南の水流によって砂泥互層(埋土A)で埋まっていたことが分かる(図5・6)。埋土Aは黄灰色(2.5Y6/1)細礫混りシルト～粘土質シルト、シルト質中粒～粗粒砂からなり、埋土Bは黄灰色(2.5Y5/1)～暗灰黄色(2.5Y5/2)の細礫・炭・偽礫(黄灰～灰黑色シルト)混りシルト

図 8 第 7 層上面造構平面図

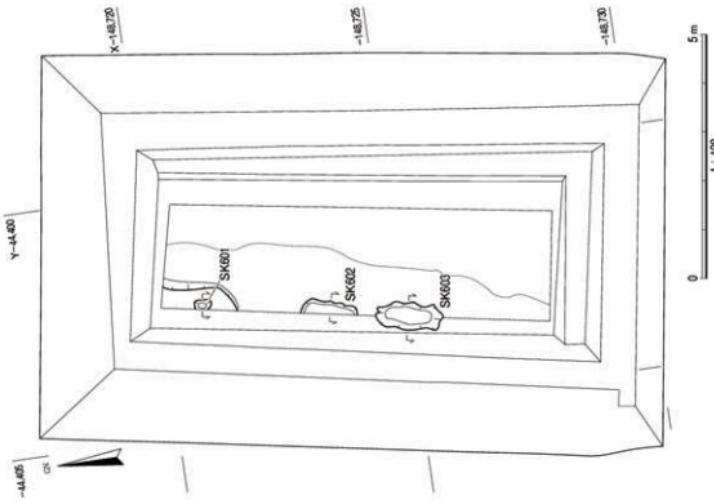
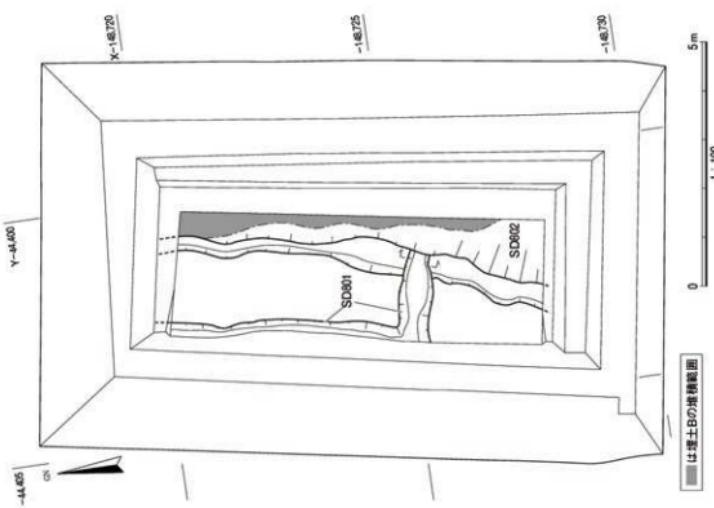


図 7 第 8 層上面造構平面図



質細粒～中粒砂からなっていた。また、客土層(埋土B)の上位に当る水成の埋土Aについては、同じ累重関係にある第6層と一連の堆積である可能性を持つが、両層の連続部分はSD503によって破壊されており、確認できていない。

遺物は、古代の土師器・須恵器・瓦を含み、15世紀頃を下限とする土師器・瓦器・瓦質土器などが出土した(図13)。24・28は土師器皿である。24は内外面にヨコナデを施す。28は口径9.5cmと小型で、外面にユビオサエが認められる。時期は15世紀頃と思われる。25は土師器壺である。内面にハケメが見られ、口縁部の一部に煤が付着する。26は須恵器杯である。口径13.0cmで、内外面を回転ナデで仕上げる。時期は8世紀末頃であろう。27は瓦器碗である。内面にヘラミガキ、外面下部にはユビオサエを施す。13世紀の遺物であろう。29は古代の瓦である。平瓦で凹面に布目圧痕、凸面に繩目タタキ痕が認められる。出土遺物を踏まえると、古代(8世紀頃)に掘られ、最終的に中世(15世紀頃)に埋没した溝と推測される。

SD801 調査区の西端を南北に延び、南側で東へ折れたL字状の溝である。埋土は暗褐色(10YR3/4)～灰黃褐色(10YR4/2)を呈し、細礫・炭混りシルト質細粒～中粒砂(第8a層)からなる。南北に延びる部分の幅は不明であるが、深さは約0.14～0.16mで、北から南に向けて約0.3m下がっていた。東へ折れた部分の幅は約0.4～0.6m、深さは0.18mで断面形は皿状を呈する。やや下がりながら東側へと延びており、SD802に統一していたようである。SD802への排水を目的とした溝の可能性がある。遺物は、土師器杯・壺、須恵器壺の細片が出土し、8～9世紀の遺構と思われる。

b. 第7層上面の遺構(図8・11、図版3)

SK601 調査区の北西端で検出した土壤で、西端部は側溝の掘削により失われていた。平面形は亜な楕円状と思われ、長径が約0.35mである。断面形は腕状を呈し、深さは約0.1mと浅い。埋土は、黄灰色(2.5Y4/1)炭(少量)・中粒砂(黄灰色)混りシルト(第6層)からなっていた。遺物は土師器・須恵器杯・壺の細片が出土している。

SK602 SK601の南約1.8mの位置で検出した土壤で、西半部は側溝の掘削により失われていた。平面形は隅丸長方形と思われ、長径が約1.0mである。断面形は浅い皿状を呈し、深さは0.04mであった。検出時に遺構上部をやや削平しており、本来はSK601と同等の深さであったと思われる。埋土は、暗灰黄色(2.5Y4/2)炭(少量)・中粒砂(黄灰色)混りシルト(第6層)からなっていた。遺物は土師器・須恵器の細片が出土している。

SK603 SK602の南約0.5mの位置で検出した土壤で、西半部は側溝内で確認した。平面形は不定形で細長く、南北が約1.4m、東西は0.55mである。断面形は逆台形を呈し、深さは約0.2mであった。埋土は、褐灰色(10YR4/1)炭(少量)・細粒砂(黄灰色)混りシルト～細粒砂質シルト(第6層)からなっていた。SK601・602と比較して大型であるが、用途・機能などは不明である。遺物は下位層起源ではあるが、土師器杯・壺、須恵器杯、黒色土器が出土しており、8世紀末～9世紀初頭に属するとみられる。

c. 第5層上面の遺構(図9・11・13、図版4)

SD504 調査区の西部に分布する第5層上面に掘られた、北北東～南南西(N20°E)の方向に延び

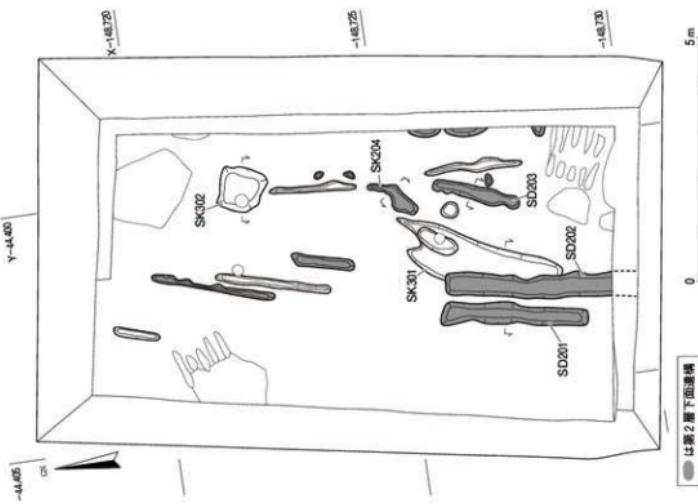


圖10 第4層上面，第2層下面結構平面圖

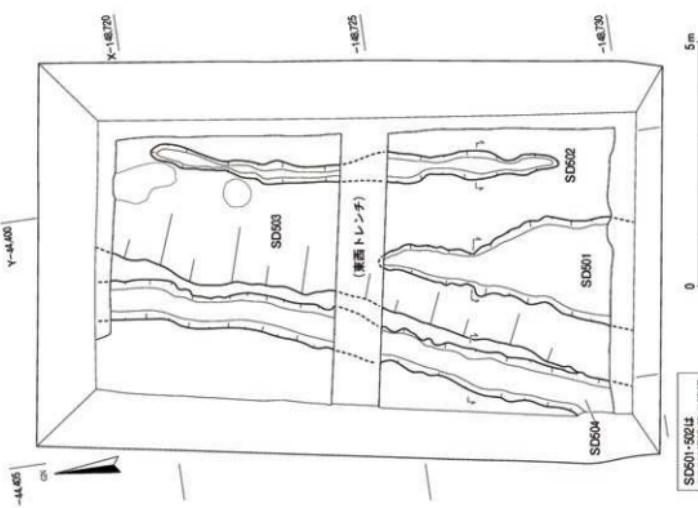


圖 9 第 5 層上面遺構平面圖

る溝である。埋土は、上層がにぶい黄褐色(10YR5/4)偽礫(灰～灰白色シルト)を多量に含むシルト質中粒砂、下層はにぶい黄褐色(10YR5/3)炭・偽礫(灰～灰白色シルト)を少量含むシルト質中粒砂からなっていた。人為的に埋め戻されており、幅が約0.6～0.8m、深さは0.25mで、断面形は底部がやや尖った皿状を呈する。北側から南側に向けて、緩やかに約0.2m下がっていた。遺物は土師器、瓦器椀、中国産白磁、備前焼擂鉢、瓦などが出土しており、豊臣後期以降に掘られた排水溝と考えられる。

SD503 北北東～南南西(N23° E)の方位をとる溝である。南壁を参考にすると、幅が約5.7m以上、深さは約0.8mの規模であったと思われる。埋土は、にぶい黄褐色(10YR5/4)～にぶい黄橙色(10YR6/3)の細礫・炭混りシルト質細粒～中粒砂、中粒～粗粒砂、シルト～粘土質シルトからなり、水流による砂泥互層をなしていた。溝の埋没後は、上部の厚さ約20～30cmの部分が土壤生成し、その上面で溝(SD501・502)を検出した。確認した溝のもっとも深い部分は、北壁でTP+11.3m、南壁ではTP+11.2m付近である。東壁に、平行ラミナが多く観察されたが、その傾斜からは流向を明確に判断できなかった。上記標高を溝のもっとも深い部分とみれば、北→南を基調にしていたと思われる。

遺物は、古代の土師器・須恵器を含み、土師器焰烙、肥前陶器鉢、備前焼擂鉢、丹波焼甕などが出土した。図化していないが、砂泥互層から出土した肥前陶器鉢は17世紀中葉に相当する。土壤生成した埋土の最上部に限ると、図13の31～34が出土した。31は中国産青花皿である。口縁部に團線を巡らせ、高台内は無釉になっている。32は丹波焼擂鉢で、内面下端に擂目が残る。33は堺擂鉢である。34は土師器焰烙である。口径22.0cmで、外面には煤が付着する。以上から、SD503は豊臣後期(第5層の年代)以降に掘られ、18世紀初頭には埋没したものと思われる。

SD502 SD503の埋没後に掘られた溝で、調査区の東端を南北に延びていた。埋土は、にぶい黄褐色(10YR5/4)細礫混りシルト質細粒～中粒砂で、自然堆積したものであろう。幅が約0.3～0.6m、深さは約0.15mで、断面形は整った碗状を呈していた。検出長は約8.3mであったが、本来は調査区内を貫いていた可能性もある。遺物は、土師器・須恵器・瓦器のほか、17世紀後葉以降の肥前磁器などが出土している。

SD501 SD503の埋没後に掘られた溝状の遺構で、調査区の南部中央に広がっていた。平面形は北側から南側に向けて、急激に幅の広がる不定形状であった。埋土は、にぶい黄褐色(10YR5/4)炭・偽礫(灰白色シルト)混りシルト質中粒～粗粒砂で、人為的に埋め戻されたとみられる。幅は最小0.4m、最大2.2m、深さは約0.2mで、断面形は底部に凹凸のあるいびつな皿状を呈する。遺物は土師器・須恵器・瓦器のほか、17世紀後葉以降の肥前磁器などが出土した。水流などの影響で、自然に形成された可能性もある。

d. 第4層上面・第2層下面の遺構(図10・11・13、図版5)

重機掘削の終了後、第4層上面で遺構検出を行い、第3層を埋土とする遺構(第4層上面遺構)と第2層を埋土とする遺構(第2層下面遺構)を検出した。前者に300番代、後者に200番代の遺構番号を付して、以下に報告する。第4層から第2層の地層年代より考えて、前者は概ね19世紀前葉、後者は近世末期～近代の遺構と思われる。

SK301 調査区の南部中央で検出した土壤状の遺構で、SD202と重複関係にあった。平面形は、北

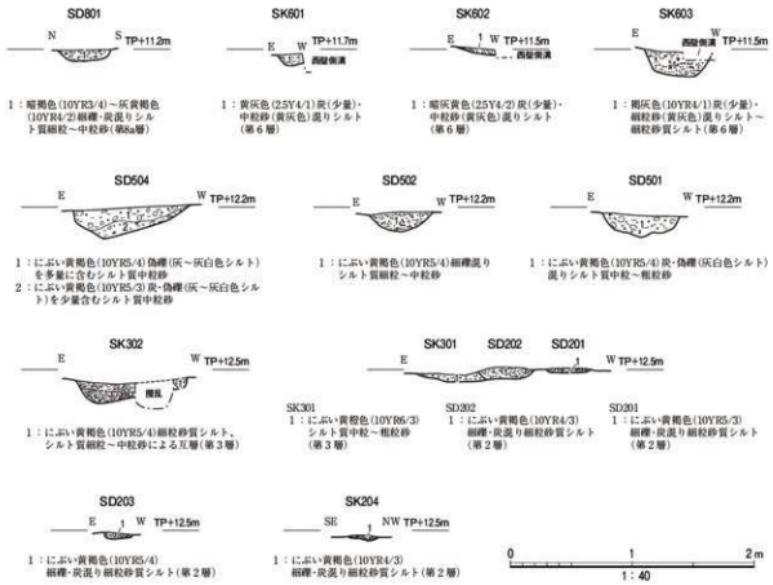


図11 おもな遺構断面図

北東-南南西を長軸とした不定形で、長さが約3.5m、幅は約1.0mで、断面形は皿状を呈し、深さは0.06mと浅いものであった。埋土は、にぶい黄褐色(10YR6/3)シルト質中粒～粗粒砂(第3層)からなる。人為的な遺構とは考えにくく、水流などで削られた凹部に、砂が自然堆積したのであろう。遺物は、肥前磁器・関西系陶器などが出土した。図13の35は、肥前磁器筒形碗である。いわゆる青磁染付で、口縁部には四方櫛文が施されている。時期は18世紀後葉で、下位層からの混入である。

SK302 調査区の北東部で検出した土壙である。平面形は隅丸方形で、南北が約1.0m、東西は0.9mであった。断面形は皿状を呈し、深さは西側で0.07m、東側は0.16mとやや深くなっていた。埋土は、にぶい黄褐色(10YR5/4)細粒砂質シルト、シルト質細粒～中粒砂による互層(第3層)をなす。大型の土壙であるが、用途・機能などは不明である。遺物は土師器・須恵器のほか、18世紀前葉以降の肥前磁器などが出土した。ただし、これらは遺構の年代を示すものではなかった。

SD201 調査区の南部中央で検出した南北に延びる溝である。幅が約0.3～0.4mで、断面形は皿状を呈し、深さは0.04mと浅いものであった。埋土は、にぶい黄褐色(10YR5/3)細粒・炭混り細粒砂質シルト(第2層)からなる。遺構の時期を示すものではないが、土師器・瓦器の細片が出土した。近世末期～近代の耕作に係わる溝と考えられる。

SD202 SD201の東隣を南北に延びる溝である。SD201に並行しながら、調査区の南側へと続いている。幅が約0.4～0.5mで、断面形は皿状を呈し、深さは0.1mであった。埋土は、にぶい黄褐色

(10YR4/3)細礫・炭混り細粒砂質シルト(第2層)からなる。時期不明な肥前陶器・瓦の細片が出土した。SD201と同時期・同性格の遺構であろう。

SD203 調査区の南東部で検出した溝である。北北東-南南西に延びており、幅が約0.3mで、断面形は皿状を呈し、深さは0.05mと浅いものであった。埋土は、にぶい黄褐色(10YR5/4)細礫・炭混り細粒砂質シルト(第2層)からなる。遺物は、18世紀前葉以降の肥前陶器火入れ、肥前磁器碗が出土した。近世末期～近代の耕作に係わる溝であろう。

SK204 調査区の南東部で検出した土壙である。ただし、平面形は土壙にも溝にも捉えがたい不定形状を呈していた。北東-南西にやや長く約1.0m、幅が0.15～0.35m、断面形はいびつな皿状で、深さは0.04mと浅いものであった。埋土は、にぶい黄褐色(10YR4/3)細礫・炭混り細粒砂質シルト(第2層)からなる。遺構の時期を示すものではないが、土師器・瓦器の細片が出土した。近世末期～近代の耕作に係わる遺構とみられる。

iii)地層出土の遺物(図12・13)

ここで地層出土の遺物について述べる。第8b層からは1～8が出土した(図12)。1は土師器杯である。体部下半から底部にかけて、ユビオサエのちナデを施す。口縁端部を丸く取っている。2は土師器皿である。口径18.8cm、器高2.7cmに復元される。内面に放射状の暗文がわずかに残る。3は土師器高杯である。体部外面にユビオサエのちヘラケズリを施す。4は土師器高杯の脚部である。残器高は6.0cmで、外面を面取りしている。5は土師器壺である。付け庇で内面は煤が付着し、体部外面にハケメが認められる。6・7は須恵器杯である。6は高台径12.0cmで、内外面に回転ナデを施す。8は須恵器壺である。口径32.2cmで、口縁部から内面に回転ナデを施し、体部外面にはカキメを施す。第8b層からは、8世紀前～中葉(難波V古段階)を主体とする遺物が出土している。

第8a層からは9～23が出土した(図12)。9～11は土師器杯である。9・10は内外面にヨコナデを施し、10にはヘラケズリ調整も認められる。11は高台部分である。断面三角形を呈し、ヨコナデを施す。12は土師器壺である。径25.5cmの口縁部で、ヨコナデで調整された内面には煤が付着する。13・14は須恵器杯蓋である。13は口径16.0cm、器高1.5cmで、外面を回転ナデで調整する。15・16は須恵器杯である。16は内外面を回転ナデ、高台内にはヘラ切りを施す。17・18は須恵器壺である。18は口径37.8cmで、外面にはタタキメが確認できる。19は黒色土器碗である。いわゆるA類で、内面にヘラミガキ、外面にはユビオサエが認められる。20は黒色土器鉢である。同じくA類で、内外面ともにヘラミガキが施される。21～23は古代の瓦である。21は丸瓦の玉縁部分で、布目圧痕が残る。22は平瓦で凹面に布目圧痕、凸面に繩目タタキ痕が認められる。23も平瓦で、凹面に布目圧痕がみられ、凸面には格子タタキメが残る。第8a層も8世紀(難波V)を主体とし、9世紀にかけての遺物が出土した。

第5層からは、肥前陶器碗30が出土した(図13)。見込みは施釉されているが、その他は無釉である。時期は17世紀初頭と思われる。

3)若干の考察とまとめ

本調査の成果について、下記の i)と ii)の2項目について若干の考察を加えて整理し、報告書のま

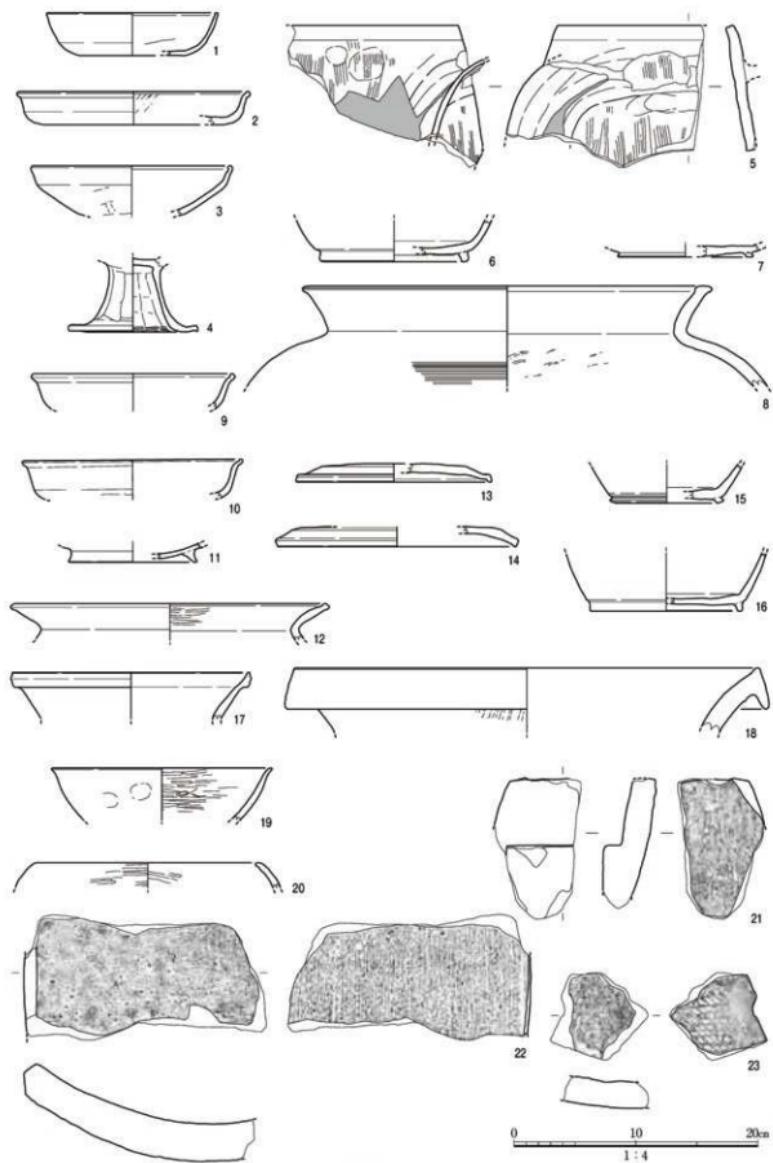


图12 出土遗物实测图(1)
第8b层(1~8)、第8a层(9~23)

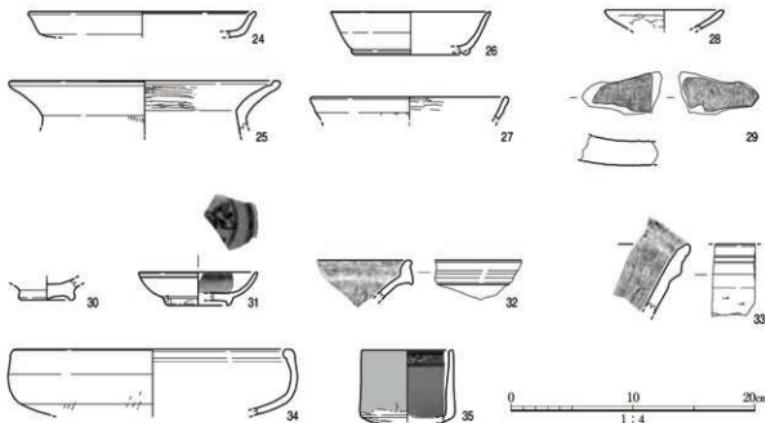


図13 出土遺物実測図(2)
SD802(24~29)、第5層(30)、SD503最上部(31~34)、SK301(35)

とめとする。

i)上町台地における「埋没谷」の検出

本調査地は埋没谷内に位置するとみられた。周辺には、複数の埋没谷が存在しており、それらとの関係を考えてみたい。

調査地の北側には、「天王寺区役所から北東の小宮町へ抜ける谷の存在」【大阪市教育委員会・大阪文化財研究所2011】が指摘され、おそらく北山谷に収斂すると思われる谷がある。一方で南側は、真法院谷が弧をなして回り込んで来ており、その谷頭付近を締め切って、近世の「毘沙門池」が造られている(図14)。谷の方向を考えた場合、地形的に北側の谷は南西→北東方向、真法院谷は北→南方向が基調となるはずである。本調査で検出したSD802・503は北→南で、方向からみて真法院谷のそれに近く、真法院谷系統の谷を捉えたものではないだろうか。これが同谷の本筋であるか、支谷であるのかは今回の調査では明らかにできず、周辺における調査例の増加を待つべき課題である。

ii)古代・近世における「谷の開発」

今回の調査では、古代(第8b層段階: 8世紀頃)と豊臣期(第5層段階: 17世紀初頭頃)に谷内を埋め立て、その客土層上から南北方向に流水痕跡のある溝(SD802・503)が掘られていたことが判明した。これらは規模や形状からみて、居住と係わる溝であった可能性がある。つまり、両時期の客土工事には、単に谷の埋立てを行うばかりでなく、その平坦面を宅地などに利用可能な地形に造成する意図を窺うことができる。古代に谷地形を改変した時期が8世紀であったことは、橋梁遺構を発見したUH09-2次調査の成果と共にし、この時期に当該地域の谷に係る開発が進行したことを示しているのではないだろうか。その場合、流水痕跡のある南北方向の溝(SD802)の性格は、造成地内の水流をコントロールし、崩落などを招かないように水道を固定した「排水溝」であったと考えられよう。



図14 調査地と埋没谷との位置関係
（[越智清・市川創・ほか2014]に係る巻頭図版1に加筆）

豊臣期については、NW12-4次調査などで、谷内をひな壇状に造成して宅地を設けるなど、積極的に谷を改変した事例が知られている〔大阪文化財研究所2013〕。本調査における当該期の整地と溝の関係についても、古代のそれと同様な目的を考えても良いのではないだろうか。

iii) まとめ

・埋没谷を検出した。この谷は、上町台地における開析谷の1つである「真法院谷」に連なるものとみられる。

・谷の内部は、古代(8世紀頃)に埋立てを施しており、客土層の上面では屋敷地に関係するような溝などが発見された。谷内が宅地として造成されていた可能性がある。また、南北方向の溝が検出され、排水の機能を担っていたことが考えられた。

・谷の埋立ては豊臣期(17世紀初頭)にも行われ、古代と同様に宅地・排水溝が設けられたと考えられた。

- ・近世後半には、水成層が薄く堆積していた。谷の名残で、雨水などが自然に流入する地形を呈していたのであろう。
- ・近世末期～近代には、作土層(第2層)が堆積していた。当地における、耕作地としての土地利用が始まったのは遅く、この時期であることが分かった。

引用・参考文献

- 大阪市教育委員会・大阪市文化財協会1983、「難波宮跡(NW81-4次)発掘調査概報」:『昭和56年度大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』、pp.57-62
- 大阪市教育委員会・大阪文化財研究所2011、「上本町遺跡発掘調査(UH09-5)報告書」:『大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書(2009)』、pp.201-212
- 大阪市教育委員会・大阪文化財研究所2019、「上本町遺跡発掘調査(UH17-2)報告書」:『大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書(2017)第2分冊』、pp.77-84
- 大阪市文化財協会1999、「四天王寺旧境内遺跡の調査」:『大阪市埋蔵文化財発掘調査報告-1996年度-』、pp.85-106
- 大阪市文化財協会2021、「天王寺区勝山一丁目215-3、223における建設工事に伴う上本町遺跡発掘調査(UH20-4)報告書」
- 大阪文化財研究所2010、「上本町遺跡発掘調査報告」I
- 大阪文化財研究所2012、「上本町遺跡発掘調査報告」IV
- 大阪文化財研究所2013、「難波宮址の研究」第十九
- 大阪文化財研究所2018、「上本町遺跡発掘調査報告」VI
- 積山洋2010、「複都制下の難波京」:『東アジアにおける難波宮と古代難波の国際的性格に関する総合研究』、pp.79-96
- 高橋工2007、「細工谷遺跡周辺の古代における谷の開発について」:大阪市文化財協会編「細工谷遺跡発掘調査報告」II、pp.61-68
- 地図資料編纂会編1987、「大阪実測図」:『日本近代都市変遷地図集成 大阪』、柏書房
- 趙哲済・市川創・高橋工・小倉徹也・平田洋司・松田順一郎・辻本裕也2014、「上町台地とその周辺低地における地形と古地理変遷の概要」:大阪文化財研究所・大阪歴史博物館編「大阪上町台地の総合的研究-東アジア史における都市の誕生・成長・再生の一類型-」、pp.9-22

東壁地層断面
(南西から)



北壁地層断面
(南西から)



南壁地層断面
(北西から)



第8b層上面遺構
(南東から)



SD802断面
(北から)



SD801断面
(西から)



第7層上面遺構
(北西から)



SK 601断面
(北から)



SK 603断面
(北から)



第5層上面遺構
(南東から)



SD504断面
(北から)



SD502断面
(北から)



第4層上面・
第2層下面遺構
(北東から)



SK302断面
(北から)



SK301・SD202断面
(北から)



天王寺区勝山一丁目209-1・2、212-3・4における建設工事に伴う
上本町遺跡発掘調査(UH21-2)報告書

調査個所 大阪市天王寺区勝山1丁目209-1・2、212-3・4
調査面積 59m²
調査期間 令和3年4月13日～4月27日
調査主体 一般財団法人 大阪市文化財協会
調査担当者 調査課長 高橋工、積山洋、和田亮平

1) 調査に至る経緯と経過

上本町遺跡は東西約800m、南北約2,300mに及び、大坂城跡南端から四天王寺の南東にいたる広大な遺跡である。今回の調査地は四天王寺の東約250mに位置しており、東約150mで古代の難波京朱雀大路跡にいたる。地形上は、上町台地に開く「真法院谷」の中にあたる(図1)。この谷は調査地付近で北西から南東へ、そして北東へとV字状に屈曲すると復元されている[趙哲済ほか2014]。現地の標高はTP+9.1m前後である。

調査地の西隣で行われたUH20-4次調査では近世の井戸や土壙などの遺構や、TP+6.5m前後で北と東へ降る谷底の緩斜面(上町層)が検出されている[大阪市教育委員会ほか2022]。

調査地の南隣で行われたUH09-5次調査では15世紀頃の銅製品の鋳造に関わる遺物(銅滓、羽口など)がまとまって出土し、またTP+7.5~8.0mで南東から北西へ降る傾斜面などが検出されている[大阪市教育委員会・大阪文化財研究所2011]。

当該地で建築工事が計画され、大阪市教育委員会が行った試掘調査の結果、今回の本調査を実施することになった。調査は現地に8m四方の調査区を設ける計画であったが、外周フェンスの位置などの事情により、東西7.8m・南北7.6mの規模となった(図2)。4月13日に重機掘削を開始し、近世の地層まで掘り下げた。その後は人力による掘削と遺構検出、記録などを実施し、4月27日に終了した。

以下の本文等に示す標高値はT.P.値(東京湾平均海面値)で、TP+○mと記した。また本報告で用いた国土地標値は現場で作成した街区図を1/2500大阪市デジタル地図に合成することにより世界測地系座標に乗せたものであり、方位は座標北を基準とした。

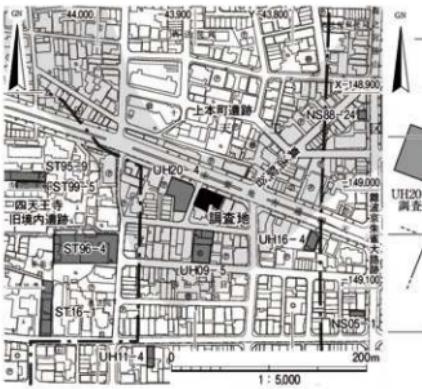


図1 調査位置図

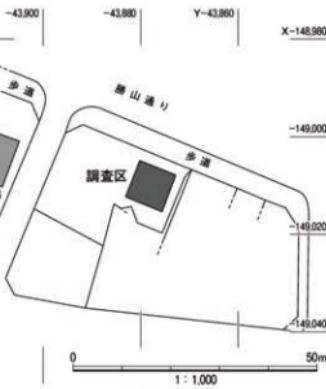


図2 調査区位置図

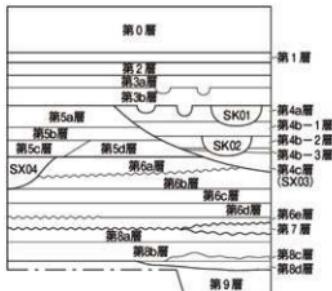


図3 地層と遺構の関係図

2) 調査の結果

i) 層序(図3～6)

調査地の現標高はTP+9.1m前後で、周辺の現地形は東へ低く傾斜しているが、調査区でみる各層の堆積にさほど傾斜はなく、調査地はおおむね平坦地である。現地表下約3.5m、深掘り部分を加えると約4.0m(TP+5.15m)までの地層を確認した。

第0層：近・現代の盛土層および攪乱埋土で、層厚は110～130cmである。

第1層：黒褐色(2.5Y3/2)～オリーブ黒色(5Y3/1)

細礫混りシルト、砂混りシルトなどが主体の作土層で、層厚は30～40cmである。2～3層に細分できたが、一括した。近代頃かと推測される。

第2層：灰オリーブ色(5Y5/2)細礫・シルト混り細粒砂で、層厚は約10cmと薄いが、砂や礫を主体とするので作土層とは考えにくく、盛土層ないし整地層であろう。近世の地層と判断し、本層まで重機で掘削し、第3層以下を人力掘削による調査対象とした。

第3層：作土層で、2層に区分できたが、一部境界が不明瞭な箇所が見受けられた。出土遺物から、中世から近世にかけての地層とみられる。

第3a層：暗灰黄色(2.5Y4/2)砂混りシルトの作土層で層厚は10～20cmである。本層の下面で溝状の浅い耕作痕(いわゆる鎌溝)がみられた。

第3b層：オリーブ褐色(2.5Y4/3)シルト混り細粒砂の作土層で、細礫を少し含む。層厚は約10cmである。本層の下面で溝状の浅い耕作痕がみられた。

第4層：調査区北半部に堆積していた人為的な盛土層とその下位の水成層をまとめて第4層とした。計5層に細分された。

第4a層：褐色(10YR4/6)礫混り極細粒砂で、部分的に黄褐色(10YR5/6)細粒砂の偽礫を含む盛土層である。層厚は約10cmである。本層の上面でSK01を検出した。

第4b層：本層はさらに3層に細分できた。

第4b-1層：オリーブ褐色(2.5Y4/4)細礫・シルト混り細粒砂の盛土層で層厚は10～25cmである。

第4b-2層：暗灰黄色(2.5Y4/2)砂・礫混りシルトの盛土層で層厚は約10cmである。本層の上面で土壤SK02が検出された。

第4b-3層：暗灰黄色(2.5Y4/2)シルト混り礫・砂層である。北壁断面(図5)のみで部分的に確認された層準で、その分布範囲から第4c層(水成層)に由来する可能性がある。

第4c層：調査地北部で検出された落込みSX03の埋土である。本層は灰黄色(2.5Y6/2)中粒～粗粒砂を主体とした水成層で、層厚は約40cmである。平行ラミナが明瞭に確認でき、シルトのラミナもみられた。また砂と共に流されてきたシルトの偽礫を多く含んでいた。奈良時代～平安時代初期の遺物が出土している。

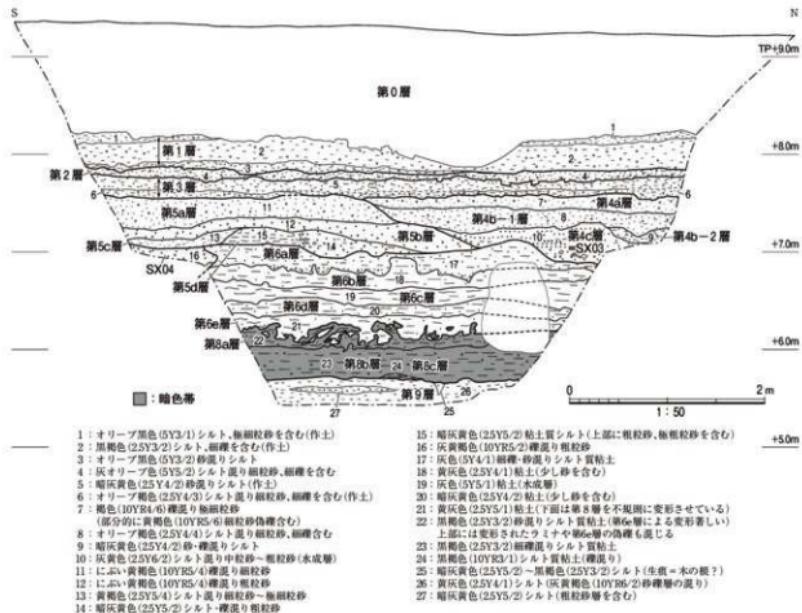


図4 西壁地層断面図

第5層：調査区の中央から南半部にかけて、第6層の上位に堆積していた盛土層で、4層に細分された。古代の遺物が出土している。

第5a層：にぶい黄褐色(10YR5/4)疊混り細粒砂からなる層厚30～40cmの地層である。

第5b層：にぶい黄褐色(10YR5/4)疊混り粗粒砂層で疊、シルトの偽疊を含む。層厚は約20cmである。

第5c・5d層：いずれも第5b層の下位、第6a層の上位に位置する一連の地層であるが、2層に細分した。第5c層は黄褐色(2.5Y5/4)シルト混り細粒～極粗粒砂(図4-13層)と暗灰褐色(2.5Y5/2)シルト・疊混り粗粒砂(同14層)からなる盛土層で、第5d層(同15層)の南北に分布していた。層厚は最大約30cmである。第5d層は暗灰褐色(2.5Y5/2)粘土質シルトを主体とする盛土層で、層厚は20cm弱である。

第6層：全体的に灰色を基調とするシルト質粘土～粘土を主体とし、最大層厚は105cmに及ぶ。5層に細分することができた。このうち第6c層のみが分級の良い自然堆積層であり、他は堆積中、または堆積直後に何らかの二次的營力による堆積構造の変形と砂・疊の混入がみられた。飛鳥時代の遺物が出土している。

第6a層：灰色(5Y4/1)細繊維・砂混りシルト質粘土層で層厚は約20cmである。分級が悪く砂は比較的均質に混り合っているが本層の下部には極粗粒砂が集中している。本層の上面で落込みSX04を検出した。

第6b層：黄褐色(2.5Y4/1)粗粒砂混り粘土層で、層厚は約20cmである。

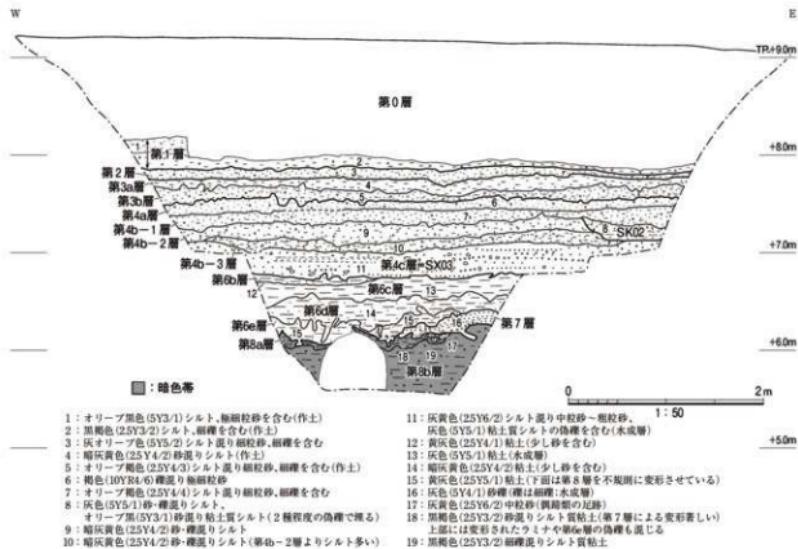


図5 北壁地層断面図

第6c層：灰色(5Y5/1)粘土層で層厚は約15cmである。分級が極めて良い粘土層であり、砂粒を含んでいない。

第6d層：暗灰黄色(2.5Y4/2)砂礫混り粘土層で、層厚は約15cmである。包含する砂礫は多く、粒径は粗粒砂から細礫である。

第6e層：黄灰色(2.5Y5/1)粘土層～砂礫混り粘土層で、層厚は10～25cmである。砂礫は極粗粒砂～細礫であるが、第6d層よりかなり少ない。下部に第7層・第8層に由来する偽縫を含む。また北壁断面では本層が第6d層によって大きく変形されている様子がみられた。

第7層：北壁、東壁の断面で認められた水成層である。灰色(5Y4/1)砂礫層で、層厚は10～20cmを測り、明瞭なラミナが確認できる。

第8層：有機物を多量に含む黒褐色シルト質粘土層で、古土壤または湿地性堆積層からなる。最大層厚は約60cmであり、4層に細分された。第8a・b層から古墳時代の土器が出土している。

第8a層：黒褐色(2.5Y3/2)砂混りシルト質粘土層で、有機物を多量に含む。層厚は10～20cmである。上面が第7層に覆われていない部分では第6e層による不規則で大きな変形を受けている。本層の上面で、第7層の砂で埋まる偶縫類の足跡を検出した。堆積構造の変形をもたらしたした要因の一端であろう。本層は下位の第8b層を大きく変形させ、上位の第6e層からも変形を受けたものと考える。

第8b層：黒褐色(2.5Y3/2)砂・礫混りシルト質粘土層で有機物を多量に含む。層厚は約35cmである。第8a層より砂や細礫を多く含んでいる。東壁断面(図6)では、下位の第8c層に強い変形を及ぼしてい

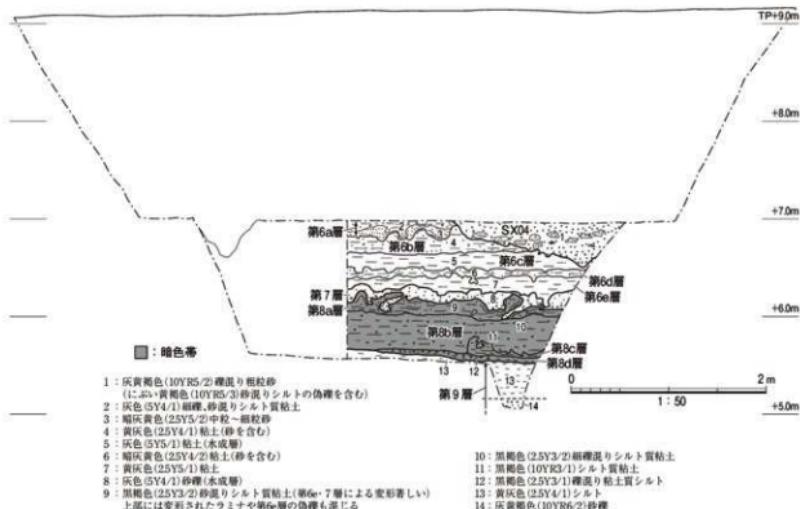


図6 東壁地層断面図

る様子が観察された。

第8c層：黒褐色(10YR3/1)疊混りシルト質粘土層で層厚は10~20cmである。第8b層に比べ、砂をほとんど含まず、礫も少ない。第8b層の下に部分的に残存するのみである。

第8d層：東壁断面でのみ確認できた地層である。黒褐色(2.5Y3/1)疊混り粘土質シルトの水成層で層厚は約10cmと薄い。本層は第8層中でもっともプライマリーな堆積構造を残した地層であろう。

第9層：黄灰色(2.5Y4/1)シルトの自然堆積層で層厚40cm以上である。小規模な深掘りを実施した結果、TP+5.15m以下は灰黄褐色(10YR6/2)砂疊層であった。締まりが悪く、これらを一括して第9層とした。土師器壺の破片が1点出土したのみで、年代の詳細は不明である。

ii) 遺構と遺物(図7~10)

a. 第8層の遺物

遺物は第8a・8b層から出土したが、取り上げ時の区別はできていない。土師器、須恵器が出土している。1~4は須恵器蓋杯で、1・3が杯蓋、2・4が杯身である。1~3はいずれも口径が大きく、1は15.1cm、2は14.0cm、3は13.7cmを測る。4はやや小ぶりである。1・2はTK10型式、3はMT15型式、4はTK47型式に属するであろう。第8a・8b層の年代は古墳時代中期末~後期前半頃に収まるであろう。また土師器では壺や移動式竈などの破片も出土している。

b. 第7層の遺物

土師器の細片等が出土しているが、実測できるものはない。

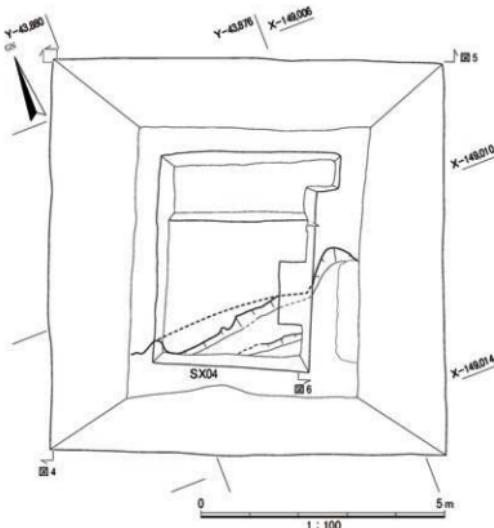


図7 第6層上面の遺構平面図

c. 第6層の遺物

第6層からは古墳時代の土師器、須恵器等が多く出土しているが、最新の遺物は5の平瓦の破片で、第6a層か第6b層から出土した。凸面は丁寧なナデ、凹面には布目と模骨痕がみられ、桶巻づくりである。よって飛鳥時代の7世紀の瓦である。西250m余の四天王寺に関わる瓦であろう。このほか、須恵器の杯身、杯蓋、甕の破片等が出土しており、非常に厚い本層は6～7世紀の長期間にわたって堆積したとみられる。

d. 第6層上面の遺構と遺物

SX04 調査区の南部で検出した北から南へ向かって落ち込む第6a層上面の遺構である。南辺は調査区外に及ぶ。幅1.7m以上、深さ0.5mほどである。埋土は疊混り粗粒砂でラミナがみられる水成層である。また砂混りシルトの偽蹠を含んでおり、砂・蹠などとともに流されてきたものであろう(図6)。出土遺物には土師器、須恵器のほか、6の円筒埴輪がある。体部は厚く、外面の突帯が脱落した跡には円形(突帯位置の目印)が見られる。これは堺市日置莊窯の埴輪の特徴である[十河良和2011]。日置莊窯の年代は6世紀後半である。ただし、SX04からは、薄い平瓦の破片なども出土しており、遺構の年代としては第6層の飛鳥時代と第5層の奈良時代との間である。

e. 第5層の遺物

7は須恵器の広口壺である。奈良時代に属する。このほか、第5層から奈良時代の土師器、須恵器が出土している。

f. 第5層上面の遺構と遺物

SX03 調査区の北半で検出された第5層の落ち込みである(図5)。南辺は東西方向であるが、北辺は調査区外で不明である。落ち込みを埋めていた第4層の詳細は前項で述べたが、最下層の第4c層がSX03を埋めた地層であり、その上位の第4b-3層もその可能性がある。第4c層は南北幅2.4m以上の範囲に堆積し、その深さは約0.4mであった。第4c層からの出土遺物は土師器、須恵器である。8-14は須恵器、15-16は土師器である。8・9・11は杯身で、10は杯蓋、12は平瓶である。11は大型で口縁部が外反する金属器模倣タイプである。13は鉢の底部で、平安初期に降る。14は広口タイプの壺である。15は杯Bで、暗文の有無は不明であるが、同一器種で暗文を有する細片がある。16は壺である。これらの土器の多くは奈良時代に属すが、13により、SX03の年代は平安時代の9世紀頃であろう。

g. 第4b-2・4a層上面の遺構

SK02 第4b-2層上面で検出した小土壙で、東西1.0m以上、南北約0.5m、深さ0.2m弱を測る。灰色砂・礫混りシルト、オリーブ黒色砂混り粘土質シルトなどで埋まっていた。年代のわかる遺物は出土していないが、古代～中世かと推測される。

SK01 第4a層上面で検出した小土壙で、東西0.6m、南北約0.3m、深さ0.1m弱を測る。灰色砂混りシルト、オリーブ黒色砂混り粘土質シルトなどの偽礫を主体として埋められていた。遺物は出土していない。

h. 第4b層の遺物

17-20は第4b-1・2層から出土した。17・18は土師器皿であるが、18はかなり大型なので盤とすべきかもしれない。いずれにも暗文がみられる。19・20は須恵器で、19は小型の壺の

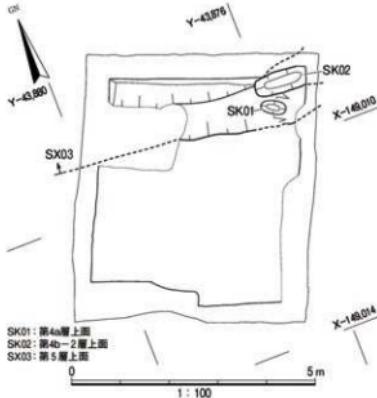


図8 第5・4b-2・4a層上面の遺構平面図



図9 SK01遺構断面図

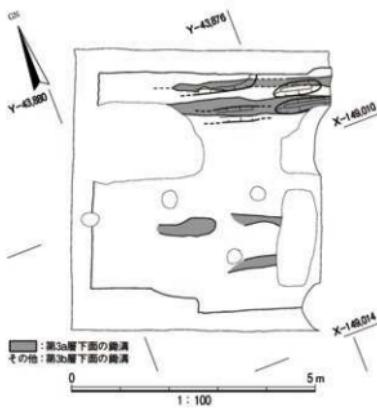


図10 第3a・3b層下面の遺構平面図

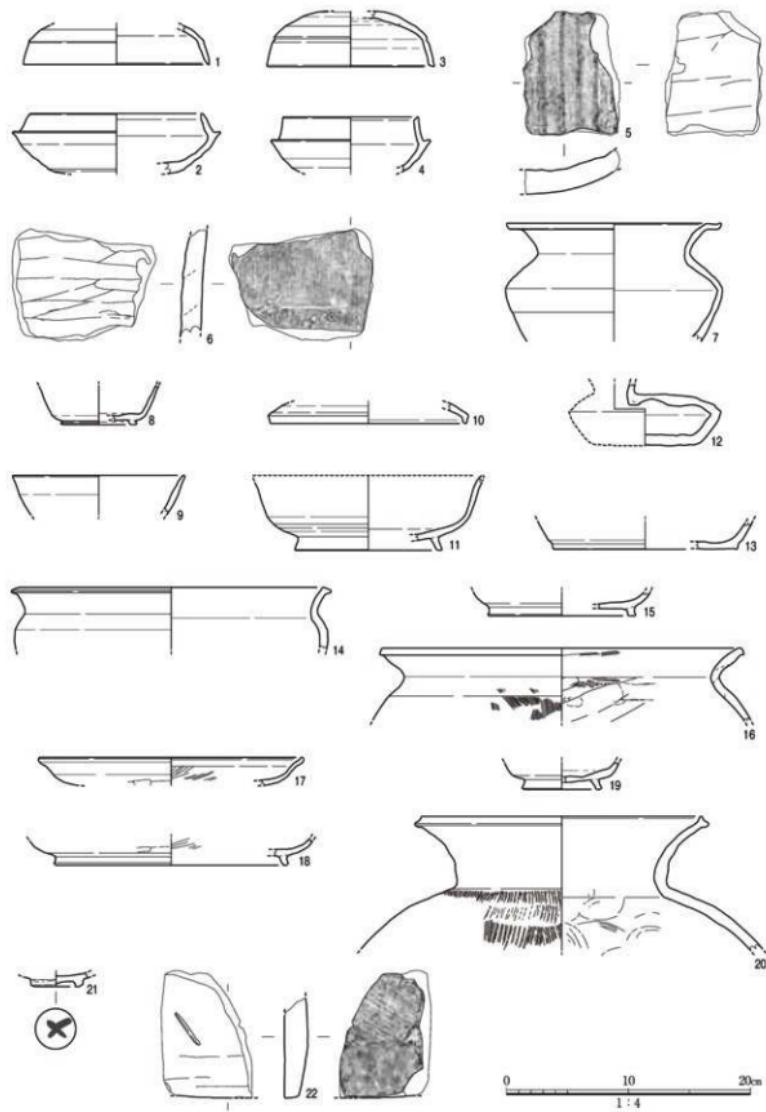


图11 出土遗物实测图

第8层(1~4)、第6层(5)、SX04(6)、第5层(7)、第4c层=SX03(8~16)、第4b层(17~20)、第3层(21~22)

ようである。20は壺である。これらの土器は8世紀に属すが、地層の年代としては下位の第4c層=SX03の9世紀を過らない。

i. 第3a・3b層下面の遺構と遺物

耕作痕 第3a層と第3b層の、それぞれ下面で幅0.02~0.15mで、極めて浅い耕作痕(いわゆる鋤溝)がみられた。いずれも西北西~東南東の方向であった。

j. 第3層の遺物

古代の土器が多いが、21は中国産白磁皿、22は丸瓦である。21は高台が露胎で底裏には×印の墨書きがある。22の凹面にみられる粘土板切取技法はコビキAである。遺物に基づけば第3層の年代は、21により15~16世紀頃であろう。

3)まとめ

今回の調査成果は、地形復元の基礎データが得られたことである。それは、第8a・8b層が古墳時代、第6層が古墳時代後期~飛鳥時代、第5層が奈良時代、第4b・4c層が平安時代初期と整理され、奈良時代から平安時代にかけて大きく谷の埋積が進んだ様相を窺うことができる。

調査地は真法院谷の最深部に位置するが、それでもSX03の南辺やSX04の北辺がある程度正方位に近いことは、難波京の条坊制地割が影響していたことを示すのかもしれない。

しかし、問題も残る。西隣のUH20-4次地点と比較すると、その谷底で検出された第6c層(オリーブ黒色砂礫混りシルト層)が本調査地の第8層と一連である可能性があるが、20-4次第6c層はTP+6.4~6.9mで検出されたのに対し、今回の第8層はTP+5.6~6.2mとかなり低い。また出土遺物は20-4次第6c層が飛鳥時代(註1)の遺物を含むのに対し、今回の第8層は古墳時代と、一致していない。この両者は別の地層であるか、または今回の第8層出土遺物が本来の地層の年代を示していないのかのいずれかであろう。

また、第6層以下の地層に二次的な營力による変形が著しく見られ、その一部が大型動物による踏込みによるとみられたが、それだけですべては説明できない。この点も課題として残った。

このような問題を解決するには、周辺の更なる調査が必要であり、将来に委ねるところが大きい。

註)

(1) UH20-4次第6c層出土の平瓦4は、凸面に1枚づくりの特徴である繩タタキがみられず、断面形状から桶巻づくりの可能性が高く、そうであれば飛鳥時代に属する。

引用・参考文献

大阪市教育委員会・大阪文化財研究所2011、「上本町遺跡発掘調査(UH09-5)報告書」:「平成21年度大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告(2009)」、pp.201-210

大阪市教育委員会・大阪市文化財協会・大阪府文化財センター2022、「上本町遺跡発掘調査(UH20-4)報告書」:「大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書(2020)」、pp.257-266

十河良和2011、「日置莊西町窯系円筒埴輪と河内大塚山古墳」：『ヒストリア』228号、pp.27-51、大阪歴史学会
趙哲済・市川創・高橋工・小倉徹也・平田洋司・松田順一郎・辻本裕也2014、「上町台地とその周辺低地における地
形と古地理変遷の概要」：『大阪上町台地の総合的研究』pp.9-22、大阪歴史博物館・大阪文化財研究
所

西壁地層断面(東から)



北壁地層断面(南から)



東壁地層断面(西から)



完掘後の調査区全景
(南から)



第8層上面(南から)



第6層上面SX04
(南から)



第5層上面SX03
(南から)



第3層除去後全景
(西から)



作業風景(南から)



浪速区湊町一丁目5-33における建設工事に伴う
湊町遺跡発掘調査(MC21-1)報告書

調査個所 大阪市浪速区湊町1丁目5-33
調査面積 400m²
調査期間 令和3年9月9日～10月26日
調査主体 一般財団法人 大阪市文化財協会
調査担当者 調査課長 高橋工、岡村勝行、和田亮平

1) 調査に至る経緯と経過

調査地は、新発見の遺跡である。JR難波駅の東隣にあり、上町台地の西側に広がる海岸低地に位置する。周辺一帯は中世荘園の「難波荘」があったとされる地域である。

調査地の半径300m以内では過去に調査実績はないが、500m以内では約10件が実施されている(図1)。このうち今回の調査地より西方のSL12-1・13-2、IN13-1、また、南方のNK96-1・01-1・12-1、NB16-1・17-2・19-1次調査地[大阪市教育委員会・大阪市文化財協会 1998・2003・2021、大阪市教育委員会・大阪文化財研究所2014a・2014b・2015a・2015b・2018・2019]などでは、中世に遡る作土層が検出され、当地域(旧難波村)の耕地開発が概ね12世紀末以降に始まり、近世の新田開発を経て海側に拡がっていった状況が明らかにされている[南秀雄2021・2022]。

大阪市教育委員会により、令和2年5月19日に敷地の2箇所で試掘調査が行われ、GL-1.6mで、中世以前と考えられる古土壤が確認された。この結果を受け、本調査は東西16m、南北25mを対象として、実施することとなった(図2)。令和3年9月9日に調査を開始した。まず重機でアスファルト、搅乱層およびGL-1.4mまでの現代・近代盛土を掘削した。下位層は人力で掘り下げたが、湧水が著しく、壁面が崩壊する危険があったため、第2-2層からは調査区を東西6m、南北14.5mに縮小した。層序に応じて、順次遺構・遺物を検出し、実測・写真撮影による記録を進めた。平面調査はGL-3.2m(第5層上面)まで行った。その後、調査区南部の一部を重機によって深掘りし、GL-6.0m(TP-3.6m)までの地層(第7~10層)を観察・記録した。第4~6層については連続的な不搅乱ブロック試料、第7層と第8層については掌大の自然科学分析用の試料を採取した。10月26日に現地における全作業を終了し、資材・機材を撤収した。後日、第6~8層から採取した試料について放射性炭素年代測定を行った。



図1 調査地位置図



図2 調査区位置図

株式会社加速器分析研究所に依頼し、分析結果を得た(表1)。

報告で用いた方位は、現場で記録した街区図を1/2,500大阪市デジタル地図に合成することによって得た世界測地系座標に基づき、座標北を基準とした。標高はTP値(東京湾平均海面値)を用いてTP ± ○mと表記した。

2)調査の結果

i)層序(図3・4)

現地表の標高はTP+1.9~2.4mで、北西から南東にやや下がる。調査区の地層を次の第0層~第10層に区分した。第7層以下は調査区南部で行った深掘りの地層断面観察による。

第0層：アスファルト、パラスからなる現代の盛土層及び搅乱層で、層厚は70~90cmである。

第1層：中粒砂～極粗粒砂を主体とする近代の盛土層で、層厚は110~130cmである。西から東の一定方向かつほぼ同じ量の盛土が繰り返されており、大阪鉄道湊町駅(1889年開業)の建設に伴うものと考えられる。上面で旧地表面を確認した。

第2層：3層に分類した。

第2-1層：黒褐色(2.5Y3/1)シルト質極細粒～細粒砂からなる作土層で、層厚は20~30cmである。大阪鉄道湊町駅の建設直前までの近世末～近代の地層である。上面で歯間群が検出された。

第2-2層：灰色(5Y4/1)シルト質極細粒砂からなる盛土層で、層厚は約20cmである。18世紀後半に属する肥前磁器が出土した。上面でSD03を検出した。

第2-3層：シルト偽礫を多く含む灰色(5Y5/1)極粗粒砂～細礫からなるSX04を埋める盛土層で、層厚は約20cmである。偽礫は第3-0層に由来する。極粗粒砂～細礫層には、18世紀後半に属する肥前磁器のほか、古墳時代～中世までの多様な遺物を含み(図8)、さほどローリングを受けていないことから調査地近くにあった遺物包含層に由来するものと考えられる。

第3層：3層に分類した。

第3-0層：灰色(5Y4/1)粘土質シルトを主体とする作土層で、層厚は約40cmである。上面で南北方向の土採り穴SX04が検出された。

第3-1層：灰色(5Y5/1)シルトからなる作土層で、層厚は約10cmである。出土遺物は確認できなかつた。

第3-2層：暗オリーブ灰色(5GY4/1)粗粒砂質シルトからなる作土層で、層厚は約10cmである。古墳時代から豊臣後期の遺物を含む(図6)。上面でSD05・06を検出した。

第4層：暗オリーブ灰色(2.5GY4/1)細粒砂質シルトからなる水成層で、層厚は10~15cmである。遺物は確認できなかつた。

第5層：オリーブ黒色(5Y3/2)シルト～極細粒砂からなる水成層で根茎を主とする植物遺体を多く含む。層厚は約40cmである。生物擾乱が著しく、甲殻類のものと思われる巣穴が確認された。遺物は確認できなかつた。

第6層：灰色(5Y4/1)シルト質中粒砂からなる水成層で、枝片を主とする植物遺体を含む。層厚は

約110cmである。植物擾乱が著しい。遺物は確認できなかった。本層から採取した葉・小枝(R96)の放射性炭素年代測定を実施したところ、534calAD-603calAD(88.9%)の結果を得た。

第7層：灰色(5Y4/1)シルト質細礫～中礫からなる泥質砂で、一部に水平層理が見られた。層厚は約20cmである。地層全体にシジミ貝化石(以下、「貝化石」を省略)(図版3下)を含み、合殻直立姿勢(両殻が合わさった状態)のものもあった。原地性の貝化石と判断でき、本層は汽水域である河口域あるいは堤間湿地の堆積層と考えられる。人工遺物は確認できなかった。本層から採取した葉・小枝(R103)から、591calAD-652calAD(95.4%)の測定結果を得た。なお、採取土には、ハマグリ1点、シオフキ1点も含まれていたが、下位の第8層からの混入の可能性がある。

第8層：灰色(5Y4/1)シルト質細礫～中礫からなる自然堆積層で、層厚は約30cmである。生物擾乱が顕著であった。木質遺物のはか、シオフキ、カガミガイ、バイガイを含む。合殻直立姿勢は確認できなかったが、原地性の貝化石である可能性が高い。貝はいずれも外浜に生息し、本層は海水域にあると考えられる。人工遺物は確認できなかった。本層から採取した種子殻(R106)から、58calBC-30calAD(84.8%)の測定結果を得た。なお、採取土にはシジミ1点が含まれていたが、上位の第7層からの混入の可能性がある。

第9層：灰色(7.5Y5/1)極細粒砂からなる水成層で、層厚は35cmである。遺物は確認できなかった。

第10層：明緑灰色(7.5GY8/1)極細粒砂シルトからなる水成層で、層厚は40cm以上である。固く締まる。遺物は確認できなかった。

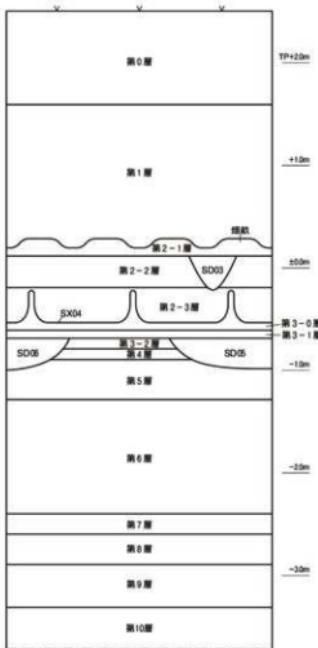


図3 地層と遺構の関係図

表1 放射性炭素測定および暦年較正の結果

試料	測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ 補正なし		暦年較正用 (yrBP)	1 σ 暦年代範囲	2 σ 暦年代範囲
		Age (yrBP)	pMC (%)			
葉・小枝1 R96	IAAA-220576	1,580 ± 20	82.19 ± 0.23	1,524 ± 22	544calAD-582calAD (68.3%)	440calAD-453calAD (2.1%) 478calAD-496calAD (4.4%) 534calAD-603calAD (88.9%)
葉・小枝2 R103	IAAA-220577	1,520 ± 20	82.75 ± 0.23	1,439 ± 22	605calAD-642calAD (68.3%)	591calAD-652calAD (95.4%)
種子殻 R106	IAAA-220578	2,120 ± 20	76.79 ± 0.22	2,033 ± 22	49calBC-9calAD (68.3%)	99calBC-70calBC (7.9%) 58calBC-30calAD (84.8%) 43calAD-59calAD (2.8%)

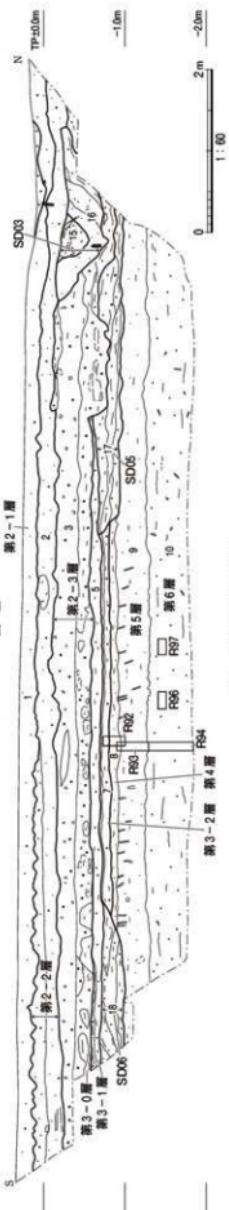
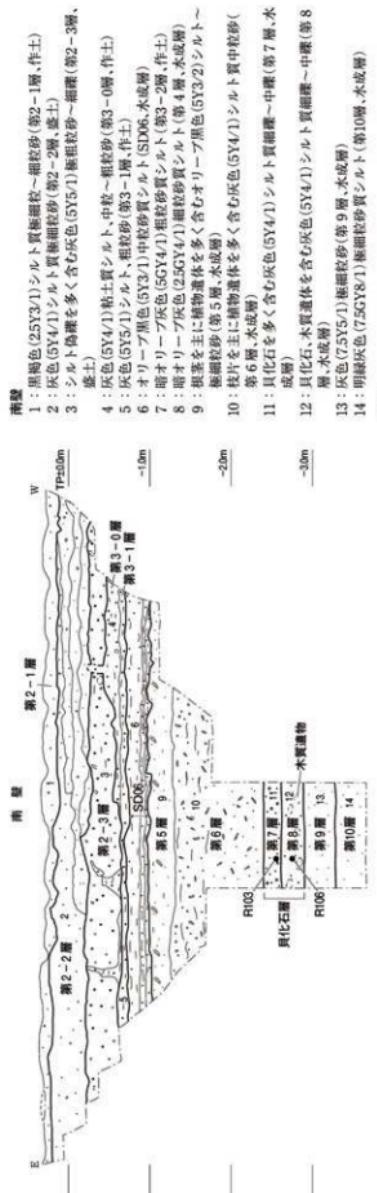
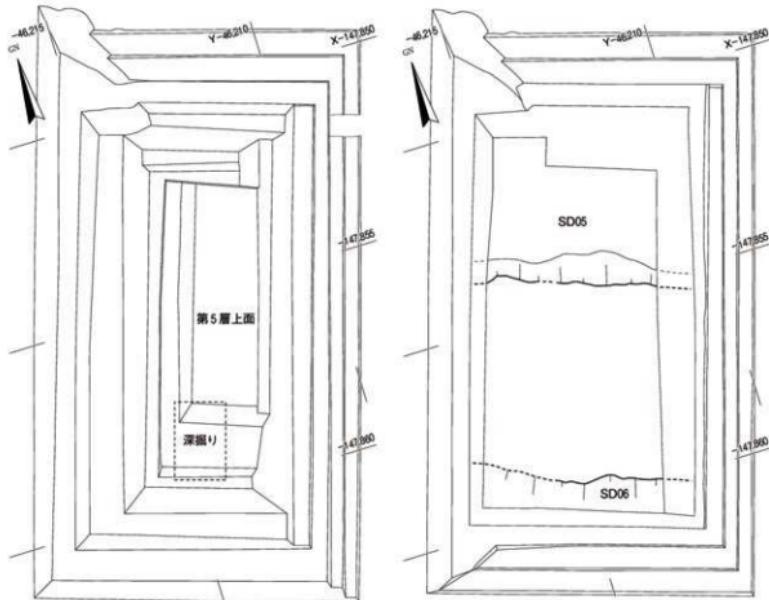
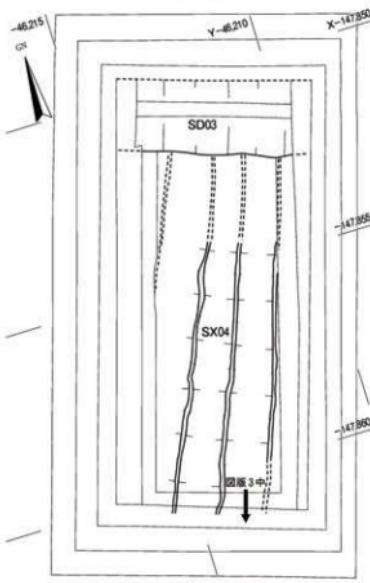


図4 潟在区地層断面図



第5層上面

第3-2層上面



第3-0層・第2-2層上面

図5 調査区造構平面図

0 1:125 5m

ii) 遺構と遺物

a. 17世紀初頭以前の遺物(図6)

第3～2層から出土した1～4が該当する。1は瓦器碗である。和泉型で、内外面の調整から概ね12世紀前半に位置付けられる。混入品と考えられる。2は中国産白磁小杯である。3は肥前陶器碗で、豊臣後期のものである。4は15世紀頃の瓦質土器羽釜である。数は少ないものの、これらはいずれも豊臣後期以前のものであり、第3～2層は17世紀初頭頃の地層と考えられる。

b. 17世紀初頭～中頃の遺構と遺物(図5・6)

第3～2層上面でSD05・06を検出した。

SD05：調査区北部で検出した幅4.0m以上、長さ5.7m以上、深さ0.25mの東西方向の溝である。埋土は中粒砂質シルトを主体とする自然堆積である。溝底はTP-1.0m付近にあり、東西端で顕著な高低差は認められない。土師器・須恵器・瀬戸美濃焼の細片のほか、小型管状土錐7が出土した。明確な時期を示す遺物に乏しいが、17世紀初頭頃のものと考えられる。

SD06：調査区南部で検出した幅1.4m以上、長さ5.7m以上、深さ0.3mの東西方向の溝である。埋土は中粒砂質シルトを主体とする自然堆積である。溝底はTP-1.0m付近にあり、東西端で顕著な高低差は認められない。土師器・瓦器の細片のほか、肥前磁器小杯5・皿6が出土した。豊臣後期以前の遺物が少なくないものの、肥前磁器片の存在から、17世紀中頃の遺構と考えられる。

c. 18世紀後半の遺構と遺物(図5・7)

第2～2層上面でSD03、第3～0層上面でSX04を検出した。

SD03：調査区北部で検出した幅2.1m、長さ4.6m以上、深さ0.6mの東西方向の溝である。上層は炭混り灰オリーブ(5Y4/2)粘土質シルト、下層は灰色(10Y4/1)粗粒砂質シルトを主体とする自然堆積である。埋土からは肥前磁器を中心とする近世遺物が出土した。8～12は肥前磁器で、8～11は染付碗、12は染付小広東碗である。13は備前焼蓋付壺である。14・15は関西系陶器で、14は土鍋、15は碗である。16は軟質施釉陶器灯明皿である。以上の遺物は概ね18世紀後半に属する。17は土製支脚で、鋳造に関わるものであろう。18は瓦質土管である。内面に布目、縄目痕を残す。全長34.5cm、直径23.2cmである。原位置では確認できなかったが、暗渠に用いられたものと考えられる。

SX04：調査区全域で検出した第3～0層の採取を目的とする土採り穴である。幅1.0～1.2m、長さ

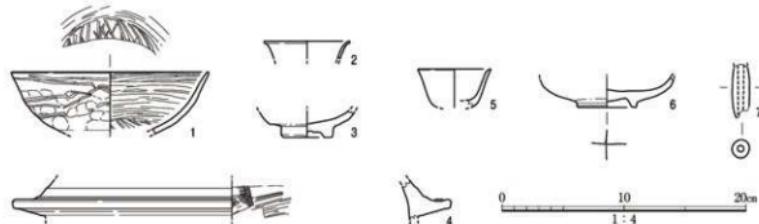


図6 豊臣期以前の遺構・地層出土遺物実測図

第3～2層(1～4)、SD06(5・6)、SD05(7)

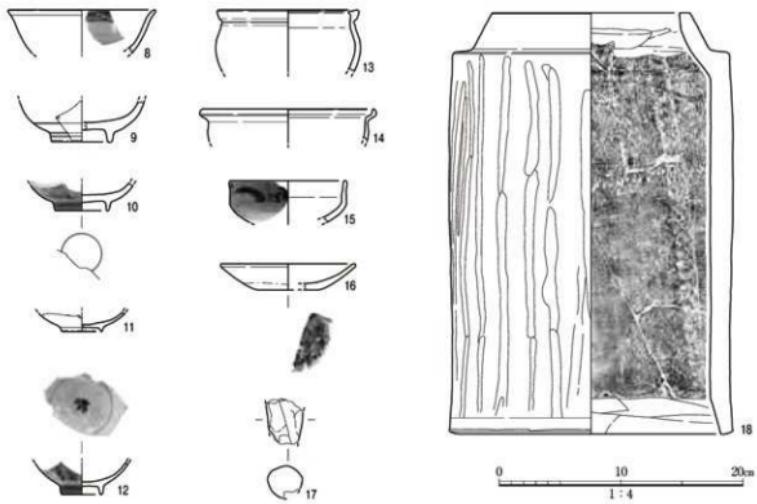


図7 SD03出土遺物実測図

7.5m以上、深さ約0.4mの南北方向の並行する長細い土壙で構成される。土壙間は上端で幅約0.1m、下端で幅約0.2m掘り残され、土採りが定形的、規則的に行われたことがわかる。なお、この掘り残しは上端から10~15cm付近で基部から離れて、東西方向にずれている状況が南壁の地層断面で確認できた(図版3中)。ズレは西方向、東方向ともにあり、第2~3層で埋められた後、外部からのなんらかの圧力によって生じたものと考えられる。

d. 第2~3層出土の古墳時代~近世の遺物(図8)

18世紀後半の土採り穴であるSX04の埋め戻し土(第2~3層)からは、古墳時代~近世の多様な遺物が出土した。19~29は土師器である。19~22は皿で、19・20は「て」の字口縁を有する。器壁はやや厚めで、11世紀代のものだろう。23~26は皿もしくは椀である。26の底には糸切り痕を残す。27・28は甕で、後者は河内系である。概ね11世紀に位置付けられる。29は羽釜である。口縁端部近くに突帯を巡らす。30~34は須恵器である。30は杯身で、TK10型式に位置付けられる。全体に摩滅が著しい。31は甕の頸部で、外面に格子タタキ痕が見られる。32は器台の脚部で、シャープな波状文が施されている。33は鉢で、口縁端部が「く」の字に屈曲する。34は壺である。34は搬入品であり、神戸市神出窯跡出土品に類似例がある(例えば、[神戸市教育委員会2011])。頸部に突帯を2条巡らし、その間に把手を配置するタイプであり、神出窯跡では10~12世紀と幅広い時期に製作されている。35は黒色土器A類椀である。内面を丁寧にヘラミガキし、器壁は厚い。36は黒色土器B類椀である。口縁端部をやや外方に折り曲げる。35・36は概ね11世紀代に位置付けられる。37・38は瓦器椀である。内外面の最終調整、器形から12世紀後葉から13世紀前葉のものだろう。39は中国産白磁碗である。口縁端部は

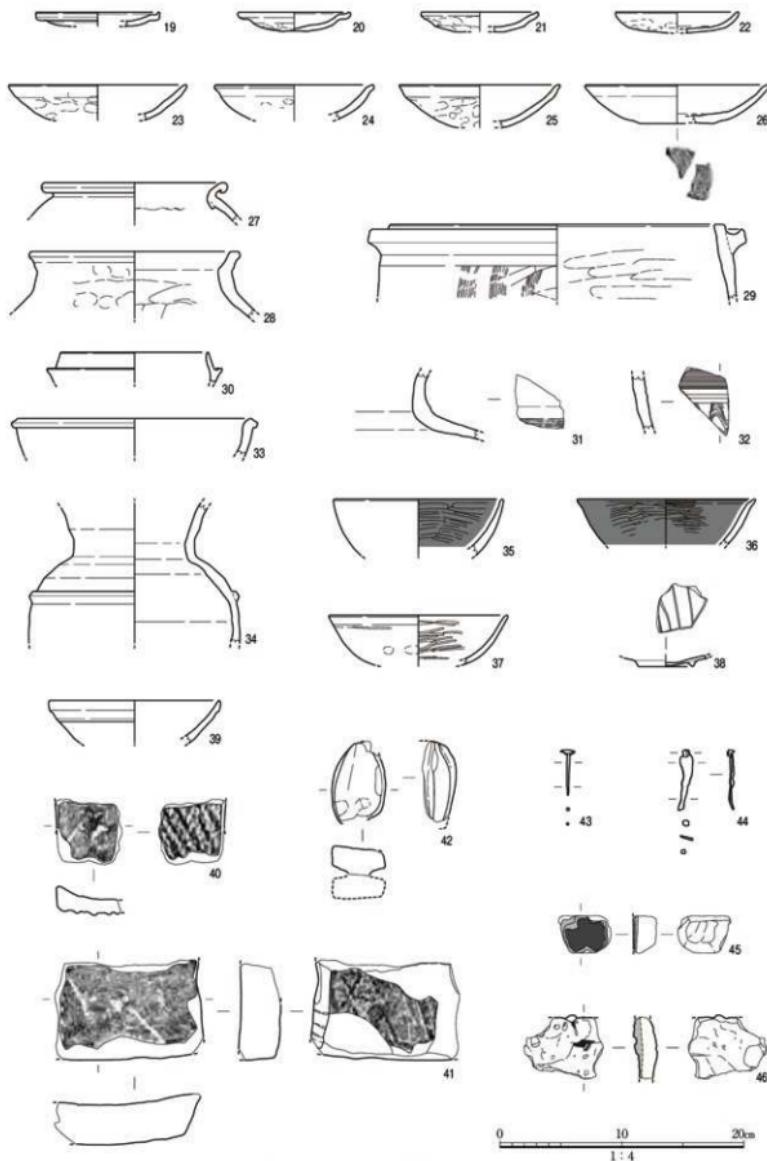


图8 第2-3层出土遗物实测图

玉縁状である。40・41は平瓦である。とともに凹面に布目、凸面に格子タタキの痕を残し、古代のものである。42は有溝土錘である。43は銅製の鉢である。丸頭で長さ3.5cmである。44は銅製の板状製品である。長さは4.9cmで、一端に一辺0.4cm大の塊を設ける。45は鋳型、46は鋳造炉壁の破片である。

e. 19世紀の遺構と遺物

第2～1層上面で畝間群を検出した。畝間の幅は0.80～0.85m、畝の高さは0.05m前後である。作土からは肥前磁器、関西系陶磁器のほか、レンガを含み、近世末から大阪鉄道湊町駅(1889年開業)の建設直前までの耕作地と考えられる。

3)まとめ

調査地周辺では、調査面積や湧水などの理由から、これまで掘削深度が限られ、ほとんどの場合、中世以降の調査に留まっていたが、今回の調査ではGL-6.0m (TP-3.6m)までの地層、土地履歴、この地の古環境・古地形の復元に重要な知見を得ることができた。その要点は次のとおりである。

1. 第8層からはシオフキ、カガミガイ、バイガイ、第7層からはシジミが出土した。この段階、調査地が海浜にあり、海水域(外浜環境)から汽水域(河口域あるいは堤間湿地)に変化したと考えられる。それぞれの地層から採取した放射性炭素年代では、前者が $58\text{calBC} - 30\text{calAD}$ (84.8%)、後者では $591\text{calAD} - 652\text{calAD}$ (95.4%)であり、500年以上の懸隔があるが、これは前者の試料である種子殻が、地層の堆積年代より古い時代のものであった可能性がある。海水域から汽水域への変化は、ひとまず後者の時期以降と考えておきたい。
2. 第5～6層は連続的な自然堆積層であり、水棲植物が繁茂する湿地環境にあったと復元できる。第6層から採取した試料の放射性炭素年代は $534\text{calAD} - 603\text{calAD}$ (88.9%)であった。第7層試料より古い年代が示されたことになるが、これは採取試料が第6層の堆積年代より古いものであったことに起因すると考えられる。現状では第6層の年代は第7層試料の放射性炭素年代 $591\text{calAD} - 652\text{calAD}$ (95.4%)以降ということになる。調査地で明確な作土が確認できるのは第3～2層の17世紀初頭頃であるが、12世紀代の瓦器椀1のほか、少なからずの中世遺物を含んでいる。さらに遊離資料であるものの、第2～3層には11世紀に遡り得る資料がまとまって出土している。こうした資料から、この地における陸化は古代末に遡る可能性がある。
3. 難波砂堆の形成過程の研究[趙・中条2017]で示された古地形復元によると、調査地は難波砂州の浜堤3Aの西端(古代～中世初の海岸線と推定されるライン)から西に約70mにある。このラインの西100～120mには、明治期の地図には併行する土手状の高まりが記されており、調査地は微地形的には細長い堤間湿地に位置している可能性がある。
4. 18世紀後半以降の盛土である第2～3層からは、古代末を中心に古墳時代から中世前期と幅広い時期の遺物が出土した。須恵器杯身30以外ではローリングの痕が認められず、これらの遺物は調査地から遠くない場所で利用された可能性が高い。なかでも11世紀に遡り得る資料群は、周辺ではこれまで確認されておらず、当該期の集落の存在を示唆するものとして注目される。

引用・参考文献

- 大阪市教育委員会・大阪市文化財協会1998、「浪速元町計画による建設工事に伴う発掘調査(NK96-1)」:「平成8年度 大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書」、pp.91-100
- 2003、「浪速元町遺跡 B 地点発掘調査(NK01-1)報告書」:「平成13年度大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書」、pp.53-58
- 2021、「難波1丁目所在遺跡発掘調査(NB19-1)報告書」:「大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書(2019)」、pp.69-76
- 大阪市教育委員会・大阪文化財研究所2014a、「浪速区元町一丁目における建設工事に伴う難波元町遺跡発掘調査(NK12-1)報告書」:「大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書(2012)」、pp.365-372
- 2014b、「浪速区桜川二丁目における建設工事に伴う桜川遺跡発掘調査(SL12-1)報告書」:「大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書(2012)」、p.373-380
- 2015a、「稻荷遺跡発掘調査(IN13-1)報告書」:「大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書(2013)」、pp.531-540
- 2015b、「桜川遺跡C地点発掘調査(SL13-2)報告書」:「平成25年度大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書」、pp.107-112
- 2018、「浪速元町遺跡発掘調査(NB16-1)報告書」:「大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書(2016)」、pp.509-518
- 2019、「浪速元町遺跡発掘調査(NB17-2)報告書」:「大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書(2017)第2分冊」、pp.115-124
- 神戸市教育委員会2011、「神出窯跡群III - 神出鴨谷1号窯～3号窯・神出梶谷1号窯 一般国道175神出バイパス建設事業に伴う発掘調査報告書(1)」、兵庫県文化財調査報告第407冊
- 趙哲済・中条武司2017、「大阪海岸低地における古地理の変遷-「上町科研」以降の研究-」:「ヒストリア」264号、pp.3-23
- 南秀雄2021、「西大阪平野の沿海開発の一例-難波・木津地域の発掘から-」:「葦火」203号、pp.6-7
- 2022、「発掘からみた中世大阪の沿海開発-難波砂堆」:「大阪市文化財協会研究紀要」第23号、pp.1-26

南壁深掘り地層断面
(北から)



南壁深掘り地層断面
(北西から)



西壁地層断面
(北東から)



調査区全景(西から)



調査区全景
(南東から)



調査区全景
(東から)



第3 - 2層上面
SD05・06
検出状況(南東から)



SX04地層断面
(南壁、北から)



出土した貝化石
(左: 第7層、
右: 第8層)



淀川区西中島七丁目 6 - 3 における建設工事に伴う
西中島 7 丁目所在遺跡 B 地点発掘調査(WN21-1) 報告書

調査個所 大阪市淀川区西中島7丁目6-3
調査面積 500m²
調査期間 令和4年1月24日～3月15日
調査主体 一般財団法人 大阪市文化財協会
調査担当者 調査課長 高橋工、岡村勝行、桑原武志

1) 調査に至る経緯と経過

調査地は、淀川三角州の沖積地に立地する新発見の遺跡である。JR新大阪駅の南西近く、新御堂筋の西にあり、周辺500mではこれまで10数件の調査が実施されている(図1)。このうち宮原遺跡は新大阪駅の北方に広がる中世集落で、史料によれば、宮原遺跡周辺には13世紀頃より宮原莊あるいは宮原北莊・宮原南莊とよばれる莊園が置かれ、1994年以来、各所で12~15世紀頃の建物跡・井戸などの莊園に関係する遺構・遺物が検出されている。今回の調査地近辺では、北西にあるMH09-1・17-1・19-1次調査地で中世から近世にかけての耕作跡が確認された[大阪文化財研究所2010、大阪市教育委員会・大阪文化財研究所2019a・2021]。また、南方100mのWN17-1次調査では中世の遺物がまとまって出土し、近隣に集落の存在の可能性が指摘された[大阪市教育委員会・大阪文化財研究所2019b]。

大阪市教育委員会により、令和3年10月13日に敷地内の2箇所で試掘調査が行われ、現地表下1.3mで、中世以前と考えられる遺構面および遺物包含層が検出された。この結果を受け、本調査は東西25m、南北20mを対象として、実施することとなった(図2)。排土置き場の確保から、調査区を東西に2分割し、西側を1区、東側を2区とした。令和4年1月24日に1区の調査を開始した。まず重機でアスファルト、擾乱層および現代~近世盛土までを掘削した。下位層は人力で掘り下げ、第5層上面、第6層上面・層中で遺構・遺物を検出し、実測・写真撮影による記録を進め、2月18日に完了した。2月21日より、2区の調査を開始した。1区同様の方法で順次進め、主要遺構の記録を終えた3月9日には、流路NR6053に直交するサブトレーンチ(長さ18.0m、幅2.5m、深さ1.5m)を設定し、下位の地層の堆積状況を調査した。3月15日に現地における全作業を終了し、資材・機材を撤収した。



図1 調査位置図

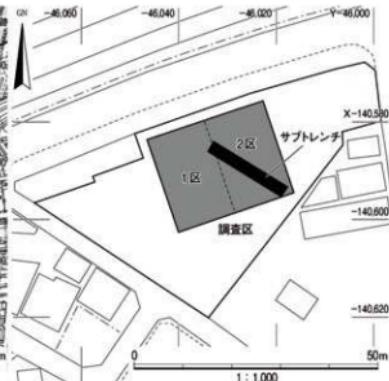


図2 調査区位置図

報告で用いた方位は、現場で記録した街区図を1/2,500大阪市デジタル地図に合成することによって得た世界測地系座標に基づき、座標北を基準した。標高はTP値(東京湾平均海面値)を用いてTP ± 0mと表記した。なお、本報告の遺物の記載は調査課学芸員小田木富恵美が担当した。

2) 調査の結果

i) 層序(図3～5、図版1)

現地表の標高はTP+0.9～1.4mで、南から北にやや下がる。調査区の地層を次の第1層～第7層に区分した。

第1層：アスファルト、現代盛土層及び擾乱層で、層厚は60～120cmである。

第2層：褐色(10YR4/4)細粒砂質シルトを主体とする近世～近代の盛土層で、層厚は約20cmである。上面で近代の遺構が検出された。

第3層：暗褐色(10YR3/4)極細粒砂質シルトを主体とする近世の盛土層で、層厚は約20cmである。上面で近世の遺構が検出された。

第4層：暗褐色(10YR3/4)細粒砂質シルトを主体とする作土層で、層厚は15cm前後である。重機で除去したために、詳細は不明であるが、第5層で16世紀代の遺物が出土していることから、それ以降と考えられる。上面でSK4001、下面で北西～南東方向の鋤溝が検出された。

第5層：大きく2層に分類した。

第5～1層：灰黄褐色(10YR4/2)極細粒砂質シルトからなる古土壤で、層厚は20cmである。マンガン斑の沈着が著しい。出土遺物は多く、11世紀後葉～12世紀前半を中心とするが、16世紀代の瀬戸美濃焼陶器天目碗の細片を含み、長期に渡って形成された遺物包含層である。層中からは12世紀前半

～13世紀初頭の遺物を含む遺構が確認された。上面でSD5002など16世紀代の遺構を検出した。

第5～2層：暗オリーブ褐色(2.5Y3/3)極細粒砂質シルトからなる自然堆積層で、層厚は20～30cmである。1区北部のNR6053の凹みにのみ分布する。出土遺物で最も新しい瓦器輪66～68は11世紀後葉～12世紀前半であり、その頃の地層と考えられる。

第6層：大きく2層に分類した。

第6～1層：にぶい黄褐色(10YR4/3)細粒砂～中粒砂混りシルト層からなる自然堆積層で、

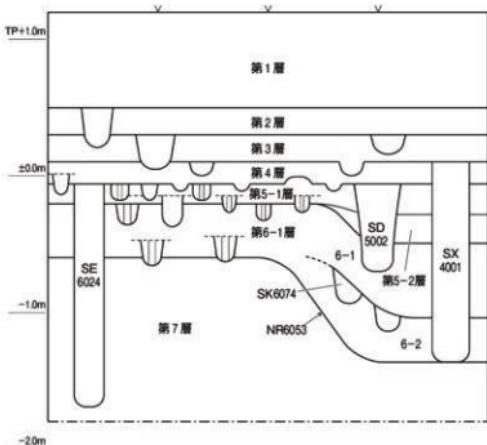
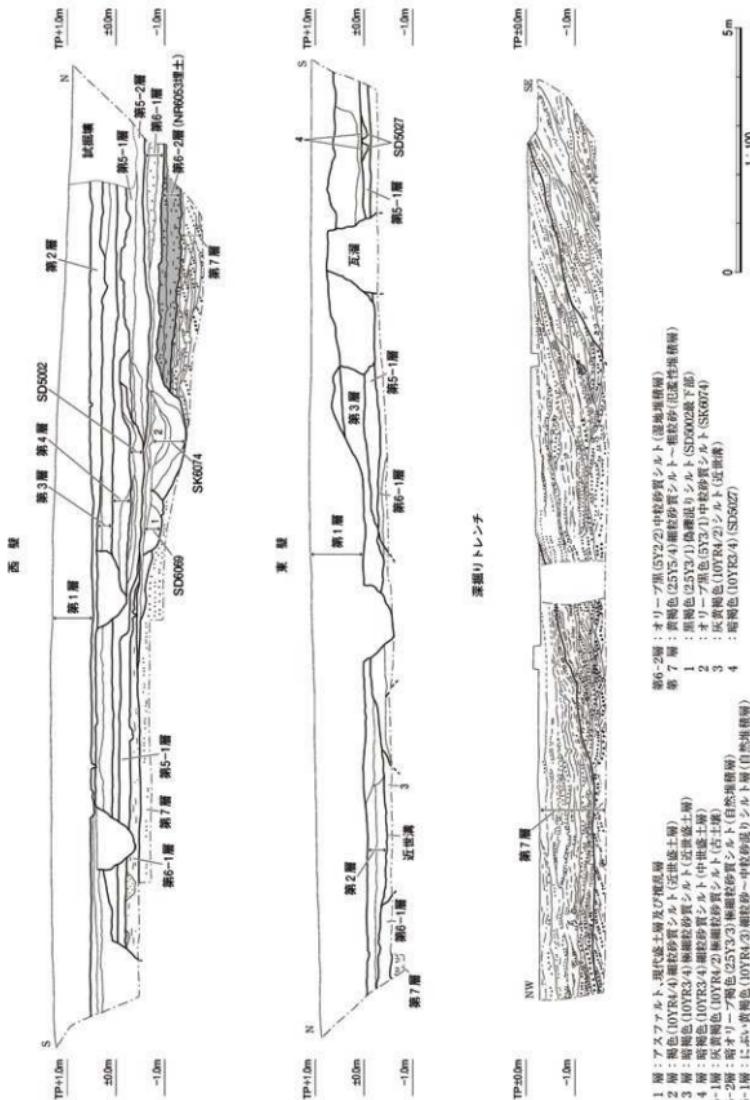


図3 地層と遺構の関係図



第1層：アスファルト, 用鐵送土層及び被風層
第2層：褐褐色 (OYRb4) 剥離砂質シルト (近地表層)
第3層：褐褐色 (OYRb3/4) 剥離砂質シルト (近地表層)
第4層：褐褐色 (OYRb3/4) 剥離砂質シルト (近地表層)
第5, 18層：灰褐色 (OYRg4) 剥離砂質シルト (近地表層)
第6, 25層：油アスファルト (OYRg3/3) 剥離砂質シルト (近地表層)
第7層：油アスファルト (OYRg2/3) 剥離砂質シルト (近地表層)

第6-2層：オリーブアスファルト (SY2/2) 中粒砂質シルト (遠地表層)
第7層：黄褐色 (OYRg5/4) 剥離砂質シルト (相較的距離)
1: 黄褐色 (OYRg3/1) 剥離砂質シルト (SY2/2)
2: 棕褐色 (OYRg3/1) 剥離砂質シルト (SY2/2)
3: 黑褐色 (OYRg2/2) ノンオル (近地表)
4: 灰褐色 (OYRg3/4) (SY2/2)

図4 溝谷区内地盤断面図

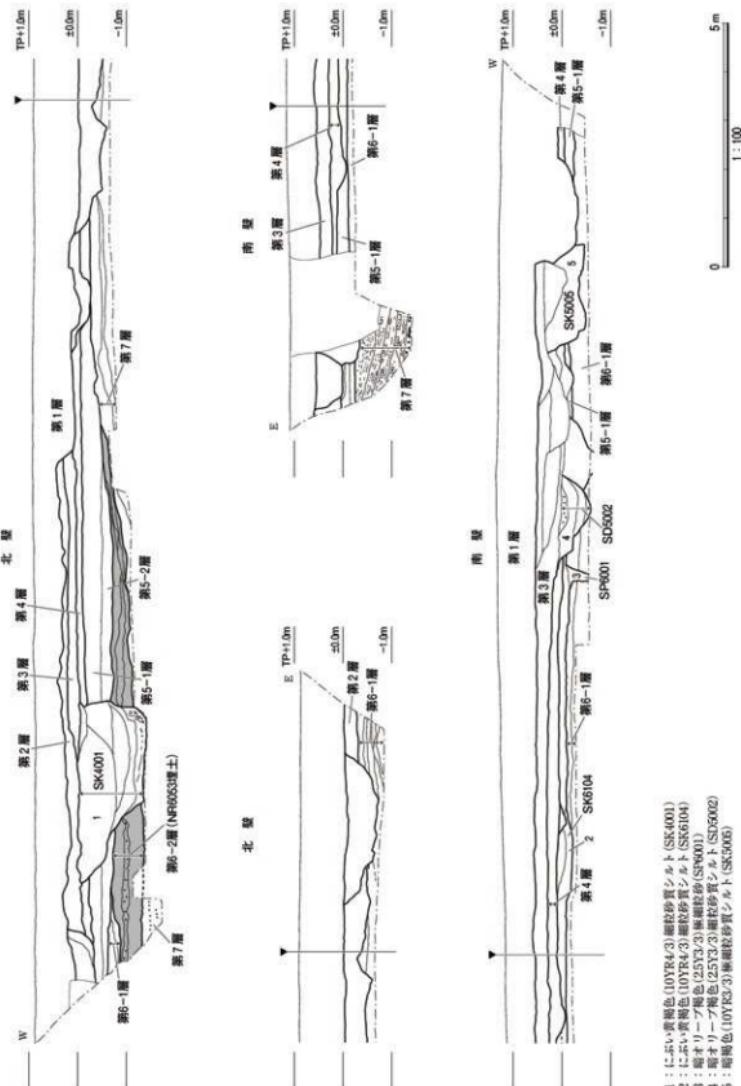


图 5 调查区地层断面图

1 にぶい黄褐色 (10YR4/3) 線粒形質シルト (SK4001)
 2 にぶい黄褐色 (10YR4/3) 線粒形質シルト (SK6104)
 3 暗オリーブ色 (2.5Y3/3) 線粒形質シルト (SK9001)
 4 暗褐色 (2.5Y3/3) 線粒形質シルト (SD5002)
 5 暗褐色 (10Y3/3) 線粒形質シルト (SK5005)

層厚は20~35cmである。須恵器杯身1のほか(図6)、11世紀代の遺物が出土した。上面および層中で11世紀後葉~12世紀前半の遺構を検出した。

第6~2層:オリーブ黒色(5Y2/2)

中粒砂質シルトを主体とする自然堆積層で、層厚は20~40cmである。第

7層で埋没する自然流路の放棄流路を埋めた堆積層である。瓦器碗や黑色土器A・B類など10世紀後葉~11世紀初頭の遺物が出土した(図11)。上面でSK6074を検出した。

第7層:上部が細粒砂質シルト、下部が粗粒砂を主体とする氾濫性堆積層で、層厚は130cm以上である。2区に設けたサブトレントの地層断面では、粗粒砂からシルトへの上方細粒化の堆積状況とともに、中央下部でトラフ型ラミナが明瞭に観察された。南東から北西に側方移動する流路の堆積層であり、古流向は北東から南西であった。本層からは6世紀末の須恵器杯身2、8世紀末~9世紀初頭の須恵器B蓋3が出土した(図6)。

ii) 遺構と遺物(図6~20)

遺構の検出作業は、はじめに第5~1層上面で行い、土壤、溝、鉄溝などを検出した。次に第6~1層上面で行い、掘立柱建物跡、柱穴、流路、溝、土壤、畠状遺構などを検出した。また、第6~1層中ではNR6053の東岸近くで、柱穴を多数検出した。検出した遺構数は、約200に及ぶ。これらを検出面、出土遺物、切り合ひ関係などにより、4期に分類した。下記には主要な遺構を記載する。

第I期:9世紀初頭以前の遺物(図6)

第6~1層から出土した1、第7層から出土した2・3が該当する。1は須恵器杯蓋である。天井部をヘラケズリ調整する。2は須恵器杯身である。口縁端部は短く内傾し、底部をヘラケズリ調整する。以上はTK209型式に属し、6世紀末のものであろう。3は須恵器B蓋である。器高は低く、口縁端部は丸く收める。8世紀末~9世紀初頭に属するものであろう。

第II期:10世紀後葉~12世紀前半の遺構と遺物(図7~11)

第6層上面・層中で、掘立柱建物、柱列、柱穴、流路、溝、土壤を検出した。

SB6001:調査区中央から南西部で検出した掘立柱建物である。主軸は北から東に35度振る。桁行は6間(11.8m)以上で、柱間は2.0~2.2mである。SP6133・6091は桁行の延長上に位置するが、SB6001北辺から柱間が3.1mと長いこと、深さが0.13~0.20mと浅いことなどから、庇などの柱穴と考えた。梁行は現状では中柱が確認できないが、柱間が4.4mと長く、2~3間と考えられる。柱穴の直径は0.50~0.88m、深さは最大0.50m、柱痕跡は0.17~0.20mである。建物の向きとほぼ一致し、柱筋が合う柱穴列SA6001~6003は庇となる可能性がある。周辺からは瓦は出土しておらず、板葺きもしくは草葺きの建物である可能性が高い。

SB6001の柱穴からは土師器皿・壺、黒色土器碗A・B類、瓦器碗などが出土した。13は土師器皿である。器壁はごく薄い。口縁部は「て」の字状を呈し、端部は水平よりも下方へ折れ曲がる。14・15は

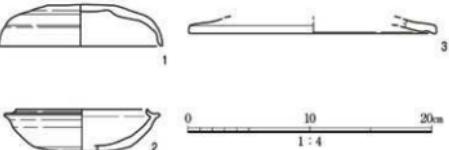


図6 第I期の遺構出土遺物実測図

第6~1層(1)、第7層(2・3)

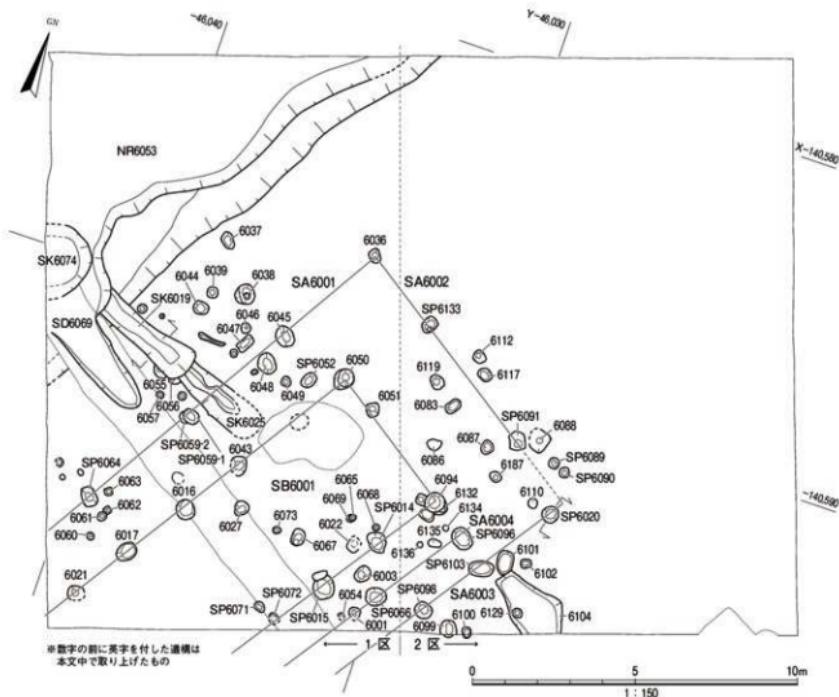


図7 第II期遺構平面図

土師器である。15は台付皿の台部であろう。13・14は10世紀後葉に属する。16は樟葉型瓦器碗の底部で、高台内には「×」の線刻を有する。11世紀後葉に属する。17は庇柱の可能性のあるSP6091から出土した和泉型瓦器碗で、外面のヘラミガキがやや粗い。12世紀初頭に属する。以上、SB6001に関連する出土遺物は、10世紀後葉に遡るものも含むが、おおむね11世紀後葉から12世紀前葉に位置付けられ、建物はその頃のものと考えられる。

SA6001: SB6001の西に位置する柱列である。4間以上で、柱間は3.7~4.0mである。方向は北から東に31度に振り、SB6001と若干ずれがあるが、SP6064・6059がSB6001の東西柱筋の延長に位置し、庇の可能性がある。

SA6002: SB6001の北に位置する柱列である。3間分あり、柱間は2.2~2.6mである。SB6001の梁行に平行し、庇となる可能性がある。

SA6003: SB6001の東2.4mに位置する柱列である。2間分以上、柱間は2.2~2.6mである。SB6001に平行し、SP6098・6103はSB6001の東西柱筋の延長に位置し、庇の可能性がある。このう

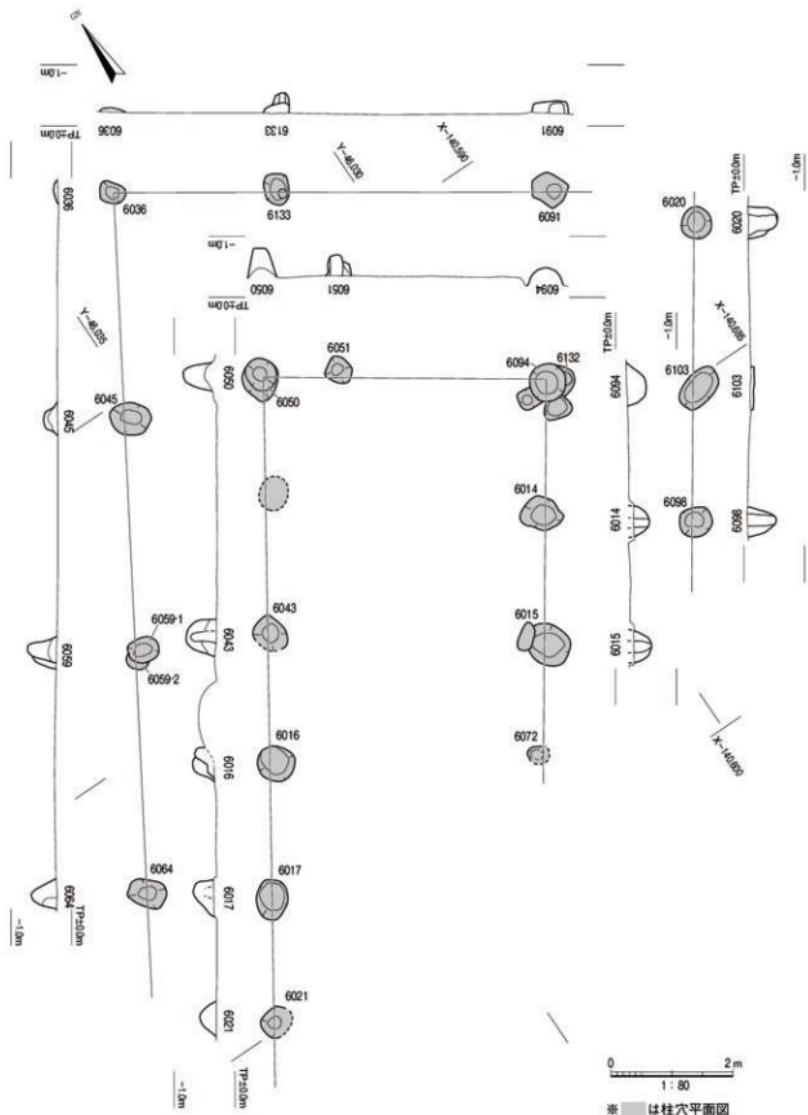


図8 SB6001・SA6001~6003平面・断面図

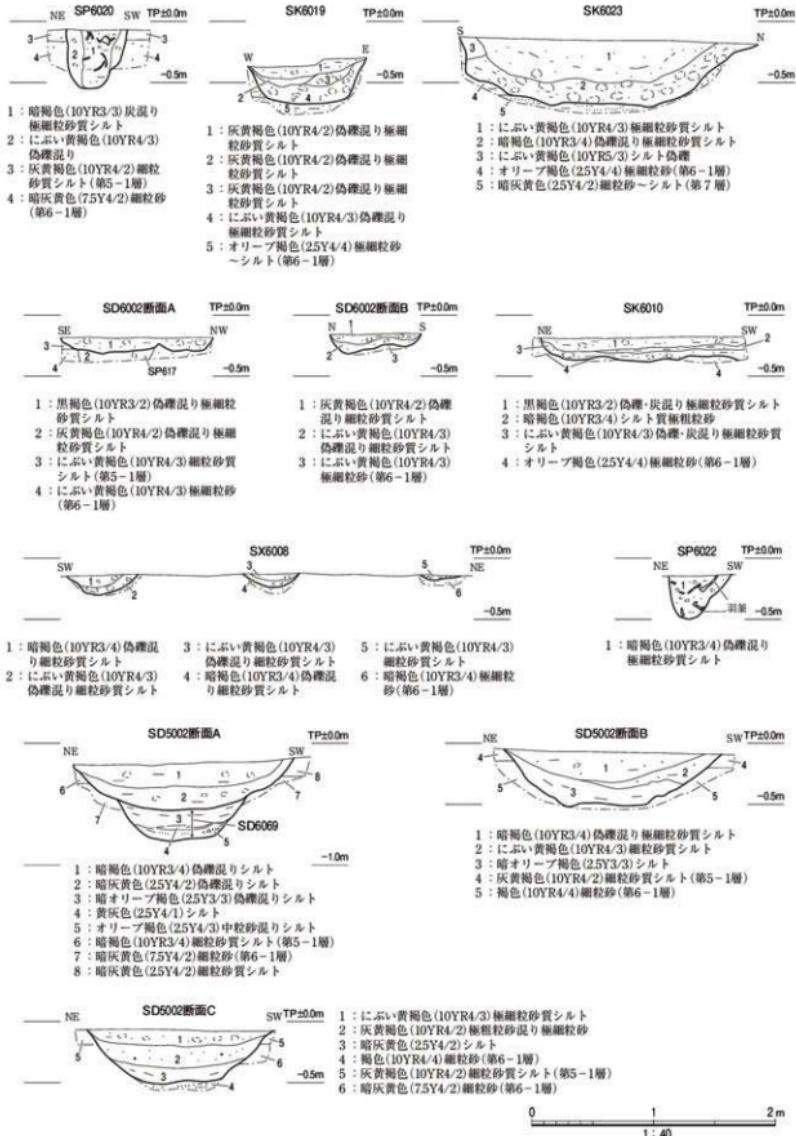


図9 第II～IV期造構断面図

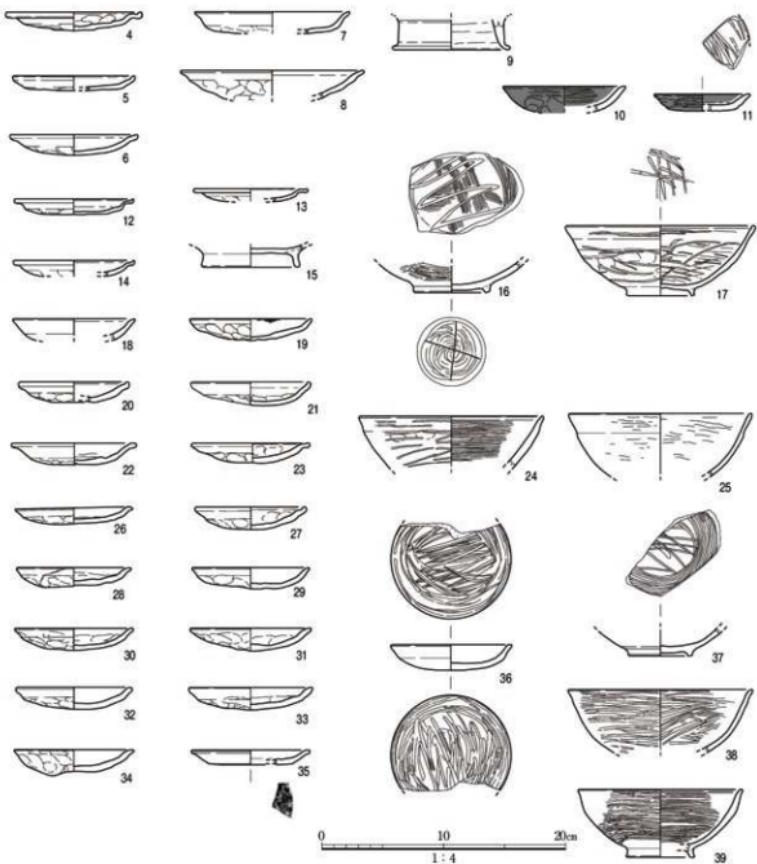


図10 第二期の遺構出土遺物実測図(1)

SP6052(4~11)、SA6004(SP6066:12)、SB6001(SP6072:13)、SP6014:14・15、SP6015:16)、SA6002(SP6091:17)、
SP6071(18・19)、SP6089(20~22・24)、SP6090(23・25)、SA6003(SP6020:26~39)、SK6019(71~73)

ちSP6020は一辺0.50m、深さ0.47mで、柱の抜き取り穴からは完形あるいは完形に近い土師器皿が約10個体、黒色土器B類の破片、瓦器椀などが出土した(図版5中)。土器が安置されておらず、破片を含むことから、「埋納」ではなく、廃棄の可能性が高い。おもな土器を図示した。26~35は土師器皿である。26・27が「て」の字に近く、他は軽くつまんで外反させる。35は底部外面を糸切りしており、他地域からの搬入品の可能性がある。36~39は瓦器である。36は皿、37~39は椀で、このうち37・39は樟葉型である。35の外面は二次的に被熱している。以上は11世紀後葉に属するものであろう。

SA6004 : SB6001の東1.2mに位置する柱列である。2間以上、柱間は3.2mである。SP6066は長辺0.58m、短辺0.56m、深さ0.56m。SP6096は長辺0.64m、短辺0.50m、深さ0.42mで、前者からは、土師器皿12が出土した。器壁はごく薄く、口縁部は「て」の字状を呈する。10世紀後葉に属するものであろう。

SP6052:SB6001の西で検出した長辺0.61m、短辺0.42m、深さ0.57m、柱痕跡0.13mの柱穴である。土師器、瓦器、黒色土器などが出土した。4~9は土師器である。4~7は皿で、口縁部は「て」の字状を呈するものや内傾するもの、外反するものがある。8は杯である。9は台付皿ないし椀の台部である。10~11は黒色土器B類の皿である。これらは10世紀末~11世紀初頭に属するものであろう。

SP6071 : SB6001の内側で検出した長辺0.30m、短辺0.22m、深さ0.35mの小穴である。土師器、東播系須恵器などが出土した。18~19は土師器皿で、18は口縁端部にわずかな面を持つ。19は口縁端部を軽く内側へ屈曲させ、内面に煤が付着する。

SP6090:SB6001の北東で検出した一辺0.31m、深さ0.11mの柱穴である。土師器、瓦器が出土した。23は「て」の字口縁部を持つ土師器皿である。25は和泉型の瓦器椀である。

NR6053:調査区の西で検出した北東から南西に流れる流路で、幅5.9m以上、深さ最大0.7mである。掘削排土は確認できないが、東岸がほぼ直線上に伸び、自然流路に加工した可能性がある。埋土からは土師器、黒色土器A類・B類、瓦器などが出土した。40~51は機能時の堆積層(第6~2層)から出土した。40は「て」の字状口縁の土師器皿である。41は土師器椀で、口縁部は直線的に広がる。42~44は黒色土器である。42はA類の椀、43はB類の椀、44はA類の鉢である。45~46は瓦器椀である。47は土師器甕の口縁部で、平安時代初頭に遡る可能性がある。48~51は土師器羽釜である。48~49は口縁部がやや長く内傾気味で、50~51は口縁端部が短いものである。52~70はNR6053廃絶後の堆積層(第5~2層)から出土した。52~64は土師器である。52~59は皿で、52~58は「て」の字状口縁でやや退化した形態である。60~61は口縁部外面にナデを施す椀である。62は台付皿の台部である。63は甕である。64は羽釜で、50~51よりも口縁端部が短く、丸みを持つ。65は黒色土器A類の椀である。66~68は樟葉型の瓦器椀で、67の高台内には線刻を有する。69は和泉型の瓦器椀である。70は軽石である。以上は黒色土器や土師器類に10世紀後葉~11世紀初頭のものを含んでいるが、瓦器椀は11世紀後葉~12世紀前半のものである。最も新しい46~69は12世紀後半に下るが、SK4001などからの混入品の可能性がある。したがって、NR6053はおよそ10世紀後葉~12世紀前半まで機能した流路と考えられる。

SD6069 : 調査区西壁近くで検出したNR6053に取り付く溝である。上部をSD5002に切られているが、現状では長さ3.00m、幅1.50m、深さ0.65mである。遺物は確認できなかった。

SK6019 : 長辺3.90m以上、短辺0.74m、深さ0.47mの細長い土壤で、NR6053に繋がる。偽礫を多く含む細粒砂質シルトで、埋め戻されていた。完形品の土師器皿71のほか、土師器羽釜・甕、瓦器椀、黒色土器椀B類が出土した。71~73は土師器皿である。71~72は「て」の字状口縁で、72はやや退化した形態である。以上は12世紀代に属するものであろう。

SK6025:長辺2.14m以上、短辺1.05m、深さ0.42mの細長い土壤で、SE6024、SK6019に切られる。偽礫を多く含む細粒砂質シルトで埋め戻されていた。土師器皿・羽釜・須恵器甕、瓦器椀が出土した。

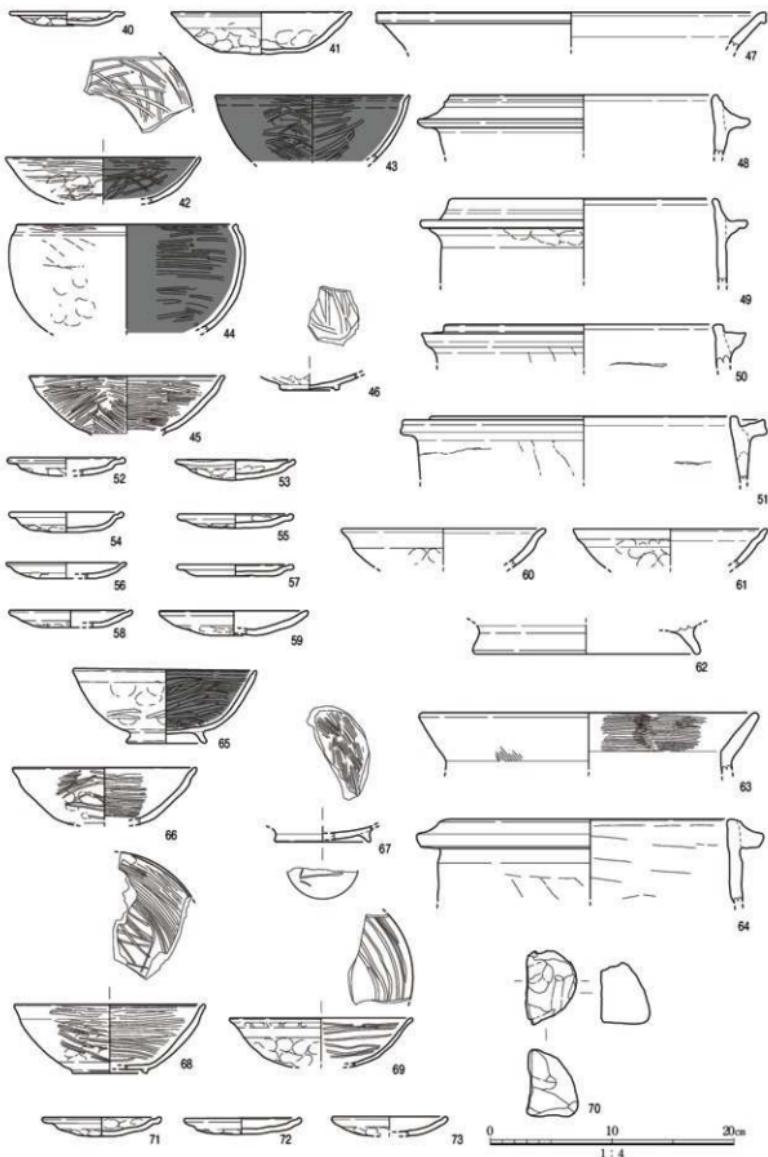


図11 第Ⅱ期の遺構出土遺物実測図(2)

NR6053(40~51)、NR6053上層(第5~2層: 52~70)、SK6019(71~73)

SK6074：調査区西壁近くで検出した水溜め状の土壤で、長辺1.85m以上、短辺1.50 m以上、深さは0.8mである。埋土は黒褐色中粒砂質シルトを主体とし、自然堆積である。遺物は確認できなかった。

第Ⅲ期：12世紀後半～13世紀初頭の遺構と遺物(図9・12～18)

第5-1層中、第6-1層上面で、掘立柱建物、井戸、溝、土塁、島状遺構を検出した。

SB6002：調査区中央北部で検出した、梁間2間(4.1m)、桁行5間(9.7m)以上の総柱掘立柱建物である。主軸は西から北に25度振る。SD6002に切られる梁行の柱間は1.8mと2.3m、桁行の柱間は1.4~2.3mで、2.1m前後が多い。柱の掘形は0.26~0.60m、柱痕跡は0.13~0.18mである。SP6114からは94~98、SP6034からは99~101、SP6075からは102、SP6022からは103~109が出土した。94・99は土師器皿である。98・105~107は土師器壺、108・109は土師器羽釜である。SK6010出土の85よりも錫が短く退化している。95は瓦器皿である。96・100~104は瓦器椀である。97は中国産白磁で玉縁状口縁の碗である。以上はおむね12世紀後半に属し、103は12世紀末に降る可能性がある。

SE6024：調査区中央西寄りで検出した井戸である(図16、図版3中：下)。掘形は長辺2.00m、短

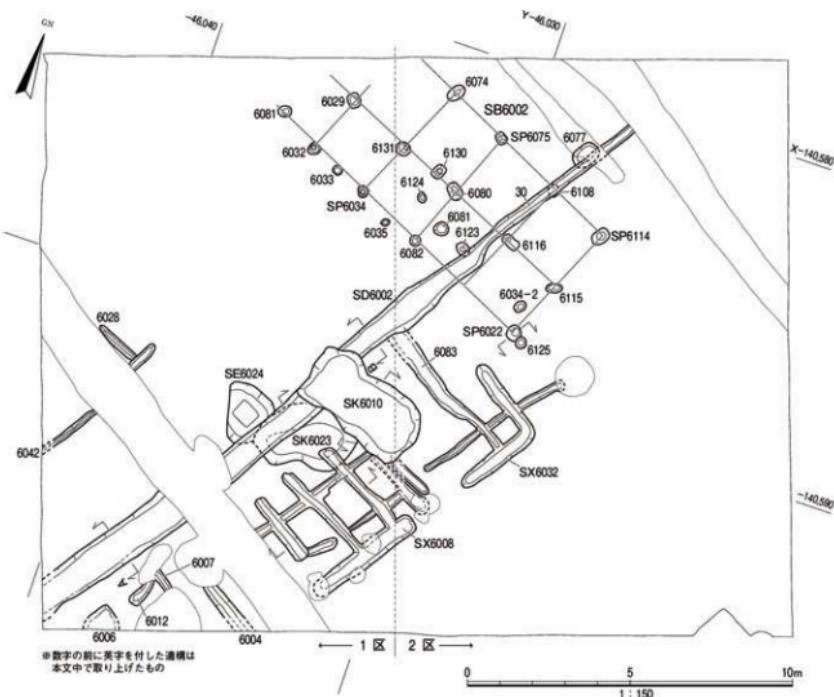


图12 第Ⅲ期遗骸平面图

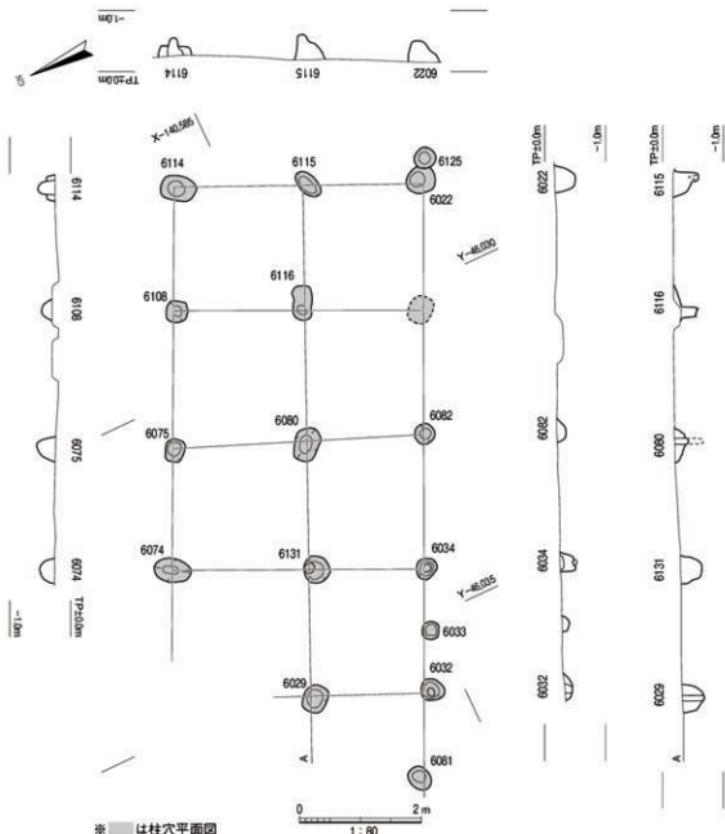


図13 SB6002平面・断面図

辺1.88m、深さ1.30mである。井戸側は平面がほぼ方形で、長辺0.52m、短辺0.48m、深さ0.94mである。長さ74~79cm、幅8.5~12.5cm（10cm前後が多い）、厚さ0.6~1.0cmの薄板6枚を縦板組にし、上端と中央の2箇所を角材の横桟で留めていた。隅材は確認できなかった。内部には曲物が4段分設置されて、検出時の総高は0.38mであった。110~113は井戸側に使用した曲物である。上から順に直径・高さは、それぞれ38cm・13cm、36cm・18cm、35cm・14cm、33cm・17cmである。110には、底板を留めていた穴があり、桶が転用されていることが明瞭である。114~116は井戸側に用いられていた部材で、114・115は横桟の角材、116は縦板組の材の一部である。117~124は井戸側内から出土した土器である。117・118は土師器皿で、いずれも口縁端部を軽く外反させる。119~121は瓦器皿で、内面には

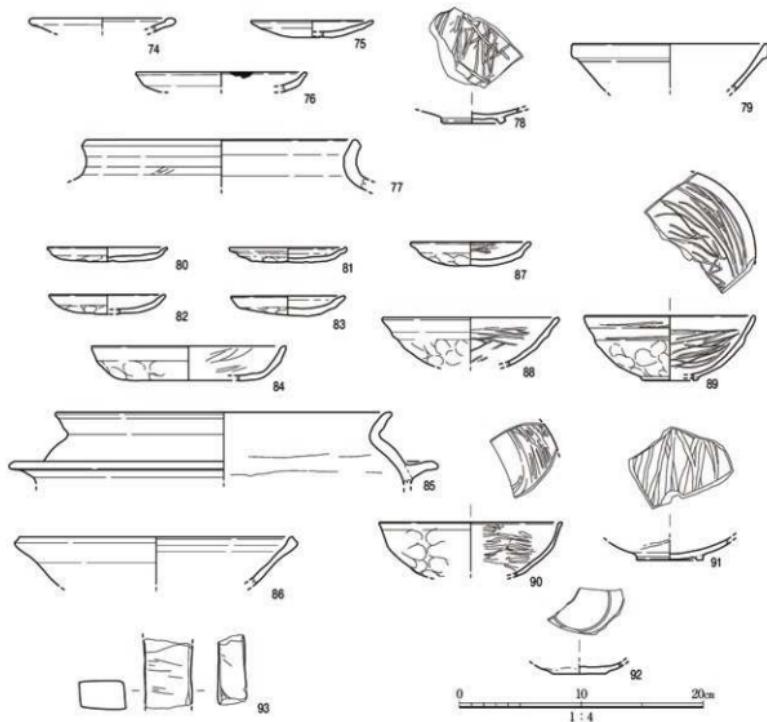


図14 Ⅲ期の遺構出土遺物実測図

SK6023(74~79)、SK6010(80~93)

ヘラミガキを施す。122~124は瓦器椀である。外面のヘラミガキは退化している。125は井戸埋没後の堆積層から出土した瓦器椀である。内面には平行線状ヘラミガキを施す。以上は12世紀後半に属し、そのうち125は12世紀後葉に下る。

SD6002: 第5~1層中で検出した調査区を斜めに横切る南北方向の溝で、幅0.3~1.1m、深さ0.10~0.18 mである。溝底の南北の比高は約0.10mで、北に向って下がっていた。埋土は偽礫を含む灰黄褐色細粒砂質シルトで、土師器皿・甕・羽釜、瓦器椀などが出土した。瓦器椀は和泉型Ⅲ期[尾上・森島・近江1995]に属するものである。SB6002の柱穴を切っており、13世紀前葉頃のものと考えられる。

SK6010: 調査区中央で検出した土壤で、長辺3.54m、短辺2.18m、深さ0.17mである。SD6002を切る。埋土は偽礫・炭を含む黒褐色(10YR3/2)細粒砂質シルトで、土師器皿80~84・羽釜85、瓦器椀88~92・甕87、須恵器捏ね鉢86などが出土した。

SK6023: 長辺2.75m、短辺2.22m、深さ0.58mの土壤で、SD6002に切られる。埋土は大きく2層

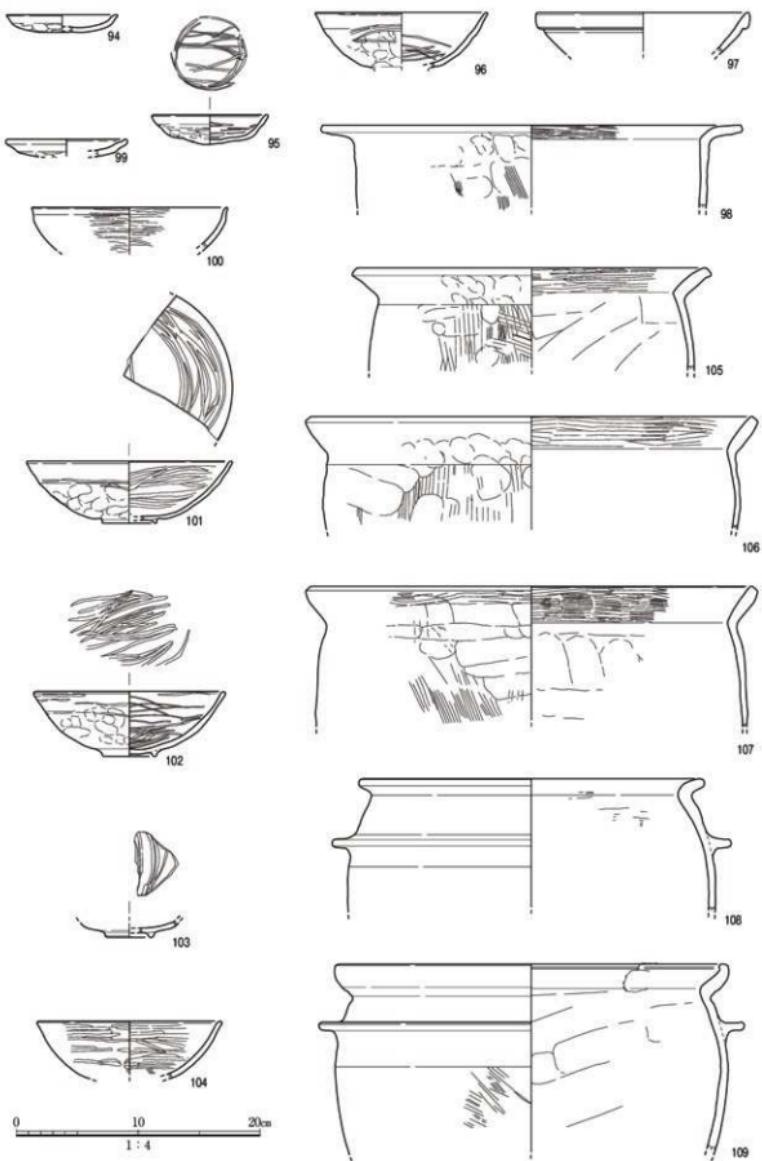


图15 第Ⅲ期SB6002柱穴出土遗物实测图

SP6114(94~98)、SP6034(99~101)、SP6075(102)、SP6022(103~109)

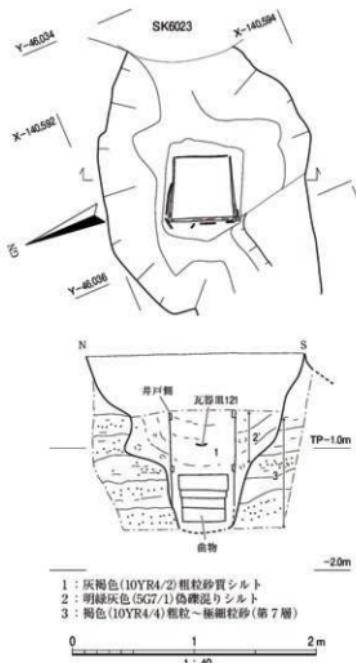


図16 SE 6024平面・断面図

以上、幅1.5m前後、深さ0.3~0.4mである。溝底のレベルはTP-0.5m前後とほぼ一定している。埋土は2ないし3層に分かれ、下層は暗オリーブ褐色細粒砂質シルトで、上層は偽縫を含む細粒砂質シルトによる埋戻しである。掘り上げ後、西部で同じ方向のSD6069が検出された。常時、水が流れている痕跡は確認できず、排水を主目的とした溝と考えられる。土師器、瓦器、瓦質土器、瓦など多様な遺物が出土した。136は土師器皿である。口縁部は外反し、外面にはユビオサエ痕跡が残る。137は中国産白磁の皿で、口縁部は端反である。高台内には「上」の墨書を有する。138は瓦質土器擂鉢の底部で、内面には摺目が見られる。139は備前焼の擂鉢である。140は用途不明の土製品である。141は丸瓦、142は平瓦である。これらは16世紀中葉以前に属するものであろう。なお、瓦は前段階までの遺構では出土しておらず、当期からの瓦葺建物の存在を示唆している。

SK5003: 凹み状の浅い土壙で、長辺2.30m、短辺1.90m、深さ0.01~0.05mである。135が出土した。中国産白磁の皿で、口縁部は輪花となる。底部内面は釉剥ぎする。16世紀代に属するものであろう。

SK5005: 長辺2.00m以上、短辺1.00m、深さ0.22mの土壙で、埋土は偽縫を多く含む暗褐色細粒砂質で、埋め戻されていた。土師器皿・鍋、須恵器捏ね鉢、瓦器碗が出土した。

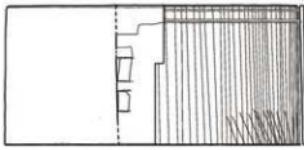
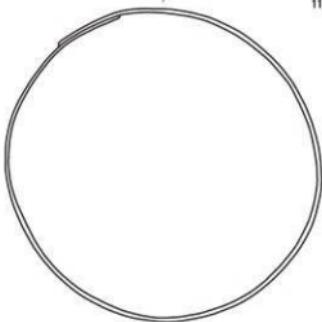
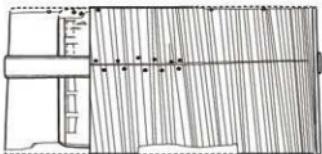
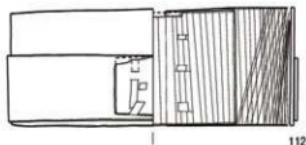
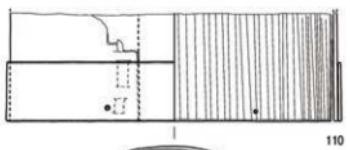
に分かれ、上層はにぶい黄褐色細粒砂質シルトの自然堆積、下層は偽縫を多く含む暗褐色細粒砂質シルトであった。土師器皿74~76、黒色土器碗B類、瓦器碗78、白磁碗79、瓦質土器壺77などが出土した。水溜遺構と考えられる。

SX6008 : SD6002の東側の第5~1層中で検出された、東西・南北の複数の溝が直交する遺構で、同様のSX6032を合わせると南北約12m、東西約4mの範囲に及ぶ。溝には切合いは確認できず、畠の可能性がある。溝の大きさは、幅0.25~0.50m、深さは0.1m前後である。埋土からは土師器皿、瓦器碗、白磁碗のほか、瓦質土器羽釜の小片が出土した。126~130は土師器である。126~129は口縁部が内湾する皿である。130は壺である。131~134は瓦器碗である。このうち133は口径が縮小していることとヘラミガキが退化していることから13世紀前半に下る可能性があり、他は12世紀後半に属するものであろう。

第IV期：16世紀以降の遺構と遺物(図9・19・20)

調査区南西部を中心に第5層上面で、溝、土壙、第4層上面でSK4001、下面で鋤溝を検出した。

SD5002 : 北西-南東方向の溝で、長さ13.6m



0 30cm
1:6

图17 SE6024出土遗物实测图

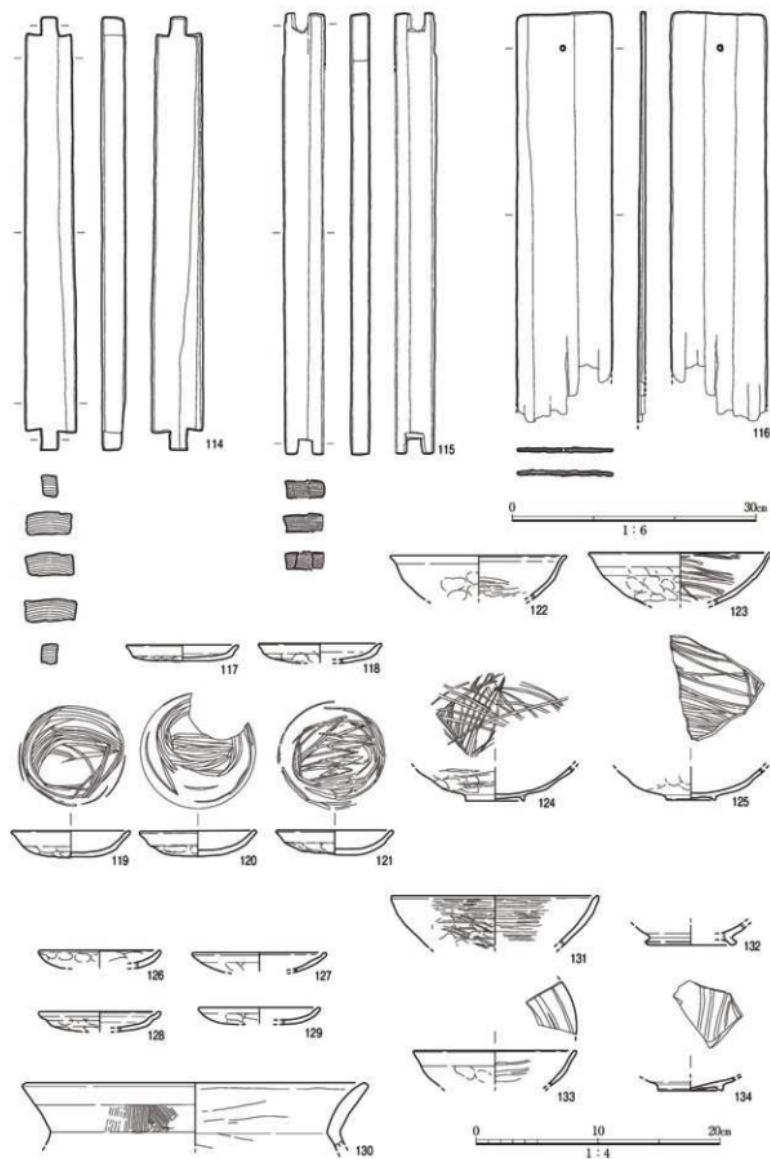


図18 SE6024・SX6032出土遺物実測図
SE6024(111~125)、SX6032(126~134)

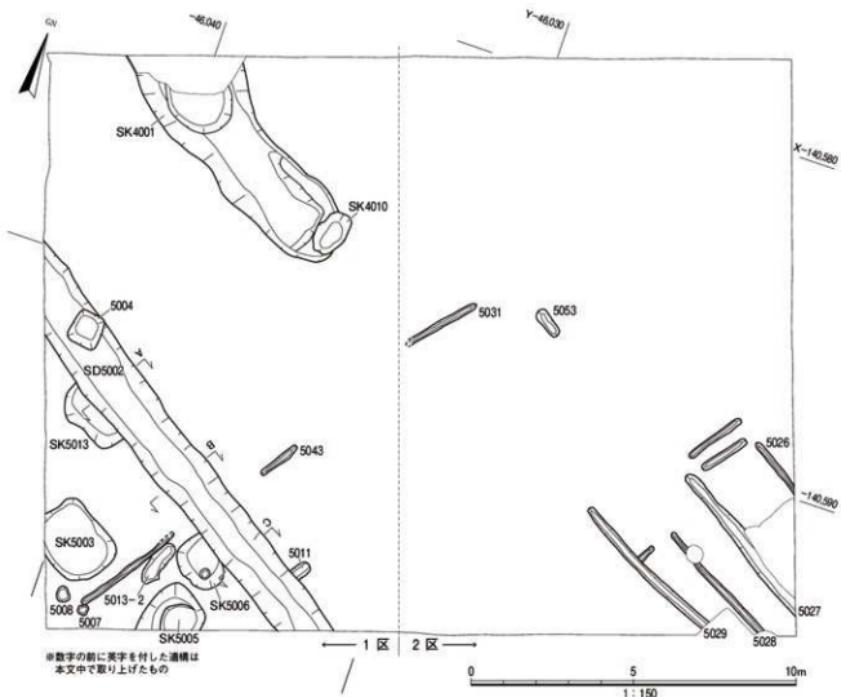


図19 第IV期遺構平面図

SK5006：長辺1.70m以上、短辺1.24m、深さ0.36mの土壙で、SD5002に切られる。埋土はにぶい黄褐色細粒砂質シルトで、土師器皿、瓦質土器擂鉢・羽釜などが出土した。

SK5013：長辺2.26m、短辺0.90m以上、深さ0.20mの土壙で、SD5002に切られる。埋土はにぶい黄褐色細粒砂質シルトで、土師器片が出土した。

SK4001：1区北部の第4層上面で検出した大型の土壙で、長辺4.65m以上、短辺2.90m、深さは0.80前後であるが、北西部は一段丸く掘り窪められ1.30mとなる。埋土は大きく2層に分かれ、上層は偽礫を含む暗褐色細粒砂質シルトを主体とし、埋め戻されている。下層は中粒砂混りオリーブ黒色シルトである。出土遺物はいずれも細片であるが、中世以前の土師器、瓦器、青磁、白磁、瓦などが出土した。明確に遺構の時期を決められるものはないが、検出層位から幅広く16世紀以降の水溜遺構と捉えておく。

SK4010：SK4001を切る土壙で、長辺1.35m、短辺0.90m、深さ0.54mである。埋土は偽礫を多く含む暗褐色細粒砂質シルトで、土師器、須恵器、瓦器椀、中国産青花碗、白磁皿、平瓦が出土した。

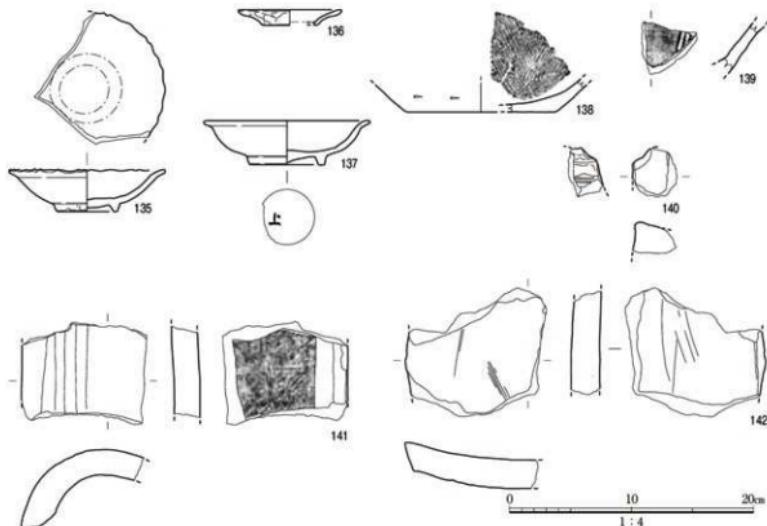


図20 第Ⅳ期の遺構出土遺物実測図

SK5003(135)、SD5002(136~142)

3)まとめ

今回の調査では、平安時代中期から室町時代の集落が発見され、そのおよその変遷が明らかになった。その要点は次のとおりである。

第Ⅰ期は第7層(氾濫性堆積層)の段階で、概ね北東から南西に流れる古流路の存在が明らかになった。流路は8世紀末～9世紀初頭以降に埋没した。調査地の古代末の遺構面の高さは、周辺調査地の相当面より、0.5～0.8m高く、流路は埋没の際、自然堤防を形成したものと考えられる。

第Ⅱ期の初め、さきの自然堤防上に集落が営まれた。遺構ではあまり明確ではないものの、「て」の字状口縁の土師器皿や黒色土器椀の存在から10世紀後葉に遡る。集落の姿は、SB6001が築造された11世紀後葉頃に明確となる。SB6001は桁行11.8m以上、梁行4.4mの大型建物で、3面以上の庇を備えた可能性がある。建物は12世紀前半まで継続したものと考えられる。この時期、調査区西側には流路があり、取排水にはSD6069、SK6074が利用された。SB6001周辺に遺構が集中し、北側に見られないことから、この時期の集落はSB6001から南側に広がっているものと想定できる。

第Ⅲ期では、調査区の北側に総柱建物SB6002、中央に井戸SE6024が作られた。SX6008・6032は畠の可能性があるが、SD6002がこれらに伴う溝であれば、これらの遺構はSB6002、SE6024よりも後出するものとなる。これらの時期は12世紀後半から13世紀初頭と考えられる。

第Ⅳ期は、出土遺物から16世紀を中心とする時期と考えられる。第Ⅲ期からおよそ3世紀離れているが、実際この時期の遺物はほとんどなく、前集落とは断絶している。SD5002の北側は掘溝と若干

の溝のみで耕地として利用された。遺構はSD5002の南側に広がっており、SD5002は集落を画する溝である可能性が高い。

引用・参考文献

- 大阪市教育委員会・大阪文化財研究所2019a、「宮原3丁目所在遺跡発掘調査(MH17-1)報告書」:「大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書(2017)第2分冊」、pp.141-152
- 2019b、「西中島7丁目所在遺跡発掘調査(WN17-1)報告書」:「大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書(2017)第2分冊」、pp.153-158
- 2021、「宮原4丁目所在遺跡発掘調査(MH19-1)報告書」:「大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書(2019)」、pp.301-312
- 大阪文化財研究所2010、「宮原遺跡発掘調査報告」、pp.1-51
- 尾上実・森島康雄・近江俊秀1995、「6. 瓦器椀」:『概説 中世の土器・陶磁器』中世土器研究会編、pp.315-337

1区西壁北部
地層断面
(南東から)



1区南壁地層断面
(北東から)



2区サブトレンチ
(南から)



1区検出遺構全景
(南から)



1区検出遺構
(南東から)



1区NR6053
(西から)



1区SB6001
(北から)



1区SE6024
(北から)



1区SE6024断ち割り
(西から)



1区SD5002
(南東から)



1区SK5003
(南西から)



1区SK4001
(南西から)



2区検出遺構全景
(南西から)



2区SP6020
遺物出土状況
(北西から)



2区SP6022
遺物出土状況
(北西から)



東淀川区西淡路三丁目380-1他8筆における建設工事に伴う
西淡路1丁目所在遺跡E地点発掘調査(WA21-1)報告書

調査個所 大阪市東淀川区西淡路3丁目380-1他8筆
調査面積 576m²
調査期間 令和3年8月10日～10月18日
調査主体 一般財団法人 大阪市文化財協会
調査担当者 調査課長 高橋工、
趙哲済、藤原啓史、平山裕之、南秀雄

1) 調査に至る経緯と経過

大阪市東淀川区西淡路3丁目にある本調査地は、西淡路1丁目所在遺跡の東方にあり、同遺跡E地点と呼称される。本調査の事前の試掘調査で新たに発見された遺跡である。調査地一帯は淀川デルタの主流路～中央分流路である淀川～中津川と、北辺を流れる神崎川にはさまれたデルタ低地にあり、神崎川からは約500m南に位置する(図1)。昭和後半まで本調査地の南東側にそって中島大水道があつた。この水路は当該地の滞水を排水するために1678(延宝6)年に開削された排水路である。洪水や大雨で堤内地に溜まつた水は、自然の状態であれば時間とともに排水されたが、堤防が整備されると滞水となって水田から排水できず、稲作に被害を及ぼしたという。この水路は既存の水路を一部連結して、現東淀川区菅原2丁目付近から同西淀川区伝法付近まで連なつていて。現在は埋め立てられてJR東海道新幹線の高架になつている。

本調査地から西南西へ0.5～3kmの西淡路1丁目～崇禪寺・宮原一帯は天満砂州の先端部に当り[国土地理院1983]、砂州上とその周辺にいくつかの原始・古代の遺跡が知られている。その中で、本調査地に近い西淡路1丁目所在遺跡では、これまで数件の調査が行われていた(図1)。WA18-1・20-1次調査地には弥生時代末～古墳時代初頭の集落跡と同時期の(あるいは集落地を削除した)河川が分布した。河川は植物片薄層を複数介在して北東から南西に流れおり、淀川の氾濫流路とみられる。埋積後、奈良時代中葉までに小規模な流路が形成され、その流路も埋没したのち、奈良時代中葉～平安時代に再び集落が經營された[大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2020・2022]。WA18-1・20-1調査地の南西にあるWA06-1次調査地では、上述の淀川の分流路が南西に流下し、奈良時代以降に離水して後、中世にかけて耕地として利用された。JR東海道本線に面するWA08-1・10-1・



図1 調査位置図



図2 調査区配置図

12-1 次調査地の中世以前は沼地や河道であり、14世紀中頃以降に耕地として利用された[大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2008、大阪市文化財協会2010、大阪文化財研究所2012・2014]。JR東海道新幹線沿いのWA07-1次調査地では戸戸や櫛などの古代(平安時代初期以降)から中世の集落やその近隣地であった。また、時期未詳の基礎砂礫層には無数の巣穴化石が観察され、海浜成層と考えられている。

西淡路1丁目所在遺跡の南側にあり、天満砂州東列の崇禪寺浜堤に位置する崇禪寺遺跡は、鉄製素環頭大刀が出土した弥生時代末～古墳時代初頭の集落遺跡である。また、西淡路1丁目所在遺跡の西にあり宮原浜堤に位置する宮原遺跡は、古代以降の遺跡である。

一方、調査地の北東150mには、縄文・弥生時代の遺物散布地である淡路遺跡([前田豊邦2004]では淡路新町遺跡と呼称)がある。ここでは1963年に東淀川区西淡路5丁目で東海道新幹線の敷線に伴う中島大水道の付け替え工事が行われた際、縄文時代晩期の船橋式土器の口縁部の破片や弥生土器、貝殻などが採集されたという[前田1988・2004]。

2021年5月11日、本調査地で計画された建設工事に先立って大阪市教育委員会が試掘調査を行ったところ、地表下約0.7mの深さで近世以前の遺構面および遺物包含層が検出された。そこで本格的な調査を実施することになり、同年8月10日に調査を開始した。

調査区は建設施工者により先行して攪乱土層の重機掘削が行われ、55cm下がった状態で調査主体に引渡された。調査区は事前に東西9m×南北66mの範囲が設定されていたが、調査区の南に接して沈殿槽の建設が調査と並行して行われたため、安全確保のため調査範囲のうち南限約3mをトレーンチ調査のみとした。また、北側は工事車両の通路確保のため、北東角を約4m控えることとした。

調査は残りの攪乱土層を重機掘削した後、後述する第3層上面での遺構検出から人力で作業を行った。層位掘りと遺構検出、遺構の掘下げと写真撮影、平面図・断面図の作成、遺物の取上げ等を順次行った。調査深度が深くなった地表下2.5m以下は部分的に掘り下げ、下位層の分布を確認し、分析試料を採取して、10月15日に実働42日間の調査を終了し、同月18日に撤収した。

本報告で用いた方位は、現場で記録した街区図を1/2,500大阪市デジタル地図に合成することによって得た世界測地系座標に基づき、座標北を基準にした。標高はT.P.値(東京湾平均海面値)を用いてTP±○mと表記した。

2) 調査の結果

i) 層序

調査区はJR東海道新幹線に並行して、ほぼ北東-南西方向に細長い範囲である。表記を簡便にするため、本文での調査区外周壁面の位置説明は、長軸の北東側を北、南西側を南、短軸の南東側を東、北西側を西と呼ぶことにする。また、調査区を10m単位で地区割りを行い、南から北へ1区～7区に区分した(図2)。現地表はTP+1.0～1.3mの小さな起伏のある平坦な盛土地である。調査地の地層は、レンガやコンクリートブロックなどを含む現代の攪乱・整地層(第0層)の下位を7層に区分した(図3)。なお、地層の層厚は微妙に変化するため、表記の煩雑さを避けるため、詳細な値が必要でない

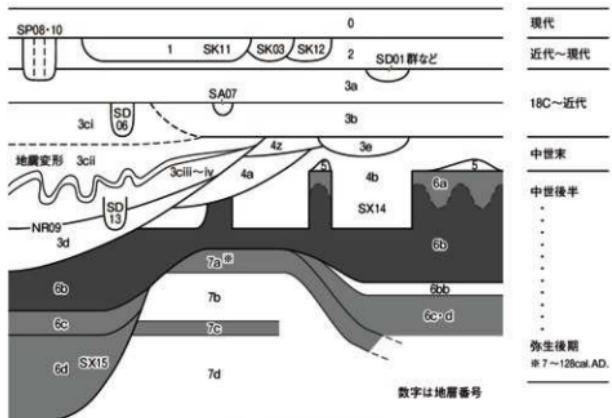


図3 地層と造構の関係図

場合は、各層が分布する要所要所での平均的な層厚を5cm刻みの概数で表記する。なお、3区に大きな搅乱があり、第3層以上は搅乱を挟んで対比できていないところがある(図3~9、表1)。

第1層は第0層基底の浅い凹みを埋めた整地客土層であり、現代の搅乱を免れて西壁と東壁に部分的に残存した。第1a・1b層に区分できる。第1a層は主として第3層に由来するにぶい黄褐色(10YR4/3)~黄褐色(2.5Y5/3)の細粒砂質シルト~シルト質中粒~細粒砂の客土からなり、層厚は10~20cmである。遺物は出土していない。第1b層は、黄褐色(2.5Y5/4)~オリーブ褐色(2.5Y4/4)細~中疊・炭混りの中粒~細粒砂質シルトの客土からなり、層厚は20cmである。本層からは近代~現代の磁器が出土した。

第2層は客土層および作土層である。客土層は1~3区の大搅乱壙まで分布する、オリーブ褐色(2.5Y4/3)シルト偽疊混りシルト質中粒~細粒砂からなり、層厚は10~20cmである。作土層は大搅乱壙以北の3~7区に分布する、黄褐色(2.5Y5/3)~オリーブ褐色(2.5Y4/3)細疊・中疊混り中粒~細粒砂質シルト主体であり、層厚は10~15cmである。大搅乱壙で分断されたため客土層と作土層の層序関係は不明である。調査では本層までを重機掘削し、SK03・SP08・SP10・SK11などを検出した。これらは第2層下面および第2層内・第2層上面の造構である。

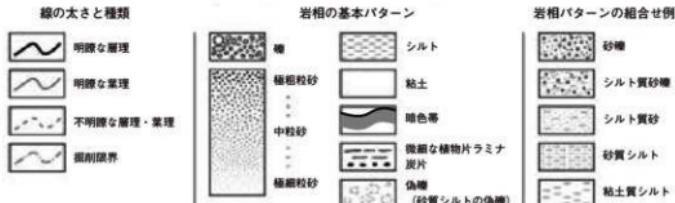
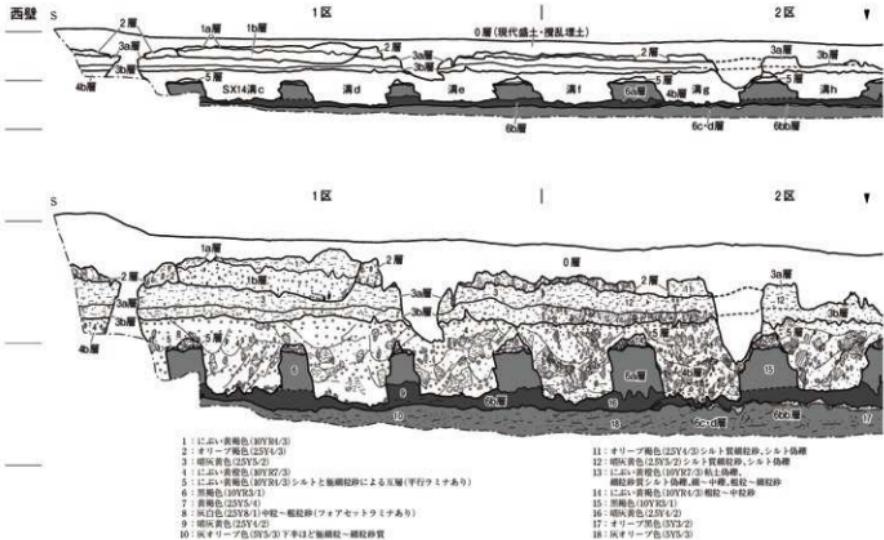
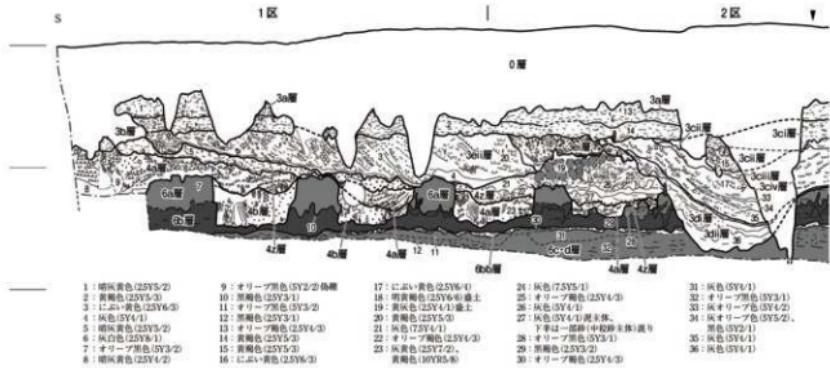
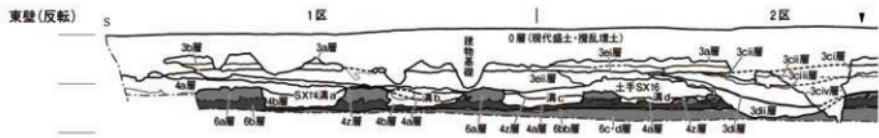
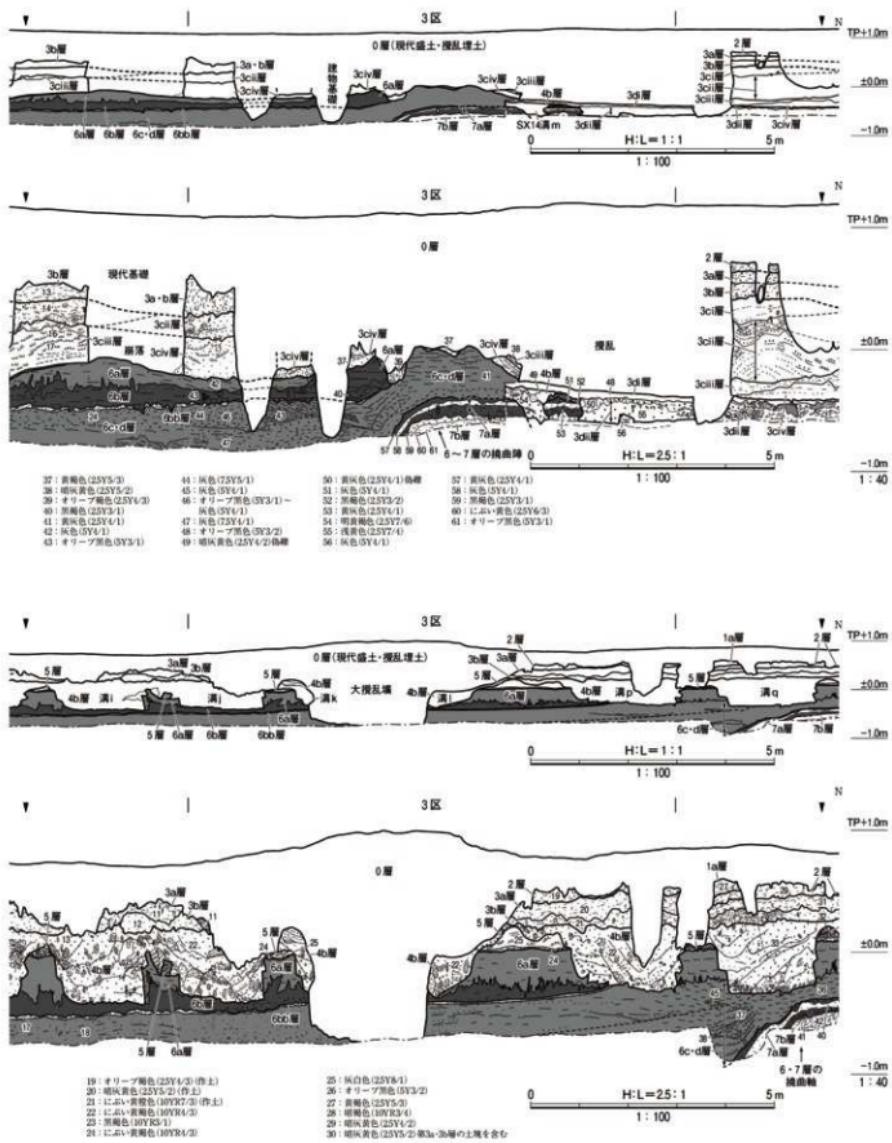
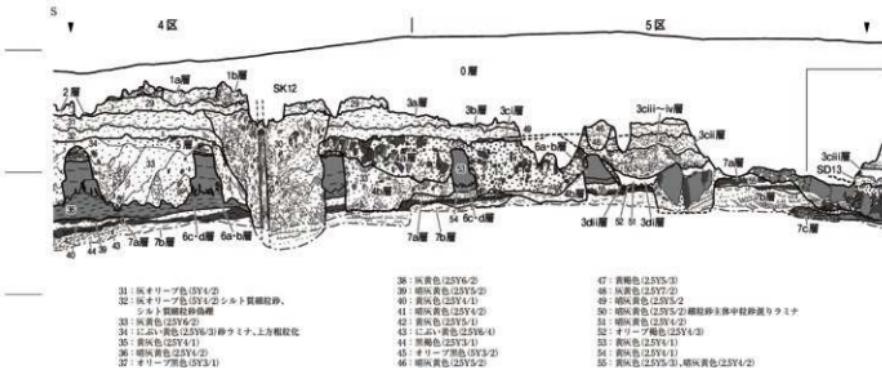
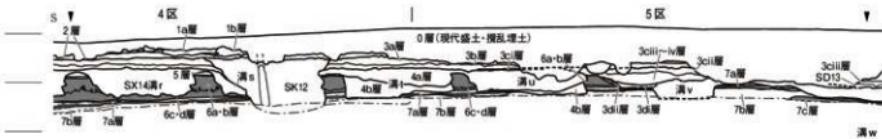
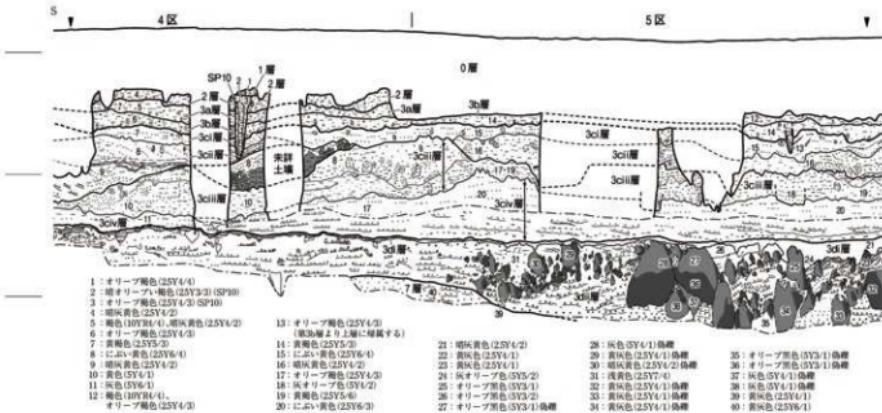
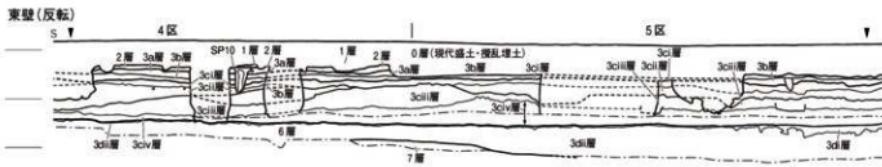


図4 地層・造構断面図(図5~9・13)の岩相凡例







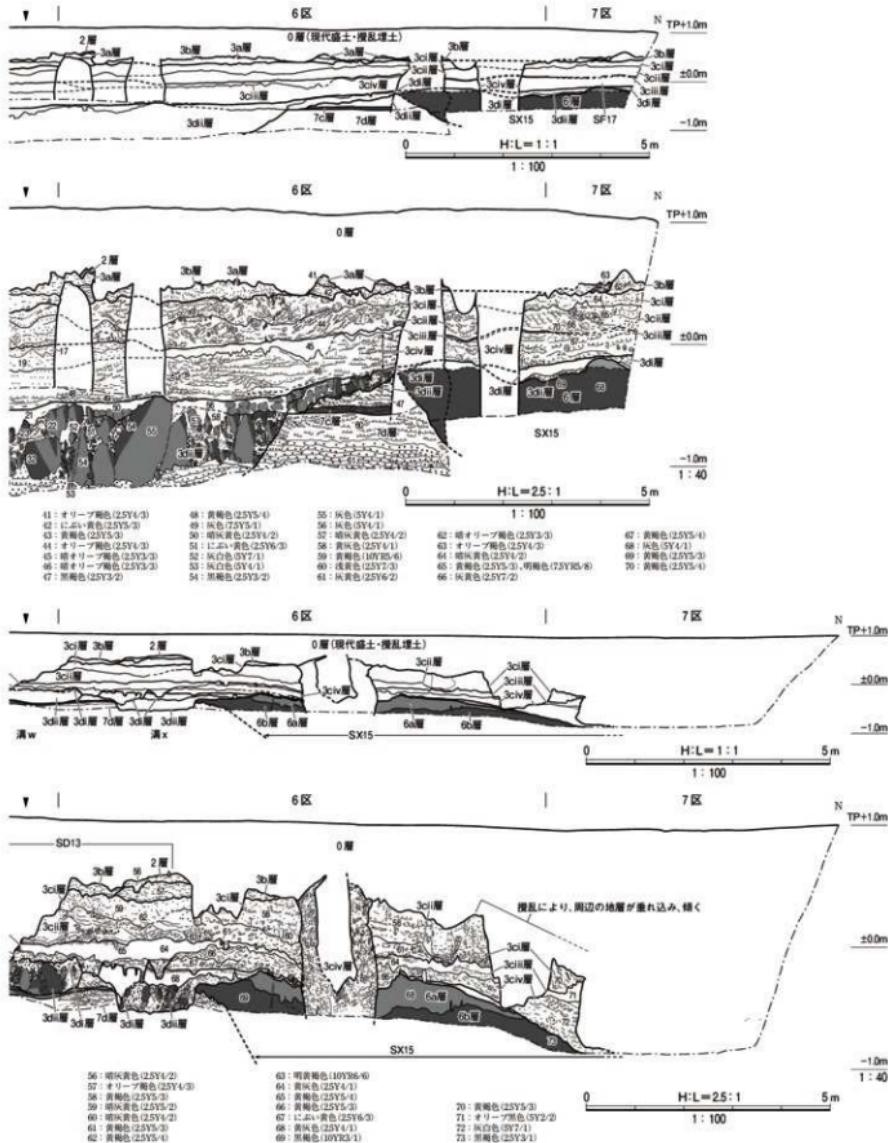


図6 地層断面図(調査区東・西壁の北部)

各壁面の縱横比は上段が $1:1$ 、下段が $2.5:1$

第3層は第3a・3b・3c・3d・3e層に区分した。第3a・b層は作土層で、第3c・d層は氾濫流路NR09の堆積層である。

作土層の第3a層は褐色(10YR4/4)～暗灰黄色(2.5Y4/2)の泥偽礫・細礫混り細粒砂質シルト～シルト質中粒～細粒砂からなり、層厚は10～20cmである。下位層に由来する泥偽礫を多く含む耕起期間の短い作土層である。本層上面では1区でSD01群・SK02、4・5区でSD04・SK05などの耕作痕跡や、深いSK12を検出した。2・3・6・7区は攪乱により平面での遺構検出はできなかった。

同じく第3b層は暗灰黄～黃褐色(2.5Y5/2～3)やにぶい黄橙色(10YR7/3)を呈するシルト質中粒～細粒砂からなる。下位の第3ci層を耕起した作土であり、後述するNR09の周縁部から外側に分布する。層厚は10～20cmである。本層上面ではピット列のSA07を検出した。本層からは、18世紀中頃以降の磁器が出土した。

氾濫流路NR09の堆積層である第3c層は、岩相が類似した上部と下部の2セットに区分できる。上部のセットは黃褐色(2.5Y5/3)で比較的薄いシルト・砂細互層(第3ci層)と、暗灰黄～黃褐色(2.5Y5/2～5/3)で厚い粘土偽礫混り極粗粒砂～細粒砂細互層(第3cii層)からなる。セットの最大層厚は45cm前後ある。第3cii層に含まれる粘土偽礫の最大は中疊サイズである。下部のセットはオリーブ褐色(2.5Y4/3)の薄い細粒砂～粘土細互層(第3ciii層)と、下半部にラミナにそって植物片を多量に含み灰(5Y5/1)～にぶい黄橙色(10YR7/4)中粒～細粒砂の細互層(第3civ層)からなる。セットの最大層厚は55cm前後あり、第3civ層の方が比較的厚い。第3ci層上面には溝SD06が、第3civ層上面には溝SD13が掘られていた。

第3d層も上記と同様の泥層と砂礫層のセットである。上部の第3di層はオリーブ黒色(5Y3/2)で薄い粘土層と、下部の第3dii層はにぶい黄橙色(10YR7/4)で厚い粗粒砂主体の砂層であり、主として第6層に由来する巨疊サイズの偽礫が多量に含まれる。セットの最大層厚は60cm以上である。

第3c～d層の古流向は、NR09の東から調査区に入り、蛇行後は概ね北から南へ流れ。また、第3c層中には顕著な変形・変位が認められる。これらの氾濫堆積層には、多時期の遺物が少量含まれるが、最新のものは第3dii層から出土した瓦器碗の破片である。また、第3civ～ii層中には顕著な変形・変位構造が認められる(詳細は後述)。

第3e層は土手らしい盛土層(第3ei層)とNR09に先行する氾濫流路の堆積層(第3eii層)が構成する。1区南東部の狭い範囲に分布する。上部の第3ei層は明黃褐色(2.5Y6/6)の泥偽礫を多量に含む極粗粒～粗粒砂主体の盛土層である。層厚は最大20cmである。下部の第3eii層は灰色(5Y4/1)粘土薄層～にぶい黄色(2.5Y6/3)礫混りやシルト質粗粒～中粒砂層である。最大層厚は30cmで、ラミナの見かけのフォーセットは北東傾斜である。

第4層は第3e層と第5・6層とに挟まれる地層であり、第4z・a・b層に区分した。

上部の第4z層は整地客土層およびNR09の土手盛土層である。ともにNR09西岸に断続的に分布する。黄灰～灰色(2.5～5Y4/1)の泥偽礫とシルト偽礫混り極粗粒～粗粒砂の盛土・整地客土層で、層厚は盛土層で40cm前後残存し、整地層で10cm前後である。

中部の第4a層は1区の南東部に分布する氾濫堆積層である。灰白色(2.5Y8/1)極粗粒～中粒砂から

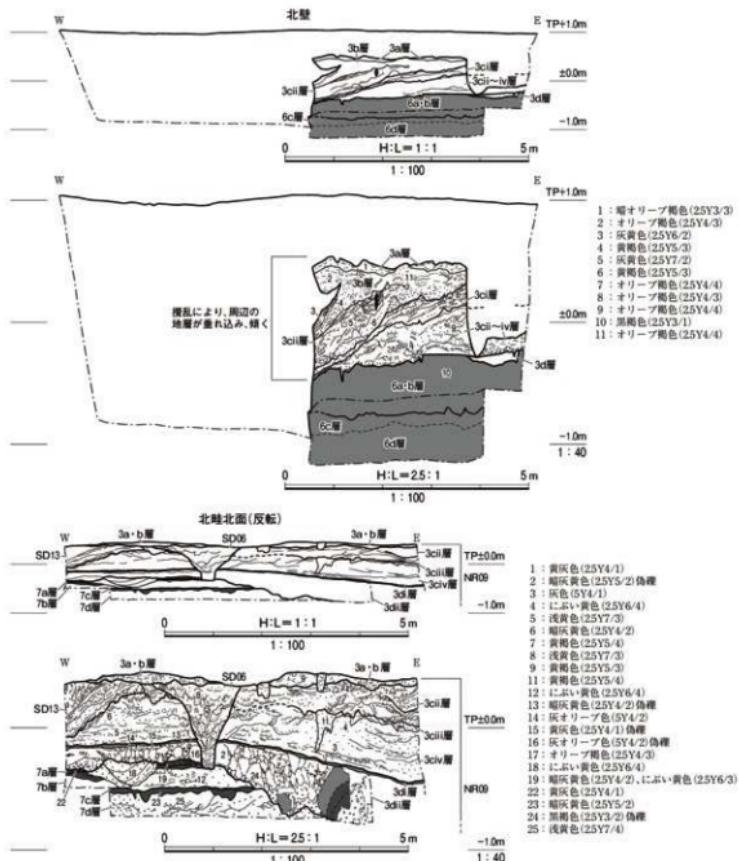


図7 地層断面図(調査区北壁・北壁)

各壁面の縦横比は上段が1:1、下段が2.5:1

なり、下部に泥偽礫を含む。最大層厚は30cmであり、一部はSX14の溝群埋土を浸食した後に埋めている。斜交葉理から推定される古流向は北から南へである。

下部の第4b層はSX14の溝群の埋立て客土層である。にじみ黄褐色(10YR7/3)～灰黄色(2.5Y6/2)粘土偽礫混りシルト質粗粒～細粒砂からなる。厚さは溝の深さを越えて最大65cmである。偽礫粘土は第6層に由来する。偽礫の並びから埋め方のわかる溝の多くは、北からの客土が優勢だが、多くの溝には南からも客土されている。

第5層は削剥され残った氾濫砂層である。下部はにじみ黄褐色(10YR7/3)～にじみ黄褐色(10YR4/3)細粒～極細粒砂とシルトの上方粗粒化する砂泥互層となり、層厚は3～5cm、上部は

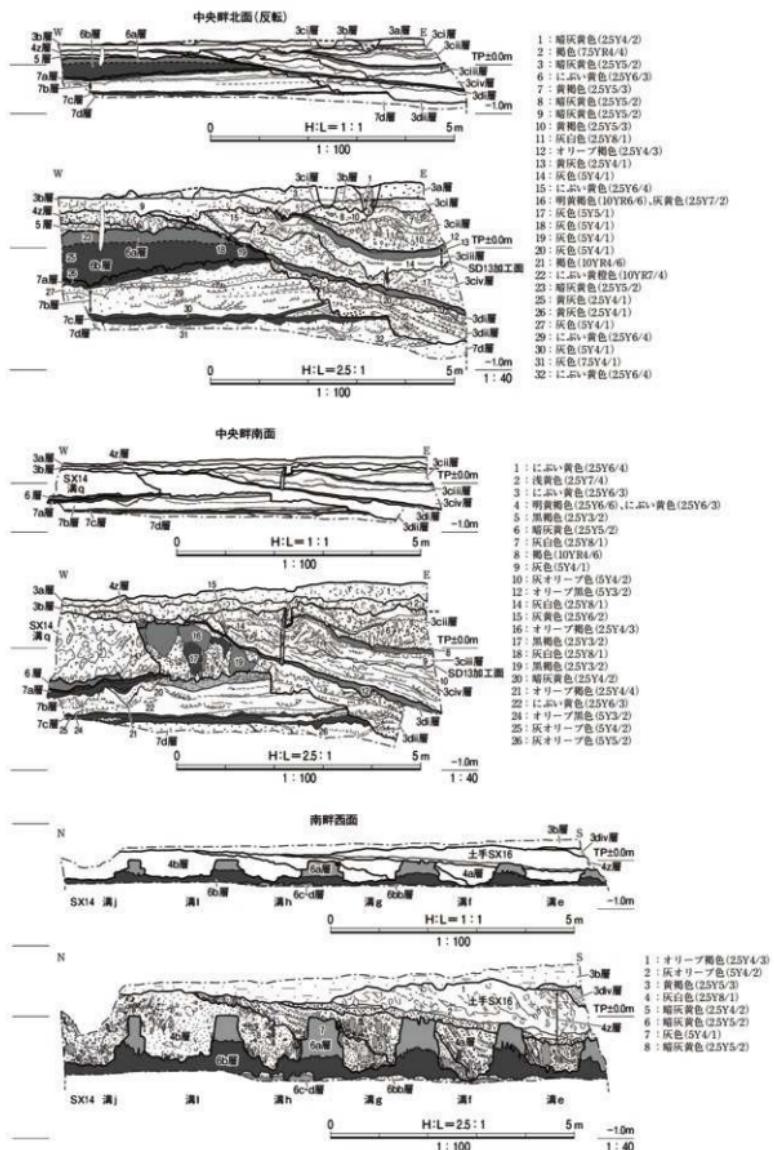


図 8 地層断面図(中央群・南唯)

各壁面の縦横比は上段が1:1、下段が2.5:1

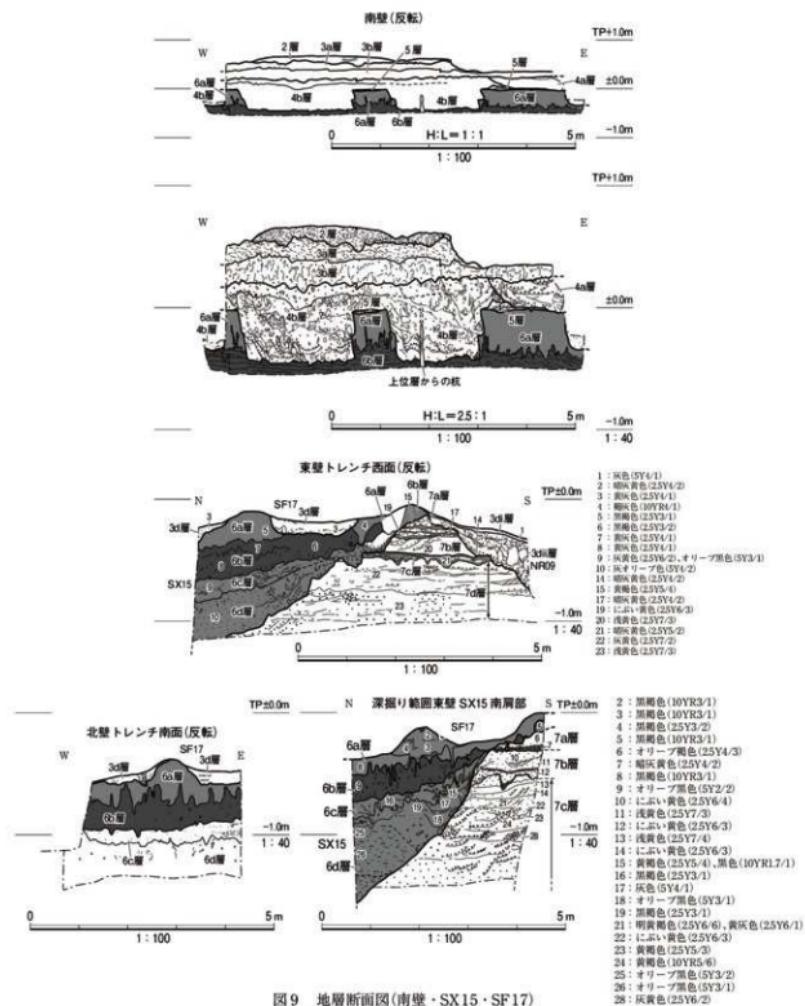


図9 地層断面図(南壁・SX15・SF17)

横幅比は南壁の上段が1:1、下段が2.5:1、SX15・SF17が2.5:1

フォーセットラミナが顕著な灰白色(2.5Y8/1)粗粒～中粒砂からなり、残存最大層厚は15cmである。フォーセットラミナの走向傾斜はE-W・18°Sであり、古流向は北から南と推定される。本層からは遺物は出土していない。

第6層は湿地の堆積層で、第6a～6d層の4層に細分した。第6c・6d層は、6・7区と3・4区の撓曲軸(後述)の西で確認した地層である。第6a層は黒褐色(10YR3/1)の塊状粘土層であり、層厚は

30~40cmである。6・7区では上面に畠の歯を検出した。また、最上部で15世紀頃の土師皿片が出土した。

第6b層は暗灰黄色(2.5Y4/2)粘土層で、層厚は10~40cmである。SX15内では種・実、植物遺体を多く含む。第6a層と第6b層の境界部分にはラミナの変形構造が見られる。また、撓曲軸以西の第6b層最下部には、黄灰色(2.5Y4/1)細粒砂薄層が層厚3~6cmで挟まる(第6bb層とよぶ)。1箇所のフォーセットラミナの走向傾斜はN37°E 8°Wで、古流向は西南西から東北東へであり、東壁断面では25~50cm間隔で上に緩く丸く凸に変形している。

第6c層は黒褐色(2.5Y3/1)極細粒砂質泥層で、層厚は5~20cmである。ヒシの実のはか植物遺体を含む。

第6d層の上半部はオリーブ黒色(5Y3/1)の砂質泥層である。下部から上部へシルト質細粒砂から細粒砂質シルト、シルトへ上方細粒化する。上部に植物片が密集する部分があり、炭酸第1鉄が晶出する。層厚は50~60cmあり、上面は不規則に凹凸する。

撓曲軸の西では第6c層と第6b層の区分はできず、層厚65cmの細粒砂質泥層となり、細かいラミナが認められる。

第7層は分級と連続性のよい薄い泥層を複数挟む砂層である。全層厚は140cm以上で、下限は未確認である。第7a・7b・7c・7d層に細分した。

第7a層は暗灰黄色(2.5Y5/2)中粒~細粒砂層と砂質シルト薄層の互層であり、層厚は10~50cmで撓曲軸の西側が厚い。葉などの植物遺体を多く含む。3区以南では全般に泥質となる。

第7b層は浅黄色(2.5Y7/3)で斜交葉理の発達する粗粒~細粒砂である。層厚は20cmである。幅数10cm、深さ10cm程度のトラフ型斜交葉理が発達する。

第7c層は中位に粗粒~中粒砂のレンズを断続的に挟む灰色(5Y4/1)泥層で、最大層厚は15cmである。

第7d層にはぶい黄色(2.5Y6/4)で極粗粒~粗粒砂、粗粒~中粒砂、中粒~細粒砂からなる平行ラミナが発達する砂層である。層厚は90cm以上である。斜交葉理が顯著に発達する。

各地層の走向傾斜を表1に示す。特にまとまった傾向はないが、第7b層や第7d層の一部には南からの流れが認められる。確認できた第7d層の下限はTP-1.6mである。

第6・7層には4~6区で西落ちの撓曲がある。撓曲軸はN3°Eで撓曲の落差は西側が約60cm落ち、撓曲軸の東側で第6b層は薄くなつて尖滅する。撓曲軸の西側では第7b~d層の分布はトレーンチ底よ

表1 地層の走向傾斜

測定場所	地層	測定対象	走向または方向	最大傾斜
4区中央壁壁面	第6b層内砂層	フォーセット葉理	N30°E	18°W
4区中央壁壁面	第7a層上部の砂層	トラフ型斜交葉理のフォーセット葉理	N89°W	7°W
4区中央壁壁面	第7a層下部の砂層	トラフ型斜交葉理のフォーセット葉理	N20°W	20°E
4区中央壁壁面	第7a層砂層	細いトラフ型斜交葉理(方向のみ)		NS
7区東トレーンチ壁面	第7a層砂層	トラフ型斜交葉理の底面フォーセット葉理	N40°E	16°W
4区中央壁壁面	第7c層の泥層上面	浅いチャネルのフォーセット葉理	N9°W	20°W
7区東トレーンチ壁面	第7c層内砂層	トラフ型斜交葉理のフォーセット葉理	N56°E	35°N
7区東トレーンチ壁面	第7c層内砂層	トラフ型斜交葉理のフォーセット葉理	N67°E	8°N

りも深くなり、未確認である。

4区で実施されたボーリングの資料によれば、第7層の砂層はTP-4.0mまで続き、TP-3.3mから砂層基底までは細繩～中粒中疊が含まれる。砂層の下位はTP-16.0mまでは海成の砂混り粘土層が続く。その下位は非常に密な砂疊の更新統である。

ii) 放射性炭素年代

当地域における地層の形成年代を知るために、第7a層と第3civ層の植物片を用いて放射性炭素年代を測定した(図10、註1)。その結果、第3civ層はcalBC.728～404年(2σ)の縄文時代晚期～弥生時代前期頃、第7a層はcalBC.31～AD.128年(2σ)で弥生時代～後期頃を指した。上位の第3civ層の年代が古いのは、古い植物片が二次堆積したものであろう。

iii) 遺構と遺物

a. 中世以前(註2)

SX15 6・7区の東・北壁と深掘り断面で確認した、第7層上面の凹地である。約9mの長さを検出した南肩の走向はN81°Wであり、幅は6.5m以上、深さは1.2m以上である。凹地を埋積した第6d-c層と6b-a層はともに上方細粒化するが、後者の方がより泥質で上部は泥に移化することから滞水域であったと考えられる。凹地の内壁面に加工の痕が見られず、規模の大きさなどを考慮すれば、この凹地は放棄流路と考えられる(図9・12、図版1)。

b. 中世後半

SX14 1～5区に分布する第5層上面の溝群である。第5層は大半が削削され、一部が第6層上に残存しただけである。溝は東西方向であり、南から順にa～xまでの番号を付し、東端の配置の違いからA・B群に分類した

(SX14の機能は3)～

i)で検討する。

A群は1～3区の溝a～lで、1～3区に跨って分布し、各溝の東端が南北に揃う。溝の長さは14余m以上である。第5層を掘り込んで第6a-b層の泥を掘削している。各溝の方向はN87°～88°Wのほぼ東西で、幅が1.0m、深さが0.3～0.5m、溝間の畦幅は0.4～1.0mであり、溝間隔

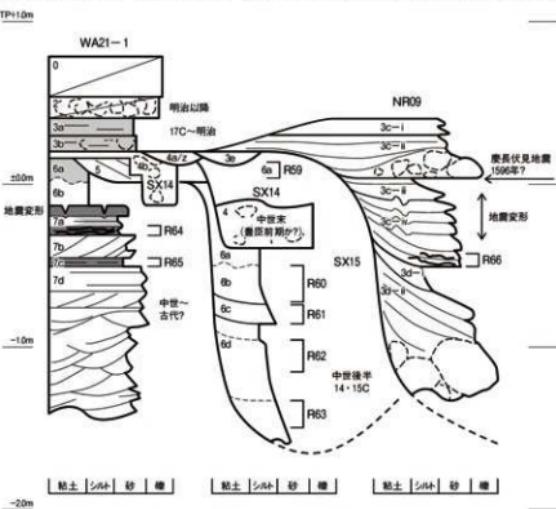
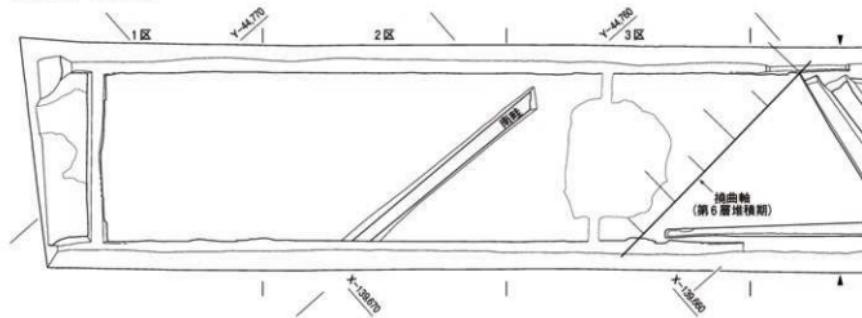
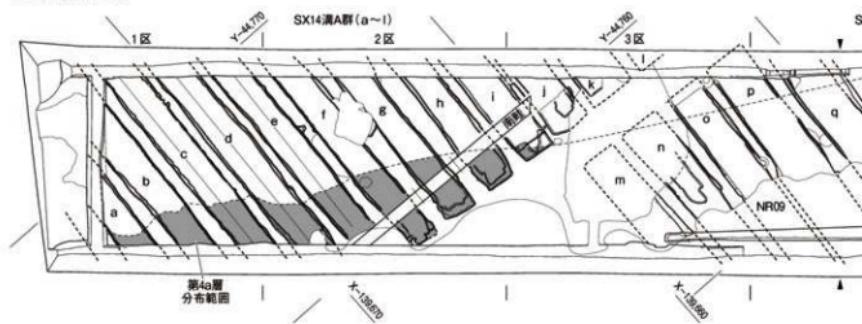


図10 分析試料採取層準の柱状図

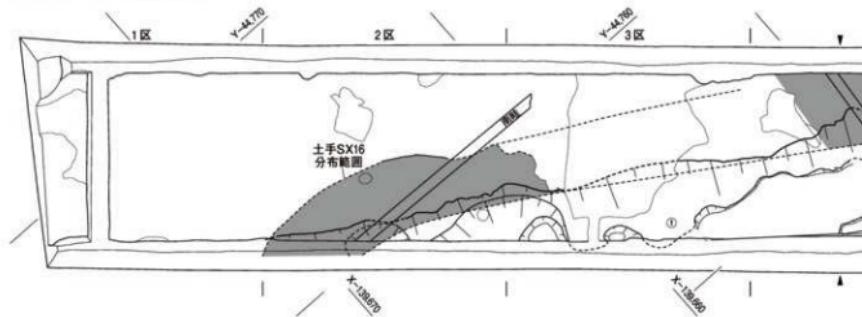
中世以前(第7・6層堆積期)



中世後半(第5層上面)



中世末(第4z層上面～第3d層基底面)



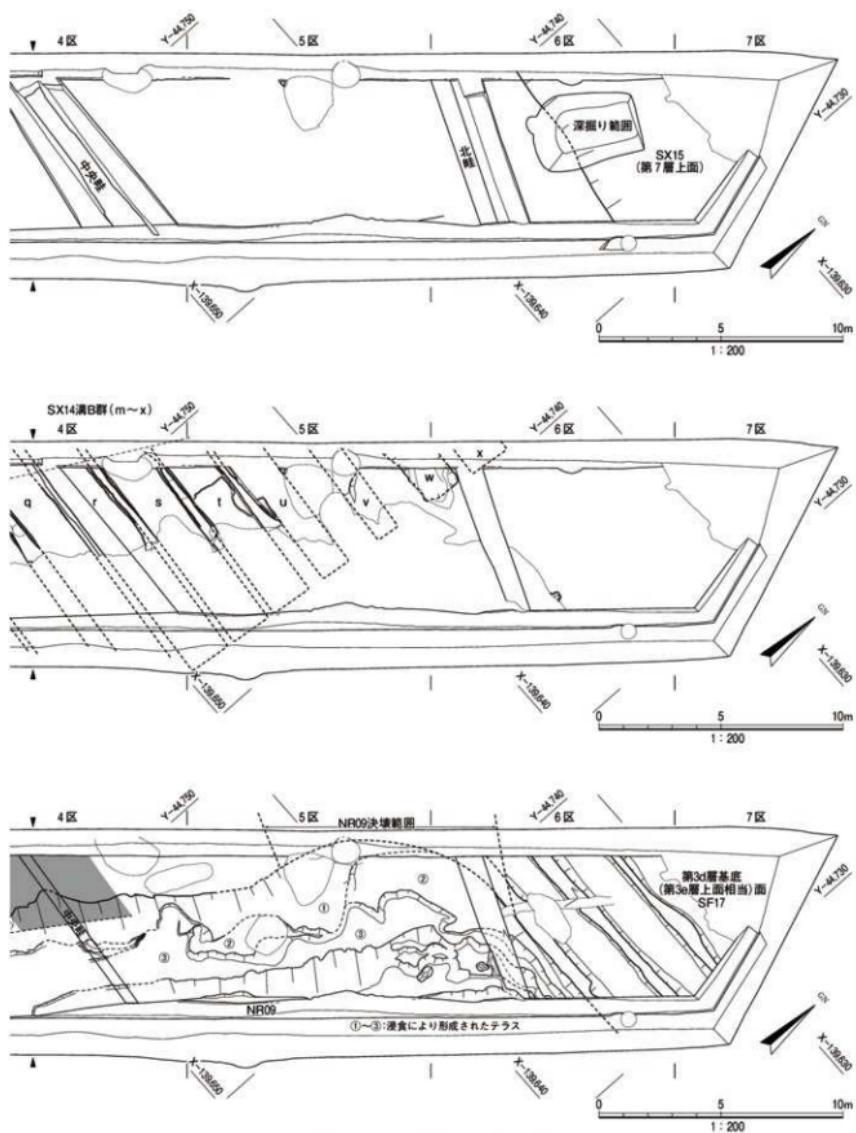
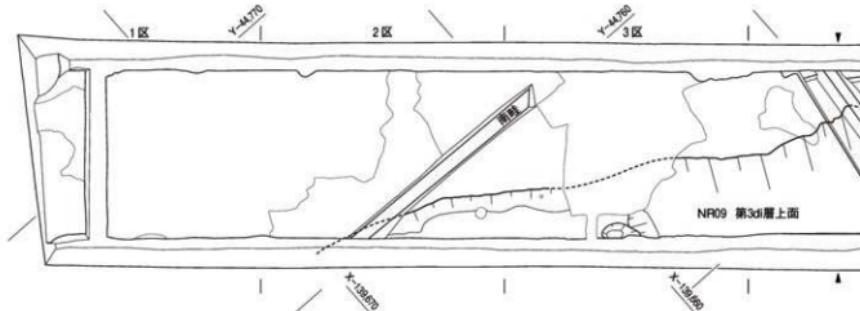
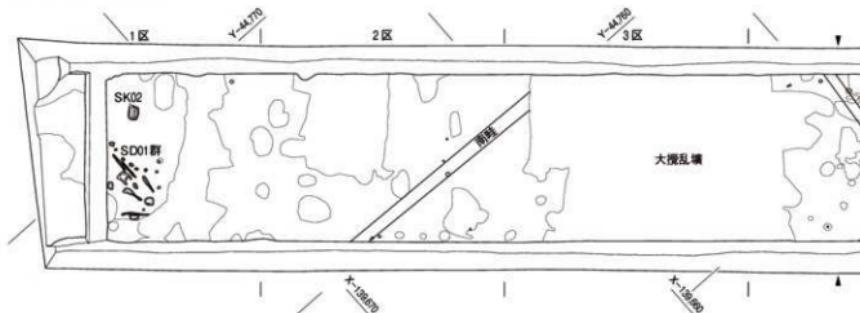


図11 遺構平面図(中世以前～中世末)

中世末(第4z～3cl層堆積期)



近世(第3b・a層・第2層の各上面)



は平均1.9mである。埋土は第4b層が主体であるが、溝iの東端以南の東側および溝m(B群)は第4b層を浸食して第4a層が埋めている。なお、南部の溝aやbには分級のよい斜面堆積したラミナが認められることから、第4b層の埋立て時に溝底に水が溜まっていたと考えられる(図9、図版1～3)。

溝の壁面および底面には、鋤による掘削痕が明瞭に残る。溝は2段掘りされており、上段・下段とも10～20cm前後の深さがある。下段は上段より7～14cm内側を掘っている。

溝f～iの東端平面に残る明瞭な掘削痕跡は各々が幅17～18cmで直線的であり、これが鋤幅を示すものと考えられる。鋤面の形狀は湾曲のある現代の剣スコタイプではなく、平らな角スコタイプであることが判る。また、断面では鋤面の延長が第6層中に幅0.1cm、深さ2.5cmの突き刺し痕跡を残すことから、鋤先が鋭い金属製であったこともわかる。

溝の両壁面を南畔断面で比較すると、溝j・h・gの南側の鋤掘り面が上段78～105°・下段83～90°、溝h・g・fの北側の鋤掘り面が上段100～108°・下段100～102°であり、北側面がオーバーハングし、南側が概ね順走の急傾斜であることが判る。この傾斜の違いは、他の全ての溝でも認められる。現代

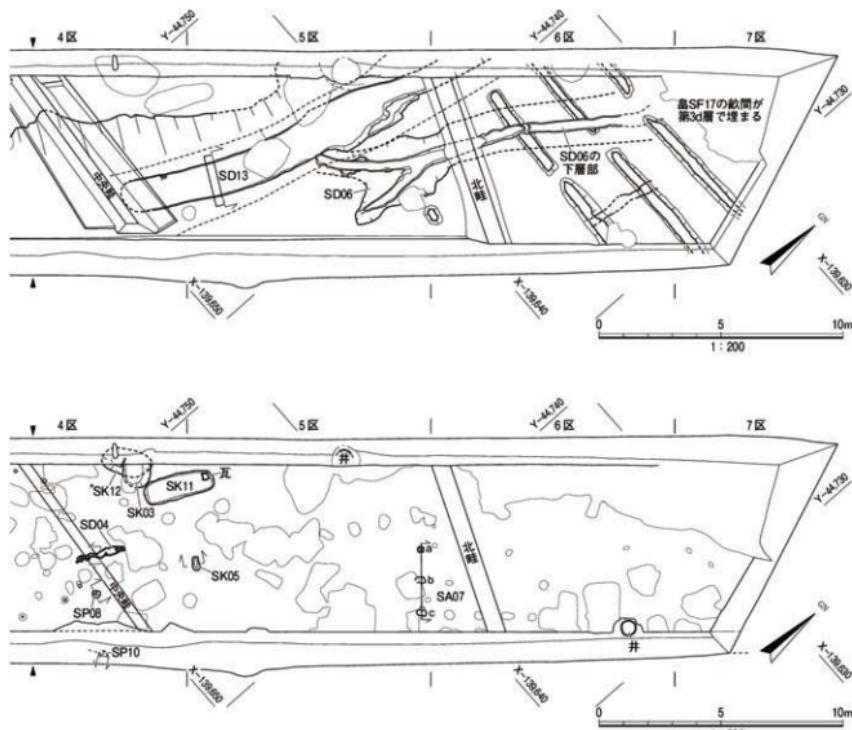


図12 遺構平面図(中世末～近世)

のスコップの使い方から類推すると、粘土を掘削するにあたって、作業者は当初、掘削予定の溝範囲の南側(後の溝間の南側畦上)に立って南側から鋤を踏込み(鋤面は東西方向)、北側は掘り込んだ溝の中に立って踏み込んだと推測できる。平面の掘り上げ痕が方形を基本とすることから、南側に鋤目を入れた後、鋤目に直交して鋤を踏み込み、そのまま粘土塊を抉り出すように四角く掘り起したのであろう。そのため、方形掘形の底は不規則で平坦な加工面を持たない。掘起こしにより上段下端と下段上段の比高が10cmある箇所もある。掘起し作業は壁面に直交する鋤の踏入れ角度は50~80°で幅は12~18cmであるが、達目には概ねそろって規則正しく掘っているように見える。各溝は鋤痕の傾斜からみて東から西へ後退して掘り進められたと推定される(図版2・3)。

ところで、SX14の上位の埋土である第4a層は、下位の第4b層に比べて偽礫も基質の砂も粗粒である。溝1の東端以南の東側および溝m(B群)を埋める第4a層に含まれる偽礫の円磨の程度は亜角礫~亜円礫である。また、長径・中径とも10~28cmで大小の差が大きいが、長径は15~21cmにモードがある。偽礫の多くは長径・中径面が平らで、中には鋤先痕が残るものや鋤身痕とみられる直線的な段がある

ものがある。これら偽蹕のサイズや形状はSX14の溝に残る掘削痕跡に近似する。また、偽蹕の多くは第6層に由来する。したがって、これらの偽蹕の少なくとも一部はSX14から掘り上げられた粘土塊であったと考えられる(図版6)。これらの偽蹕は、もとは第4b層の埋立て客土に含まれていたものが、氾濫流で洗い出されて、第4a層の二次偽蹕として砂に埋もれたものか、あるいは第4a層の氾濫が発生する以前に掘り上げられて近くに積まれていた粘土塊が氾濫流に押し流されて堆積したのである。その際、転動や流水中の砂で偽蹕表面が削られ、凹みを持ったと考えられる。また、SX14の畦部分の第6層は粘土であったため、浸食されずに形状を維持したものと考えられる。

B群は3～6区の溝m～xで、A群とは幅1.2mの南北畦を隔てて東側に位置する。形状はA群に類似し、溝幅がやや広く1.6～1.9mであり、溝間隔は平均2.1mである。ただし、溝vの幅は狭く、1.0mであり、溝u/v間とv/w間の畦は広く1.2m・1.4mである。溝wを除く大半の溝はNR09の浸食により東側が浸食される。東端が唯一確認できる溝wを基準にすると、溝の長さは13.5m程度である。各溝は方向がN88°～92°Wで、幅が1.6～2.1m、深さが0.2～0.4mであり、南端の溝mはA群の溝kのほぼ東に位置し、それより南には分布しない。溝l～sの埋土は第4b層の客土であり、A群と同じ粘土偽蹕質砂である。掘形の形状も同じである。ただし、溝s～tでは、亜角～亜円の粘土偽蹕が多数含まれる粗粒な砂蹕である第4a層が、溝内第4b層を一部削剥して覆う。この様子はA群の東部と同じである。また、溝v～xは底の一部や断面で確認できる程度で遺存状況は悪く、埋積層には長径50cmの粘土偽蹕をはじめ、第6層に由来する多数の粘土偽蹕を含み、砂蹕が埋める。この埋積層はNR09の氾濫流路が溢流して堆積した第3dii層である(詳細NR09で述べる)。

出土遺物 第6層上面にめり込むように最上部から出土した1は土師器皿である。胎土は精良で、体部下半にはユビオサエ痕が残る。15世紀代に属するものであろう。SX14はこの時期頃の形成と考えられる。また、SX14の溝埋土の第4b層からは次の遊離資料が出土した。溝aからは平安時代まで遡る可能性がある土師器片、溝lからは瓦器腕片、溝eから古式土師器である。近隣に当該時期の集落遺跡等から置換され再堆積したものと思われる。

土手SX16 第4a層の氾濫砂蹕層が堆積後、第4a層の堆積範囲に少し被って、土手が積まれている。検出範囲は2～5区の、後述のNR09の西岸に沿うように分布しており、第4a層の氾濫も、NR09とよく似た範囲に起ったと考えられる。高さ0.3～0.6m、幅3.9mが残存し、4区でも高さ0.1m、幅3.1mが残存する。土手の外側は第3d層堆積時に削剥されたため、土手敷はもう少し広かったと考えられる。土手の盛土前に、土手敷と土手の内側(堤内地)は層厚10～15cmの第4z層が整地客土され、第4a層の凹みを埋めている(図11)。

畠SF17 6・7区の第6層上面で確認した畠らしい遺構である。3列の丸みのある歓は幅0.4～0.8m、高さ0.1～0.2mで東西を向き、歓間隔は1.0～1.2mである。3列の歓はSX14B群の溝xの東側に位置し、SX14の溝の方向を踏襲するように平行する。作土は第6a層が母材であり、歓をつくるが、歓間では作土と変形のある第6a層とは判別し難い。作土の上を第3d層が直接覆うことから、耕起時期(存在時期)は第3e層上面の時期と考えられる(図5・9・10・12、図版3)。

氾濫流路NR09 2～6区の東側半分に分布する氾濫流路である。幅6m以上、深さ1.4m以上で、

約50mの距離で検出した。6区で東から調査区に入り、6・5区で屈曲して東から南に流下方向を変えて南流し、2区で調査区の外に出る。氾濫回数は第3dii-i層、第3civ-iii層、第3ci-i層を堆積させた3回である(図11、図版1・2・4)。

第3dii層を堆積させた最初の氾濫流(以下、第3dii層の氾濫流と呼ぶ。他も同様)の営力は第4a層のそれをはるかに超え、屈曲部から南側ではSX14B群の溝m～x間の東部が削剥された。特に屈曲部では東方からの水流の一部が直線的に流れ、溝v～xを甚だしく破壊し、第6層がつくる溝間畦を偽碟化して押し流し、砂碟とともに溝の残骸を埋めている。氾濫流路の最深部は未確認であるが、攻撃斜面下の淵に堆積したとみられる粘土偽碟の見かけの最大は1.3m×0.7mであった。なお、第3dii層中には第6層の偽碟のほかに、細碟を少量含む中粒砂質泥偽碟が含まれる。この偽碟は当該地では未確認の作土に由来し、上流側で耕起されていたものと推定される。この氾濫が収まり、静水域になると第3dii層の泥層が堆積した。

2度目の氾濫流で堆積した第3civ層は、分布範囲が第3d層の分布を越えて堤内地割数mに広がるが、平行ラミナが発達する中粒～細粒砂主体であり、高くなると増水したが、氾濫の勢いは第3dii層ではない。氾濫の勢いが収まったばかりのときに、SD13が掘られている。

3度目の氾濫流で堆積した第3ci层も、第3dii層ではないが、中粒サイズの偽碟が多く含み、大きな氾濫であったことがわかる。第3ci层の勢いが収まり、第3ci層の堆積が始まったばかりの時に、SD06が掘られている。

排水溝SD13 第3civ層上面の南北溝で、4区～6区で検出した。検出面では幅が1.3～1.6m、深さが0.2m程度であるが、中央断面(図8)との比較から、埋没直前の幅は2.5m前後、深さは0.4m以上あったと推定できる。掘削後、肩が崩れて幅が広がったとみられる。造構埋土は下部が黄褐色(10YR5/6)、にぶい黄色(2.5Y6/3)泥質な細粒砂質泥偽碟と中粒・極細粒砂混りの細粒砂でが混在する加工時層であり、上部が黄灰色(2.5Y4/1)粘土の放棄時層である。下部に泥偽碟が多いのは第3div層を掘っているからであり、上半部に貧弱なラミナが認められることから、上半部は水が漬いていた可能性がある。上部の粘土層は第3ciii層である。溝底が5区側から中央畦付近へ少し高くなり、中央畦より南には続かないことから、掘削途中で放棄されたと考えられる。氾濫後の排水を目的とした溝の可能性がある(図12、図版4)。

排水溝SD06 第3ci層上面に掘られた溝で、5～6区で検出した。北畦で断面が漏斗状になり、上幅が1.8m、下幅が0.5mで、深さは0.7mである。上半部は砂層で崩れやすい第3dii層を溝の壁面を約45°の斜面で掘っている。下半部は泥偽碟が多く、崩れにくい第3di層を垂直に約0.2m掘り下げている。検出長は13m余りで、5区北寄りで二股に分かれ、3～4m先で掘り止まる。6区は北側が浅くなりさらに北に延びる。同様の溝状掘削痕跡が、SD06の東側にはほぼ平行している。埋土は下半部が下底に泥偽碟を伴う中粒～細粒砂ラミナ互層で水中堆積後に変形し、上半部は浅黄色(2.5Y7/3)極細粒～細粒砂偽碟と暗灰黄色(2.5Y5/2)シルト質砂の埋立て客土である。下半部の偽碟のみが加工時層でラミナ互層が機能時層、上半部が放棄時層である。この溝はSD13と同様に排水を目的としたのであろうが、掘削後に水が漬いて斜面からの砂が堆積したため、やむなく埋め戻したと考えられる。二股に

分かれるのは、排水先を変更しようとしたのであろう(図7・12、図版5)。

c. 近世

SA07 調査区5区の第3b層上面で検出した東西方向に並ぶピット列である。西端から順にピットa～cの番号を付した。ピットa・b間は1.0m、b・c間は1.1mの間隔を空けてならぶ。ピットaは一辺が15cmの方形で、深さ7cm、埋土はシルト質細粒砂である。ピットbは長辺が35cm以上・短辺が25cmの長方形で、深さ14cm、埋土は上半部が中粒～細粒砂質シルト、下半部が中粒～細粒砂である。ピットcは柱穴の可能性がある。長辺34cm・短辺23cmの長方形で、深さは25cm、掘形は粘土偽礫混りの中粒～細粒砂を埋土とする。柱痕跡は直径15cmで中央西寄りにあり、埋土は細礫・粘土偽礫混り中粒～細粒砂である。このピット列は耕地を区画する柵や杭列であろう(図7・12・13、図版5)。

第3b層出土遺物 2は弥生土器の甕で、右上がりのタタキを施す。弥生時代後期で、下位層からの遊離遺物である。4・5は肥前磁器の染付である。4は碗の底部で、「大明年製」銘を施す。5は筒茶碗で、外面には菖蒲文、口縁部内面には四方罇文を巡らす。以上2点は18世紀中～後葉に属し、第3b層の耕起時期を示すと考えられる(図14)。

第3a層出土遺物 3は土師器高杯の外反する杯部で、端部は軽く外方へつまんでいる。内外面の調整は摩滅のため不明である。古墳時代中期に属し、下位層からの遊離遺物である。肥前磁器や関西系陶器や土人形などが出土した(図14)。

SD01群 1区の第3a層上面の耕作痕跡である。細い溝5本と足跡状の凹みである。溝4本は幅0.1～0.2m、長さ0.8～0.9mで東西に延びる。南壁に一番近い溝は幅0.1m、長さ1mと他の4本に比べて長く、北東～南西とやや北よりに延びる(図12)。

SK02 1区の第3層上面で検出した幅0.4m、長さ0.5～0.6mの土壙である(図12)。

SD04 4区の第3層上面の幅0.25m、深さ0.1m、長さ2.0mの溝である。埋土は、粘土偽礫混りシルト質細粒砂で、瓦片を含む(図12・13)。

SK05 5区の第3層上面の直径0.2m、深さ0.35mの土壙である。シルト混りの細粒砂質シルトで埋まる。スラグが出土した(図12・13)。

SK12 3区の第3層上面の長さ2.6m、幅1.7m、深さ1.2mのやや大型の土壙で、掘削深度に当る第7層～第3a層の偽礫を埋土とする(図6・12)。

d. 近代

SP08 4区の第2層上面の直径0.3m、深さ0.6mの柱穴である。掘形は、粘土偽礫を含む砂質シルトで、柱痕跡は直径10cmで、粗粒～中粒砂で埋まる。わずかだが、木片が出土した(図12・13)。

SP10 4区の第2層上面の東壁で確認した直径0.7m、深さ1.1mの柱穴である。掘形は、炭・シルト偽礫混りの細粒砂質シルトで、柱痕跡は直径25cmであり、細礫・炭・シルト偽礫混りのシルト質粗粒～細粒砂で埋まる(図12・13)。

SK11 4・5区の第2層上面の長さ2.9m、幅1.0m、深さ0.4mの土壙で、1層を埋土とする。平瓦を四角く組んでいる。7は平瓦で、刷毛目状の滑り止めを施す。8は橘唐草文軒平瓦で、7と同様な滑り止めを施す。これらは江戸時代に属するものを再利用したとみられる(図12・14)。

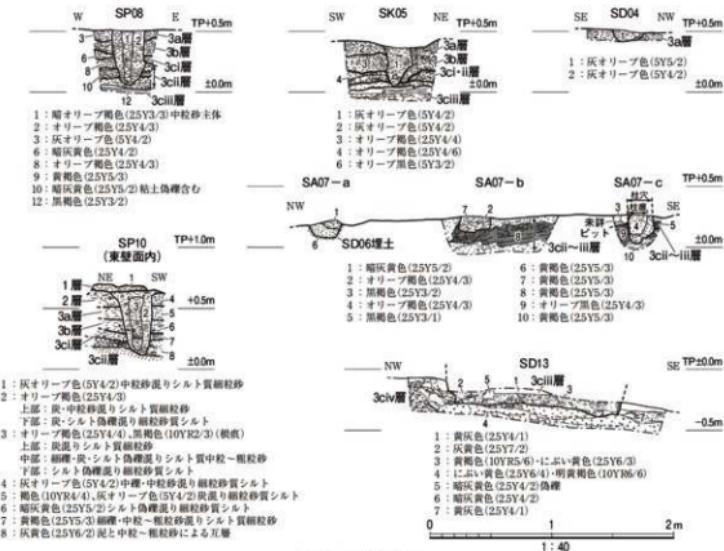


図13 遺構断面図

SK03 4区の第2層上面の長さ1.1m、幅1.0m以上、深さ0.3mの土壌で、第1b層を埋土とする。出土遺物の6は平瓦で、本口に「泉州」「谷川瓦株式会社」「大辻利平」の刻印を記す。谷川瓦株式会社は明治22年の設立と伝えられるため、これ以降のものである。また、近代の大谷焼の甕が出土した(図12・14)。

3) 遺構と遺物の検討

i) SX14の機能

SX14の粘土探掘後の形状は、土壤改良法のひとつである反転客土法(いわゆる天地返し)と酷似する。この方法は生産力を上げるために、表層の耕作に適さない土壤(例えば氾濫砂)を下層の耕作に適した土壤(例えば埋もれた作土)と入れ替える土壤改良法のひとつである。スコップを用いて人力で行う場合は、通常、一筋の溝を掘り下げ、耕作に不適な土壤を溝に埋め込んだ後、その上に耕作に適した土壤を積み上げ、統けて隣接の溝を掘る工程を繰り返すことにより、耕作適地を拓げる方法である[井上公夫2005]。

A群の溝埋土の第4b層は、含まれる偽理の並びから、溝の北側から搬入されたものが多いものの、溝埋土の一部は南側からの搬入も少なからずあり、南側の溝を埋める最中に北側の溝も同時に埋めていると考えられる。B群でも溝q・rには見かけの北からの搬入が認められる一方、南からの客土も認められる。また、溝の深さを越えて、第4b層は削り残された第5層の上20cm余りまで連続して盛土されており、その間に作業の休止期を示す不連続面は認められない。したがって、隣り合う溝どうしは

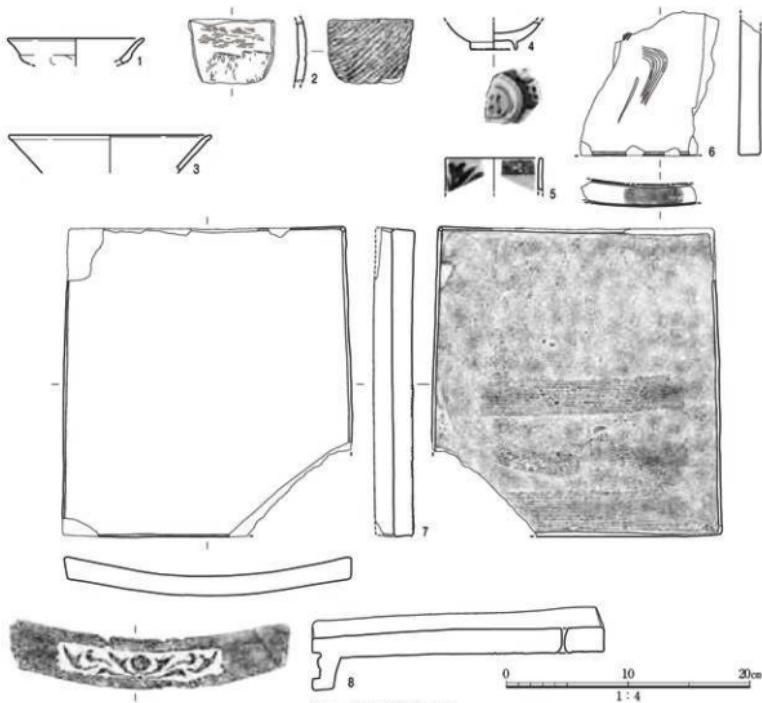


図14 出土遺物実測図

第6層(1)、第3b層(2・4・5)、第3a層(3)、第2層上面(SK03: 6、SK11: 7・8)

片側が埋まっていたわけではなく同時存在したと考えられる。また、第4b層の掘り上げられた第6層堆積物やその耕起土壤が第4b層を覆う箇所は観察されていない。第4b層の上には、氾濫流路の第4a層、直後の整地と盛土の第4z層、氾濫堆積層とこれを覆う砂質盛土の第3eii・i層、さらに氾濫流路NR09の第3dii～3ci層が覆う。この間に第6層の粘土塊が何かに用いられた形跡はない。第4b層の直上を作土層が覆うのは18世紀代の第3b層まで待たねばならなし、第3b層は第3ci層が耕起されたものである。また、第4b層には第6層由来の大小の偽礫が含まれている。このような状況から、SX14は反転客土の跡ではなく、第6層の粘土を探るための採掘溝群であると考えられる。

ii) 調査地の堆積環境とその変遷

a. 弥生時代後期～中世前半(第7～6層堆積期)

第7a層の14C年代が弥生時代後期頃を示す第7層は、堆積相から淀川デルタの氾濫低地を形成した氾濫堆積層と考えられる。砂の第7d・b層は氾濫期(活動時)、植物片が多く含まれ泥質な第7a・c層は氾濫の休止期(静穏時)と推定される。古流向が北東～北西からのものが多いことから、例えばSX15の前身のような、デルタ分流路からの氾濫流と推定できるが、南から古流向もあり、全般に粒

度の分級が良く、當時分別を行う潮汐の影響が示唆される。特に、第7c層のように南南東からのものは潮汐流の可能性がある。

第6層はデルタの分流路が遷移し、氾濫流が調査区に直接及ばなくなり静水域となって堆積した泥層である。第6層堆積期のSX15は第7層堆積後に流れていた分流路が放棄流路となったものと推定される。SX15には放棄後しばらくは自然堤防の溢流水が流れ込んでいたが、やがて静穏な水域となり、粘土が堆積した。その堆積場が塩湿地であったなら、塩分により粘土の堆積速度は早かったと考えられる。

4～6区の第6・7層の西落ち挽曲が、基盤岩類の断層から波及するかどうかは不明であるが、第6bb層の規則的な変形や第6a層の下限で認められる変形と関係する可能性はある。

上位層中の遊離資料として弥生土器や古式土器、瓦器など、弥生時代から中世前半までの土器が含まれるが、これらは上流の集落などから二次的に流されてきたものであり、当該時期の本調査区は、デルタ低地の氾濫原であった。

b. 中世後半～末(第5・4・3e層堆積期)

第6層の上面にめり込むように出土した土師器片1から、第6層上面は14～15世紀頃には離水していたことがわかる。第6層を覆う第5層は、その堆積構造から堤防を溢流した氾濫流により下半部が堆積した後、破堤により上半部がフォーセットラミナを作りながら堆積したとみられる。古流向は北から南へであり、調査区の北約500mにある神崎川の自然堤防が決壊した可能性がある。

第5層の砂層の堆積量は、粘土採掘溝のSX14A・B群の規模の平均をA群が幅1.4m・深さ0.4m、B群が幅1.8m・深さ0.3mとし、これに各溝長の合計を積算、さらに、採掘時のこぼれ粘土が埋土の第4b層の10%を占めたと仮定し、これが1～5区の溝に全て戻され、かつ第5層が6区には堆積しなかつたとすると、層厚が約20cmとなり、これに第5・6層上の第4b層20余cmの砂分を加算すると、平均層厚が約40cmとなる。すなわち、調整区内に層厚40cmの砂を堆積した氾濫である。

採掘集団の違いをイメージさせるSX14A・B群それぞれの掘形サイズをもしながら、画一的な区画と規則的な粘土採掘技術が用いられ、層厚40cmの砂を排除して下の粘土を採掘しようとする背景には、広範囲で統一的な統制と指揮にもとづく普請事業が想定される。

SX14の溝群が掘削された中世後半～末頃の大坂は、大坂本願寺から豊臣大坂城・大坂城下町への大変革の時期であり、豊臣秀吉は1586(天正14)年に、大川右岸に天満本願寺の堤防を築堤し[大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2010]、また、伏見城と大坂城間の交通路を堅固にするため、1596(文禄5)年には後に京街道と呼ばれた文禄堤を整備している。一方で、1585(天正13)年・1586(天正14)年に大川が氾濫し、1594(文禄3)年には近畿諸国が大風(おそらく台風)に見舞われるなど、当時は頻繁に風水害に遭っていた。この時期の当該地周辺は、淀川と神崎川に挟まれたデルタ低地にあり、文献記録は未確認であるが、第5層や第4a層、第3eii層などを堆積させた氾濫にみるように、頻繁に洪水の被害をうけたと考えられる。後述するように、第3cii層堆積直後に慶長伏見地震とみられる大地震が発生している。したがって、SX14から採掘された粘土塊は、堤普請などの水防対策に利用された可能性があり、その時期は豊臣前期やその直前が有力である。

c. 中世末(第3d・c層堆積期)

16世紀後葉の豊臣前期に第4a層や第4eii層、第3dii・civ・cii層などの淀川の氾濫流路からもたらされた氾濫砂層が堆積した。その中でも第3dii層の氾濫は強烈であり、屈曲した蛇行部ではSX14の粘土畦をなぎ倒して浸食し、氾濫流は堤防決壊流さながらに直線的に流れ、粘土偽礫を堆積した。第4a層が粘土畦を残し第4b層の砂だけを浸食したのとは大きな違いである。第3dii・civ・cii層の各氾濫は、減衰してその都度一面に泥層(第3di・cii・ci層)を堆積した。層序と堆積相の共通性からは、3回の堤防の決壊が同じ場所で起こっていたと考えられる。

氾濫の後には、復旧作業が行われた。しかし、第4a層や第3eii層の氾濫では土手(第4z層・第3ei層)を盛ったが、その土手は第3dii層の氾濫で大半が洗い流された。繰り返す第3層の氾濫では排水溝を掘り、滯水を排除しようとした。第3civ層堆積後のSD13、第3ci層堆積後のSD06などであるが、いずれも途中で通水を断念した。一旦引いた水が再び増水したのであろう。増水の原因は、氾濫で決壊した本流河川の自然堤防や人工堤防の復旧と関係する可能性がある。すなわち、堤防の復旧による堤内地の滯水や排水不良を誘発したのではないか。一種の内水氾濫である。

第3civ～cii層には顕著な変形・変位が観察された。荷重痕のほか、層内剪断や転動・流动などであり、当該地周辺で発生した大地震によるものと考えられる(図版6)。当該時期の地震の中で、1596(文禄5)年に京都市伏見区付近を震源として発生した慶長伏見地震の痕跡は、各地に被害の痕跡を残しており、調査地西方の淡路西遺跡をはじめ、淀川流域の遺跡でしばしば見つかっている。観察された同時期の変形・変位の原因も、この地震に当ると考えられる。

d. 近世以降

遺構の種類や密度、遺物量などからみて、中世末までの当該地は、集落遺跡のように遺物が多量に出土する地域とは異なり、例えば第3e層上面のSF17のような、集落地の周辺で人間がときどき湿地周辺を耕起する閑寂な生産地であったと思われる。しかし、近世に入るとその様子は変化する。

第3ci層を耕起した第3b層は、18世紀中頃以降の近世遺物を含む。当該地域の排水不良を解消するために中島大水道が開削されたのが1678年であり、第3b層の出土遺物はその開削の少し後に当るところから、当該地の水田開発は、中島大水道開削前後であり、開削後の生産力の増加とともに、作土に紛れる遺物量も増えていったと思われる。

その後も当該地は生産地として水田(第3a・2層)が耕され、近代・現代に至ったと考えられる。

4)まとめ

本調査では、当該地の地層が弥生時代後期まで遡り、中世後半以降、人間活動が顕著になることを明らかにした。特に、中世後半～末頃の粘土採掘遺構は、豊臣前期の大坂城築城と係る可能性を指摘した。ただし、年代の根拠となる遺物は希少であり、放射性炭素年代などによる確認が必要である。しかし、淀川と神崎川にはさまれた当該地が、頻繁に氾濫を受け、当時の人びとは洪水と排水対策に苦慮したであろうことは十分推察され、17世紀後半に中島大水道が開削された理由もうなづける。

周辺地域の調査を進めれば、集落地を取り巻く周辺地域の環境と人間活動の推移が明らかにできよう。今後の調査に期待される。

註)

- (1) 14C年代測定に当って、(独)日本学術振興会科学研究費助成事業「古代の水田灌漑システムの復元研究」(基盤研究(c))21K00982(代表 大庭重信)の一部を使用した。
- (2) 一般に、日本史における中世は、関ヶ原合戦(1600年)までを指し、それ以降は近世(江戸時代)と区分されるが、大阪市内の大坂城跡や大坂城下町跡における考古学的調査では、中世を本願寺期(～1580年)までとし、その後を近世として、豊臣前期(～1598年)・後期(～1615年)、徳川期に区分する。本調査地は大坂城跡・大坂城下町跡から離れた土地にあるため、一般的な時期区分を用いて、豊臣前期・後期を中世末に含める。

引用・参考文献

- 井上公夫2005、「元禄地震(1703)と富士山宝永噴火(1707)による土砂災害と復興過程—神奈川県山北町における最近の史科学・考古学の成果による再検討ー」:『歴史地震』、20号、pp.247-255。
- 大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2008、「市営日出住宅建設に伴う西淡路1丁目所在遺跡発掘調査(WA06-1)報告書」:『大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書(2006)』、pp.307-313
- 大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2009、「西淡路1丁目所在遺跡B地点発掘調査(WA07-1)報告書」:『大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書(2007)』、pp.305-316
- 大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2010、「桜宮地区埋蔵文化財調査(天満1丁目所在遺跡発掘調査 TW08-1)報告書」:『大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書(2008)』、pp.21-29
- 大阪市教育委員会・大阪文化財研究所2014、「北区天神橋1丁目における建設工事に伴う天神橋1丁目所在遺跡発掘調査(TW12-1)報告書」:『大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書(2012)』、pp.45-54
- 大阪文化財研究所2012、「西淡路1丁目所在遺跡発掘調査報告書Ⅱ」、pp.1-41
- 大阪文化財研究所2014、「西淡路1丁目所在遺跡発掘調査報告書Ⅲ」、pp.1-18
- 大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2017、「同心町遺跡発掘調査(DC15-1)報告書」:『大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書(2015)』pp.1-8
- 大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2020、「西淡路1丁目所在遺跡発掘調査(WA18-1)報告書」:『大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書(2018)第2分冊』、pp.185-194
- 大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2022、「西淡路1丁目所在遺跡発掘調査(WA20-1)報告書」:『大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書(2020)』、pp.311-324
- 大阪市文化財協会2010、「西淡路1丁目所在遺跡発掘調査報告」、pp.1-62
- 大阪市文化財協会2021、「加島遺跡発掘調査報告」、pp.1-45
- 建設省国土地理院1983、「土地条件図 大阪地区」、179ps.
- 前田豊邦1988、「市域の縄文遺跡」:『新修大阪市史』第1巻 新修大阪市史編纂委員会、pp.239-240
- 前田豊邦2004、「淡路新町遺跡」:『新修大阪市史史料編』第1巻 考古資料編 大阪市史編纂所・大阪市史料調査会、p.91

東壁地層断面

第6層由来の巨大な泥偽礫を含む氾濫流路堆積層
(第3d層:写真中央下半)



西壁地層断面

下位の氾濫原泥層
(第6～7層)から
SX14(粘土探掘遺構)
および上位の作土層
(第2～3層)と
整地客土層(第1層)



深掘り箇所の地層断面

放棄流路SX15と
第7層の氾濫堆積層
(6区、西から)



調査区ほぼ全域に分布する中世末頃の粘土採掘遺構SX14(第5層上面)とこれを掘削して流れた氾濫流路NR09(第4層上面、北東から)



中世末頃の
粘土採り遺構SX14A群
の溝a～k、第5層上面
(1～3区、南東から)



SX14溝b～j各々の
北壁の掘削痕(南から)



SX14溝b～j 各々の
北壁の掘削痕
(1区、南東から)



SX14溝h東端
農具痕跡が明瞭に残る
(東から)
スケールは40cm×60cm



SF17
(6・7区、北東から)



氾濫流路 NR09
(4 ~ 6 区、西から)
第3d層上面の検出状況、
第4層を掘削して
写真中央から右手前へ
蛇行して流れる



NR09の断面(部分)
(4 区、中央畔断面北側、
東から)
第4b層以下(奥)を掘削
して斜交する第3層
(NR09 : 手前)



排水溝 SD13検出状況
(4・5 区、南東から)



排水溝SD06
(6区、北東から)



第3層上面の遺構
検出状況(北東から)



第3b層上面の
櫛か杭列SA07
(5区、北西から)





地層の変形第3ci~iv層(4区、東壁)



地層の変位 第3civ層内で偽礫化(左:水掛け法前、右:同後、中央畔北面)



SX14、埋土内の切り出された泥偽礫(左:溝E・南畔西面、右:溝F内偽礫)

東住吉区北田辺四丁目16-3における建設工事に伴う
北田辺4丁目所在遺跡B地点発掘調査(KI21-1)報告書

調査個所 大阪市東住吉区北田辺4丁目16-3
調査面積 225m²
調査期間 令和3年11月25日～12月9日
調査主体 一般財団法人 大阪市文化財協会
調査担当者 調査課長 高橋工、岡村勝行

1) 調査に至る経緯と経過

調査地は、古代寺院の推定地である田辺廃寺、縄文から中世の複合遺跡である桑津遺跡の西側、北田辺4丁目所在遺跡B地点に位置する(図1)。田辺廃寺は1925年、大阪鉄道(現近畿日本鉄道)の建設工事がおこなわれた際に、飛鳥・奈良時代の瓦が多量に出土したことにより、確認された遺跡である。調査地の近くでこれまで行われた調査では、西70mのKW09-1次調査地において、奈良時代の井戸や土壤が検出され[大阪文化財研究所2011]、また、北東200mのKW88-21次調査地、東150mのKW87-20次調査地、東200mのTB16-1次調査地では、古代寺院の存在を示唆する複弁蓮華文軒丸瓦が出土している[大阪市文化財協会1998、大阪市教育委員会・大阪文化財研究所2018]。

大阪市教育委員会により、令和3年9月29日に敷地中央部で試掘調査が行われ、地表下約0.45mで、古代の土器を含む遺構(本調査のSD01)が確認された。この結果を受け、本調査は敷地中央の東西25m、南北9mを対象として、実施することとなった(図2)。

令和3年11月25日に調査を開始した。まず重機で地表下0.4~0.5mまでの現代の地層(第1・2層)を掘削し、その後、人力で掘り下げた。順次遺構・遺物を検出し、実測・写真撮影による記録を進め、地表下1.0mまでの地層の観察を行った。12月9日に現地における全作業を終了し、資材・機材を撤収した。

報告で用いた方位は、現場で記録した街区図を1/2,500大阪市デジタル地図に合成することによって得た世界測地系座標に基づき、座標北を基準とした。標高はT.P.値(東京湾平均海面値)を用いてTP +○mと表記した。



図1 調査位置図

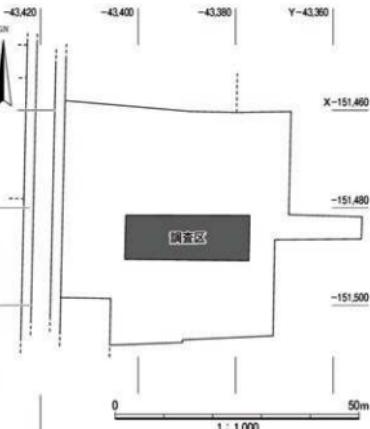


図2 調査区位置図



図3 地層と遺構の関係図

2) 調査の結果

i) 層序(図3・4)

現地表の標高はTP+7.3~7.5mで、西から東にやや下がる。調査区の地層を次の第1層~第3層に区分した。

第1層：バラスと真砂からなる現代の盛土層及び擾乱層で、層厚は30~70cmである。

第2層：地山および作土の偽礫を多く含んだ現代の盛土層で、層厚は5~10cmである。

第3層：黄褐色粘土質シルト～極粗粒砂混り細粒砂質シルトからなる地山層で、層厚は30cm以上である。樹木の根によると思われる擾乱が、調査区全体で観察された。上面で古代の遺構が検出された。

ii) 遺構と遺物(図5~8)

第3層上面で、SD01, SK03・04, 06~10を検出した。

SD01：調査区中央で検出した、幅0.4~1.2m、深さ0.12m、長さ7.6m以上の南北方向の溝である。溝底の高さはほぼ一定である。調査区外に延びる。埋土は自然堆積である。土師器・須恵器の小片が出土した。

SK03：調査区中央で検出した、長辺1.1m、短辺0.8m、深さ0.08 mの土壙である。埋土は自然堆積である。遺物は出土しなかった。

SK04：調査区中央西寄りで検出した、一辺0.7m、深さ0.05 mの方形の土壙である。埋土は偽礫が混じり、人為的な埋戻しと考えられる。須恵器壺2が出土した。底部の破片で内外面に自然釉がかかり、古代に属するものと考えられる。

SK06：調査区中央西寄りで検出した、長辺0.9m、短辺0.8m、深さ0.12mの土壙である。埋土は自然堆積である。土師器の小片が出土した。

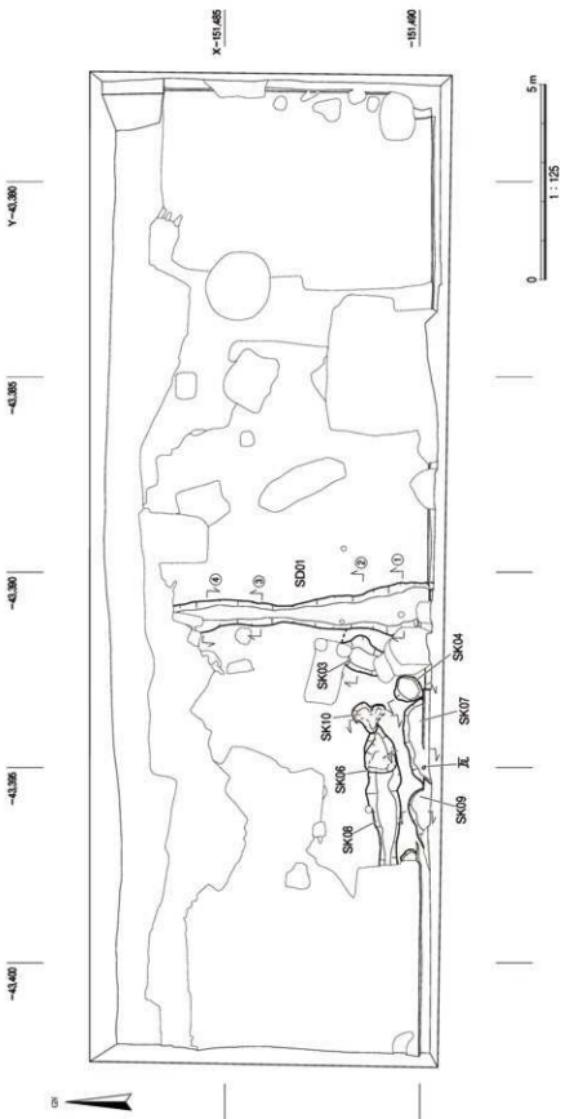
SK07：調査区中央南壁沿いで検出した、長辺2.3m、短辺0.5m以上、深さ0.10mの土壙である。埋土は偽礫が混じり、人為的な埋戻しと考えられる。平瓦3が出土した。凹面に布目があり、凸面は摩滅し調整は不明であるが、古代に属するものと考えられる。

SK08：調査区中央西寄りで検出した、長辺3.6m以上、短辺0.8m、深さ0.05mの土壙である。SK06に切られる。埋土は自然堆積である。須恵器杯G蓋1が出土した。端部の小片であるが、飛鳥時



図4 南壁地層断面図

图 5 游乐平面图



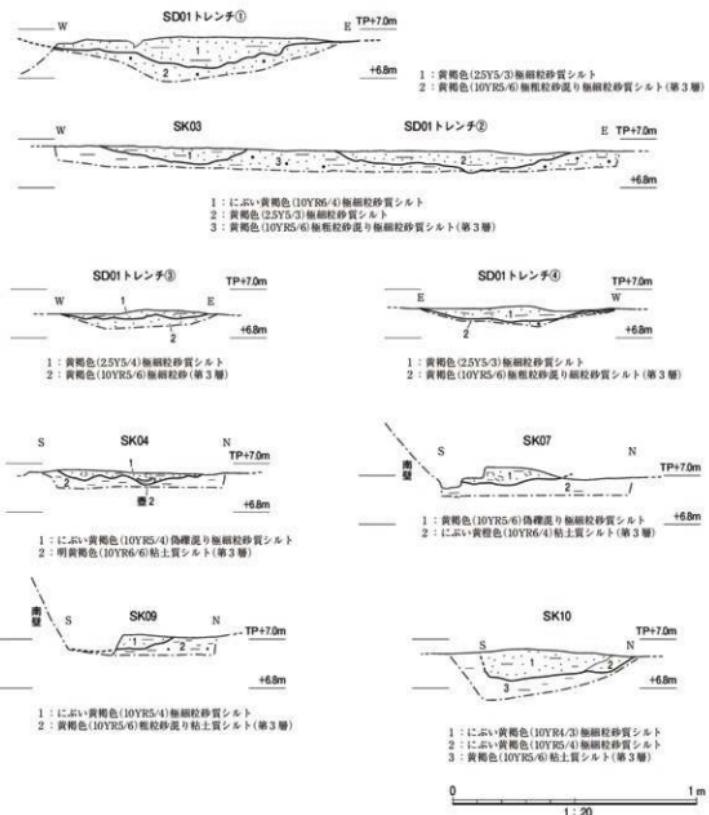


図6 遺構断面図

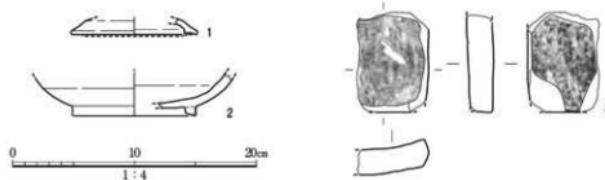


図7 出土遺物実測図
SK04(2)、SK07(3)、SK08(1)

代中頃に属するものと考えられる。

SK09：調査区中央南壁沿いで検出した、長辺1.5m以上、短辺0.3m、深さ0.12mの土壌である。埋土は自然堆積である。遺物は出土しなかった。

SK10：調査区中央西寄りで検出した、長辺0.8m、短辺0.7m、深さ0.12mの土壌である。埋土は自然堆積である。遺物は出土しなかった。

このほか、現代の第2層からではあるが、瓦器碗と考えられる小片が1点出土した。

3)まとめ

調査地は、全体に旧建物の解体時と思われる攪乱・削平が広く遺構面にまで及んでいた。このため調査地全体の状況は明瞭でないものの、中央部からは古代の遺構・遺物が検出された。これらは想定される田辺廃寺寺域の復元を含め、この地域の歴史像を考える上で重要な情報を与えてくれる。今後の調査により田辺廃寺の実態が明らかになっていくことを期待したい。

引用・参考文献

大阪市文化財協会1998、「桑津遺跡発掘調査報告 付田辺東之町遺跡」、pp.62-68、pp.89-93

大阪文化財研究所2011、「桑津遺跡B地点発掘調査報告」、pp.1-20

大阪市教育委員会・大阪文化財研究所2018、「東住吉区駒川一丁目30-3他における建設工事に伴う田辺廃寺発掘調査(TB16-1)報告書」：『大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書(2016)』、pp.623-631

南壁地層断面
(北西から)



調査区全景
(東から)



SD01検出状況
(南から)



調査区中央部
遺構群検出状況
(南東から)



SK04
(北東から)



SK07
(北西から)



東住吉区南田辺一丁目15-11他における建設工事に伴う

難波大道路発掘調査(ND21-1)報告書

調査個所 大阪市東住吉区南田辺1丁目15-11他
調査面積 160m²
調査期間 令和4年3月9日～3月24日
調査主体 一般財団法人 大阪市文化財協会
調査担当者 調査課長 高橋工、和田亮平

1) 調査に至る経緯と経過

難波大道は、古代の難波京から南へ延びる京域の中心軸上に想定される幹線道路である。大道は文献の記載にも見えてはいたが、難波宮から南へ約9.8km下った堺市大和川・今池遺跡の発掘調査[大和川・今池遺跡調査会1981等]で、同軸線に平行し、約17mの間隔で延びる2条の道路側溝とみられる溝が検出されたことからその存在が確実視されるようになってきている。一方で、大和川・今池遺跡より北の大坂市域では、大道の存在を確實に示す道路側溝などの発見はまだないのが現状である。

今回の調査地は上町台地南部にあり、難波宮の南約7.2kmで、埋蔵文化財包蔵地「難波大道跡」の西縁上に位置する(図1・2)。近隣の同遺跡内では今まで5件の発掘調査が行われている。山坂神社が建つ独立小丘陵の北側ではND90-10・94-15次調査が行われ、6世紀中葉～後葉の掘立柱建物など居住に関わる遺構が発見された[大阪市教育委員会・大阪市文化財協会1991・1996]。同時期とみられる柱穴はND10-1次調査でも見つかっており[大阪市教育委員会・大阪文化財研究所2012]、件の小丘陵を取り巻くように古墳時代後期の集落が展開していたことが考えられる。小丘陵については、全長150～160mで西向きの前方後円墳とする説[堀田啓一1979]もあるが、前二者のように丘陵に隣接する個所を発掘しても埴輪や周溝など古墳の存在を証明する発見はなく、その蓋然性は低い。難波大道に關係する時期の調査成果もある。ND10-1次調査では、ほぼ正南北方向の溝SD01が発見されていて、細片ながら7世紀後葉～8世紀の遺物が出土した。溝は幅3m以上、深さ0.15mとされ、理論上の大路中軸線より7.2m東に当る。大路に係る遺構かどうかは、報告書では位置関係から判断を保留しているが、大路東側溝としても不自然ではなく、今後の周辺調査が待たれる。また、ND11-4次調査では、7世紀初頭以降とみられる掘立柱建物が部分的にではあるが検出されている[大阪市教

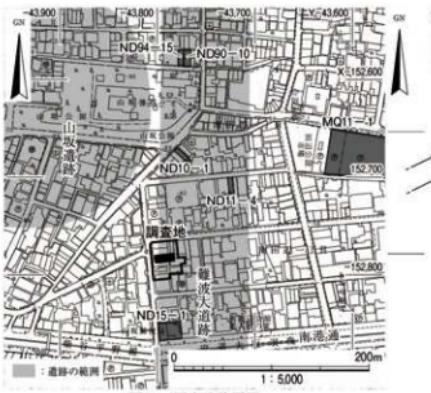


図1 調査地位置図



図2 調査区配置図

育委員会・大阪文化財研究所2013]。建物の方位は正東西に近く、時期は確定できないものの大路に関係する可能性があろう。他には、ND11-4次調査で中世(13~14世紀)の土壌、ND15-1次調査[大阪市教育委員会・大阪文化財研究所2017]では近世末~近代の溝などが発見されている。

如上の遺跡環境の中、当該地で共同住宅の建築が計画されたため、大阪市教育委員会が令和3年12月に試掘調査を行った。その結果、地表下ごく浅く地山層が現れ、上位に遺構と中世以前とみられる遺物包含層が検出された。それを受けた大阪市文化財協会によって発掘調査が行われることになった。調査は、仮設工事などに続いて頭書の日程で行った。重機を用いて表土の除去を開始したが、試掘結果どおりに遺物包含層・地山層(後述の第2・3層)が残っていたのはごく一部で、それ以外は近代以降に地下げされ、近世以前の地層は残っていないことがわかった。このため、近代以降の地層(後述の第1層)までを重機掘削の対象とした。以後、遺物包含層を人力にて掘り下げ、その後、地山層上面で遺構検出とその掘下げを行い、遺物の捕集に努めた。遺構や地層について必要な平・断面図を作成し、写真による記録を行い、終了後は機材等の撤収を行った。なお、建築工事との関係から、調査による掘削深度は地表下1.5m迄と制限されたため、基本的に遺構の掘削もこの制限内とし、部分的なトレンチを穿って深さを確認するに止めた(SK01・SE03・04・07・09)。

本報告で用いた方位は、現地で作成した街区図を大阪市デジタル地図(S=1/2500)に合成することで世界測地系座標に乗せており、座標北を基準とする。標高はTP値(東京湾平均海面値)で、本文中では「TP+○m」と略記している。

2) 調査の結果

i) 層序(図3~5、図版1)

現況の地形は平坦ではあるが、調査地の北西隅でTP+7.5m、南辺中央部でTP+7.1mと南へ向って緩やかに傾斜している。しかし、これは本来の地形を反映したものではなく、旧建物解体工事後の整地によるものである。表土掘削を開始すると、試掘結果の層序とは大きく異なり、近代・現代に大きく改変を受けていることがわかった。以下に地層の遺存状況を概説する(図3)。表土(後述の第0層)は解体工事に伴う擾乱層で、調査区東部と南西部で地表下約1mにまで達していた。第0層を除去

すると北東の一画を除いて近代の地層(第1層)が現れ、その下面是やはり地表下約1mまで達していた。この範囲で地山層を全面的に掘り下げる行為、つまり地下げが行わ

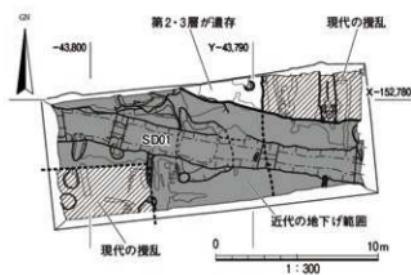


図3 地層の遺存状況

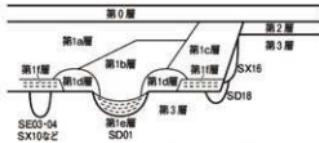


図4 地層と遺構の関係図

れたものとみられた。地下げでできた凹地の北辺は東南東-西北西方向で直線的に延び、基底は平坦で、後述する溝SD01が掘られていた。東・西・南の限界は調査区外であった。試掘調査で発見された遺物包含層(第2層)と地山層(第3層)が残っていたのは、上記近代と現代の削剥を免れた北辺中央部約5mの範囲のみであった。以下、上記の第0~3層について記載する。

第0層：黄灰色(7.5Y4/3)碎石・瓦礫混り中粒砂からなる表土層で、層厚は10~100cmである。

第1層：近代の地下げによる凹地内の堆積層で、第1a~1f層に細分される。第1a~1d層は客土層、第1e・1f層は自然堆積層である。

第1a層：黄褐色(2.5Y5/3)地山偽礫混り粘土質シルト～極細粒砂からなり、層厚は最大で60cmである。凹地を埋めて平地化した最終段階の地層である。

第1b層：黄褐色(10YR5/6)地山偽礫(シルト～細粒砂)からなり、層厚は最大で70cmである。凹地底部に掘られたSD01を埋めた地層である。

第1c層：黄褐色(2.5Y5/3)シルト質細粒砂からなり、層厚は最大で60cmである。SD01の土手を形成した第1d層の北側(土手の外側)に盛られており、本層堆積段階ではSD01はまだ機能していたものと考えられる。

第1d層：オリーブ褐色(2.5Y4/3)粗粒砂混り粘土質シルトからなり、層厚は最大で40cmである。平面的には検出していないが、SD01の両肩部に盛られ土手を形成していたとみられる。西壁での断面をみると、幅90cm、高さ30cmほどで、SD01最下部の砂泥互層(第1e層)の堆積後に盛られていた。

第1e層：暗灰黄色(2.5Y4/2)～オリーブ黒色(5Y3/2)粘土～細粒砂の砂泥互層で、層厚は最大で30cmである。SD01の埋土で流水と滯水が繰り返されて堆積したものである。

第1f層：にぶい黄褐色(10YR6/4)粘土質シルト～中粒砂からなり、層厚は10cmである。現代の擾乱が及び、調査区南西部のみで確認された。凹地底部に堆積した砂泥互層で、本層も第1d層の下位に当り、SD01内の第1e層と一連の地層である可能性もある。

第1層の年代は、後述のように最下位の第1e層から明治時代後半の遺物が出土しているので、19世紀末以降である。

第2層：黄褐色(10YR5/3)シルトからなり、古墳時代後期の遺物を包含する。層厚は10cmである。須恵器杯身1、同甕口縁部2(図8)が出土した。1はTK43型式に属し、6世紀後葉の遺物である。

第3層：明黄褐色(10YR6/6)シルト質細粒砂～にぶい黄褐色(10YR6/4)極粗粒砂からなる地山層である。上方に細粒化する。層厚は100cm以上である。

ii) 遺構と遺物(図6~8、図版1~2)

遺構はすべて、近代の地下げによる凹地の底部、第3層上面で検出された(図6)。したがって、地下げ以前の時期の遺構は上部約80cm以上を破壊された状態である。第2・3層が遺存する部分では近代以外の遺構は検出されなかった。

SD18は北壁沿いにあり、上部をSX16によって破壊されていた。北東-南西方向に弧状に延びる溝で、現存する幅は1.5m、深さは0.6mであるが、本来、深さは0.8m以上あったとみられる。埋土下層はシルト～細粒砂が堆積していて、水流があったことがわかる(図7)。出土遺物には図8の4~8な

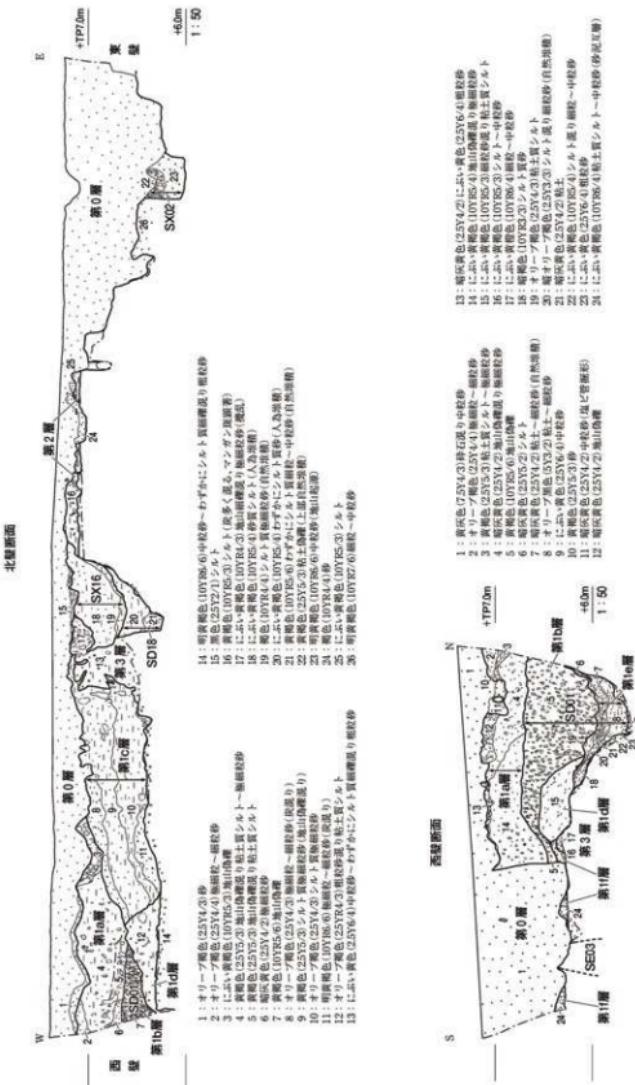


圖5 北壁・西壁地壘断面図

どがある。須恵器4・8は本来第2層に帰属する遺物である。4は須恵器杯身でTK43型式に属する。8は甕の口縁端部である。これらには6世紀後葉の年代が与えられる。5は瓦質土器甕口縁部、6は備前焼鉢口縁部、7は瀬戸美濃焼天目茶碗である。これらは中世後半の遺物で、天目茶碗の形態から16世紀末から17世紀前葉に下る可能性もある。

SX16は調査区内では大部分が搅乱されて残っていなかったが、北壁の地層断面で把握できた(図5)。東西1.9m、深さは0.6mで、土壤のように見える。砂質シルトで埋められていた。肥前陶器皿3や同碗などが出土し、17世紀後半頃の遺構である。

調査区西部のSE03・04・07・09は平面形が直径0.6~1.0mほどの円形で、現状で0.6m以上の深さがあることから井戸と判断した。いずれも底部は検出していないが、地山偽礫が混じる砂などで埋められていた(図7)。SE03・04・07からは肥前磁器や関西系陶器が出土し、その特徴からみて18世紀後半以降の遺構である。

SX10は調査区中央にあり、近代のSD01などに切られる落込みである。平面形は不整な隅丸方形で、東西3.4m、南北4.7m、深さ0.5mを測る。埋土は黄褐色(2.5Y5/4)砂が堆積していた。上部が削平されていることを考えると、灌水用の水溜のような機能をもっていたのではないだろうか。17世紀後葉の肥前磁器碗が出土した。

SX13・14は東壁沿いに検出され、SD01に切られる。遺物は出土せず、時期は不明であるが近世の遺構の可能性がある(図7)。

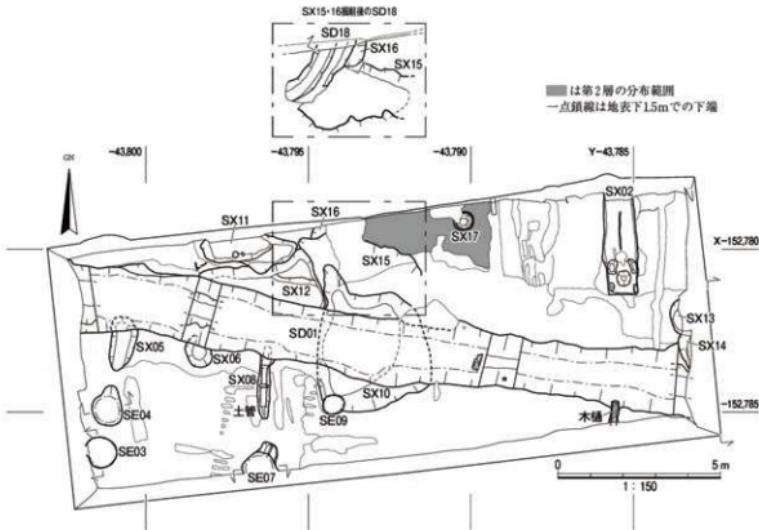


図6 第3層上面平面図

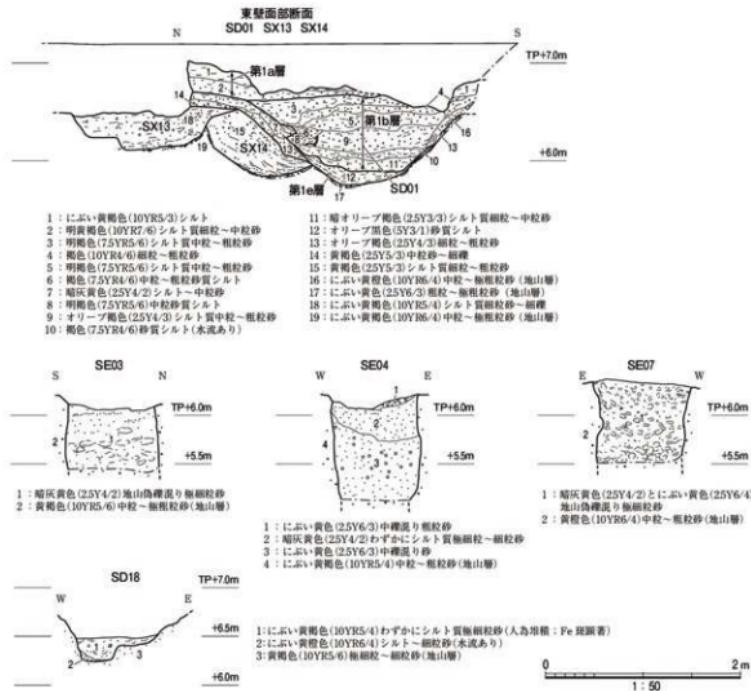


図7 遺構断面図

この他の遺構はすべて近代以降のものである。SD01は調査区を縦断して東南東から西北西方向に延びる(図6)。幅は1.6~2.1m、深さは0.8mある。遺構底には砂泥互層(第1e層)が堆積し、流水と滞水が繰り返されたようである(図5・7)。流向は先に述べた方向に等しい。南の肩部にはSX05、土管を据えたSX08、木樋が取り付き、溝へ排水を行っていたものとみられた。この状態の後、両岸に第1d層で土手が盛られていた。その後、溝内部は第1b層で埋められ、最終的には第1a層で凹地全体が埋められていた。砂泥互層からの出土遺物には明治20~30年代の磁器が含まれていた。また、出土した植木鉢の刻印には「大阪市南区北河堀町…」とあり、北河堀町が大阪市南区に編入されたのが1897(明治30)年であるから、溝がこの年代より新しいことは確実である。溝の方位は凹地北縁に平行し、凹地内の排水のために掘られた溝と考えられる。この他、SX17は甕を用いた便槽、SX02は形態からみて第二次世界大戦時の防空壕であろう。

3)まとめ

今回の調査では、限られた面積ながら古墳時代後期(6世紀中葉~後葉)の遺物を含む地層を検出し

た。このことから、周辺で発見されている同時期の集落の範囲がより南へ広がることが確実となった。難波大道に関する発見はなかったが、冒頭にも述べたように、今後の調査でも引き続き注意を払っていく必要がある。

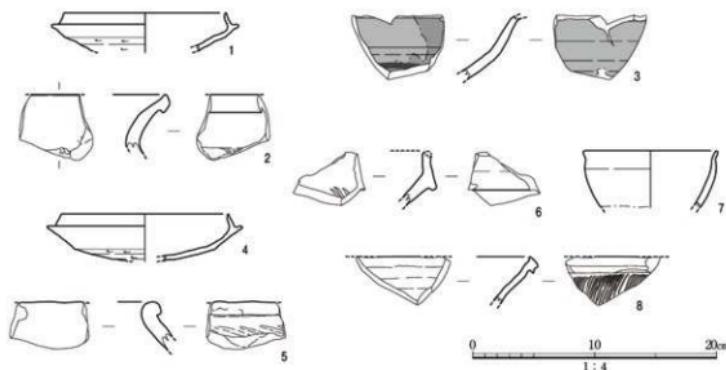


図8 出土遺物実測図
第2層(1・2)、SX16(3)、SD18(4~8)

引用文献

- 大阪市教育委員会・大阪市文化財協会1991、「扶蘇邸の建設に伴う難波大道跡発掘調査(ND90-10)略報」:『平成2年度大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』、pp.177-182
- 1996、「宮崎邸建築に伴う発掘調査(ND94-15)」:『平成6年度大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』、pp.113-116
- 大阪市教育委員会・大阪文化財研究所2012、「東住吉区南田辺一丁目における建設工事に伴う難波大道跡発掘調査(ND10-1)報告書」:『平成22年度大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』、pp.95-99
- 2013、「難波大道跡発掘調査(ND11-4)報告書」:『平成23年度大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』、pp.169-174
- 2017、「難波大道跡発掘調査(ND15-1)報告書」:『大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書(2015)』、pp.391-399
- 堀田啓一1979、「失われた歴史を掘る」:『大阪の歴史』井上薰編、創元社
- 大和川・今池遺跡調査会1981、「大和川・今池道路」Ⅲ

北壁地層断面
(南西から)



西壁地層断面



SD18とSX16断面
(南西から)



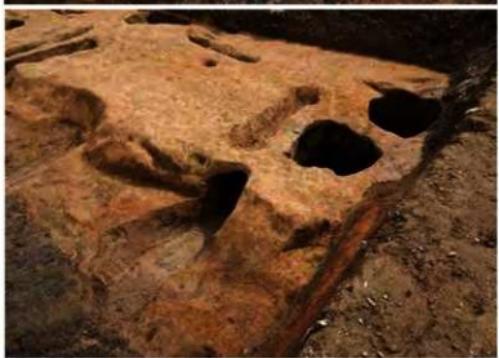
第3層上面全景
(西北西から)



SD01
(東南東から)



SE03・04周辺
(北西から)



平野区平野上町二丁目 6 - 4・5・10の各一部における
建設工事に伴う平野環濠都市遺跡発掘調査(HN21-1)報告書

調査個所 大阪市平野区平野上町2丁目6-4・5・10の各一部
調査面積 120m²
調査期間 令和3年11月4日～12月6日
調査主体 一般財団法人 大阪市文化財協会
調査担当者 調査課長 高橋工、平山裕之

1) 調査に至る経緯と経過

平野環濠都市遺跡は大阪市平野区に所在する中世～近世の集落遺跡である。平野の地は、古代に坂上田村麻呂の子である広野麻呂によって開拓されたとの伝承が残る。平安時代後期には杭全庄あるいは平野庄と呼ばれる莊園となった。中世には平野郷、平野庄とも称され、環濠と土塁によって囲まれた「自治都市」として繁栄した。17世紀の初期には融通念佛宗の根本道場である大念佛寺が定堂化され、門前町としても賑わったことであろう。徳川期には奈良街道・八尾街道が通り、中高野街道の起点という陸上交通の要衝で、旧平野川に続く舟入を利用し、柏原船が往来する物資の集散地でもあった。

調査地は遺跡の北端中央部に位置し(図1)、北約300mには杭全神社が鎮座する。1694(元禄7)年に描かれた『平野大絵図』に照合すると、「市町」の北西端に相当している(図2)。現在、調査地の南から東を画する小路は絵図のそれと一致し、この頃から位置が変わっていないことがわかる。また、調査地の北は環濠で、東北東～西南西から南南東～西北西に方位を変える様子が描かれている。

本遺跡では1976(昭和51)年に杭全神社境内で行われた調査を端緒とし、これまでに発掘調査を積み重ねており、大坂ノ陣の前後を中心には弥生時代から徳川期にかけての様相が、徐々に明らかとなっている[大阪市文化財協会2009]。近隣で行われた既往の調査について、いくつかの事例を挙げる(図1)。調査地の東約50mでHN84-15・85-10次調査が行われた。両調査地では9～19世紀の遺構・遺物が確認され、当地における開発が平安時代に遡ることが判明した[大阪市教育委員会・大阪市文化財協会

1987b、大阪市文化財協会2009]。南約180mで行われたHN85-23・95-1次調査地は、平野郷の中心域に位置している。両調査で13世紀代の溝を検出し、溝が埋没した後の15～16世紀には、ほぼ同一の方位で道路状遺構が構築されていた[大阪市文化財協会1985・2009]。これらの遺構は座標北に対して西に約11°振っているが、長期にわたって町割の基準となる



図1 調査地位置図

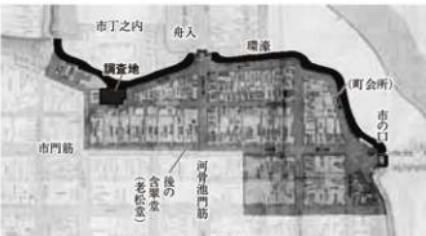


図2 市町と調査地
(1694(元禄7)年「平野大絵図」を改変)

方位であったと考えられている。南約80mのHN85-7次調査では、大坂ノ陣に伴う焼土層を含む計3枚の焼土層を確認し、豊臣期の埠列建物・土壤・井戸などを検出した[大阪市教育委員会・大阪市文化財協会1987a]。東約300mの遺跡東端で行われたHN10-1次調査では、幅6.0m以上、深さ1.2m以上の大規模な南北溝を検出し、その位置と規模から平野郷を囲む環濠と想定されている。出土遺物からは中世末(16世紀後葉)に比定され、近世初頭まで何度も掘削・埋戻しを繰り返していた状況が判明した[大阪文化財研究所2012]。

本遺跡について、今までの調査・研究にもとづく最大の関心事は、環濠の掘削時期とともに現在まで残る町割がいつ成立したのかである。HN84-15・85-23・95-1・96-16次調査などでは、大坂夏ノ陣に伴う焼土層で覆われた遺構の方が、「摂州平野大絵図」に描かれた町割と近似しており、16世紀後葉には町割を施工していた可能性が高い。よって、環濠の掘削と町割の施工は、ほぼ同時期に行われたか、環濠の掘削が町割の施工にやや先行したものと推測されている[大阪市文化財協会1985・1999・2009]。

以上のような歴史的環境に位置する当該地で、大阪市教育委員会が試掘調査を行ったところ、近世以前の遺構面や遺物包含層が地表下約0.8mの深さで確認され、これを受けて発掘調査を実施することになった。遺跡の残存状況が良好と判断された敷地の西寄りに、東西15m×南北8mの調査区を設定し、西区(西半部)→東区(東半部)の順に反転掘削して調査を始めた(図3)。西区は令和3年11月4日、東区は11月24日より重機掘削を開始し、両区とも後述する第2b層上面までを除去した。それ以下の掘下げと遺構の掘削は人力による。壁面の崩落を防ぐ目的で、第2b層より下層の調査は壁際に小段を設けながら行った。調査地の地層は主に中世～近世の人为堆積層で構成されており、近隣で層序の参考とし得る調査例はなく、試掘結果も実際の地層とは大きく異なっていた。このため、側溝を掘削しながら連続のよい整地層の層理面を探索し、後述の第2b・3・4b・5層の各層上面で遺構検出を行った。また、短期間で遺構が多く残る複数時期の地層を調査し、かつ、反転掘りを行う必要があったの

で、調査期間の不足が予想された。このため、第2b・3層上面で検出した近世の遺構については遺構断面の実測を省略し、岩相のメモだけを作成することによって調査日数の短縮を図った。このような方針で、適宜に地層・遺構の実測図作成ならびに写真撮影による記録保存を行い、出土遺物の捕集に努め、12月6日に現地での作業を終了した。

本報告で用いた方位は、現地で作成した街区図を大阪市デジタル地図(S=1/2500)に合成することで世界測地系座標に乗せており、座標北を基準とする。標高はT.P.値(東京湾平均海面値)で、本文中では「TP+○m」と略記している。なお、



図3 調査地位置図

遺物に関する記載は学芸員小田木富慈美が行った。

2) 調査の結果

i) 層序と各層出土の遺物(図4～8、図版1)

a. 層序

調査地の現況地形は、西半部が東半部に比して段をなして低くなっていたが、これは旧建物解体後の整地工事によってできたもので、本来平坦であったとみられる。西半部地表の標高はTP+5.8m、東半部は同+6.2mほどであった。

整地工事に伴う現代の整地層の下位で、地表下約2mまでの地層を以下の5層に大別した。岩相は南壁地層断面のそれに代表させて記す(図4～7)。

第1層：近代の整地層で、第1a層・第1b層に細分される。第1a層は炭・漆喰片を含むオリーブ褐色細礫混りシルト質細粒～中粒砂、暗灰黄色細礫・炭・漆喰片混りシルト～シルト質中粒砂からなり、層厚は10～20cmである。第1b層はオリーブ褐色細礫・炭・漆喰片・粗粒砂混りシルト質細粒～中粒砂からなり、層厚は10～40cmである。両層は北に向って層厚、上面標高がともに増大していく、環濠内側の土手に接続していく可能性が考えられた。

第2層：近世18～19世紀の整地層で、以下の第2a・2b・2c層に細分される。第2a層は主に東区に分布し、炭を含むオリーブ褐色細礫混り細粒砂質シルト、炭を含むオリーブ褐色細礫・シルト偽礫混りシルト質細粒～中粒砂からなる。層厚は10～15cmである。第2b層は調査区全域に分布し、炭を含むオリーブ褐色細礫混り細粒～中粒砂質シルトからなる。層厚は10～30cmである。第2c層は調査区全域に分布し、炭を含むオリーブ褐色細礫・シルト偽礫混りシルト質細粒～中粒砂からなる。第2b層上面で遺構検出を行い、後述のように18世紀前葉～19世紀末(明治時代)の遺構が検出された。このことから第2b層は18世紀前葉までに客土されたことになる。また、地層断面の観察から、第2a・2b・2c各層の上面から遺構が掘り込まれていたことがわかる。よって、第2b層上面で検出した遺構には同層より上位から掘り込まれたものが混在している。同様に第2c層上面から掘られた遺構は、次の第3層上面の遺構に含まれているはずである。

第3層：調査区全域に分布し、炭を含む暗灰黄色細礫・粗粒砂混り細粒～中粒砂質シルト、炭を含むにぶい黄褐色細礫混り細粒砂質シルトなどからなる整地層である。層厚は15～30cmである。本層上面で遺構検出を行い、17世紀中葉～末葉の遺構を検出した。このことから、本層は17世紀中葉までに形成されたことがわかる。

第4層：中世の地層で、古土壤の第4a層、整地層の第4b層に細分される。第4a層は黄褐色細粒～中粒砂からなり、層厚は10cmほどである。下位層の上部が土壤生成したものである。下位層に由来するであろう弥生土器

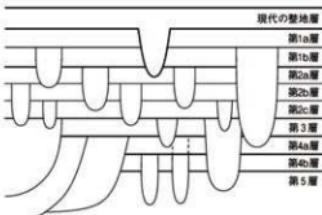


図4 地層と遺構の関係図



- 第1層 1: オリーブ褐色 (25Y4/3) 紆織・灰・津吹片混りシルト質粗粒砂・中粒砂
 2: 褐灰黄色 (25Y4/2) 紆織・灰・津吹片混りシルト・シルト質中粒砂
 第1b層 3: オリーブ褐色 (25Y4/4) 紆織・灰・津吹片混りシルト質粗粒砂・中粒砂
 第2c層 4: オリーブ褐色 (25Y4/3) 紆織・灰・津吹片混り粗粒砂質シルト
 5: オリーブ褐色 (25Y4/3) 紆織・灰・シルト・粗粒砂質シルト質粗粒砂
 第2d層 6: オリーブ褐色 (25Y4/3) 紆織・灰・シルト・粗粒砂質シルト質粗粒砂
 第3層 7: オリーブ褐色 (25Y4/3) 紆織・灰・シルト・粗粒砂質シルト質粗粒砂
 第4a層 8: 褐灰黄色 (25Y5/2) 紆織・灰・粗粒砂質シルト質粗粒砂・中粒砂
 9: にふ・黄褐色 (10YR4/3) 紆織・灰・粗粒砂質シルト質粗粒砂
 第4b層 10: 黄褐色 (10YR5/6) 紆織・中粒砂
 第5層 11: 黄褐色 (10YR5/6) 紆織・シルト質粗粒砂質シルト質粗粒砂
 第6層 12: オリーブ褐色 (25Y4/4) 粗粒砂・砂砾
 13: 褐オリーブ褐色 (25Y3/3) 紆織・灰・津吹片混りシルト質粗粒砂・中粒砂 (SK22)
 14: 褐オリーブ褐色 (25Y4/2) 紆織・灰・津吹片混りシルト質粗粒砂・中粒砂 (SK23)
 15: オリーブ褐色 (25Y4/3) 紆織・灰・シルト・津吹片混り粗粒砂・中粒砂質シルト
 16: オリーブ褐色 (25Y4/3) 紆織・灰・津吹片混り粗粒砂質シルト
 17: 黄褐色 (10YR5/6) 紆織・灰・シルト・粗粒砂質シルト質粗粒砂 (SP12)
 18: 褐灰黄色 (25Y4/2) 紆織・灰・シルト・粗粒砂質シルト質粗粒砂 (SD119)
 19: 褐灰黄色 (25Y4/2) 紆織・灰・シルト・粗粒砂質シルト質粗粒砂 (SD129)
 20: オリーブ褐色 (25Y4/3) 紆織・灰・シルト・粗粒砂質シルト質粗粒砂・中粒砂 (SD129)
 21: 褐灰黄色 (25Y4/2) 灰・シルト・粗粒砂・津吹片混り粗粒砂質シルト・シルト質粗粒砂
 22: にふ・黄褐色 (10YR4/3) 紆織・灰・シルト・偽粗粒砂・性土ブロック (シルト) 質粗粒砂質シルト (SK142)
 23: 褐灰黄色 (25Y4/2) 紆織・灰・津吹片混りシルト質粗粒砂
 24: 褐灰黄色 (25Y4/2) 紆織・灰・津吹片混りシルト質粗粒砂・中粒砂
 25: 褐灰黄色 (25Y4/2) 紆織・灰・津吹片混りシルト質粗粒砂・中粒砂
 26: 褐色 (10YR3/3) 深けた・中粒・灰多く含むシルト質粗粒砂・粗粒砂 (SK131)
 27: にふ・黄褐色 (10YR4/3) 紆織・シルト・偽粗粒砂・粗粒砂・中粒砂質シルト
 28: オリーブ褐色 (25Y4/4) 紆織・灰・津吹片混り粗粒砂・中粒砂 (SX141)
 29: オリーブ褐色 (25Y4/4) 紆織・灰・津吹片混り粗粒砂質シルト
 30: 褐灰黄色 (25Y4/2) 紆織・灰・シルト・偽粗粒砂・粗粒砂質シルト
 31: 黄褐色 (10YR5/6) にふ・黄褐色 (10YR4/3) 紆織・シルト・津吹片混り粗粒砂・中粒砂質シルト・粗粒砂
 32: 褐色 (10YR4/3) 紆織・粗粒砂質シルト質粗粒砂・中粒砂 (SK62)
 33: 褐色 (10YR4/3) 紆織・粗粒砂質シルト質粗粒砂・中粒砂
 34: にふ・黄褐色 (10YR4/2) 紆織・粗粒砂質シルト質粗粒砂
 35: 褐色 (10YR4/4) シルト質粗粒砂・粗粒砂 (SK62)
 36: 褐色 (10YR4/4) シルト・中粒・粗粒砂 (SK63)
 37: にふ・黄褐色 (10YR4/3) 紆織・粗粒砂質シルト質粗粒砂・中粒砂
 38: オリーブ褐色 (25Y4/4) 紆織・粗粒砂質シルト質粗粒砂・中粒砂
 39: オリーブ褐色 (25Y4/4) 紆織・中粒混じるシルト質粗粒砂 (第4層上面)
 40: にふ・黄褐色 (10YR4/2) 紆織・粗粒砂質シルト質粗粒砂・中粒砂
 41: オリーブ褐色 (25Y4/3) 紆織・灰・シルト・粗粒砂質シルト質粗粒砂・中粒砂
 42: オリーブ褐色 (25Y4/3) 紆織・灰・シルト・偽粗粒砂・粗粒砂質シルト (SK174)
 43: オリーブ褐色 (25Y4/3) 紆織・中粒・津吹片混り粗粒砂・中粒砂質シルト質粗粒砂 (SK174)
 44: にふ・黄褐色 (10YR4/3) 灰・中粒・粗粒砂・燒土混りシルト質粗粒砂 (SK174)

図 5 南壁地層断面図

や11世紀の遺物が出土した。第4b層は明黄褐色細織～中疊混り中粒～粗粒砂からなり、層厚は20cm前後で、下位層を母材として客土されていた。両層の上面で遺構検出を行い、第4a層上面では豊臣後期の溝状造構SX80が、第4b層上面では13世紀頃の小穴群が検出された。このことから、第4a層は豊臣後期までに形成された地層、第4b層は13世紀までには形成された地層ということになる。

第5層：オリーブ褐色粗粒砂～砂礫からなる河成層で層厚は30cm以上である。フォアセッタラミナの傾斜は主に東から西へ下がっており、本層堆積時の流向は東→西が基調であったことがわかる(図版1)。本層上面でも遺構検出を行ったが遺構は発見されなかった。また、本層から出土した遺物には時期がわかるものはなかったが、上位層から出土し、摩滅の顯著な須恵器3(8世紀代)や土師器12(9~10世紀代か)からは本層が堆積した年代を推測することができる(図8)。

b. 各層出土の遺物(図8)

側溝掘削中に第2層以下から出土した1は古漁戸の水滴で鉄軸を施す。体部は扁平で注口はごく短い。15世紀代であろう。

第3層出土のものとして2~4・7・9がある。2は土師器皿で、口縁部は「て」字状である。器壁は薄い。11世紀頃とみられる。3は須恵器皿の蓋である。口縁端部は丸い。8世紀末であろう。4は黒色土器B類の椀で、内外面をヘラミガキする。11世紀に属するとみられる。7は肥前磁器の染付

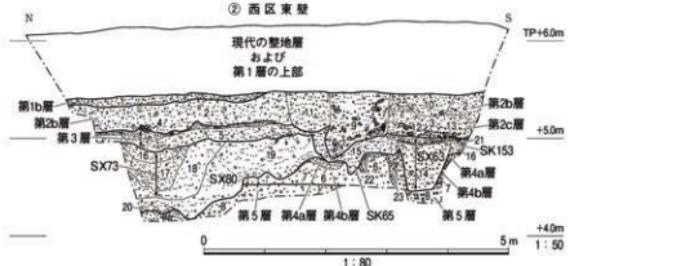


图6 西区南麓地层断面图

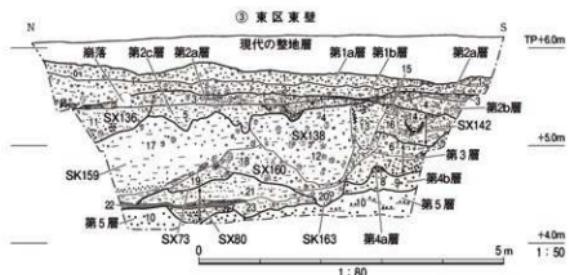


図7 東区東横地層断面図

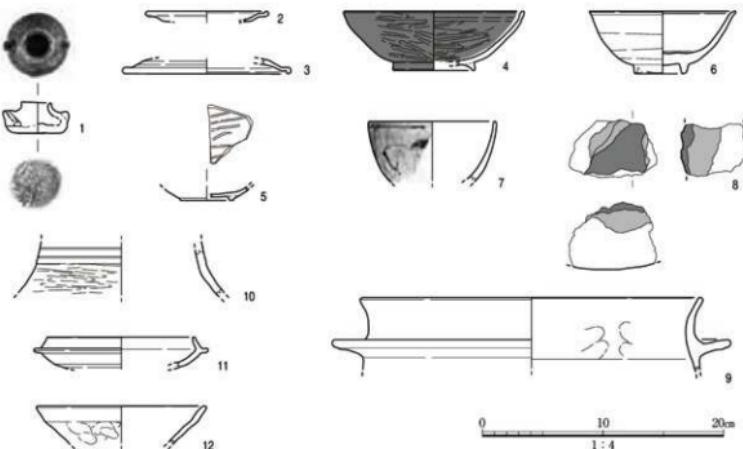


図8 地層出土遺物
第2層以下(1)、第3層(2~4・7・9)、第3層以下(5・6・8)、第4層(10~12)

碗で、一重網手文を施す。17世紀中葉であろう。9は土師器羽釜で、8世紀後半代のものであろう。7は第3層の年代を代表する遺物であるが、そのほかは下位層からの混入品である。また、側溝掘削中に出土し、第3層以下出土と判定したものに5・6・8がある。5は瓦器椀の底部で、内面には平行線状ヘラミガキを施し、高台は低い。13世紀代であろう。6は中国漳州窯産青花の碗で、内面に園線を施す。豊臣後期～徳川初期に属する。8は鋳造用鋳型の炉壁で、鉄鋳造に用いたものとみられる。平野環濠都市遺跡では中心部に当たる平野本町3丁目のHN04-1次調査で鋳造関連遺物が出土しており[大阪市教育委員会・大阪市文化財協会2005]、遺跡内における産業の立地を示す重要な資料といえる。

第4層から出土したものとして10~12がある。10は弥生土器壺の肩部で、外面をヘラミガキした後ヘラ描沈線文を施す。弥生時代前期後半であろう。11は須恵器杯身である。6世紀後葉に属する。12は土師器椀である。外面下半はユビオサエ痕が顕著である。これのみで年代の比定は困難であるが、9~10世紀代に属すると考えておく。これらはいずれも摩滅していて、本来、第5層に含まれていた遺物ではないだろうか。

ii) 遺構と遺物

a. 第4a層上面および第4b層内の遺構(中世～近世初頭: 図9~11、図版2)

調査区の北辺沿いに延びる東西性の溝状遺構(SX73・80)とその南に分布する比較的小規模な土壤状遺構と小穴などが検出された。大規模な土壤(SK81・159・174)もあったがこの3基は第3層上面から掘り込まれた遺構なので、次項で報告する。

SK100は調査区の西部、後述のSX80の底部で検出された土壤状の遺構である。東西1.4m、南北0.9m以上、深さ0.4mである。砂質の堆積物で埋められ、上部にはシルト偽縛が混じる。瓦器椀13・14が

出土した。いずれも底部内面に粗い平行線状ヘラミガキを施し、外面にヘラミガキは認められない。高台は低い。13世紀初頭～前葉に属するものである。

第4b層上面で、SX80の南には径0.2～0.8m程度の小穴・土壤状の遺構が散在していた。これらは第4b層上面ないし第4a層内から掘られた遺構である。いずれも砂質の堆積物で埋められていて、深さは0.3mほどのものもあるが、0.1m程度の浅いものが多い。遺物は細片が出土したのみであるが、時期が知れるものは13世紀代のSX100に近いものが多い。明確に柱筋が通り、建物を復元できるものはないかった。

SX80は第4a層上面で検出され、概ねE15°Sの方位をとって直線的に延びて調査区を横断していた。南北幅は最大で2.8m、深さは0.5mで、遺構の北側は検出していないが、平面・断面の形状から判断して溝の南部とみられる。細粒砂や細粒砂質シルトなどで埋められていた。西部では底部が赤褐色を呈して固化しており、滯水中の鉄分が沈着したものとみられた。SX73はSX80を切るやはり溝状の遺構で、幅は最大で1.3m、深さは0.3mである。砂質シルトで埋められていた。SX80を掘り直した可能性も考えられる。

SX80出土の遺物には土師器・瓦器・中国産磁器・肥前陶器・瓦などがある。15～18は瓦器梶である(図11)。いずれも内面に粗いヘラミガキを施し、外面にはヘラミガキがない。底部内面には平行線状ヘラミガキを施す。20は瓦器皿である。口縁部外面を雑なナデで仕上げている。21は土師器羽釜の口縁部である。器壁は薄く、端部は短く外反する。これらは13世紀初頭～前葉に属する。19は土師器皿である。体部外面にはユビオサエ痕跡が顕著で、口縁部はナデで整形している。15世紀代に属するもの

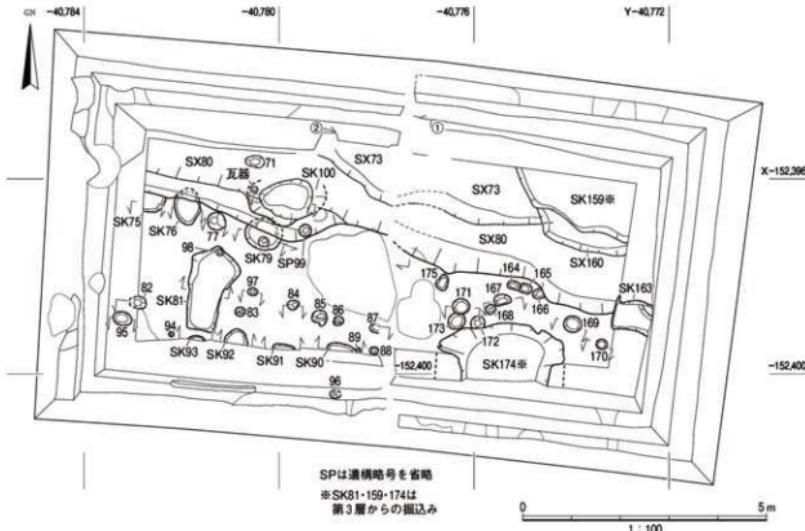


図9 第4b・4a層上面の遺構

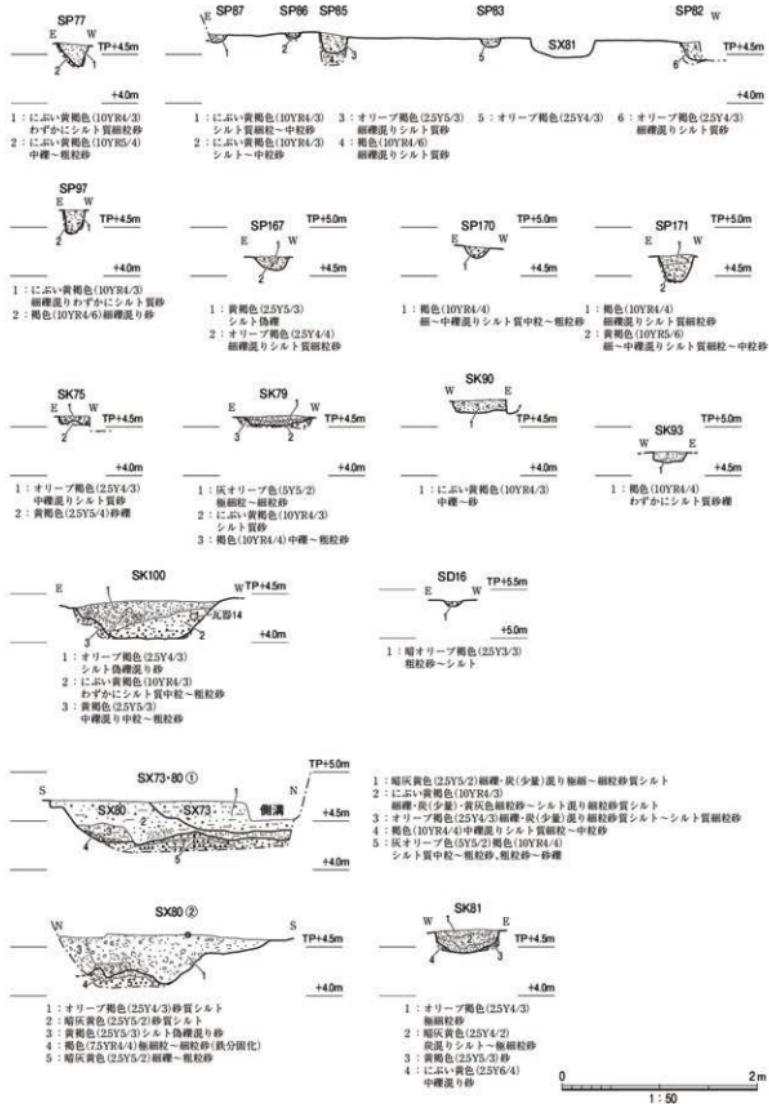


図10 遺構断面図

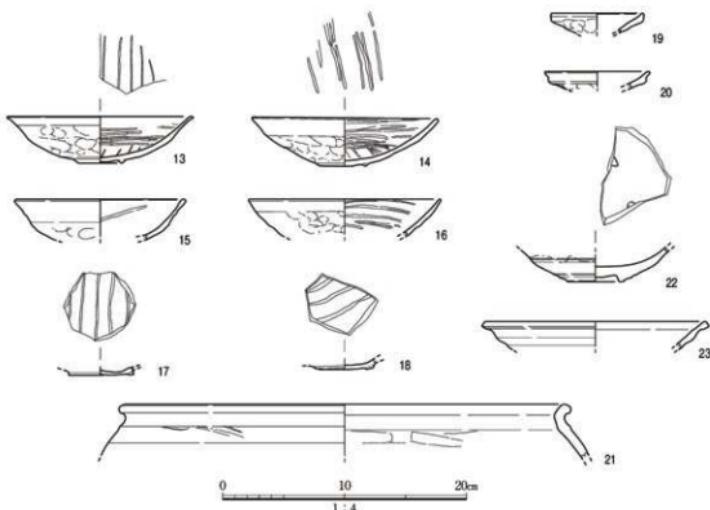


図11 第4b・4a層上面の遺構出土遺物
SK100(13・14)、SX80(15~23)

であろう。これら中世の遺物は下位の地層・遺構に由来するもので、SX80が掘削されたとき、機能していたときに混入したものと考えられる。22・23は肥前陶器の皿である。22の内面には胎土目痕が認められる。これらは豊臣後期に属する。SK73の出土遺物には陶化できるものはなかったが、土師器と瓦器に限られた。SX80が掘削された年代は15世紀以降に求められ、豊臣後期には埋められたものとみられる。

以上、第4層上面の遺構は、中世(13世紀以降)の段階ではSX100や小穴群があり、その後、北部に溝状遺構SX80が掘られた。SX80は豊臣後期(17世紀初頭)には埋められていた。豊臣期の遺構はSX80の他に検出されておらず、SX80も全体を検出したわけではなく、その機能は不明といわざるを得ないが、上述のように徳川期の環濠の位置に近く、方位もほぼ同じであることから豊臣期の環濠の一部を捉えた可能性があることを指摘しておく。

b. 第3層上面の遺構(近世前半:図12・13、図版2・3)

調査区の全域で土壤状の遺構が検出された。南西部にやや集中する傾向が認められたが、特に規則性は見出せなかった。遺物が出土して年代が明確にわかる遺構を中心に報告する。

SK39~42は調査区西端にあって、重複関係からSK41→SK42→SK40→SK39の順に古い。いずれも平面形は円形を基調とした不整形で、深さは0.2~0.3m程度である。シルト~中粒砂で埋められていた。SK39から出土した遺物として30~32を掲載した。30は肥前磁器の染付碗底部、31は土師器培塿D類である[難波洋三1992]。大坂城下町周辺で通常出土する培塿よりも口縁部下端の湾曲が強く、摘みが大きく突出するのが特徴である。32は橘唐草文軒平瓦である。以上は17世紀後~末葉に属する。

SK40からは33~36が出土した。33は肥前磁器の染付碗である。外面には草花と竹の文様を施す。34は肥前磁器の染付合子である。35は肥前陶器の皿で、刷毛目文の上に二彩で葉を描く。36は巴文軒丸瓦である。これらは17世紀後葉に属する。また、SK42からは17世紀中葉以降の肥前陶器・肥前磁器などが出土している。

SX70は調査区の南西隅で検出され、東西1.5m以上、南北0.3m以上、深さ0.1mで、平面が方形基調の遺構の一部を検出したものとみられる。シルト質の砂で埋められていた。出土品として38～40を掲載した。38は肥前陶器で内野山系の皿である。底部内面は釉剥ぎする。39は肥前磁器の染付碗である。外面には格子文と草文を描く。40は丹波焼の擂鉢である。口縁部は断面三角形を呈する。以上は17世紀後～末葉に属する。

SK81は調査区の南西部にあり(図9)、平面形は不整な矩形で、東西1.0m、南北1.8m、深さ0.3mを測り、シルト～砂で埋められていた。41～44が出土した(図13)。41は肥前陶器の呉器手碗である。体部は緩やかに湾曲する。42は肥前磁器で外面青磁釉の合子である。43は軟質施釉陶器の灯明皿である。44は土師器焰焰D類で、摘み部分に2孔を穿つ。以上は17世紀後～末葉に属する。

SK159は調査区北東隅で検出され、前述のSX73・80を切っていた(図9)。出土した24は中国漳州窯産青花の碗で、内面には圈線を施す。25は土師器皿で、口縁部は直線的に伸び、軽く外方へつまんでいる。外面にはナデを施す。これらは豊臣後期に属するもので、第3層上面の遺構の年代よりは古く、下位のSX73・80から混入した可能性がある。

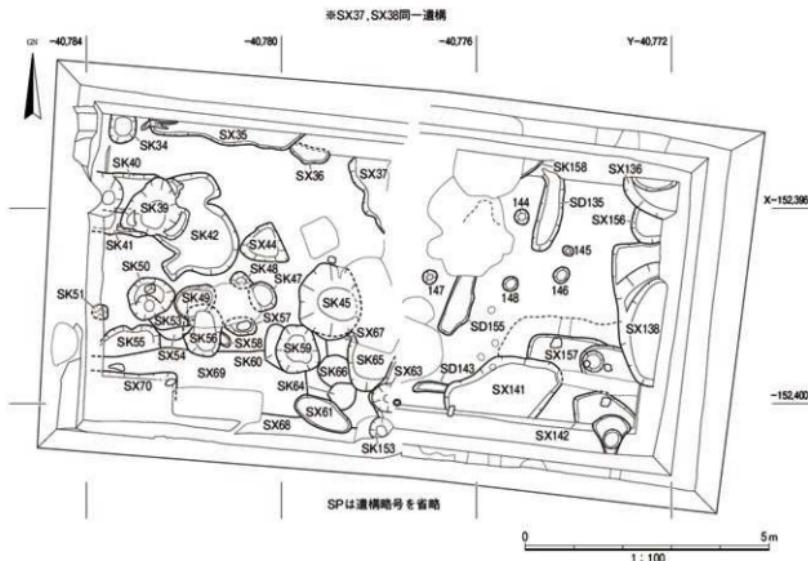


図12 第3層上面の遺構

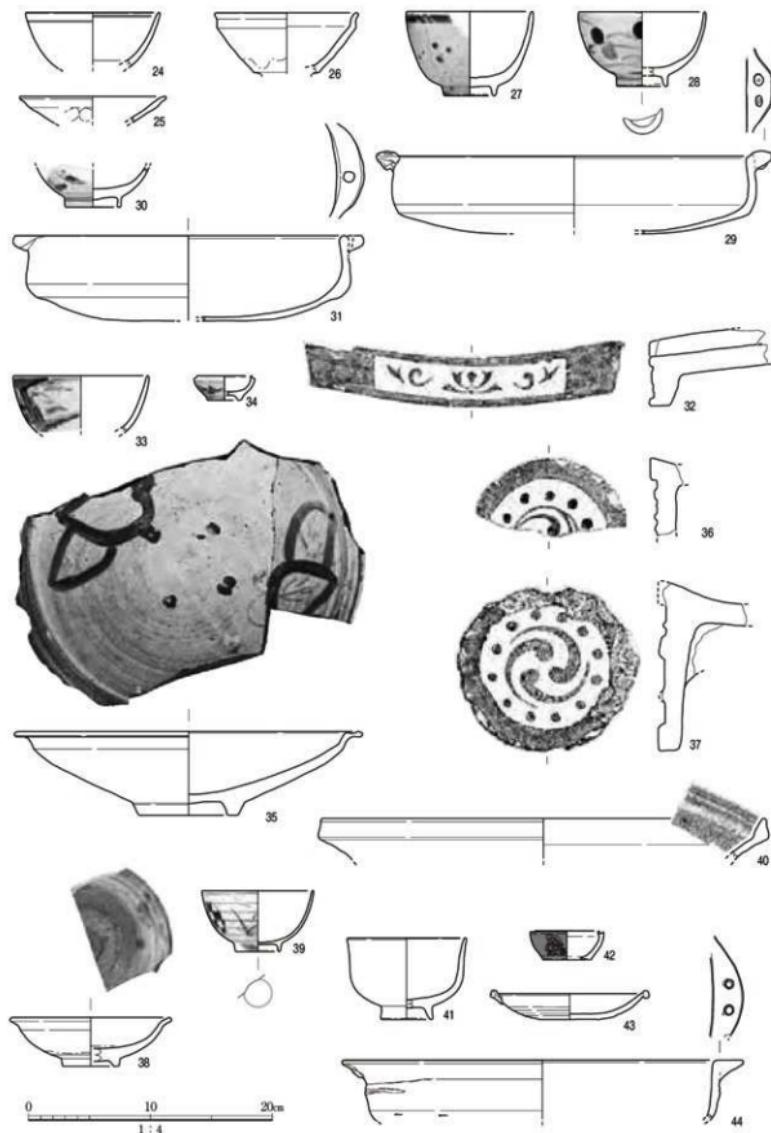


図13 第3層上面の遺構出土遺物
SK159(24・25)、SP144(26)、SK174(27)、SK158(28・29)、SK39(30~32)、SK40(33~36)
SK56(37)、SX70(38~40)、SK81(41~44)

SK174は調査区東南部で検出された土壙で、平面形は梢円形基調とみられ、東西2.6m、南北1.2m以上、深さ0.5mである(図9)。砂質シルトなどで埋められていた。肥前磁器の染付碗27が出土し、17世紀中葉頃の遺構である。

他に主要な遺物としてSP144出土の26、SK158出土の28・29、SK56出土の37を掲げた。26は瀬戸美濃焼天目碗で、器高はやや低い。豊臣後期以前のもので下位層からの混入品であろう。28は肥前磁器の染付碗である。外面には丸文を施す。17世紀後～末葉に属する。29は土師器焰烙D類で、摘みに貫通する2つの孔を有する。31・44に類似する。37は巴文軒丸瓦である。また、図化はしなかったが、SK56からは17世紀末～18世紀初頭の肥前陶器・肥前磁器、SX136からは17世紀中葉～後葉頃の土師器・肥前磁器などが出土している。

以上、第3層上面の遺構は17世紀中葉～18世紀初頭頃に属する。建物を復元できる柱穴や礎石などは検出されず、土壤状の遺構が規則性なく分布している状況から、建替えに先立って町屋を解体し、不要物を埋めて処分した際の状況を残したものと判断される。

c. 第2b層上面の遺構(近世後半：図14～17、図版3)

調査区内で検出された遺構群は、南北性の溝2条(SD16・119)を介して東区・中区・西区の三区に分割することができる。1694(元禄7)年の「平野大絵図」の当該街区には、南の小路に面し、南北3本の敷居境で四つの敷地に分割された様子が描かれている(図2)。描かれた敷地の大きさと、検出された2条の溝で分割された三つの敷地間口の差異はよく似ており、敷地境として溝が設けられたものとみられる。したがって、三区画はそのまま別々の町屋の敷地と捉えることが可能である。いずれの敷地も南側の小路に間口を開くものとみてよい。以下、西区から東区の順で主要な遺構を報告する。

SD16は西区と中区を画する。幅0.2m前後、深さは0.1m以内で、方位はN3°Eである。埋土は粗粒砂～シルトで、部分的に水流によって堆積したことがわかった。また、両側に木板を立て溝肩の土留めとしていた形跡が残っていた。排水溝であろう。この溝の同じ位置には土管を埋めた近代の溝が重なっており、敷地境・排水溝としての機能が踏襲されたことがわかる。

以下は西区の遺構である。SB1はSD16の西1.2mを南北に連なる柱列である。北から南へSP01～04が1.4～1.7mの間隔をおいて並ぶ。それぞれの柱穴は直径50cm程度で、深さが0.1～0.2mほどと浅いので礎石を抜き取った跡とみられる。西へ展開する建物、もしくは廻とみられるが確認はできなかつた。柱穴から時期がわかる遺物は出土しなかつたが、建物の下位に重なる大型の落込みSX26からは18世紀後半頃とみられる陶磁器が出土していて、建物の年代はそれより新しいものとなる。

SK09はSB1の北にあり、東西に長軸をもつ土壙である。東西2.4m以上、南北1.0m、深さ0.4mで、シルト質砂で埋められていた。陶磁器や土製品など雑多な遺物が出土し、ごみを捨てた土壤とみられる。近代以降に木の根が入り込んで特に東側を擾乱していた。59は肥前磁器の染付碗で、器壁は厚く、外面には丸文を施す(図16)。60は備前焼の灯明皿である。61は面模で、顔形である。62～64は芥子面子である。62は傘、63は東屋、64は人面である。65は硯である。以上は19世紀前葉に属する。

中区はSD16・119によって画され東西幅(敷地の間口)は約7m(4間弱)である。南西に井戸(SE23)、北東に埋甕(SX134)、南部に鉢を伏せて埋納した遺構(SK19)があり、そのほかは不整形の土壤状の

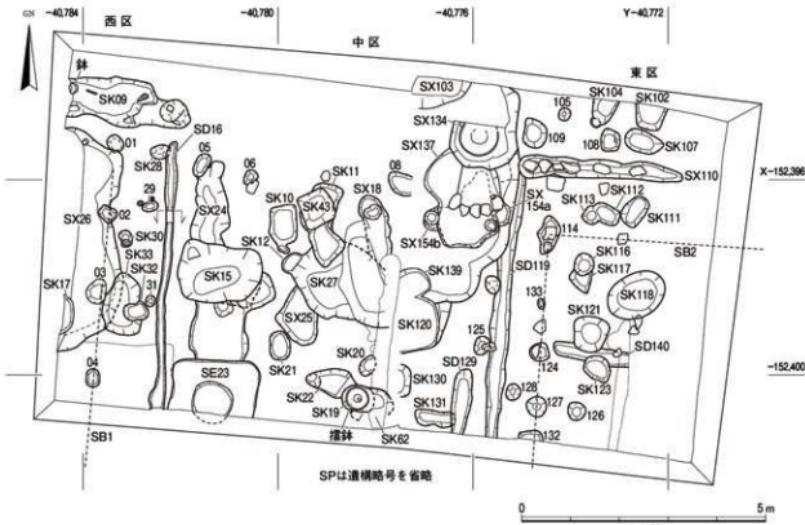
遺構が目立つ。

SE23は平面が隅丸方形の掘形をもつ井戸で、東西1.8m、南北1.1m以上、深さ1.2m以上ある。中央に直径0.8mほどの井戸側の痕跡がみられた。井戸側は残っておらず、抜き取られたものとみられた。19世紀前葉の遺物が出土している。

SX134は直径1.4mの掘形に、直径0.8mの肥前陶器の大甕を据えていた。水甕であろう。その南にはSX137があって、0.3mほど掘りくぼめた内部を三和土で固め、中央をさらに一段低くした南部に扇形に五石を配して段をなしていた。水甕に関連した水場の遺構とみられる。出土遺物から19世紀第2四半期から明治時代初期の遺構とみられる。

SK19は直径0.7mほどの掘形に、鉢86を倒位に据えていた。水琴窟のような遺構であろうか。84は中国産青花の鉢で、内外面に仙芝祝寿文を施す(図17)。85は肥前磁器の染付広東碗である。86は壠産とみられる鉢である。87は水波文軒平瓦で、15世紀頃のものであろう。88は鬼瓦の基部である。以上は瓦を除き19世紀前半に属する。

SK10~12・43は中央部にある0.3~0.8mほどの小~中規模の土壙である。いずれもシルト質砂~砂で人為的に埋められていた。SK10から出土した67は関西系磁器の染付広東碗で、内面には崩れた「寿」字を施す。SK11から出土した66は肥前磁器の小杯で(図16)、外面には赤絵で「いせ五 小町紅」と記されていて、1833(天保4)年刊の『京都商人買物独案内』にある京都祇園の伊勢屋五三郎を指すとみられる。19世紀中葉頃のものである。SK12からは雑多な遺物が出土し、そのうち68~79を掲載した。68は瀬戸美濃焼磁器の染付端反碗である。69は肥前系磁器の染付広東碗である。70は肥前磁器の染付



大皿で、底部にはハリ支え痕が明瞭に残り、焼継している。71は瀬戸美濃焼磁器の染付小杯である。72は肥前磁器の染付皿である。73は関西系磁器の染付鉢で網手文を施す。74は瀬戸美濃焼陶器の灰釉ひだ皿である。75は関西系陶器の火入れで平面が六角形を呈し、梅花文を施す。76・77は関西系陶器の灯明受皿・灯明皿である。78は土師器の焰烙D類で、口縁部は短く体部が薄い。79は輪羽口で、鎌治に使用したとみられる。以上は19世紀第2四半期～第3四半期初頭を中心とする時期のものであろう。SK43出土の遺物は48～58を掲げた(図15)。48～53は肥前磁器の染付である。48は広東碗で、高台は低い。底部外縁には焼継印がある。49は「ハ」字状高台の碗である。50は碗蓋で帆掛け船の文様を描く。51は筒茶碗である。52は山水文を描く皿で、蛇の目凹形高台を有する。53は蜻唐草文を施す蓋付鉢である。54はミニチュアの椀である。55・56はミニチュアの羽釜蓋と身である。57は福助の土人形、58は馬の土人形である。以上は18世紀後葉～19世紀のごく初期に属するものである。

中区の遺構には建物跡はなく、井戸・埋甕等のほかは乱雜に掘られた土壤状の遺構が多かった。建物を解体し、不要物を埋めた状態で残ったものであろう。北部は遺構の分布が希薄で、裏庭的な空間だったのではなかろうか。

SD119は中区と東区を画する溝である。幅は0.4m、深さは0.1m前後で、方位はN3°EでSD16と平行する。丹波焼擂鉢・備前焼甕・肥前磁器碗など、18世紀中葉から後半の特徴をもつ遺物が出土した。この溝の東が東区で、やや南に偏して建物SB2があり、その北に石垣の残欠SX110があって、全域に比較的小型の土壤状遺構が散在していた。

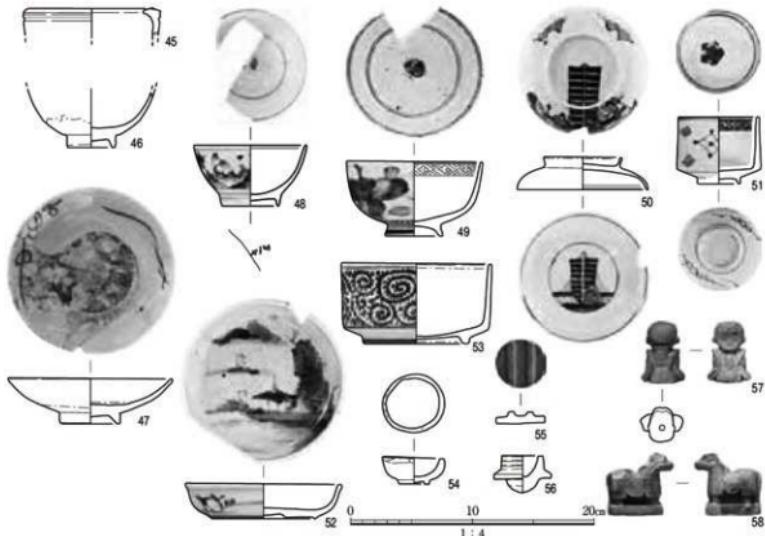


図15 第2b層上面の遺構出土遺物(1)
SK121(45)、SK118(46・47)、SK43(48～58)

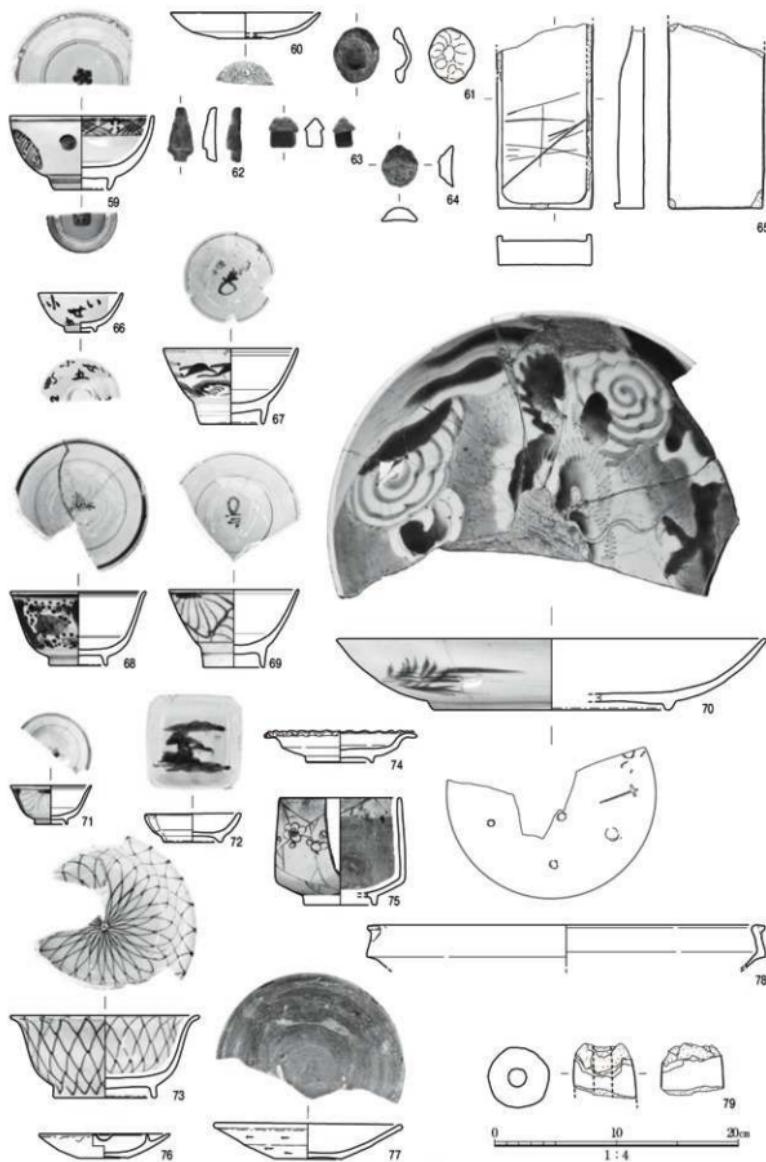


図16 第2b層上面の遺物(2)
SK09(59~65)、SK10(67)、SK11(66)、SK12(68~79)

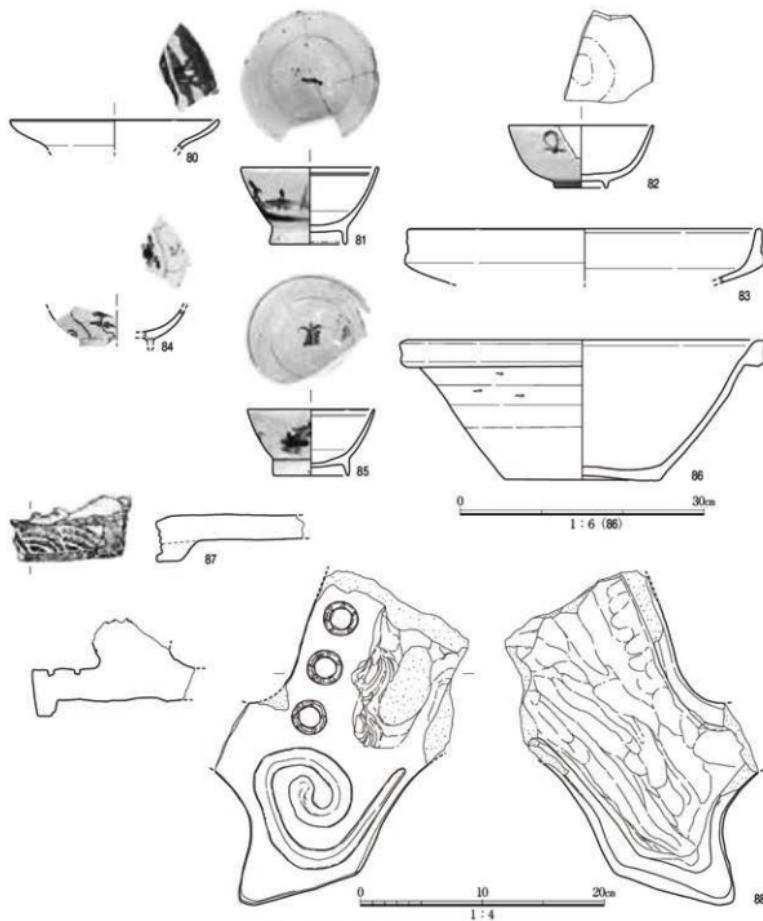


図17 第2層上面の遺構出土物(3)
SK15(80・81)、SK17(82・83)、SK19(84~88)

SB2は礎石建物の北西部を捉えたもので、SP114を北西隅として南と東へ礎石やその抜取り穴が並ぶ。西面は4.2m以上、北面は3.4m以上で、それぞれ調査区外へ続く。

SX110はSB2北面の1.5m北にあり、幅0.5m、長さ3.4mの溝状の平面形をもち、深さは0.2mである。内部にはおよそ30cm内外の石が六石据えられていた。面は揃えられておらず、石垣の根石部分で抜き取られなかった部分が残ったものであろう。したがって、石垣の面がどちら向きかはわからないが、おそらくはSB2側を高くする低い石垣があったのではないだろうか。土師器火入れ・肥前磁器

碗が出土し、その特徴から18世紀前葉以降の遺構とみられる。

土壌状の遺構は平面の規模が0.5~0.8m程度のものが多く、いずれも人為的に埋められていた。配置に規則性がみられるものはない。SK118は平面が梢円形で、東西1.2m、南北0.9m、深さ0.2mであった。出土品として肥前陶器碗46・肥前磁器染付碗47を掲載した。47は底部内面を蛇の目釉剥ぎする。これらは17世紀後半に属し、下位層からの混入品であろう。SK121は平面が隅丸方形を呈し、東西0.7m、南北0.8m、深さ0.2mである。土師器・肥前陶器・肥前磁器・関西系陶器など雑多な遺物が出土し、その特徴から18世紀中葉頃の遺構とみられる。そのうちの45はベトナム中部産陶器長胴瓶の口縁部である(図15)。外面には2条の沈線が巡る。口縁端部は内側へ屈曲し、端部は鋭い。口縁端部の特徴から豊臣後期以前とみられ、下位層からの混入品であるが、本遺跡では珍しい出土例なので掲載した。その他の土壌状の遺構では、SK111から土師器火入れ・肥前磁器碗・関西系陶器碗など18世紀後半の遺物が出土し、SK112からは関西系陶器土鍋・土人形など19世紀代の遺物が出土した。

以上、第2b層上面で検出した遺構の年代は18世紀前葉から19世紀代にかけてで、一部には明治時代の初期にまで降るものもある。ただし、第2b層より上位の地層から掘り込まれた遺構も同じ面で検出しているので、この時期幅が複数の遺構面の時期を含んでいることを断っておく。

3)まとめ

本調査では中世13世紀頃のSX100や小穴群が検出された。この時期の遺構は調査地周辺の市町・野堂町と西脇町周辺にやや集中する傾向がみられる。市町・野堂町地区で同時期とみられる遺構を表1にまとめた。HN84~15のSD901、HN85~23のSD02、HN10~1のSD302は条里制とは異なる方位をもち、農地とは異なる土地区画の原則下にあることは明らかであろう。その方位は後代の遺構に踏襲され、環濠成立以前の地割りに規制を与えたものと考えられている。

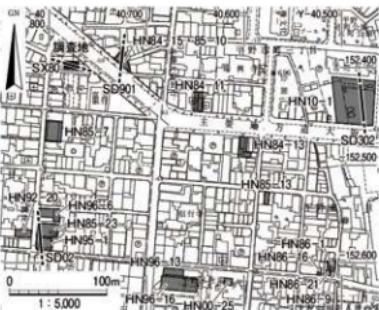


図18 13世紀遺構の方位

表1 調査地周辺の13世紀頃の遺構

地区	調査	遺構	方位	幅(m)	深さ(m)	時期	その他
市町	HN84~15・85~10	SD901	N9° E	1.8	0.5	平安時代より新しく大坂本町寺廟より古い	構の方針は17世紀まで踏襲される
市町	本調査					13世紀初頭~	SX100・小穴群等
市町東方	HN10~1	SD302	N6~8° W	10(復元値)	2(復元値)	12世紀後半~13世紀前半	同じ方位で豊臣期環濠
野堂町	HN85~23・95~1	SD02	N11d° W	2.8	0.6	13世紀前半	方位は室町時代の道路状遺構に踏襲
野堂町	HN96~16					13世紀後葉~15世紀	井戸・土壌など多数
西脇町	HN82~10					9~15世紀	包含層から遺物多数
西脇町	HN87~5					平安~15世紀	柱穴・土壌

ただし、SD901・SD302の方位は近いものの、これらの遺構間に何らかの規則性を見出すことはできず、広範囲に及ぶ地割り等は成立していないものと考えてよいのではないだろうか。

近世初頭の豊臣後期では、溝状遺構SX80を検出し、その方位が徳川期の環濠のそれに近いことから豊臣期の環濠である可能性を指摘した。この遺構は、HN10-1のSD201と同様に豊臣後期には埋められており、豊臣秀吉が大坂城下町建設に伴って平野の環濠を埋めたとする史実に合致する。ただし、全体を検出できていないもののSX80の規模は環濠に相応しいとはいはず、問題も残る。この点は今後の調査の進展に期待したい。

近世徳川期では19世紀までの町屋に関する遺構が検出された。特に第2b層上面では溝で区画された敷地割りが残っていて、1694(元禄7)年の「摂州平野大絵図」に描かれた様子と共通することがわかった。南側の小路や周辺の街区も絵図と一致しており、これらが徳川期から現代まで不变であることが再確認できた。

引用・参考文献

- 大阪市教育委員会・大阪市文化財協会1984、「平野環濠遺跡(HN82-10)発掘調査略報」:『昭和57年度大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』、pp.69-75
- 1987a、「田口ハイツ建設工事に伴う平野環濠都市遺跡発掘調査(HN85-7)略報」:『昭和60年度大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』、pp.89-99
- 1987b、「松本マンション新築工事に伴う平野環濠都市遺跡発掘調査(HN85-10)略報」:『昭和60年度大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』、pp.100-105
- 2005、「平野環濠都市遺跡発掘調査(HN04-1)報告書」:『大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書(2002・03・04)』、pp.289-296
- 大阪市文化財協会1985、「宮城氏による敷地造成に伴う平野環濠跡発掘調査(HN85-23)略報」
1999、「第IV章 平野環濠都市遺跡の調査(HN96-13・16)」:『大阪市埋蔵文化財発掘調査報告-1996年度-』、pp.45-72
- 2009、「第V章 平野区平野環濠都市遺跡の調査」:『大阪市南部遺跡群発掘調査報告』、pp.93-132
- 大阪文化財研究所2012、「平野環濠都市遺跡発掘調査報告」
- 難波洋三1992、「徳川氏大坂城期の焰烙」:『難波宮址の研究』第九、本文、pp.373-400

東区東壁地層断面



西区南壁地層断面



東区第5層のラミナ
(西から)



西区第4b層上面全景
(北西から)



東区第4b層上面全景
(西から)



西区第3層上面全景
(東から)



東区第3層上面全景
(西から)



西区第2b層上面全景
(北西から)



東区第2b層上面全景
(西から)



平野区長吉出戸八丁目1における建設工事に伴う
長原遺跡発掘調査(NG13-5)報告書

調査個所 大阪市平野区長吉出戸8丁目1番
調査面積 230m²
調査期間 平成25年10月1日～11月26日
調査主体 公益財団法人 大阪市博物館協会 大阪文化財研究所
(現:一般財団法人 大阪市文化財協会)
調査担当者 事務局次長 南秀雄、櫻田小百合

1) 調査に至る経緯と経過

調査地は長原遺跡東北地区に位置する(図1)。調査地の南側に位置するNG06-4次調査で弥生時代後期の堅穴建物が検出されており、NG06-3次調査では弥生時代中期の方形周溝墓のはか古墳時代中期の堅穴建物および掘立柱建物が検出されている[大阪市文化財協会2008]。

調査は平成25年10月1日から準備工にとりかかり、同10日から機械掘削を開始した。当初は東西20m、南北10mの200m²の調査区を設定して調査を開始した(図2)。その後、調査地西半部において古墳を検出したため、大阪市教育委員会と協議して、古墳の規模を確認する目的で調査区南西部を一部拡張して調査を行った。機械掘削は後述の第4層上部まで行い、これ以下の第6a層までは人力と重機を併用して掘り下げた。その後、実測図の作成および写真撮影による記録作業を行いながら、第7層以下第10層までの地層および構造を人力により掘り下げた。同11月26日には埋戻しや資材・機材の撤収を行って現場作業を完了した。

本報告書の作成は令和3年9月～令和4年8月にかけて行い、一般財団法人大阪市文化財協会調査課長高橋工と同課課長代理大庭重信、同課学芸員小田木富恵美が分担して執筆した。また、本項と次項 i) は櫻田(現大阪市教育委員会文化財保護課)が作成した調査完了報告に高橋が加筆して作成した。文責は各担当個所の末尾に示す。

また、基準点はMagellan社製ProMark3により測位し、本報告で用いた方位は世界測地系に基づく座標北を基準とした。標高はT.P.値(東京湾平均海面値)でTP+○mと記した。(櫻田・高橋)

2) 調査の結果

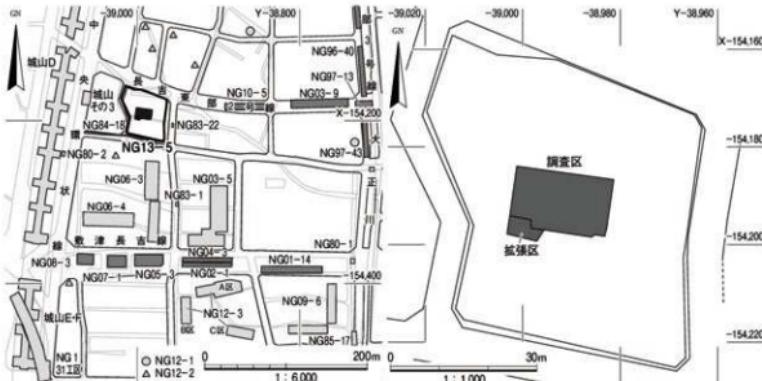


図1 調査地と周辺における既往の調査

図2 調査区位置図

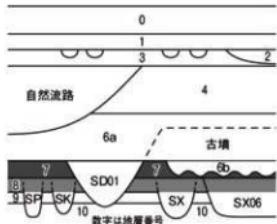


図3 地層と遺構の関係

ではこれが見られ、南壁ではなかったことから、鋤溝の方向は東西基準であったと推量される。また、鋤溝の埋土は2種類(図4の鋤溝A・B)あり、本層の耕起によって破壊された作土層が2層はあったことがわかる。

第2層：オリーブ灰色(10YR4/2)わずかに中疊～極粗粒砂混り極細粒砂質シルトからなる作土層である。調査区の北壁付近にのみ分布し、層厚は最大で14cmであった。

第3層：オリーブ灰色(10YR4/2)・灰オリーブ色(5Y5/2・7.5Y4/2)わずかに細疊～極粗粒砂混り細粒砂質シルトからなる作土層である。層厚は最大33cmで、南部で厚く、北部では上位層の耕起によって層厚を減じ、尖滅していた。

第4層：オリーブ灰色(10Y4/2)・灰オリーブ色(5Y4/2)・暗黄褐色(2.5Y4/2)を主たる土色とするわずかにシルト質細粒砂・細粒～極細粒砂質シルトからなる氾濫性堆積層で、層厚は38～107cmであった。地層断面の観察によれば、調査区の西半部を、本層の上面を下刻して南東→北西方向に向かう自然流路があった。本層はNG4層に対応し、概ね平安時代から鎌倉時代に属するものとみられる。

第5層：黄褐色(2.5Y5/3)細疊質極粗粒砂～粗粒砂からなる。上位層が堆積する際に大部分が削剥されたようで、南壁地層断面でのみ観察された。層厚は最大で8cmであった。NG5層の水成層に対応し、奈良時代に属するものとみられる。

第6a層：灰色(7.5Y4/1・5Y4/1)・黄灰色(2.5Y4/1)・灰オリーブ色(5Y4/2)を主たる土色とするシルトからなる湿地性の堆積層である。層厚は23～112cmであった。NG6層の水成層に対応し、概ね飛鳥時代から奈良時代に属するものとみられる。

第6b層：黒色(7.5Y2/1)・暗オリーブ灰色(2.5GY4/1)を主たる土色とする、水成のシルト層と第7層に由来する偽疊からなる。層厚は最大で22cmであった。第6a層が堆積する以前に耕作が行われ、下位の第7層も一緒に耕起されたものとみられる。NG6層の作土層に対応し、概ね飛鳥時代から奈良時代に属するものとみられる。

第7層：黒色(7.5Y2/1・2.5GY2/1・10Y2/1)・暗オリーブ灰色(5GY3/1)極細粒砂質シルトからなる古土壤である。層厚は最大で16cmであった。NG7B層に相当し、弥生時代後期から古墳時代中期に属するものとみられる。本層上面で古墳時代中期の古墳1基を検出した。

第8層：オリーブ黑色(7.5Y3/1)・暗緑灰色(10GY4/1)・黒色(2.5Y2/1)極細粒砂質シルトからなる古土壤である。層厚は14～26cmであった。NG8B層に相当し、弥生時代中期に属するものとみられる。

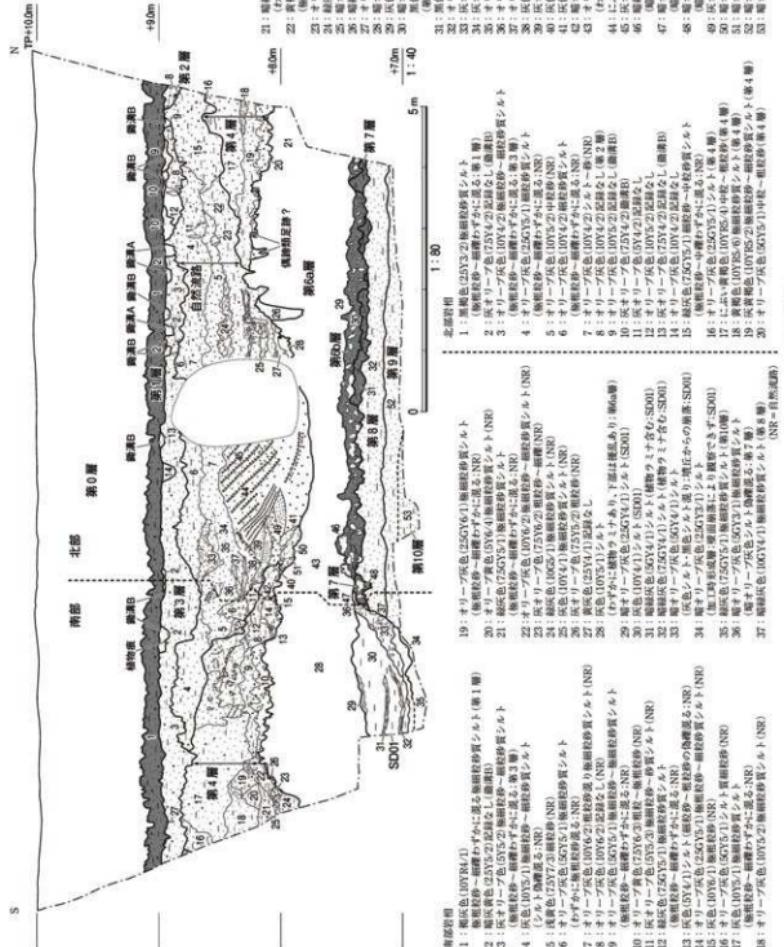


圖4 西摩地羅斯前盾

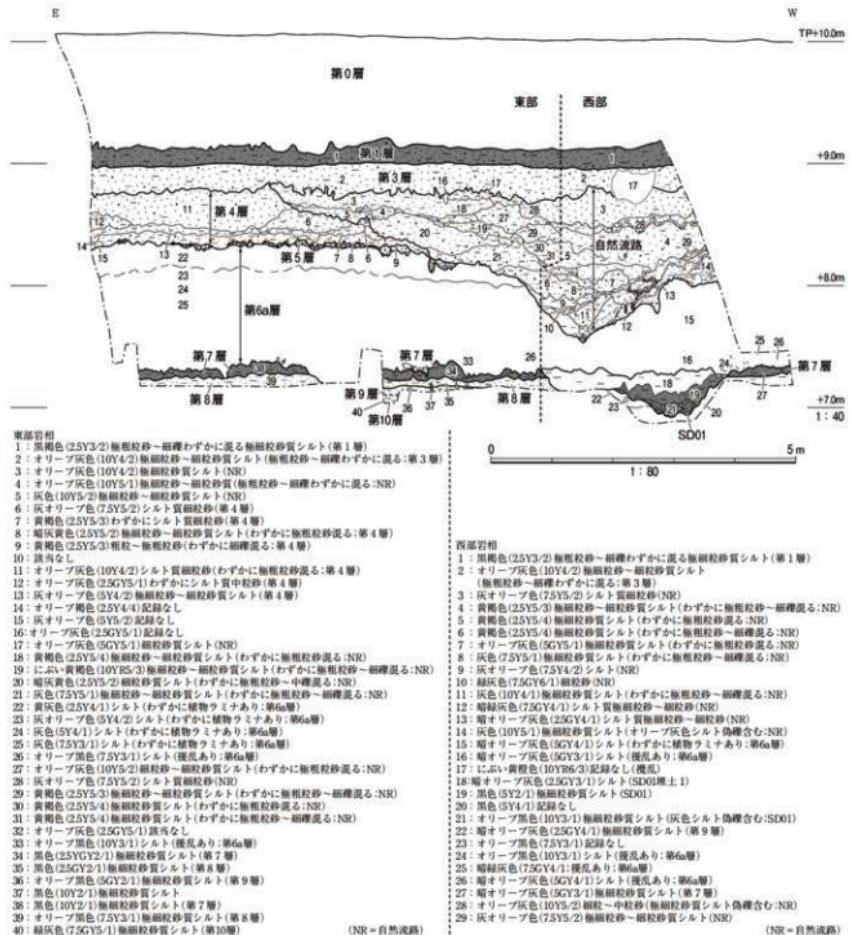


図5 南駿地層断面図

本層上面の南壁際で小穴3個を検出したが、遺物は出土せず、時期は不明であった。

第9層：暗オリーブ灰色(2.5GY3/1)・オリーブ黒色(5GY2/1)極細粒砂質シルトからなる。第10層上部に形成された暗色帶構成層で、層厚は14~20cmであった。NG9A層に相当し、概ね繩文時代晚期から弥生時代前期に属するものとみられる。本層上面で掘立柱建物・土壙・溝などを検出した。遺構の年代は弥生時代中期に取り、本来は第8層内から掘り込まれたものである。

第10層：暗オリーブ灰色(5GY4/1)・緑灰色(7.5GY5/1)極細粒砂質シルトからなり、層厚は15cm以上であった。NG9B層に相当し繩文時代晚期に属するものとみられる。(櫻田・高橋)

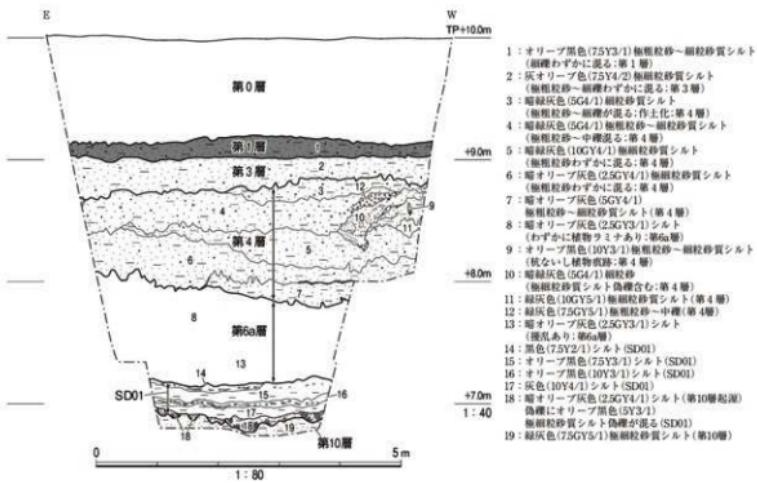


図6 拡張区南壁地層断面図

ii) 遺構と遺物

a. 弥生時代の遺構と遺物(図7~15、図版2~4)

第8層を除去した第9層の上面で遺構検出作業を行い、柱穴・土壤・溝などの弥生時代の遺構を確認した(図7)。これらはいずれも第8層内の遺構である。

SB01 調査区西端で検出した柱穴群からなり、南北のSP14・15・19、東西のSP12~14が並び、1棟の掘立柱建物を構成すると考えられる(図8)。各柱穴の平面形は直径0.4m前後の円形、検出面からの深さは0.3~0.4mある。いずれも断面で柱痕跡を確認し、柱径は7~15cmに復元される。また、東西辺のSP12~14は、地震による水平断層でTP+6.9mを境に上半が東側へ最大26cmずれていた。柱間隔は南北辺が1.2~1.3m、東西辺が0.6mと1.0mある。SP19より北側には延びないことから、東西棟の梁間2間(2.5m)、桁行2間以上(1.6m以上)の掘立柱建物に復元できる。柱穴内から遺物は出土しなかった。

SB02 調査区東部で検出した柱穴群(SP16~18)からなり、後述するSX06完掘後に確認した(図8)。調査期間の都合上、平面の記録と柱穴半截による断面観察・写真撮影のみを行い、断面実測図は作成していない。柱穴の平面は概ね円形で、直径0.3~0.4mある。平面で記録を行ったのみであるが、この東側にも一連の柱穴の可能性がある遺構を複数確認しており、棟が南東~北西方向の梁間2間(2.3m)、桁行3間(4.1m)の掘立柱建物に復元できる。柱穴内から遺物は出土しなかった。

SK10~12 調査区北東部で検出した、深さ0.1m程の浅い土壤で、いずれも埋土下半に掘削時に生じた偽縫を含むことから人為的な遺構と判断されるが(図9)、遺物は出土せず、性格は不明である。平面形はSK10が一辺0.6mの方形、SK11がSK10の東隣で軸を捕えた長軸1.1m、短軸0.8mの長方形、SK12が0.6×0.9mの楕円形で、SK11の南側でこれと重複する。

SK07 調査区北西端で検出した南北に長い不整形の土壤である。南北長2.7m以上、東西幅0.9~

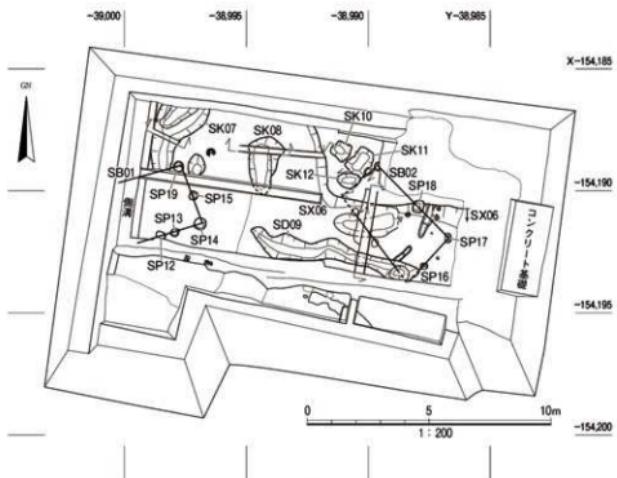


図7 第9層上面平面図(弥生時代)

1.8m、深さは0.1~0.3mあり、北側ほど幅が広く、深さも深い。埋土は下半に掘削時に生じた偽礫を多く含むオリーブ黒色シルト質細粒砂(図9の2層)、上半は暗色化したシルト質極細粒~細粒砂(同1層)が堆積していた。出土遺物は弥生土器の小片が出土し、1・2を図化した(図11)。

1は口縁部上端が欠失するが、受口状口縁をもつ広口壺に復元できる。口縁部端面に櫛描縦条文を、下端に刻目文を巡らす。頸部には文様がなく、縦方向のヘラミガキを施す。SK07西肩から出土した。2は復元口径9.7cmの広口壺である。口縁端部を上下にわずかに拡張させ、頸部外面にタテハケを施す。これらは弥生時代中期中葉のものである。

SK08 調査区北東部で検出した、南北2.0m、東西0.8~1.4m、深さ0.4m前後の南北に長い土壙である。埋土は下部に掘削時に生じた偽礫を多く含む暗オリーブ灰色細粒砂質シルト(図9の3層)、中部に暗色化した黒色粘土質シルト(同2層)、上部にオリーブ黒色細粒砂シルト(同1層)が堆積しており、中部層が遭機能時の堆積層、上部層が廃絶後の堆積層と考えられる。中部層の上端付近から弥生土器3・4、上部層の上端から同5が出土した(図10上・11)。

3はほぼ完形に復元できる広口短頸壺である。器高は28.3cmあり、丸味を帯びた体部から頸部が短く外反する器形で、口縁部下に1孔一対の紐通し孔を穿っている。体部外面の調整は縦方向のヘラミガキを中心とし、中位に粘土継ぎ目を消すように横方向のヘラミガキを加えている。また、体部上半にはタテハケ、下半にはタタキがヘラミガキに先行して施されている。4は生駒西麓型の広口壺で、口縁部と底部が欠失する。体部最大径が下半にあり、体部上端から頸部が緩やかに外反する器形で、体部上半から頸部にかけて櫛描縦条文を6帯巡らす。縦条文の幅は2.5~2.9cmあり、文様帶間にはヘラミガキを施す。4の破片の一部は西側2.0mの位置で後述する6と一緒に出土している。5は図上復元した広口壺で、体部最大径が下半にあり、頸部が緩やかに外反する器形である。口縁端部を上下に

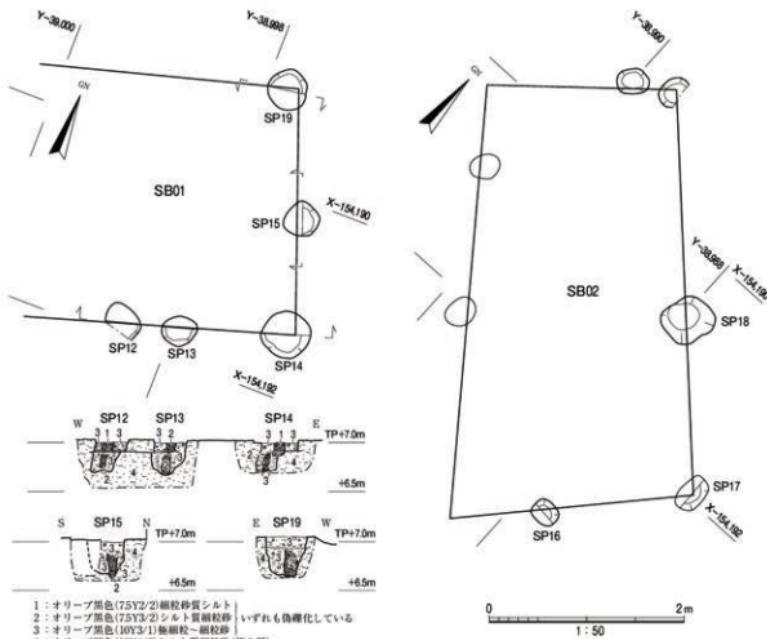


図8 SB01・02

拡張させ、端面に凹線文を施す。頸部から体部上半にかけて櫛描文を巡らせ、上下端が波状文、その間に直線文を6帶配する。以上の土器は弥生時代中期後葉(河内IV-2~3様式)[寺沢薰・森井貞雄1989](以下同、文献註を省略)に位置付けられるものである。

6はSK08東側の第8層内から、正置したものがつぶれた状態で出土した大甕(図10上・11)、一緒に4の破片が出土したことからSK08と関連する遺物として報告する。器高が36.7cmの丸味を帯びた器形で、口縁端部を上下に拡張させ、下端に刻目文を施す。調整は体部外面がヘラケズリののち縱方向のヘラミガキ、内面がタテハケである。また、底部の中央に径1.4cmの小孔が焼成前に穿たれているが、体部外面の下半には煤が付着している。SK08出土の3~5とはほぼ同時期のものである。

SD09 調査区南東部で検出した東西溝で、長さ7.2m、幅0.5~1.0m、深さ0.4m前後ある。後述するSX06が埋没する途中で、その南辺と重複して掘削されており、埋土は下部に掘削時に生じた偽疊を多く含み、中部に暗色化したオリーブ黒色シルト質極細粒~細粒砂が堆積している(図9)。遺物は弥生土器の小片が出土しているが図化できるものはない。

SX06 調査区南東部で検出した東西に長い幅2.5m前後の落込みで、北辺の肩は直線的で、南辺はSD09と重複する。平面の輪郭は第8層上面でも確認されており、検出面からの深さは0.3~0.4mある(図9)。また、西側への続きは古墳の周溝(SD01)の掘削によって削平されているが、SX06の北辺は

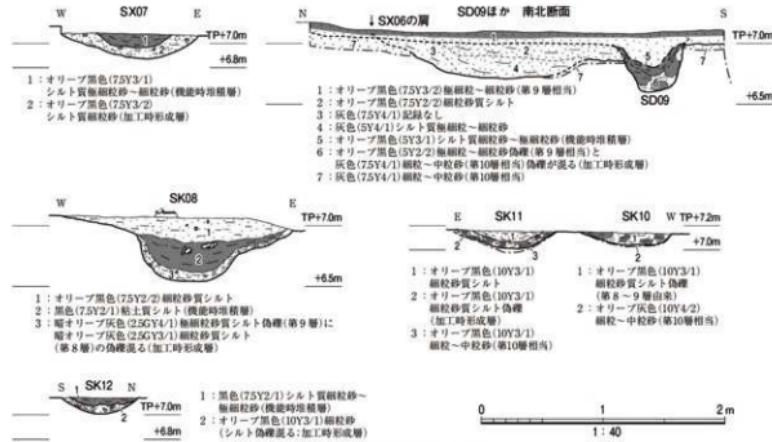


図9 遺構断面図(弥生時代)

SD01の東辺と重複する位置で北に折れ曲がっている。SX06の北辺斜面から弥生土器7~9が出土した(図12)。いずれも底から浮いた状態で、北側から転落したものと考えられる(図10中)。

7は完形に復元する広口短頸壺である。器高は28.0cmあり、卵形の体部から頸部が直線的に開き、口縁部を短く折り曲げている。調整は内外面ともタテハケで、体部外面の下半にはハケのち縦方向のヘラミガキを加えている。口縁部に2孔一対の紐通し孔を穿つが貫通していない。また、底部の内面には植物種子の圧痕が3点付着している。体部外面の下半には煤が薄く付着している。8は生駒西麓型の広口壺で、上半の欠失部分が多いが図上で全体を復元した。下半部はSX06の北肩、上半部は下半部から1.0~1.5m離れた南側で出土している。器高は38.2cm、体部最大径は30.6cmあり、そろばん形の体部から頸部が直立気味に外反する器形である。体部上半から頸部にかけて櫛描簾状文を13帯、および体部の最下段に扇形文を巡らせ、口縁部端面にも簾状文を施している。簾状文の幅は1.4cm前後あり、文様帶間には横方向のヘラミガキを施す。9は完形の水差で、器高が22.3cmある。算盤玉形の体部から口部が短く立ち上がり、口縁部下に凹線文を2带巡らす。体部外面の調整はヘラミガキである。また、外面の体部中位の片側には側面加熱によるとみられる煤が薄く付着している。以上のSX06から出土した7~9は弥生時代中期後葉(河内IV-1様式)に位置づけられる。

10(図12)は調査区南端中央の側溝掘削時に第8層から出土した大壺である(図10下)。図化できていないが下半に相当する破片も出土している。口径は36.8cmあり、口縁をくの字に折り曲げ、体部外面に縦方向のヘラミガキを施す。胎土中に長石粒を多く含んでいる。弥生時代中期後葉(河内IV-1~2様式)のものであろう。

11・12は第8層から出土したものである(図12)。11は口縁が緩やかに外反し、端部を丸くおさめる壺である。体部外面に縦方向のヘラミガキを施し、角閃石粒を含む生駒西麓産の胎土である。12は下彫れの壺の体部である。器壁は厚く、体部上端に櫛描波状文と直線文がみられる。11・12は弥生時代

中期前葉のもので、図化したもの以外の第8層出土器も中期前葉～中葉のものが主体を占める。

小結

調査域の弥生時代の土地利用の変遷や遺構の性格についてまとめておく。

まず、今回の調査で出土した弥生時代の遺物は中期に限られており、第8層内の遺構もこの時期に限定できる。また、第8層からは弥生時代中期前・中葉の土器が破片の状態で出土し、中期後葉になると遺構を中心に完形のものを含む単体で出土するようになる。

中期後葉の遺構はSK08とSX06とで出土遺物に型式差があり、SX06が古く、SK08が新しい。また、SD09はSX06の埋没途中で掘削されており、SK08に併行する時期の可能性がある。SX06の性格については、調査時には自然の落込みと認識されていたが、土器の出土状況、および調査地南側に弥生時代中期後葉の墓域が広がっていることが確認されていることから[大阪市文化財協会2008]、方形周溝墓の南周溝の一部の可能性がある。このように理解すると、SD09・SK08は本来一連の遺構で、周溝の外周を部分的に再掘削したものと考えることができ、SK08が西周溝の外辺の位置にあったと復元できる。

また、遺物が出土せず時期が特定できない掘立柱建物2棟は、調査域が墓域となる以前の中期前葉・中葉の時期の可能性がある。周辺調査では、北西約200mの城山遺跡で中期前葉の居住域が確認されており[大阪文化財センター1986]、これが今回の調査域まで広がっていたと考えられる。(大庭)

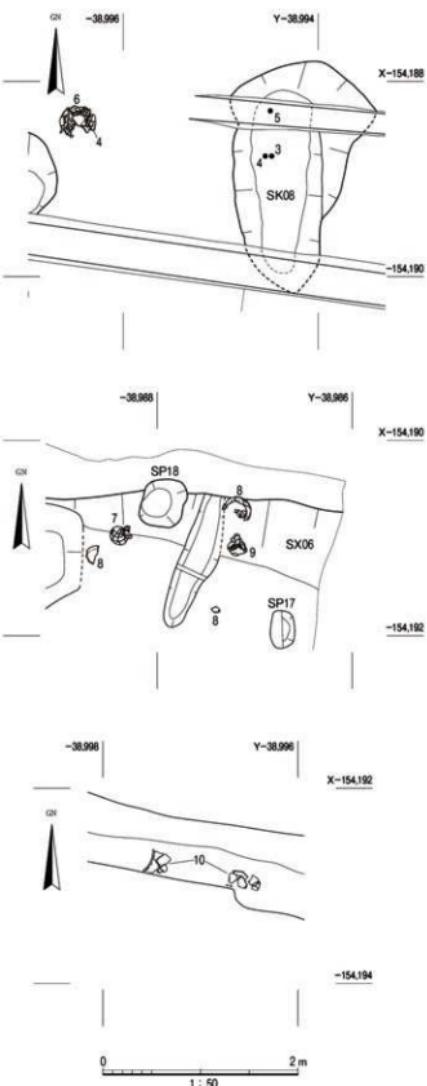


図10 弥生土器出土状況

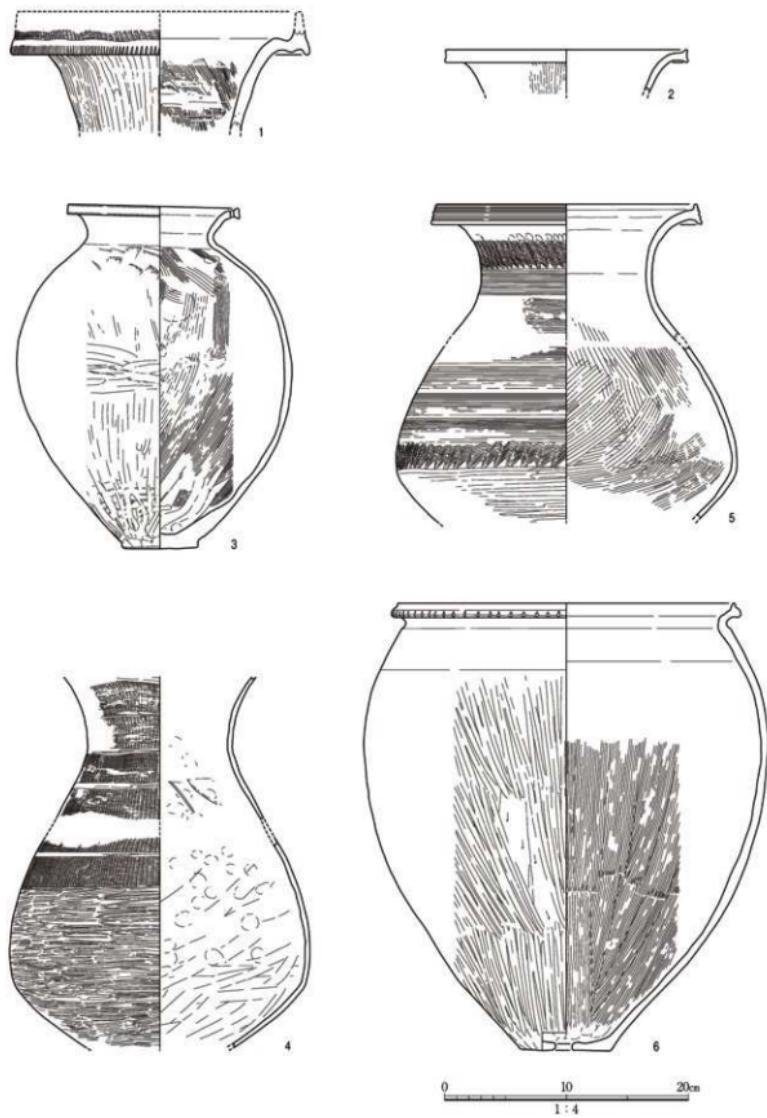


图11 弥生土器実測図(1)
SK07(1・2)、SK08(3～5)、第8層(4・6)

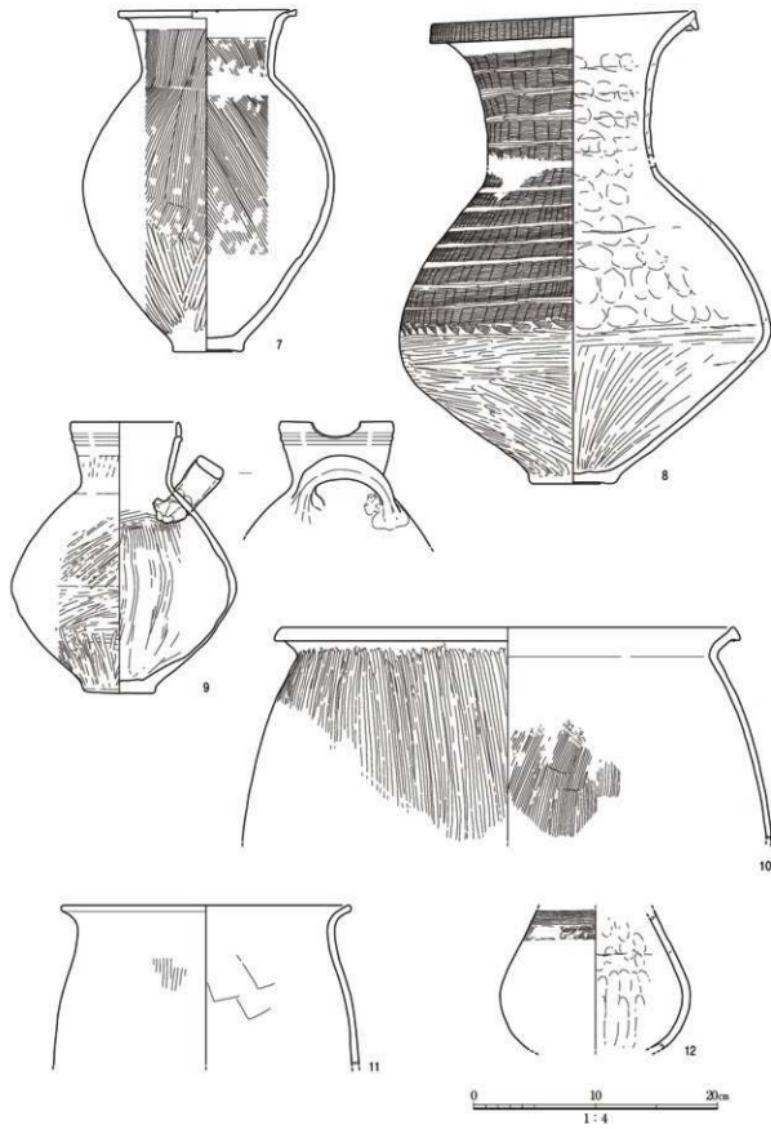


图12 弥生土器实测图(2)
SX06(7~9)、第8层(10~12)

b. 石器遺物(図13~15)

第6層から第8層にかけて石器遺物約200点が出土した。形態から判断して概ね縄文時代晩期から弥生時代のものとみられるが、ここで一括して報告する。

13~17は石錐である(図13)。13・16・17はSD01(古墳時代:後述)から、14・15は第6層から出土

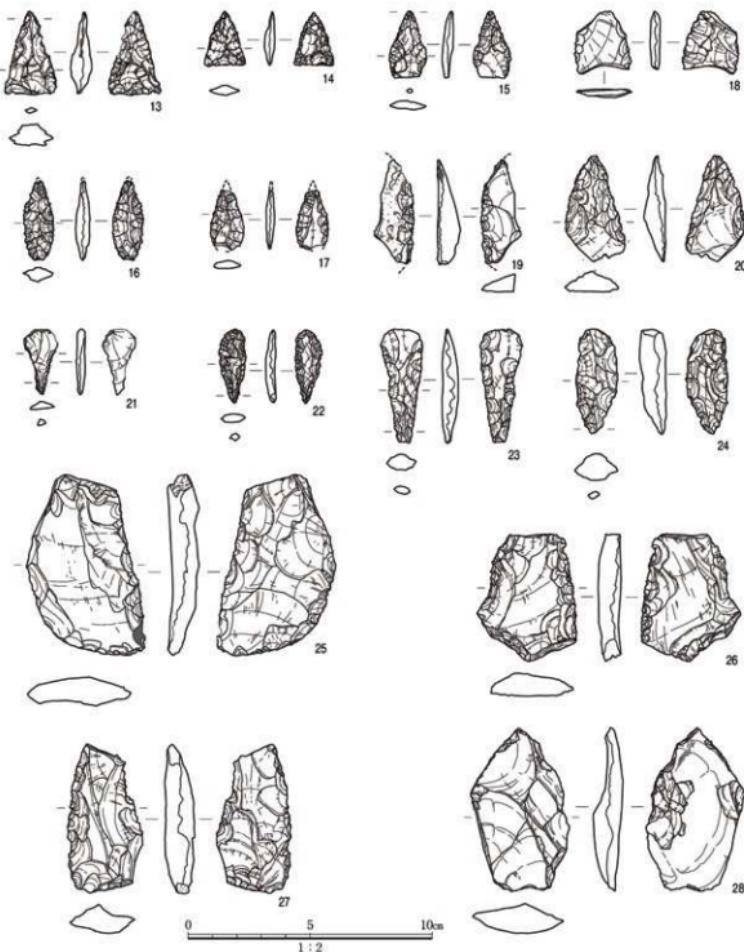


図13 石器実測図(1)

第8層(25)、第7~8層(18~27)、第7層(20~21~23)、第7層以下(24~28)、

第6~7層(19)、第6層(14~15~26)、SD01(13~16~17)、SK07(22)

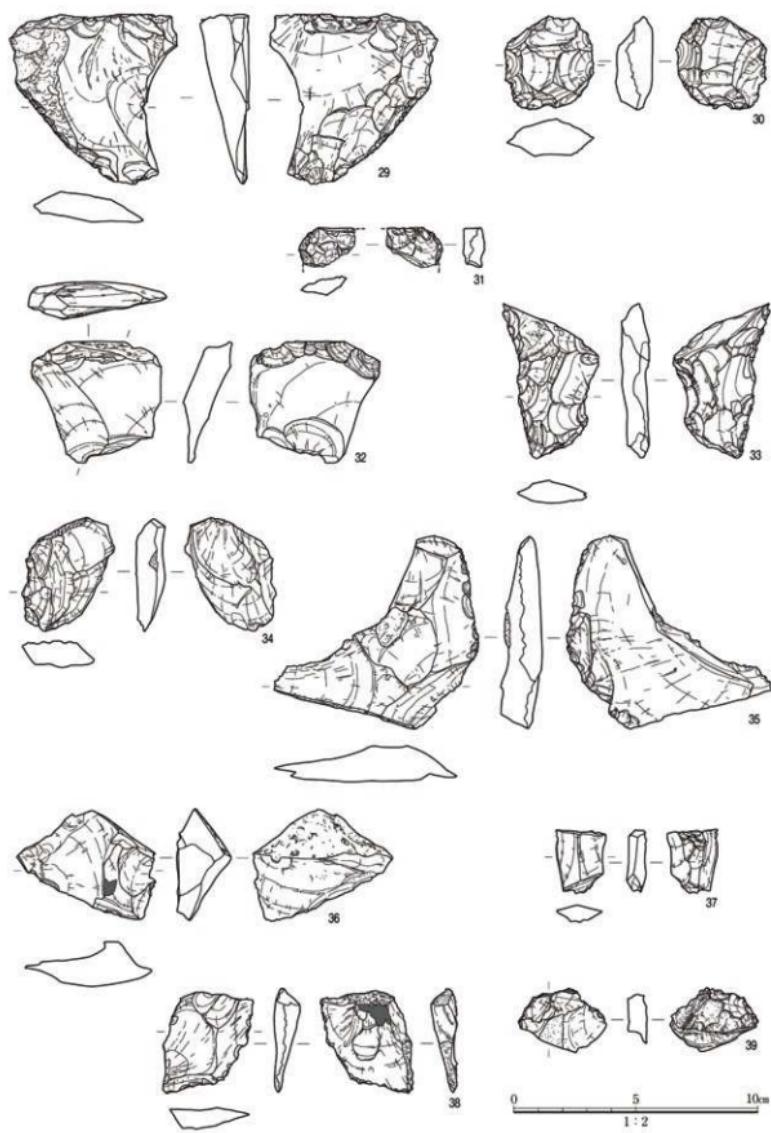


图14 石器实测图(2)

第8层(29·31·34·36·38)、第7~8层(30·37)、第6层(32)、SD01(33·39)、SD09(35)

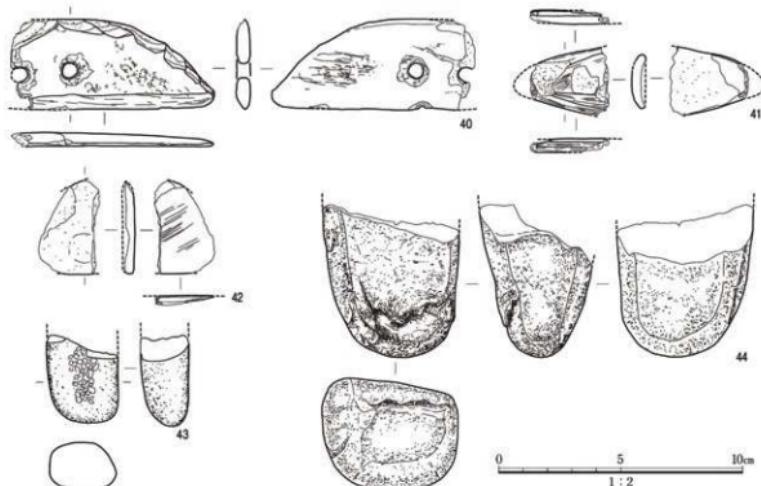


図15 石器実測図(3)

第8層(42)、第7～8層(40・43)、第6層(41)、SX08(44)

した。13・14は無茎式石鎌で平面が二等辺三角形を呈する。13は基部がかなり厚い。14は小型で薄く、比較的ていねいなつくりである。15は無茎式石鎌で平面が五角形を呈する。基部にはほとんど細部調整を施さない。16・17は円基式石鎌で、16は木葉形、17は水滴形を呈する。16は細部調整がていねいで、側刃が鋸歯状を呈する。17は薄い剥片を加工したもので、右図中央には素材となった横長剥片の主面離面が残る。これらの石鎌は13～15が繩文時代晚期、16・17は弥生時代前期に属するものとみられる。

18～20は石鎌未成品である。18は第7～8層、19は第6～7層、20は第7層から出土した。18は薄い剥片の両面に押圧剥離を加えており、先端と基部が折れたため廃棄したのであろう。19は背面が自然面となる厚い横長剥片の側刃を加工する途中に折れている。20は横長剥片の先端部を加工しており、基部が折れている。

21・24は石錐である。21・23は第7層、24は第7層以下、22はSK07から出土した。21・22は薄い小型の剥片をもとに加工しており、23・24は厚くやや大型の剥片を加工している。先端の摩滅はさほど激しくはない。

25は打面が自然面となる縦長剥片の周辺に細かい加工を加えており、靴底状を呈する。側刃を利用したスクレイパーの可能性がある。第8層から出土した。

26～28は尖頭器の未成品である。26は第6層、27は第7～8層、28は第7層以下から出土した。26は横長の剥片の両側刃に加工を加える。図の下端にも剥離が並ぶことから、こちらを基部としたものであろう。先端が折れている。27は縦長の剥片に加工をえたもので、図の下部は自然面が残る。先端が折れている。28は横長剥片を利用して打点部に押圧剥離を加え、厚みを減じようと試みているが、中央の厚い部分が除去できなかったためかそのまま廃棄している。

29~34は楔形石器である(図14)。29・31は第8層、30は第7~8層、32は第6層、33はSD01、34は第8層から出土した。29は上下方向に使用したとみられ、図の上部が打撃によって潰れている。30は上下・左右方向に使用しており、側面にはすべて打撃跡がある。31は楔本体の一部で、本来は四角形を呈したと考えられる。32は平面が台形を呈し、図の上下方向に使用している。上部は打撃によって潰れ、下部には反作用による剥離面が見られる。33は不定形で側面が打撃によって潰れる。図の上部は折れている。34は楔形石器から剥落した剥片とみられ、左図の背面側には図の横方向に打撃した痕跡が並ぶ。この剥片自体は縦方向の剥離に横方向の力が加わった不安定な剥離によって得られたものである。

35~39は剥片である。35はSD09から、36・38は第8層、37は第7~8層、39はSD01から出土した。35は打点部と側面が折れた剥片の主剥離面側に二次加工を加えて刃部を作ろうとした可能性がある。36・38・39は自然面を有する石核の端部を除去した剥片である。37は縦長剥片の打点部分で、下半は折れている。

40~42は磨製石庖丁(図15)、40は第7~8層、41は第6層、42は第8層から出土した。石材は緑色片岩である。40は半月形を呈し、直線部が刃部にある。背部は敲打と研磨によって整形している。41・42は破片で、全体の形状は40と同様に半月形を呈するものとみられる。

43・44は砂岩製の敲石で、いずれも使用のため折れている。43は中央部が窪む。44は図の下端部に使用痕跡がある。43は第7~8層、44はSX08から出土した。(小田木)

c. 古墳時代の遺構と遺物(図16~20、図版5~7)

第7層上面で遺構検出を行い、調査区西半部で古墳1基(長原218号墳)を検出した。

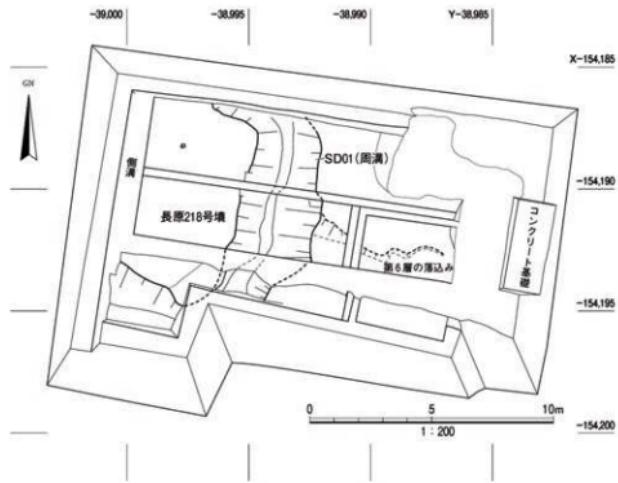
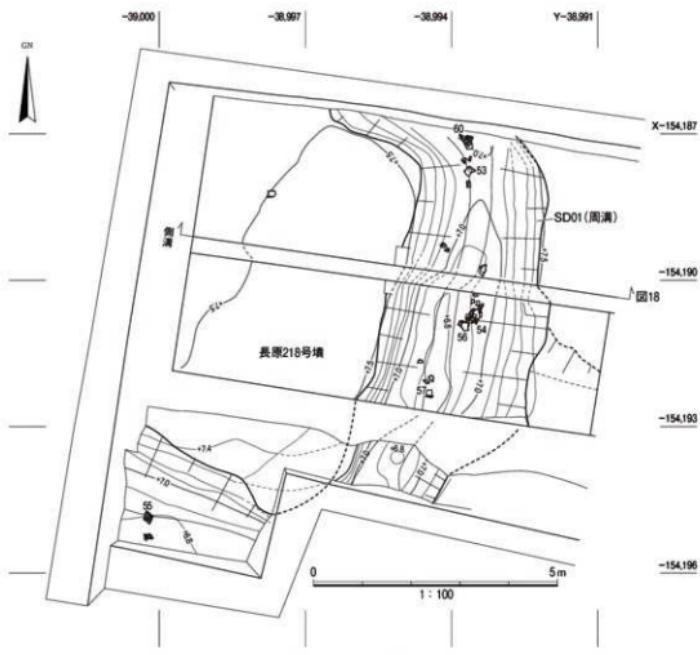


図16 第7層上面平面図(古墳時代)

長原218号墳 古墳の東半部を検出し、遺存する墳丘の南北のラインが直線的であることから方墳とみてよい(図16・17)。墳丘の基底部長は南北で約9.2m、東西で約5.5m以上で、一辺が約9mの方墳である。墳丘の高さは、周溝底から約0.7mの高さが残る。墳丘の盛土部分は残っておらず、西半部は第6b層によって耕起され、東半部は古墳築造時の基盤である第7層が露出していた(図18)。周溝(SD01)は東部で幅2.6~3.4m、深さ0.7m、南部で幅2.4m以上、深さ0.6mである。周溝底には、最大10cmの厚さで細粒砂質シルト偽礫に極細粒~細粒砂が混じる周溝掘削時の加工時形成層(図18の12層)が堆積し、その上に粘土質シルト~極細粒砂質シルトが薄層をなして堆積していた(同8~11層)。これは機能時の堆積層とみられ、図18の8層が堆積した段階では周溝は埋没して、その後凹みに極細粒砂~細粒砂質シルト(同7層)が堆積して完全に埋没していた。

遺物は、土師器・須恵器・埴輪が出土した。遺物の出土層準は第6a・6b層、SD01の埋土各層で、原位置を保っているものではなく、多くは周溝内に転落した状態で出土し、本来、墳丘上に置かれていたものとみられる(図17)。出土層準をやや詳しく見ると、SD01埋土の最上層(図18の7層)と下位層の境目付近から出たものが多く、墳丘が削平されて周溝内に遺物が散らばり、まもなくして周溝が埋まり、第6a層が堆積したものとみられる。



45~50は須恵器である(図19)。45は高杯蓋で、低い円筒形のつまみをもち、口縁端部はほぼ水平な面を作る。天井部のはば4/5の範囲に回転ヘラケズリを施している。48・49は有蓋高杯である。48の口径は9.5cmで、口縁端部はやや内傾した面を作る。杯部の底部は約1/2の範囲に回転ヘラケズリを施している。高さ5.2cmの脚部には3方向から円孔が穿たれている。49は同様な脚部で、カキメを加えたのちに4方向から円孔が開けられている。46・47は杯蓋の破片で、ともに口縁端部は内傾した面を作る。50は小型の壺で、内面・外面を丁寧なナデで調整し、底部外面には手持ちヘラケズリを加えている。口縁はわずかに外傾させ、端部を上向外へつまみ上げて、小さな二重口縁のような形に仕上げている。器壁は厚い。以上は、小型化した口径(48)、内傾した面をもつ口縁端部(46・47)という特徴からTK23型式に位置付けられるが、45は広い回転ヘラケズリ調整、天井部の未発達、端部に水平な面を作るといった古相(TK208型式)を残している。

51~60は埴輪である。すべて窯窯成で土師質に焼き上がり、黒斑をみとめない。51・52は朝顔形埴輪で(図19)、口縁部のみが残る。51は上段をナナメハケ、下段をタテハケで仕上げ、境目に断面台形の突帯を貼り付ける。

53~60は円筒埴輪である(図20)。主な特徴は共通しており、突帯3条を巡らせる4段構成で、最下段から最上段にかけて徐々に直径を増し、最上段(4段目)はわずかに外反ないし直立する。口径は20cm前後で大きな差はない、全高がわかる60は38.5cmである。58は最上段が残っておらず口径は不明であるが、他のものより大きいものとみられる。2段目と3段目に円形のスカシ孔をもつ。同段のスカシ孔は対向する位置に穿たれ、2段目と3段目では90°の方向になっている。53・54・60は、最上段外面に半円と短い直線をY字状に組み合わせた共通するヘラ記号を刻んでいる。突帯間の間隔は9.5cmのもの(53・54)と10.5cm前後のもの(60)がある。突帯の断面形は台形のもの(53・55・56・60)、M字形のもの(54・57・58・59)がある。また、外面の上部には赤色顔料の塗布がみられ、最上段(4段目)のみに行われたものの(53)もあるが、他は最上段と第3段に塗られている。第2段目以下に意図的な塗布を行ったものはみられない。内面調整はタテハケないしナナメハケを加えることで共通するが、外面調整は二次調整を加えるもの(53~58)とタテハケによる一次調整のみのもの(59・60)が



図18 長原218号横断面図

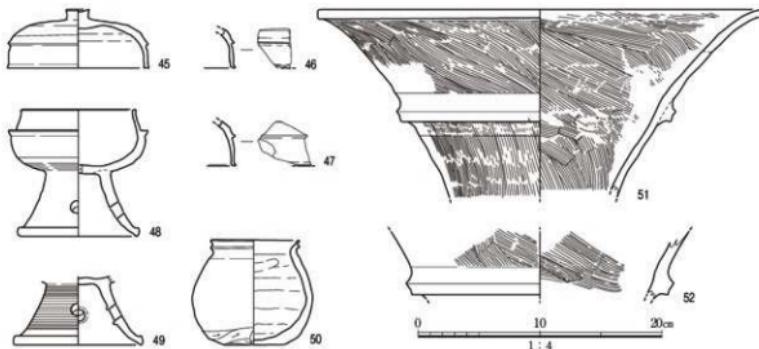


図19 古墳時代遺物実測図
第6a層～SD01(45・48～51)、第6b層(46・47・52)

ある。二次調整はB種ヨコハケで、[一瀬和夫2005]の細分によるBc種(55～58)、Bd種(53・54)がある。静止痕のピッチが不揃いな56についてはBb II種である可能性がある。

小結

長原218号墳の時期と古墳群の中での位置付けについてまとめておく。時期決定の材料として須恵器と円筒埴輪がある。須恵器高杯には杯部口径の小型化や、内傾した面をもつ口縁端部など、TK23型式の特徴をもつ反面、天井部高の未発達、広範囲に及ぶ回転ヘラケズリ調整、水平な面をもつ口縁端部など、TK208型式の特徴も残っていた。円筒埴輪には二次調整で施されたB種ヨコハケにBc種とBd種がみられた。B種ヨコハケの技法はBc種→Bd種の順で漸移するので、両種の過渡期に当るとみてよい。以上のように、新古の特徴を兼ね備える須恵器・円筒埴輪の特徴から、長原218号墳の年代は、5世紀中葉と後葉の境目頃とみることができよう。

長原古墳群全体の中でみると、この古墳は北東の縁辺部に位置し、周辺では古墳の分布が疎らである。最も近いのは北250mにあって北方の一群をなす[高橋工2005]城山1～7号墳[大阪文化財センター1986]である。これらの古墳からは韓式系土器(城山5・6号墳)や幅広の原体を使用したB種ヨコハケを施した埴輪(城山7号墳)などが出土していて、長原218号墳と同時期ないしやや先行する時期の一群と捉えられる。城山の一群や長原218号墳は、瓜破台地北東方の沖積地に展開した居住地NGE1(長原遺跡)、TK2(竹渕遺跡)など[高橋工1999]の外縁部に位置し、これらとの関係が注目される。

d. 地層出土の遺物

地層の年代を決める手がかりとなる遺物を報告する(図21)。第6～7層から出土した土師器杯61、須恵器蓋62は7世紀中葉～後葉に属するものである。第7層はその特徴的な岩相から古墳時代中期の地層であるNG7B層との対比が容易なので、61・62は第6層の年代を代表する遺物と捉えることができ、第6層がNG6層に対比できる証拠となる。第1～2層で出土した銅鏡64は江戸時代の寛永通宝である。銅鏡63は第7層から出土した。柳葉式で、全長4.6cmである。形態から弥生時代のものとみ

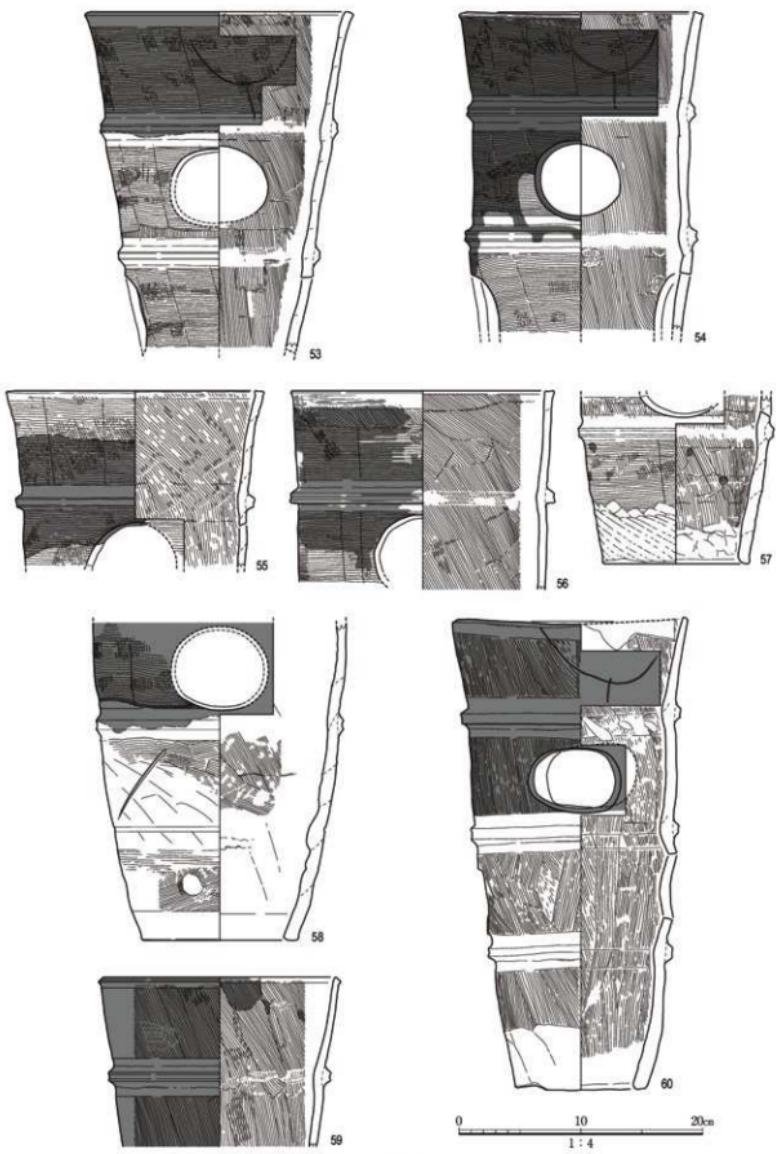


图20 SD01出土埴輪実測図

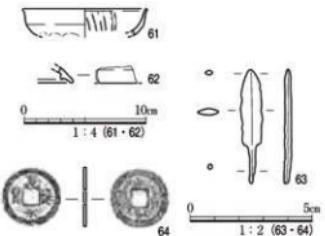


図21 各層出土の遺物
第6～7層(61・62)、第7層(63)、第1～2層(64)

た。さらに、SD09・SK08は周溝を掘り直した遺構である可能性が考えられた。

・長原218号墳を検出した。出土遺物の編年観から5世紀中葉と後葉の境目頃に属するとみられた。長原古墳群内では北部城山地区の一群と時期的に近接し、周辺に展開する居住地との関連が考えられた。また、B種ヨコハケをもつ円筒埴輪は良好な資料であり、長原古墳群の埴輪編年の進展に資することが期待される。(高橋)

られる。

3)まとめ

・弥生時代中期の遺構を検出した。遺物の型式差から中期前葉・中葉・後葉に分けて捉えることができ、前葉・中葉には当地は居住域に含まれ、SK07や掘立柱建物はこの頃の遺構であろう。SX06は後葉の遺構で、平面形や土器の出土状況から方形周溝墓の南周溝であることが考えられ、この頃には墓域内になったとみられた。

引用・参考文献

- 一瀬和夫2005、「大王墓と前方後円墳」、吉川弘文館、pp.104-133
- 大阪市文化財協会2008、「長原遺跡発掘調査報告」XVII
- 大阪文化財センター1986、「城山(その1)」
- 高橋工1999、「長原遺跡および北部周辺地域における古墳時代中期～飛鳥時代の地形環境の変化と集落の動態」：「長原遺跡東部地区発掘調査報告」II、pp.79-106
- 高橋工2005、「長原古墳群とその埴輪」：「平野区誌」、平野区誌刊行委員会、創元社、p.41
- 寺沢薰・森井貞雄1989、「河内地域」：「弥生土器の様式と編年 近畿編I」、木耳社、pp.41-146

南壁地層断面



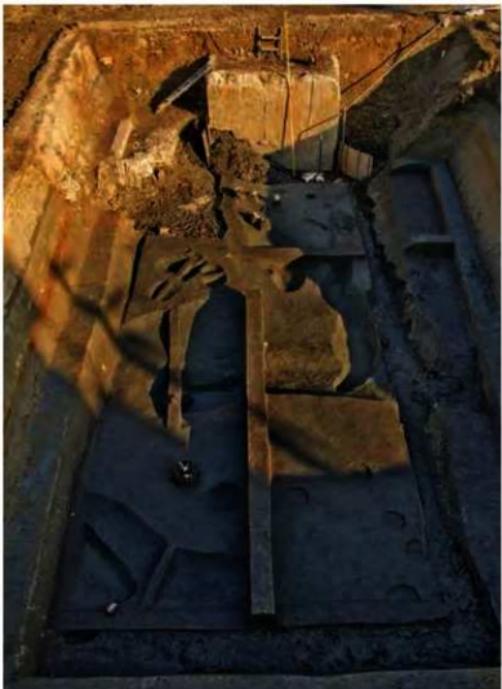
南壁西部(拡張後)



西壁地層断面(南東から)



第9層上面(西から)



SX06遺物出土状態(東から)

SX06遺物出土状態
(北東から)



SX06・SD09断面
(南西から)



SX10~12(北東から)



SX08(南西から)



SP12断面(南東から)



SP17断面(東から)





長原218号墳(南東から)



長原218号墳(西から)

長原218号墳検出状況
(西から)



長原218号墳(北東から)



長原218号墳(南西から)



長原218号墳
墳丘上位の地層断面
(北から)



長原218号墳
周溝遺物出土状況
須恵器50、埴輪54・56など
(東から)



長原218号墳
周溝遺物出土状況
埴輪53・60など
(北東から)



第 2 部

大坂城下町跡発掘調査(S0J21-1)報告書

調査個所 中央区道修町二丁目5-14
調査面積 4 m²
調査期間 令和3年5月20日
調査担当者 課長 鈴木 慎一、櫻田 小百合

〈調査に至る経緯と経過〉

調査地は大坂城下町跡の北部に位置する。周辺の調査事例としては、OJ94-16・13-3次調査などがある(図1)。OJ94-16次調査では、中世後期の溝のほか、豊臣～徳川期の礎石建物や敷地境の溝などの町屋にかかわる遺構が確認されている[大阪市文化財協会2004]。OJ13-3次調査では、飛鳥～平安時代初頭の柱穴や土壙からなる古代の遺構群や豊臣後期の土壙がみつかっている。また徳川期の遺構・遺物として、敷地境の溝や礎石列などの遺構のほか、鋳造や骨細工などの手工業にかかわる遺物が出土している[大阪市教育委員会・大阪文化財研究所2015]。

今回の調査は、建設工事に先立ち大阪市教育委員会が令和元年12月27日に実施した試掘調査において、近世前期以前の遺構面が確認されたことから本調査を実施することとなった。

調査は令和3年5月20日に実施した。工事により遺跡が影響を受ける敷地北部の立体駐車場建設予定地に東西2m、南北2mの調査区を設定して行った(図2)。第8層上面まで重機により掘削して平面精査を行った後、第10層上面までさらに重機により掘り下げ、地層断面の観察などの調査を行った。これらの作業と並行して、実測図の作成および写真撮影による記録作業を行った。調査終了後に埋め戻しを行い、現地での作業を完了した。

本報告で用いた方位は世界測地系に基づく座標北を基準とし、現地で作成した調査区位置図を「大阪市地形図」にあてはめて求めたものである。地層断面図は現地表面を基準に作成し、図3の東壁断面図には、国土地理院の提供する「地理院地図」における調査地西側道路面の標高値を参考値としてT.P. 値(東京湾平均海面値)でTP 土○mと表記して示した。

〈調査の結果〉

1. 層序(図3、図版1上)



図1 調査地位置図

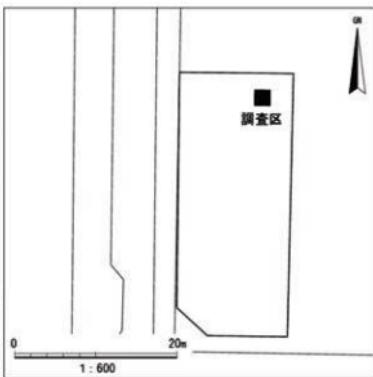


図2 調査区位置図

調査地の現地表面の標高はTP+1.7 m前後である。

第0層は現代の盛土層で、層厚は約30～60 cmである。

第1層は、漆喰と黄褐色シルト質細粒砂からなる整地層で、層厚は約15～20 cmである。

第2層は、偽礫を含む黄灰色細粒砂質シルト・暗灰黄色シルト質細粒砂・オリーブ褐色細粒～極細粒砂質シルトからなる盛土層である。層厚は約15～30 cmである。

第3層は、漆喰や偽礫を含むオリーブ褐色細粒砂質シルト・黄灰色細粒～極細粒砂質シルトからなる盛土層で、層厚は約15～35 cmである。

第4層は、偽礫を含む灰白色・黄褐色の極細粒砂質シルトからなる盛土層で、層厚は約15～40 cmである。

第5層は、焼土を多量に含む明赤褐色細粒砂からなり、層厚は約10 cmである。火事場整理に伴う地層とみられる。

第6層は、暗灰黄色細粒砂質シルトからなる整地層で、層厚は約10 cmである。

第7層は、にぶい黄色中粒～細粒砂からなる盛土層で、層厚は20～45 cmである。第8層の火

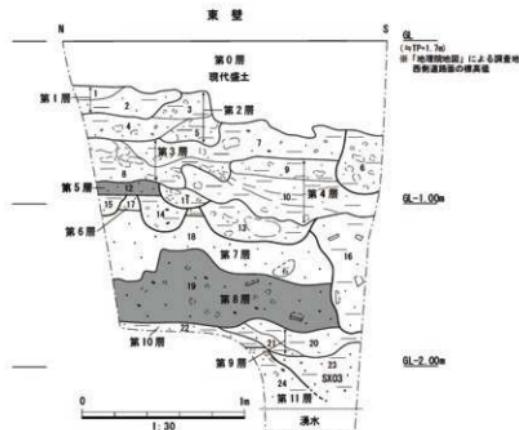


図3 東壁地層断面図

事場整理後の盛土とみられる。

第8層は、炭・瓦と多量の焼土を含む赤褐色・にぶい黄色の中粒砂からなる火事場整理によるものとみられる盛土層で、層厚は25~45cmである。第9層以下の地層が出土遺物から17世紀代の地層とみられることから、本層は1708(宝永5)年の道修町大火、あるいは1724(享保9)年の妙智焼けに伴うものと推定される。

第9層は、にぶい黄色細粒~極細粒砂質シルト・灰色中粒~細粒砂質シルトからなり、調査区南部にのみ分布する。層厚は最大で16cmである。本層からは肥前磁器の小杯1が出土した。

第10層は、黄灰色細粒砂質シルトからなる整地層で、層厚は5cm以上である。肥前磁器の染付碗2が出土した。

第11層は、炭・焼土を含む灰色中粒~細粒砂質シルトからなる盛土層である。層厚は40cm以上であるが、下部は湧水のため確認できなかった。本層からは焼締陶器の擂鉢3が出土した。体部片のため明確ではないが、内面底部付近に焼成時の直重ねの痕跡とみられる圧痕が確認できることなどから、備前焼の可能性がある。

2. 遺構と遺物(図3・4、図版1・2)

今回の調査で確認した遺構はSE01、SK02、SX03のほか、東壁断面で第3層上面以上および第5・6層各上面の土壤とみられる遺構を確認した(図3)。

SE01は調査区西部で確認した井戸で、直径は1.15m以上、深さは0.9m以上である。正確な掘り込み面は確認できていないが、第5層以上から掘り込まれていることは確かである。遺物は10~21が出土した(図版2下)。10~13は土師器の炮烙で、いずれも大坂のD類に属する[難波洋三1992]。14は土師器皿、15は瀬戸美濃磁器の皿、16・17は肥前磁器碗、18は肥前磁器青磁の盤とみられる。19は関西系陶器の壺、20はキセルの吸口とみられる。21はチャートで火打石とみられる。瀬戸美濃磁器が出土していることから19世紀代の遺構とみられる。

SK02は第10層上面で確認した土壤である。炭・細粒~極細粒砂質シルト偽礫を含む黄灰色(2.5Y5/1)細粒~極細粒砂質シルトを埋土とする。

SX03は東壁の南部で確認した落込みである。掘り込み面は第11層の上面で、オリーブ黒色の粗粒~中粒砂質シルトを埋土とする。遺物は土師器皿4、肥前磁器5~9が出土した。5は青磁碗、

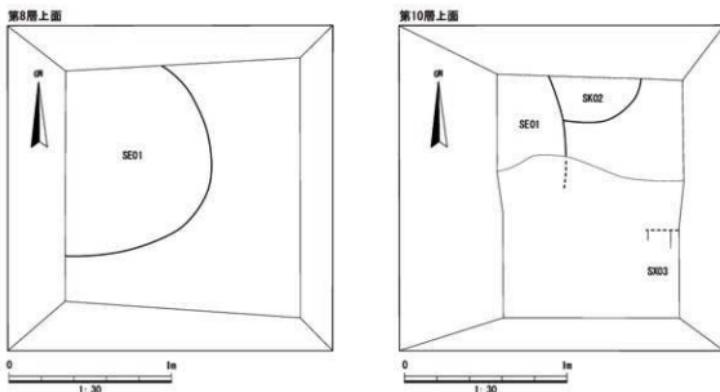


図4 遺構平面図

7は青磁の菊花皿である。6・8は染付の皿、9は染付碗である。口縁部を折縁状にする皿8は17世紀代の特徴を示しており、他の遺物の状況をふまえるとSX03は17世紀中頃～後半の遺構とみられる。

（まとめ）

今回の調査では17世紀代に遡る遺構を確認することができたほか、地層断面の観察により徳川期における当該地の土地利用の一端を確認することができた。大坂城下町の調査地周辺における土地利用のあり方を考えるうえで基礎的な資料を得ることができた。

【引用・参考文献】

- 国土交通省国土地理院、『地理院地図（電子国土 Web）』<https://maps.gsi.go.jp>
大阪市文化財協会 2004、「OS88-82次およびOJ92-24・92-36・94-16次の調査」
：『大坂城下町跡Ⅱ』、pp. 281-314
大阪市教育委員会・大阪文化財研究所 2015、「大坂城下町跡発掘調査（OJ13-3）報告書」
：『大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書（2013）』、pp. 217-234
難波洋三 1992、「第V章 第6節 徳川氏大坂城期の炮烙」：『難波宮址の研究 第九』、pp. 373-400



図版 2



出土遺物 (1: 第9層、2: 第10層、3: 第11層、4~9: SX03)



出土遺物 (10~21: SE01)

鳥ヶ辻2丁目所在遺跡発掘調査（SNS21-1）報告書

調査個所 大阪市天王寺区鳥ヶ辻二丁目 114-3
 調査面積 45 m²
 調査期間 令和3年9月27日～令和3年9月28日
 調査担当者 課長 鈴木 慎一、田中 裕子

<調査に至る経緯と経過>

調査地は周知の埋蔵文化財包蔵地である鳥ヶ辻2丁目所在遺跡の範囲である。周辺の調査では古代から中世の遺構・遺物が確認されている（図1）。調査地南側のSNS18-1次調査では、古代～近世までの遺物が出土した埋没谷が検出された【大阪市教育委員会ほか2019】。調査地南西側のNS09-1次調査では、TP + 9.0 m前後で段丘構成層が確認され、その上面で中世の井戸や近世の土壤が確認されている。また調査地西150 mに位置するNS10-3次調査やその西側のNS88-24・99-3次調査では、真法院谷〔高橋2007〕の斜面や谷を埋める古墳時代後期以降の地層が確認されている。古代から中世にかけての客土層が検出されており、谷を人為的に埋め立てたようすが観察される。これらの調査地は難波京朱雀大路跡に位置しており、大路沿いに平坦地を確保する開発が行われていた可能性が指摘されている【高橋2012】。

今回の調査は、元市営勝三住宅において計画された建設工事に先立ち実施された試掘調査で、現地表下1.2 m以下で近世以前とみられる地層や遺物が確認されたことにより実施された。

作業は令和3年9月27日より着手した。調査区は旧市営住宅の基礎を避ける形で、敷地中央南寄りに、東西15 m、南北3 mで設置した（図2）。現代盛土を重機で掘削し、それ以下を人力で掘り下げた。調査区東側4 mほどは住宅の基礎が残っており、遺構の確認ができなかった。また調査区西端には深掘トレッチを開け、現地表下2.5 mまでの地層を確認した。各層において、遺構・遺物を検出し、図面・写真等の記録作業を行い、令和3年9月28日に現地における作業を終了した。

なお、本報告で用いた方位は、世界測地系に基づく座標北を基準とし、建物の配置を基準として街区図に当てはめて求めたものである。標高はT.P. 値（東京湾平均海面値）を用い、本文



図1 調査位置図

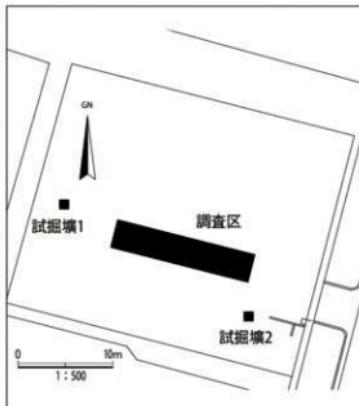


図2 調査区位置図

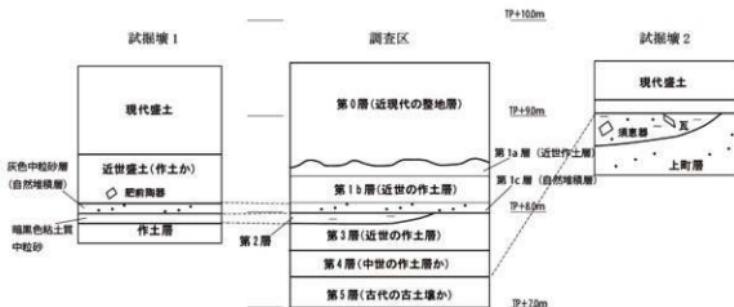


図3 遺構と地層の関係図

および図中では TP ± ○m と表記した。

<調査の結果>

調査地周辺は北から南へ緩やかに下がる地形をしている。調査地の敷地内はほぼ平坦であるが、北側の警察病院との境の道路からは高低差が 1 m 近くある。

1. 層序および各層出土の遺物 (図3～5、図版1・2)

第0層 近代～現代の盛土層で、層厚約 100 cm である。市営住宅の基礎、地山偽礫を含む盛土層を作り、瀬戸美濃焼磁器染付碗やレンガ製の埋設管が確認された。

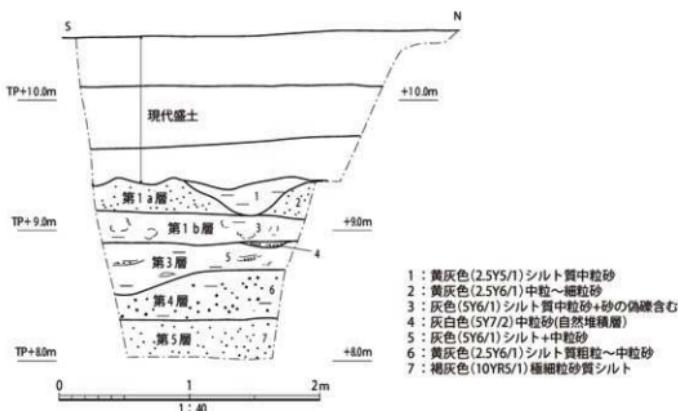


図4 西壁地層断面図

第1層 近世の作土層および自然堆積層である。第1a層、第1b層、第1c層の3層に分けることができる。第1a層は黄色(2.5Y6/1)中粒～細粒砂からなり、層厚26cmである。よく攪拌された作土層である。西壁では本層上面で土壤が確認された。第1b層は灰色(5Y6/1)シルト質中粒砂からなり第1c層を耕起した作土層である。第1c層を主体とする偽疊を含む。第1c層は灰白色(5Y7/2)中粒砂からなる自然堆積層で、後述する埋没谷を埋める地層と考えられた。層厚は20cmである。

第1層として一括して取り上げた遺物は肥前磁器白磁皿1、平瓦2がある。1は18世紀代のものであろう。2は凸面に縄叩きが見られ、下層からの混入と考えられる。

第2層 近世以前の旧地表面とみられる。灰色(5Y5/1)シルトからなり、全体的に鉄分が析出する。層厚は12cmである。出土遺物は平瓦3で、全体にいぶしがかかっている。

本層の上面で複数の小穴を確認したが、自然のくぼみとみられる。小穴からの遺物の出土はない。

第3層 中世の作土層である。灰色(5Y6/1)シルトで中粒砂が混ざっている。層厚45cmである。瓦器4が出土した。4は椀の底部で高台が剥離した痕跡がある。内面にミガキは見られない。14世紀代の可能性がある。

第4層以下は、調査区西部の深堀トレーンチで堆積を確認した。

第4層 中世以前の作土層である。黄灰色(2.5YR6/1)シルト質粗粒～中粒砂からなり、層厚は40cmである。

第5層 暗灰色(10YR5/1)極細粒砂質シルトからなり、層厚は15cm以上である。炭を含む。やや暗色化が見られ、古土壤の可能性もある。

第4・5層として一括して取り上げた遺物は、土師器5、須恵器6～8、丸瓦9、平瓦10、鉱滓11・12などである。5は皿底部の小破片で、いわゆる「手の字」皿の可能性がある。6は反時計回りに削り調整が施されており、杯蓋の天井部であろう。7・8は甕もしくは鉢の体部である。いずれも内外面ともにナデ調整である。9は凹面に布目痕跡が残り、玉縁を伴う。10は凹面に布目痕、凸面に縄叩きが見られる。鉱滓は

11・12の2点を示したが一定量出土があり、磁性が見られる。何らかの金属加工を行っていた可能性がある。そのほか、小破片ではあるが、瓦器も含まれていた。

第4・5層出土の遺物は、深堀トレーンチから一括として取り上げたが、古代～中世までの広い時期の遺物を含んでおり、第4層を中世、第5層を古代の堆積と分けられる可能性もある。

<考察>

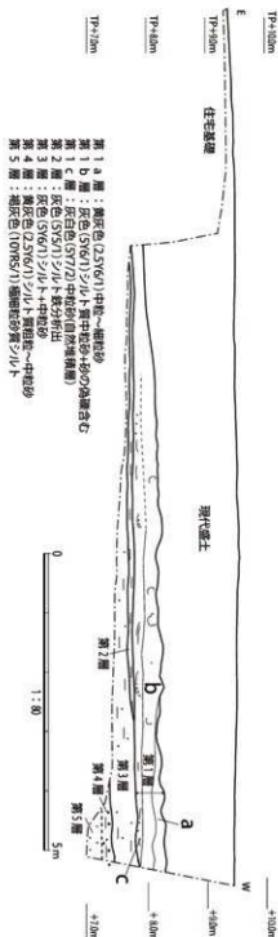


図5 南壁地層断面図

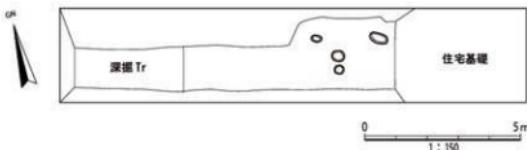


図6 第2層上面の遺構平面図

また本調査に先立って行われた試掘調査で、調査区南東部の試掘壙2では、G L - 60 cmで上町層が確認されている。その上部の作土層からは須恵器や縄叩きのある瓦が出土しており、第4・5層一括で出土した遺物のうち、古代のものと類似する傾向があった。今回の本調査区では上町層は検出されず、また調査地北側の警察病院は敷地に高低差があるので、調査地は南から北へと落ちる埋没谷の斜面に位置していたと考えられる。

本調査地は難波京朱雀大路の推定中心大路の東側に立地し、約500 m西側には四天王寺がある。第4・5層の出土遺物もあわせて考えると、古代～中世にかけて、瓦葺きの建物が調査地付近の台地上に存在した可能性が高い。鉱滓も共伴していることから、調査地北部に位置する細工谷遺跡同様、何らかの金属加工を行っていたとも考えられ、廃棄物が低地部となる本調査区へ投棄されたといえよう。

<まとめ>

- ・縄叩きや布目痕をもつ古代とみられる瓦が複数点出土した。
- ・調査区は低地だが、調査地南東部の試掘壙では上町層が検出されており、古代～中世にかけて瓦葺きの建物が調査地付近の台地上にあった可能性が示唆できる。
- ・須恵器や瓦にともない鉱滓の出土もあった。金属加工を行っていた可能性がある。

【引用・参考文献】

- 積山洋 2010 「副都制下の難波京」：平成18～21年度科学研究費補助金（基盤研究B）研究成果報告書『東アジアにおける難波京と古代難波の国際的正確に関する総合研究』pp. 79～96
- 高橋工 2007 「細工谷遺跡周辺の古代における谷の開発について」：大阪市文化財協会編『細工谷遺跡発掘調査報告』II pp. 61～68
- 高橋工 2012 「難波京朱雀大路跡と真法院谷」：大阪文化財研究所編『難波京朱雀大路跡発掘調査報告』 pp. 45～49
- 大阪市教育委員会・大阪市文化財協会 2020 「鳥ヶ辻2丁目所在遺跡（SNS18-1）発掘調査報告書」：『大阪市内埋蔵文化財発掘調査報告書（2018）』pp. 369～374



第2層上面遺構完掘・南壁地層断面
(北東から)



出土遺物 第1層(1・2)、第2層(3)、第3層(4)、第4・5層(5~12)

四天王寺旧境内遺跡発掘調査 (SST21-1) 報告書

調査個所 天王寺区四天王寺一丁目 22-7・11・12・13
調査面積 16 m²
調査期間 令和3年7月19～20日
調査担当者 課長 鈴木 慎一、櫻田 小百合

〈調査に至る経緯と経過〉

調査地は四天王寺旧境内遺跡の北西部に位置する(図1)。周辺の調査例としては、大江小学校敷地内で行われたST85-1・87-4次調査や、調査地西側で行われたST88-10次調査などがあり、古代～近世の多數の遺構・遺物が確認されている〔大阪文化財研究所2015〕。古代の遺構としては、ST88-10次調査で掘立柱建物と土壙がみつかっており、ST85-1次調査では幅1.5～2.0mの北でやや東に振る方位の南北溝が確認されている。また中世～豊臣期の遺構として、ST85-1次調査で柵や溝、井戸、壁土を採取したもののとみられる大型の土壙などが見つかっているほか、ST88-10次調査では掘立柱建物や井戸、溝、土壙、ST87-4次調査でも溝や土壙が確認されている。

今回の調査は建設工事に先立ち大阪市教育委員会が令和3年6月25日に実施した試掘調査において、現地表面から90cmの深さに中世以前の遺構面が確認されたことから実施することとなった。

調査は令和3年7月19～20日に実施した。遺跡が影響を受ける敷地東部に東西4m、南北4mの16m²の調査区を設定して行った(図2)。第5層上面まで重機で掘削し、平面精査および遺構の掘り下げを人力により行った。これらの作業と並行して、実測図の作成および写真撮影による記録作業を行った。調査終了後に埋め戻しを行い、現地での作業を完了した。

本報告で用いた方位は世界測地系に基づく座標北を基準とし、現地で作成した調査区位置図を「大阪市地形図」にあてはめて求めたものである。地層断面図は現地表面を基準に作成し、図3の西壁断面図には、国土地理院の提供する「地理院地図」における調査地北側の道路面の標高値を参考値としてT.P.値(東京湾平均海面値)でTP+○mと表記して示した。

〈調査の結果〉

1. 層序(図3、図版1中)

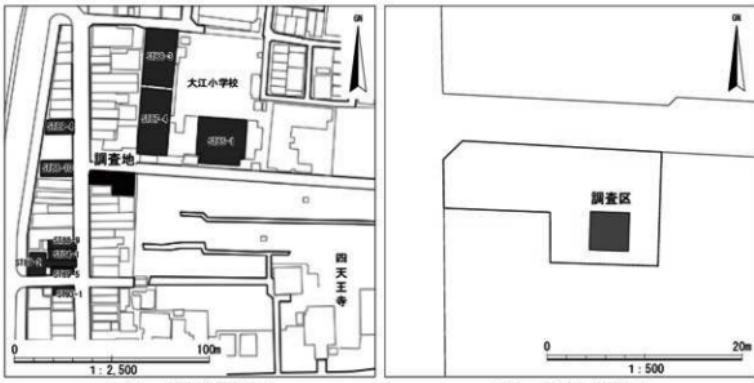


図1 調査地位置図

図2 調査区位置図

調査地における現地表面の標高はTP+20 m前後である。現地表面は層厚約15 cmのバラス層で整地されており、この下位に第1層以下の地層が分布する。

第1層は中～細礫・炭・偽縄を含むオリーブ褐色細粒～極細粒砂質シルト、黒褐色細粒砂質シルトからなる盛土で、層厚は30 cm前後である。本層下部の黒褐色細粒砂質シルト層から瀬戸美濃焼の天目碗が出土した。採取した遺物は1点のみのため地層の年代は明確ではなく、豊臣～徳川期のどこかであろう。

第2層は中～細礫を含むオリーブ褐色細粒砂質シルトからなる作土層で、層厚は約20 cmである。

第3層も作土層で、中～細礫を含むオリーブ褐色細粒砂質シルトからなる。層厚は約20 cmである。第2・3層は岩相が類似することからそれほど時期差はないものと考えられる。出土遺物はなく地層の年代は明らかではないが、第5層上面検出遺構の年代などから、16世紀～17世紀初頭の間と推定される。

第4層は調査区西部に分布する盛土で、地山偽縄・中～細礫を含むオリーブ褐色細粒～極細粒砂質シルトからなる。層厚は最大20 cmである。SK12などの土壤上部の産みを埋めた盛土層と考えられること、また岩相がSK12埋土と類似することから、これらの土壤と年代差はそれほどないと考えられるため16世紀頃の地層と推定される。

第5層はいわゆる地山で、黄褐色細粒砂質シルトからなる段丘構成層である。

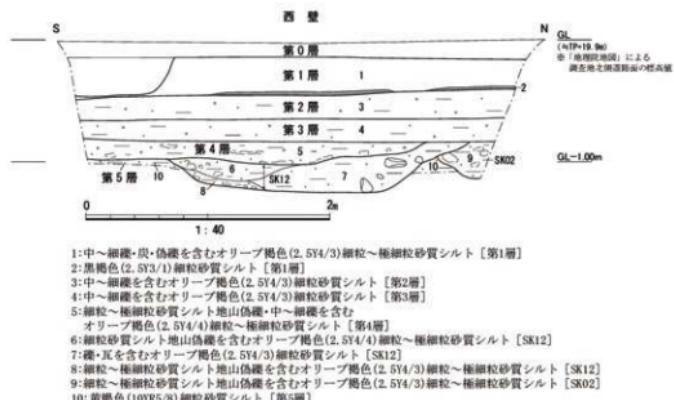
2. 遺構と遺物（図3・4、図版1～5）

地山である第5層の上面で下記の遺構を検出した。

SK01は調査区北端部で検出した土壤で、東西0.94 m、南北0.38 m以上で、深さは0.37 mである。中～細礫をわずかに含む2.5Y4/3（オリーブ褐色）細粒～極細粒砂シルトを埋土とする。土器器皿1、東播系須恵器のこね鉢2のほか、土師器、瓦質土器が出土した。

SK02は調査区北西隅で検出した土壤で、地山偽縄を含むオリーブ褐色細粒～極細粒砂質シルトを埋土とする。遺構の深さは0.30 mである。出土遺物はないが、重複関係からSK12よりも古いことから、15～16世紀以前の遺構である。

SK03は東西2.10 m以上、南北1.70 m以上の不整形な土壤である。埋土は暗灰黄色（2.5Y4/2）細粒～極細粒砂質シルトで、遺構の深さは0.30 mである。遺物は16～43などが出土した。16



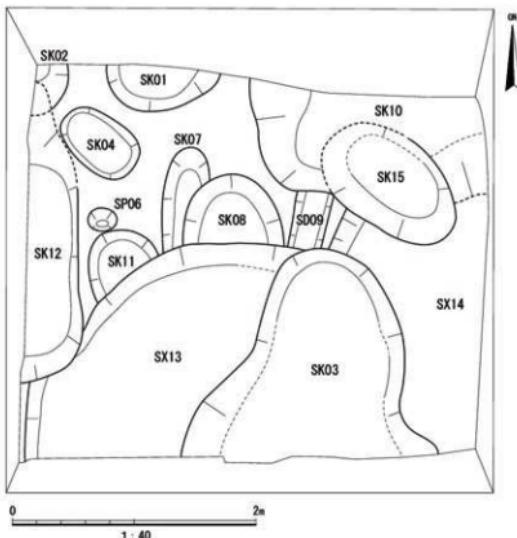


図4 遺構平面図

～29は土師器皿である。30・31は土師器羽釜で30は大和型である。32は土師器甕で、外面はタタキである。33は瓦質土器の火鉢、34は同三足土釜である。35は中国産の白磁碗、36～38は中国産の青磁で、36は菊花皿、37・38は碗である。39は国産陶器の甕体部片、40は備前焼擂鉢、41は同甕あるいは壺の体部片である。43は連珠文軒平瓦である。42は花崗岩製の五輪塔で、上部の空輪・風輪部である。これらの遺物は13～16世紀に属し、土師器皿や中国産青磁皿など16世紀代とみられる遺物が多い。遺構の年代は16世紀代であろう。

SK04は短径0.45m、長径0.70mの土壙で、深さは0.12mである。細礫を含む黒褐色(10YR3/2)細粒～極細粒砂質シルトを埋土とする。遺物は瓦質土器甕3、備前焼の甕あるいは壺の頸部4のほか、土師器、瓦質土器、常滑焼の可能性がある陶器片、瓦が出土した。瓦質土器甕3は、外面タタキで、折り返した口縁部がやや玉縁状を呈する形態から、15～16世紀に属するものとみられる。

SP06は直径0.18～0.24m、深さ0.13mの小穴で、細粒砂質シルト偽礫を含むオリーブ褐色(2.5Y4/4)細粒砂質シルトを埋土とする。出土遺物はない。

SK07は東西0.38m、南北0.88m以上の溝状の土壙で、深さは0.23mである。オリーブ褐色(2.5Y4/3)細粒～極細粒砂質シルトを埋土とする。遺物は瓦質土器の擂鉢5が出土した。14世紀後半～15世紀前半に属するものとみられる。

SK08は東西0.83m以上、南北0.58m以上、深さ0.24mの土壙である。中～細礫を含む暗灰黄色(2.5Y4/2)細粒～極細粒砂質シルトを埋土とする。出土遺物はない。

SD09は幅約0.30m、深さ0.10mの溝で、オリーブ褐色(2.5Y4/3)細粒～極細粒砂質シルトを埋土とする。溝の方位は正南北よりもやや北へ東に振る方位である。出土遺物はない。

SK10・15は調査区北東部で検出した土壙で重複しており、SK10が先行する。SK10は東西1.95m以上、南北0.92m以上、深さは0.32mである。瓦を含む暗灰黄色(2.5Y4/2)細粒～極細粒砂

質シルトを埋土とする。SK15は短径0.75m、長径1.25m前後、深さ0.20mの土壤で、暗灰黄色(2.5Y4/2)極細粒砂質シルトを埋土とする。これらの土壤の遺物は十分に掘り分けができなかつたが、6～15などが出土している。6～11は土師器皿で、11は黒色の物質が内面全体に付着している。12は瓦質土器の羽釜、13は同鉢である。14は陶器製円盤で、丹波焼とみられる陶器を二次加工して円盤状に加工している。15は備前焼の播鉢である。このほか、瓦などが出土している。瓦は燻瓦とそうでないものが含まれ、凸面縄目タタキ、凹面布目痕が残る古手の様相を呈する平瓦も含まれる。これらの遺物はやや古い年代のものも含むが、概ね15～16世紀の遺物を主体とする。

SK11は直径0.62m以上、深さ0.17mの土壤で、埋土はオリーブ褐色(2.5Y4/3)細粒～極細粒砂質シルトである。出土遺物はない。

SK12は調査区西端部で検出した土壤で、東西0.48m以上、南北2.48m以上、深さは0.40mである。埋土は磯・瓦を含むオリーブ褐色細粒砂質シルトを主とし、下部には地山偽礫を含む加工時形成層が部分的に確認できる。遺物は48～58などが出土した。48は瓦質土器の甕、49～52は同羽釜である。羽釜の口縁部は内湾気味に立ち上がるるものと、直立気味に立ち上がるものがある。53は中国産青磁、54は常滑焼とみられる。55は備前焼播鉢、56は丹波焼の甕体部とみられる。57・58は丸瓦である。瓦質土器の甕や羽釜の形態から15～16世紀の遺構とみられる。

SX13は東西2.30m以上、南北1.75m以上、深さ0.30mの落込みである。暗灰黄色(2.5Y4/2)細粒～極細粒砂質シルトを埋土とする。切合い関係からSK07・08・11、SD09よりも後出し、SK03・12よりも先行する。遺物は59～70のほか、土師器、須恵器、瓦が出土した。59～63は土師器皿である。63はへそ皿で、口径は約10.5cmである。67は常滑焼とみられる陶器の甕体部片、68は備前焼の壺、69は同播鉢である。70は平瓦で、凸面縄目タタキ、凹面には布目痕が残る。このほかに出土した丸瓦の中にはコビキ痕跡(コビキA)が認められるものがある。出土遺物はおもに15～16世紀に属するとみられることから、遺構の年代は16世紀と考えられる。

SX14は調査区東端部で検出した東西1.30m以上、南北2.60m以上、深さ0.33mの落込みである。埋土は黄褐色(2.5Y5/3)細粒～極細粒砂質シルトからなる。SK03・10・15と重複しており、これらに先行する遺構である。出土遺物は、瓦質土器の火鉢あるいは壺とみられる44、中国産白磁碗45、陶器の壺あるいは甕の底部46、備前焼播鉢47のほか、須恵器、瓦質土器、陶器、青磁、瓦が出土した。白磁碗45は14世紀に属するとみられるが、備前焼播鉢が出土していることや外面タタキの瓦質土器の甕体部片が出土していることなどから、遺構の年代は15世紀以降と推定される。

(まとめ)

今回の調査で検出した遺構は概ね15～16世紀頃の遺構と推定される。近隣では同時期の壁土採取を目的としたものと推定される大型の土壤などが確認されており、今回の調査で検出した土壤にも同様の遺構が含まれる可能性がある。

四天王寺の西縁部における中世後期の土地利用のあり方を考えるうえで基礎的な資料を得ることができたと考える。

【引用・参考文献】

大阪文化財研究所 2015、『大阪市北部遺跡群発掘調査報告』

国土交通省国土地理院、『地理院地図(電子国土Web)』<https://maps.gsi.go.jp>



調査前の調査地全景
(北西から)



西壁地層断面
(東から)



SX13 土器 (63) 出土状況
(北から)



遺構検出状況（東から）



遺構掘削状況（東から）



出土遺物 (1・2 : SK01、3・4 : SK04、5 : SK07、6～15 : SK10・15)



出土遺物 (16～41 : SK03)



出土遺物 (42 : SK03)



出土遺物 (44 ~ 47 : SX14)



出土遺物 (48 ~ 58 : SK12)

図版 5



出土遺物 (59 ~ 70 : SX13)

南住吉遺跡発掘調査（SMN21-1）報告書

調査個所 大阪市住吉区長居四丁目 70 番
調査面積 16 m²
調査期間 令和 3 年 5 月 13 日
調査担当者 課長 鈴木 慎一、田中 裕子

<調査に至る経緯と経過>

調査地は弥生時代～中世の集落跡である南住吉遺跡の中央部に位置する。周辺の調査では、西側の MN93-7 次調査地で弥生時代中期の建物跡が、北側の MN95-20 次調査地では弥生時代中期の井戸や飛鳥・奈良時代の遺構が見つかっている。また調査地北側の MN01-14 次調査地では中世の柱穴や溝が、北西側の市営住宅建設時に行われた発掘調査（MN86-48 次・MN06-1 次）では中世の井戸や溝、また細江川の可能性がある南東から北西方向の流路が確認されている（図 1）。

今回の発掘調査は、建設工事に先立ち当該地で行われた試掘調査において、現地表下 0.8m 以下で本格的な調査を必要とする中世以前の地層や遺物が確認されたことにより、実施された。試掘調査では東側の試掘場 2（図 2、図 4）は地山までの地層の堆積が薄く、一方で西側の試掘場 1（図 2、図 4）では厚い包含層の堆積や遺構が確認された。そのため本調査では、試掘場 1 に近い敷地内西部に、東西 4 m、南北 4 m の 16 m² で調査区を設置した（図 2）。

発掘調査は令和 3 年 5 月 13 日に実施した。GL - 0.8 m までの近現代盛土を重機で除去し、以下を一部重機を併用しながら人力で掘り下げた。各層において、遺構・遺物を検出し、図面・写真等の記録作業を行った後、埋め戻しを行い、同日中に調査を終了した。

本報告で用いた方位は、世界測地系に基づく座標北を基準とし、建物の配置を基準として街区図に当てはめて求めたものである。標高は T.P. 値（東京湾平均海面値）を用い、本文および図中では TP ± ○m と表記した。

<調査の結果>

1. 層序（図 2 ～ 4、図版 1）

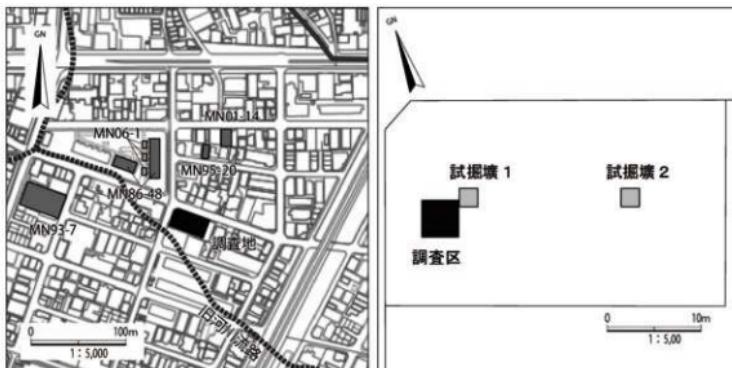


図 1 調査位置図

図 2 調査区位置図

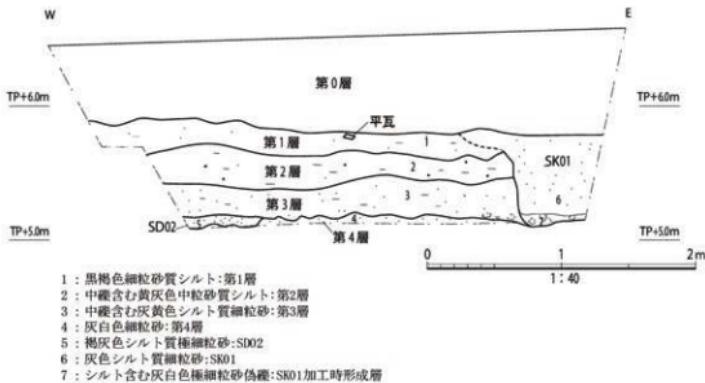


図3 北壁地層断面図

第0層 近代～現代の盛土層で、層厚約100cmである。瀬戸美濃焼染付碗1、肥前磁器青磁碗2、同染付碗3などが出土した。1は銅版転写による施文が施され、明治時代のものである。2は端反碗の口縁部で、3は見込みに「寿」が描かれる。2,3は18～19世紀に属し、第1層の混入であろう。

第1層 近世の作土層である。黒褐色細粒砂質シルトからなり層厚は約14cmである。土人形4、平瓦5などが出土した。本層上面の遺構としてSK01を検出した。

第2層 中礫含む黄灰色中粒砂質シルトからなり、層厚は35cmである。遺物の出土はない。上下層の出土遺物からみて、中世～近世とみられる作土層である。

第3層 中世の作土層である。中礫含む灰黄色シルト質細粒砂からなり、層厚は28cmである。瀬戸美濃焼陶器甕の口縁6、土師器皿7が出土した。本層下面の遺構として、SD02・03の耕作溝を検出した。

第2・3層はよく攪拌された作土層であるが、南側は砂が多く混じり北に向かって泥が主体となってくる。南側に流路があり、その氾濫堆積を耕起した作土層と考えられる。層中に混じる中礫は

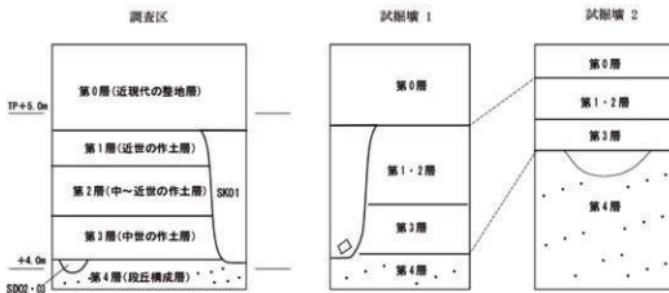


図4 遺構と地層の関係図

丸みを帯びており、南側の流路から供給されたものとみられる。

第4層 灰白色細粒砂からなり、層厚は10cm以上である。遺物の出土はない。段丘構成層である。

2. 遺構と遺物（図5、図版1・2）

i) 第3層の遺構

第3層の下面で中世の耕作溝を検出した。

SD02 幅15cm、長さ30cm以上、深さ10cm、埋土は褐灰色シルト質極細粒砂からなり、耕作溝とみられる。瓦質土器の破片8が出土した。壺の体部であろう。

SD03もSD02同様の遺構である。遺物の出土はなかつた。

ii) 第1層の遺構

第1層上面で近世の土壤を検出した。

SK01 調査区東北角に位置する円形の土壤である。直径は70cm以上、深さは73cmである。埋土は灰色シルト質極細粒砂からなり、底部に加工時形成層が観察される。出土遺物は肥前磁器白磁碗9の底部、土師器片である。9は高台が高く厚みがあり、17世紀代の可能性がある。

なお、試掘調査でおそらく本遺構と同一のものと思われる土壤から須恵器壺10の体部片が出土した。10は外面はタタキが見られ、内面には同心円状の当て具痕がある。古代のものとみられるが、混入品である。

<考察>

中世以降の作土層である第2・3層では、調査区内で南から北に向かって砂から泥へと堆積物の粒径が変化していく様子が観察された。これはMN 86-48次調査で見つかった流路の一部が調査地の南側にあり、その氾濫堆積層を利用して耕作をおこなっていたと考えられる。

今回の調査地を明治時代の地図に重ねると図6のようになる。中世～近世の集落は調査地の北側にあり、河川流域にあたる調査地は耕作地として利用されていたといえよう。今回の調査成果に基づき、図6の明治時代のような景観は、少なくとも中世くらいまでは遡ることができると考えられる。

<まとめ>

- ・調査地では、中世以降に南側にあった河川の氾濫堆積を利用して、耕作地として開発が進められた。
- ・中世～近世の集落は、河川から少し離れた調査地北側の微高地にあったとみられる。
- ・須恵器壺も出土しており、古代の集落も近隣にあった可能性はある。

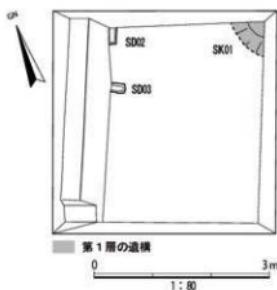


図5 遺構平面図



図6 明治19・20(1886～87)年の様子

(清水編 1995)

【引用・参考文献】

- 大阪市文化財協会 1998、『南住吉遺跡発掘調査報告書』
- 大阪市教育委員会・大阪市文化財協会 1997、「建設工事に伴う発掘調査（MN95-20）略報」：『平成7年度
大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』、pp. 169－180
- 大阪市教育委員会・大阪市文化財協会 2003、「南住吉遺跡（MN01-14）発掘調査」：『平成13年度
大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』、pp. 97－102
- 大阪市教育委員会・大阪市文化財協会 2008、「南住吉遺跡（MN06-1）発掘調査」：『大阪市内埋蔵文化
財包蔵地発掘調査報告書（2006）』、pp. 347－353
- 清水靖夫編 1995、『明治前期・昭和前期 大阪都市地図』柏書房



遺構完掘・北壁地層断面
(南から)



出土遺物 第0層(1~3)、第1層(4~5)、第3層(6~7)、SD02(8)、SK01(9)、試掘壙1(10)

長原遺跡発掘調査（　　）報告書

調査個所 大阪市平野区長吉長原西一丁目5-11
 調査面積 m²
 調査期間 令和3年9月 日～ 日
 調査担当者 課長 鈴木 慎一、宮本 康治

（調査に至る経緯と経過）

経緯と経過

本調査地は平野区長吉長原西一丁目に位置し、長原遺跡の範囲内にあたる。周辺では建物建設や区画整理事業等に伴って発掘調査が数多く行われている地域にある。主なものをあげると、調査地北側のNG84-25次調査では、北側のA区において古墳7基が、南側の 区において古墳時代中期から後期にかけての掘立柱建物跡や溝、井戸などの集落にかかる多数の遺構が検出された〔大阪市文化財協会〕。調査地南側においても 91- 次などの調査地点において古墳時代中期から後期にかけての集落遺構や、平安時代の方形の区画溝を伴う建物跡などの集落にかかる遺構・遺物が確認されている〔大阪市文化財協会 〕。以上のように本調査地点でも古墳時代をはじめとする時期の遺構・遺物が予想される地点である。

本地点では 年に試掘調査を行っており、現地表下1.6m以下で本発掘調査をする地層が遺存していることが判明していた。本年にはいり当該地で深くまで掘削のおよぶ工事が計画されたため事業者側と協議を行い、破壊せざるを得ない面積について発掘調査を実施することとなったものである。調査は事業者側で地表下 ほどまで掘削された後から着手することとなり、調査は令和3年9月29日に開始した。重機による掘削の後に人力での掘り下げ、検出作業等を進め、遺構の検出や写真・図面作成等の記録作業を行い、9月30日には調査にかかる作業を終え撤収した。



図1 調査地位置図 縮尺



図2 調査区配置図 縮尺

本報告で用いた方位は座標北を基準とし、大阪市地形図に調査地の図をはじめこんで求めたものである。地層断面図における標高については国土地理院地図の調査地南側の道路面の標高値を参考にし、 . . 値にて表記した。

〈調査の結果〉

1. 層序 (図3、図版1・2)

調査においては部分的な確認を含め、現地表下約 mまでの状況を確認した。

第0層 黄褐色～青色シルト偽縛を含む粗粒砂～細粒砂で、旧建物の建築等に伴う近現代の盛土である。層厚は1.3～1.4mほどである。長原0層に相当する。

第1層 暗灰色中粒砂の旧作土で層厚は0.2m前後である。長原1層に相当する。

第2層 明青灰色シルト質中粒砂の作土で層厚は0.2m程度である。長原2層に相当する。

第3層 黄褐色細粒砂質シルトで作土の可能性がある。層厚は0.2～0.3mほどである。長原4層等に相当する可能性がある。

第4層 灰色粘土質シルトで層厚は ほどである。長原7層に相当する可能性がある。

第5層 灰白～黄白色粘土質シルトで層厚は . . m以上である。長原 . . 層以下(いわゆる地山層)にあたるとみられる。

2. 遺構と遺物 (図3、図版1・2)

主な検出作業は第4層上面および下面および第5層の上面で行った。

第5層上面では溝 . . 小穴 . . ~ などを確認した。 . . は東側で南にふれる方位をとる溝で、幅 . . 、深さ . . 前後である。埋土は灰白色粘土質シルトの小偽縛を少量含む灰色粘土質シルトである。水漬きの堆積ではなく機能は不詳である。 . . はともに直径 . . m、深さ . . ほどの不整円形の小穴である。柱痕跡等は確認できなかった。調査区中央から北よりで直径 . . ~ . . mほどの小穴(小穴群)が . . 基ほど確認できたが明確な機能は明らかにできなかった。

第4層の上面では顕著な遺構は確認されなかった。また第3、2層では断面観察で耕作に伴う溝などが確認された。

出土遺物については、第 . . 層および . . 層からの出土があった。第4層では土師器小片1・2や須恵器杯・杯蓋3・4、外面に波状文の見られる壺類の頸部とみられる5、甕の頸部および体部6～8、須恵質の焼成の円筒埴輪片9などが含まれている(図版2)。時期は5世紀代から6世紀にかかる時期のものとみられる。第3層以上の掘削では古代および中世とみられる土師器などが少量出土している。

〈まとめ〉

本調査地では調査の結果、現代盛土以下に近世以前の地層が良好に遺存しており、古墳時代の可能性のある遺構等が確認された。古墳時代については検出されたのは溝等で、建物跡等は不明であった。より北側では掘立柱建物跡などが密に遺構が検出されており、そうした状況とは異なっており、集落の中心からはやや外れた一角にあたる可能性があろう。時期的な面では北側の集落域では5世紀から6世紀にかかる時期の遺構・遺物が確認されており、本地点でも近い時期のものがあり、同じ傾向の可能性があろう。

また古代以降については一帯の調査で平安時代から鎌倉時代にかけての遺構が多く確認されているものの、相当する時期の耕作土層かとみられる地層は確認され、少量の遺物はあったが、遺構・遺物とも顕著ではなかった。こちらも集落等の中心ではないようである。その後も中世あるいは近世の作

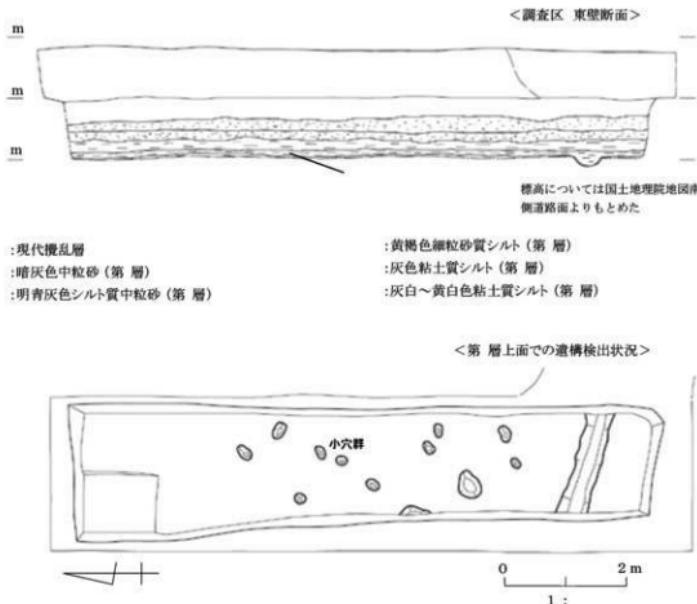


図3 調査区平面・断面図

土が認められている。

調査面積が大きくなかったものの、付近における古墳時代等の遺構の広がりや歴史的な変遷等について知見を加える貴重な機会となった。

【引用参考文献】

- | | |
|----------|-----------------|
| 大阪市文化財協会 | 『長原・瓜破遺跡発掘調査報告』 |
| 大阪市文化財協会 | 『長原・瓜破遺跡発掘調査報告』 |
| 大阪市文化財協会 | 『長原・瓜破遺跡発掘調査報告』 |
| 大阪市文化財協会 | 『長原遺跡発掘調査報告』 |



第5層上面完掘の状況（南東から）



東壁断面・第5層上面完掘状況(南西から)



第5層上面検出状況(南東から)



第4層出土の主な遺物(1・2:土師器、3・4:須恵器杯蓋、5:須恵器壺頸部

6:須恵器甕頸部、7・8:須恵器甕体部、9:円筒埴輪か)

大 阪 市 内 埋 藏 文 化 財 包 藏 地
発 挖 調 査 報 告 書 (2021)

発行日 令和5年3月31日

発 行 大阪市教育委員会

(一財) 大阪市文化財協会

編 集 大阪市教育委員会事務局文化財保護課
(大阪市北区中之島 1-3-20)

印 刷 株式会社京阪工技社
